

# 西安田・森ノ前遺跡 中安田・法幢寺遺跡

—安田地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



2011年3月

多可町教育委員会

# 西安田・森ノ前遺跡 中安田・法幢寺遺跡

—安田地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011年3月

多可町教育委員会

# 序 文

今回、安田地区のほ場整備事業に伴いまして、西安田・森ノ前遺跡、中安田・法幢寺遺跡の二遺跡の発掘調査を行いました。西安田・森ノ前遺跡では中世期の集落跡や弥生時代に遡る遺構が検出されたほか、町内では初となる奈良時代後半～平安時代前半期の役人の装身具である石帯が出土し、周辺に役所的な機能を持った遺跡が存在する可能性が示されました。多哥郡の郡衛関連遺構は中区中央平野部の思い出遺跡で確認されていますが、それ以外の地域での出土であることは注目されます。一方、中安田・法幢寺遺跡では中世末～近世期の寺院関連遺構が広い範囲で検出されました。法幢寺は夢想国師の開山と伝えられ、福井県大安寺の開山でもある名僧大愚宗築禅師の中興による寺院。数度の火災に会いますが、その度に再興され、隆盛を誇っていた名刹であると伝えられています。今回の調査により、ほぼ寺歴にそうかたちで遺構や遺物が出土し、法幢寺の歴史の一端が明らかとなりました。

ほ場整備事業は現在の農村の環境条件を整備し、未来に向けてより労働生産性の向上を目指すものでありますが、それぞれの土地には、それぞれ固有の先人たちの歴史が刻まれており、そうした歴史の積み重ねの上に現在があり、未来へとつながっていくものであります。今回の調査により、安田地区の歴史の一端が明らかとなりましたが、私たちは、そうした歴史を踏まえた上で未来へと歩みを進めていかなくてはなりません。調査成果が、そうした一端を担うものとなることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査作業及び整理作業にあたり、地元住民の方々をはじめ、多くの方々にご協力・ご指導いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

2011年3月

多可町教育委員会

教育長 岸 原 章

# 例 言

- 1 本書は兵庫県多可郡多可町中区西安田字森ノ前に位置する西安田・森ノ前遺跡、および、中区中安田字寺口に位置する中安田・法幢寺遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は多可町教育委員会が主体となり、教育総務課 課長補佐 安平勝利が担当した。
- 3 遺構等の実測は松田優子・藤田侑子・笹倉直也・棚倉和也・安平が行い、遺構及び遺物写真と遺物実測は松田・藤田・安平が行った。
- 4 本書で示す標高地は、多可町建設課設定のB.Mを使用した値である。方位は座標北で示している。
- 5 本書記載の土器実測図断面は、土師器・土師質土器—黒、須恵器・陶器—白抜き、施釉陶器・磁器・瓦—グレーとした。また、土器実測図において、中心軸に沿って内外面の成形・調整表現が上下一直線にわたって欠する土器は、遺存率及び歪み等のため復元径に問題があることを示している。
- 6 遺構の表記に際しては、次のように略したものがある。  
掘立柱建物跡—S B 溝—S D 土坑—S K 柱穴・柱穴状遺構—P  
また、遺物実測番号は、木製品—W、石製品—Sを付けた。
- 7 遺物には通し番号を付し、図面、写真、表の番号は一致する。遺物写真については、土器 個別写真は原則として縮尺を1/3もしくは、1/4としている。木製品集合写真は任意の縮尺をとっている。
- 8 本書掲載遺跡の遺物実測図は、基本的に3次元デジタイザーを使用して行い、すべてデジタルデータとして保管している。
- 9 本書記載の陶器については、兵庫陶芸美術館 長谷川眞氏、磁器については、兵庫県立考古博物館 岡田章一氏にご教示いただいた。
- 10 本書の執筆・編集は、安平が行った。
- 11 本書にかかる資料は、兵庫県多可郡多可町中区東山 539-3 那珂ふれあい館で保管している。

# 本文目次

第Ⅰ章	はじめに	
1.	地理的環境	1
2.	歴史的環境	1
3.	調査に至る経緯、調査体制	3
第Ⅱ章	西安田・森ノ前遺跡	
1.	はじめに	4
2.	確認調査の概要	4
3.	全面調査の概要	9
4.	まとめ	14
第Ⅲ章	中安田・法幢寺遺跡	
1.	はじめに	18
2.	A区	
(1)	遺構の概要	18
(2)	遺物の概要	23
(3)	瓦群について	26
3.	BⅠ区	
(1)	遺構・遺物の概要	28
(2)	小結	30
4.	BⅡ区	
(1)	遺構の概要	31
(2)	遺物の概要	38
(3)	小結	39
5.	BⅢ区	
(1)	遺構の概要	40
(2)	遺物の概要	42
(3)	小結	43
6.	BⅣ区	
(1)	遺構の概要	43
(2)	遺物の概要	51
(3)	小結	53
7.	BⅤ区	
(1)	遺構の概要	53
(2)	遺物の概要	59
(3)	小結	61
8.	C区	
(1)	遺構の概要	62
(2)	遺物の概要	64
(3)	小結	65
9.	総括	66

# 表目次

西安田・森ノ前遺跡土器観察表	中安田・法幢寺遺跡土器観察表	報告書抄録
----------------	----------------	-------

# 挿図目次

## 【第Ⅰ章 はじめに】

第1図 多可町位置図

第3図 周辺遺跡分布図

## 【第Ⅱ章 西安田・森ノ前遺跡】

第4図 調査区位置図

第6図 確認調査 T-1・3

第8図 確認調査出土遺物

第10図 掘立柱建物跡

第12図 掘立柱建物跡柱穴出土遺物

第14図 土坑2

第16図 土坑1出土遺物

第2図 調査地位置図

第5図 確認調査トレンチ位置図

第7図 確認調査 T-6

第9図 全面調査遺構全体図

第11図 掘立柱建物跡柱穴

第13図 土坑1

第15図 土坑3

第17図 土坑4

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| 第18図 土坑4出土遺物        | 第19図 落ち状遺構及び出土遺物   |
| 第20図 柱穴状遺構出土遺物      | 第21図 包含層出土遺物       |
| 【第Ⅲ章 中安田・法幢寺遺跡】     |                    |
| 第22図 調査区位置図         | 第23図 A区位置図         |
| 第24図 A区遺構全体図        | 第25図 石列1・2         |
| 第26図 石列3・4          | 第27図 土坑1～8         |
| 第28図 瓦群出土状況         | 第29図 中安田村古絵図（開山堂）  |
| 第30図 中安田村古絵図（法幢寺周辺） | 第31図 BⅠ区位置図        |
| 第32図 BⅠ区遺構全体図       | 第33図 溝1            |
| 第34図 BⅡ区位置図         | 第35図 BⅡ区遺構全体図      |
| 第36図 掘立柱建物跡         | 第37図 土坑1～9・11・13   |
| 第38図 土坑12           | 第39図 溝1・2・3        |
| 第40図 溝4・5・6         | 第41図 南側段状遺構        |
| 第42図 BⅢ～V区位置図       | 第43図 BⅢ区遺構全体図      |
| 第44図 土坑1～8          | 第45図 柱穴列           |
| 第46図 BⅣ区遺構全体図       | 第47図 土坑1～14        |
| 第48図 土坑15～30        | 第49図 溝1            |
| 第50図 石列             | 第51図 BⅤ区遺構全体図      |
| 第52図 土坑1～8・10・11・16 | 第53図 土坑12・15・17～21 |
| 第54図 井戸1            | 第55図 溝1            |
| 第56図 C区位置図          | 第57図 C区遺構全体図       |
| 第58図 礎石建物跡          | 第59図 土坑1・2・3       |
| 第60図 溝・落ち状遺構1       | 第61図 中安田村古絵図       |
| 第62図 現在の法幢寺釈迦堂      | 第63図 現在の法幢寺開山堂     |
| 第64図 『蔵勝塔』扁額        | 第65図 夢想国師像         |
| 第66図 大愚宗築像          | 第67図 義雲紹眞像         |
| 第68図 義雲紹眞像内銘文       |                    |

## 中安田・法幢寺遺跡図版目次

図版1～図版18 A区出土遺物

図版19～図版38 B・C区出土遺物

## 写真図版目次

【西安田・森ノ前遺跡】

図版39～図版47

【中安田・法幢寺遺跡 航空写真及びA区遺構】

図版48～図版56

【中安田・法幢寺遺跡 BⅠ区遺構】

図版57～図版60

【中安田・法幢寺遺跡 BⅡ区遺構】

図版60～図版67

【中安田・法幢寺遺跡 BⅢ区遺構】

図版68～図版70

【中安田・法幢寺遺跡 BⅣ区遺構】

図版71～図版78

【中安田・法幢寺遺跡 BⅤ区遺構及】

図版89～図版84

【中安田・法幢寺遺跡 C区遺構】

図版85～図版87

【中安田・法幢寺遺跡 出土遺物】

図版88～図版115

# 第I章 はじめに

## 1. 地理的環境

多可町は、平成17年11月1日に旧中町、加美町、八千代町が合併して誕生し、平成22年度で町制5周年を迎える新町である。

当町から南方の神戸市沿岸部までは約45km、北方の豊岡市沿岸部までは約70kmの直線距離にあり、兵庫県のほぼ中央部、播磨最北端に位置する。行政境は、北は丹波市、朝来市、東は丹波市、南は西脇市、加西市、西は神崎郡神河町、市川町にそれぞれ接しており、東西約13km、南北約30km、総面積185.15km<sup>2</sup>の町域を有する。町域の約79.8%を山林地帯が占めており、特に町北部には標高692.6mの妙見山、939.4mの笠形山、1005.2mの千ヶ峰など600～1000m級の山々がそびえる山間地帯である。町内は三国岳を源とする杉原川が加美区、中区の中央部を貫流し、笠形山を源とする野間川が八千代区の中央部を南流して谷底平野を形成している。

気候は、瀬戸内気候の影響下にあるが、内陸性気候の影響も受け、寒暖の差が比較的大きい。

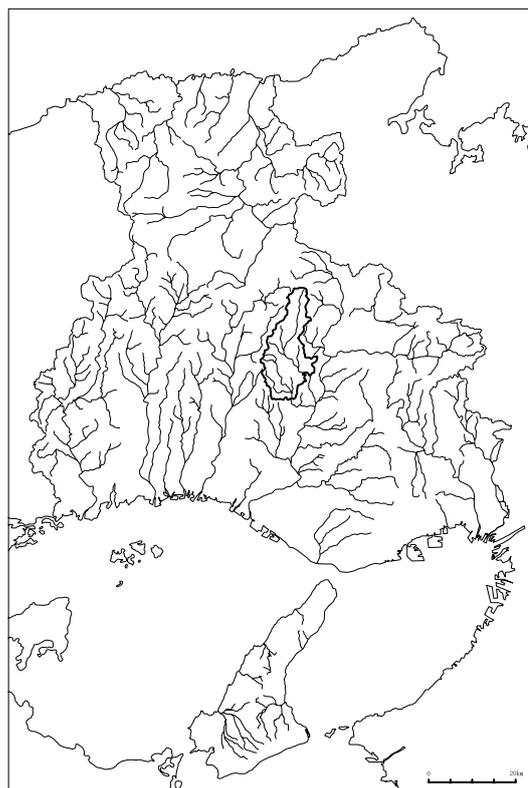
主な産業は、古くから農林業、繊維産業を中心として発達してきたが、近年の経済、社会状況の変化、人口構成年齢の高齢化、過疎化など、農山村地域を取巻く状況が厳しい中において、新たな産業の導入・振興が模索されている。また、『酒米山田錦』、『和紙杉原紙』、『敬老の日』それぞれの発祥の町であることを打ち出し、『天たかく 元気ひろがる 美しいまち 多可』として、観光産業の振興や新たな特産品の開発などにも取り組んでいる。

当報告書記載の西安田・森ノ前遺跡、中安田・法幢寺遺跡は中区南方の杉原川沿いに広がる安田平野に位置する。平野内中央部には杉原川の支流安田川が南流し、集落は北方の山麓から伸びる谷部に沿って広がっている。現在の安田川は谷開口部から南へ直線的に流れ杉原川へ合流するが、旧安田川は谷開口部付近で南東方向に流れを変え杉原川へと合流すると思われる。

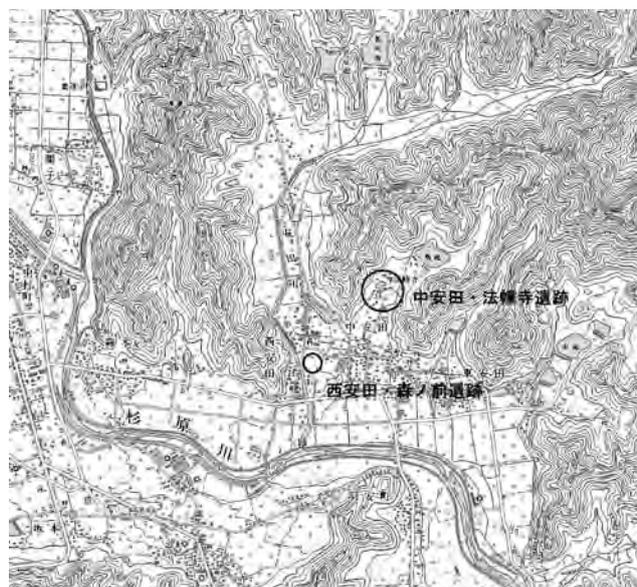
西安田・森ノ前遺跡は旧安田川の左岸の尾根先端部の微高地、および右岸の自然堤防上に位置しており、中安田・法幢寺遺跡は現在の安田川が流れる谷の、尾根をはさんだ東側の小谷部に位置する法幢寺周辺に広がる。

## 2. 歴史的環境

安田平野では、北側に広がる山麓部に伴う谷部、主に安田川流域を中心として、縄文～中世期まで多



第1図 多可町位置図



第2図 調査地位置図

くの遺跡が分布している。

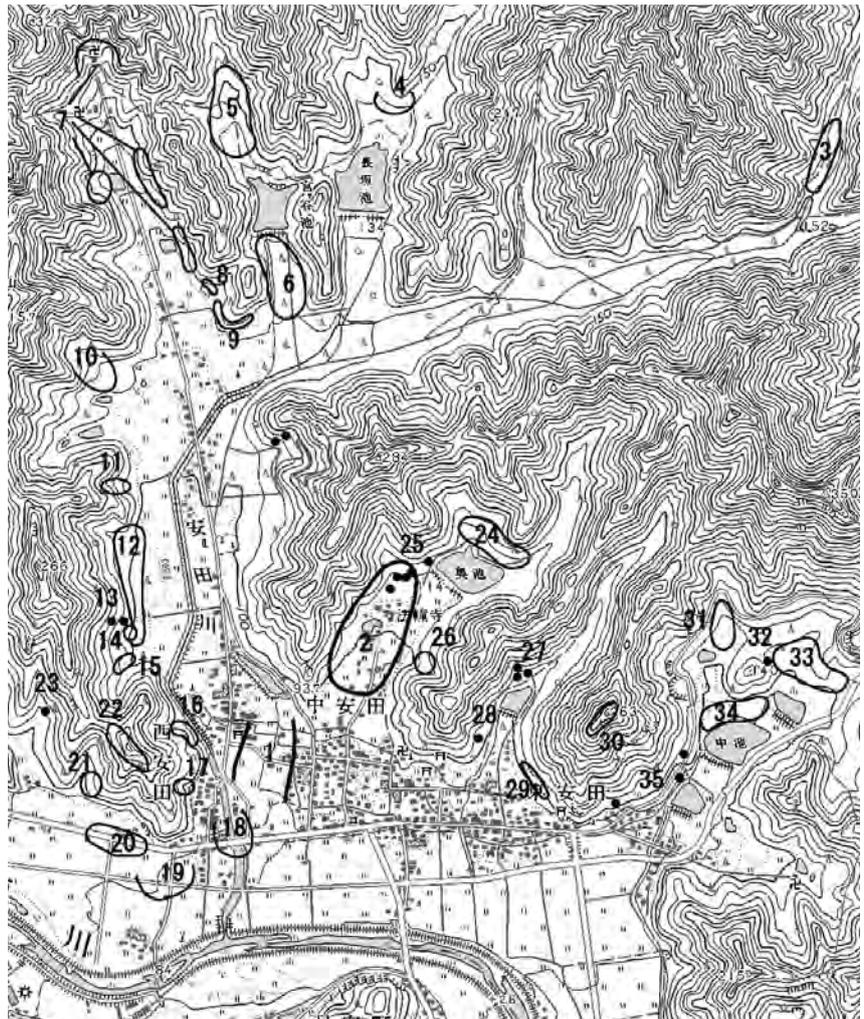
縄文時代は、安田平野では明確な遺構は検出されていないが、西安田・宮ヶ谷遺跡、西安田・森ノ前遺跡で縄文時代中期～後期の多くの土器が出土しており、集落の存在を示している。

弥生時代では、安田川の上流、谷奥部の緩傾斜地で、30棟以上の竪穴住居跡が検出された西安田長野遺跡群(宮ヶ谷遺跡、長坂遺跡)が注目される。南方に広がる平野部とは山塊によってさえぎられた、『隠れ里』的なイメージがもたれる特殊な立地に、弥生時代中期の集落が築かれており、平野部に営まれた同期の集落との相違、特殊性が指摘されている。

古墳時代では、西安田・宮ヶ谷遺跡において、中期前半の竪穴住居が1棟検出されているがその全容は不明である。西安田・森ノ前遺跡、円満寺・東の谷遺跡では、7世紀後葉の土器が多く出土しており、円満寺・東の谷遺跡で出土した陶馬は注目される。一方、古墳は、発掘調査が行われたものはないが、終末期にあたりと考えられる古墳が安田平野北方に広がる山裾に築かれる。いずれも、南へ伸びる尾根の東西両側裾に数基が分布しており、いくつかのまとまりが伺える。

奈良～平安時代前半では、遺構は確認されていないが、西安田・森ノ前遺跡、円満寺遺跡・円満寺東の谷遺跡での遺物出土がみられる。特に西安田・森ノ前遺跡では奈良時代以降の土器が多く出土しており、安田平野の中心的な役割を持つ遺跡となる。また、円満寺遺跡、円満寺東の谷遺跡で寺院関連の遺物が多く出土しており、平安時代前半にさかのぼる山林寺院の存在が確認され、現在の円満寺周辺に堂塔が広がっていたと考えられている。

平安時代後半～中世期後半期にかけては、発見される遺跡数は全町的に増加する。



番号	遺跡名	主な時代	種別	番号	遺跡名	主な時代	種別
1	西安田・森ノ前遺跡(旧西安田遺跡)	縄文～中世	集落	19	西安田・岩ヶ鼻遺跡	弥生	集落
2	中安田・法幢寺遺跡	中世	寺院	20	西安田・山根遺跡	弥生	散布地
3	西宮ヶ谷遺跡	中世	散布地	21	塚ヶ谷遺跡・塚ヶ谷1・2号墳	古墳・中世	古墳・散布地
4	西安田・長坂谷遺跡	縄文・弥生・中世	集落	22	西安田城	中世	城郭
5	西安田・宮ヶ谷遺跡	弥生	集落	23	森本6号墳		
6	円満寺東の谷遺跡	奈良～中世	社寺	24	中安田奥池遺跡	弥生・古墳・平安	散布地
7	円満寺遺跡	奈良～中世	社寺	25	中安田1～5号墳	古墳	古墳
8	西安田東窯跡	平安	窯跡	26	中安田中世墓群	中世	古墓
9	西安田・銭亀遺跡	中世	散布地	27	滝ヶ谷1～3号墳	古墳	古墳
10	花の木谷遺跡	平安～中世	散布地	28	滝ヶ谷遺跡	不明	不明
11	東安田城	中世	城郭	29	東安田中世墓群	中世	古墓
12	西安田・ガマク谷遺跡	古墳～中世	散布地	30	東安田城	中世	城郭
13	西安田1・2号墳	古墳	古墳	31	東安田・西北山遺跡	古墳・平安	散布地
14	西安田中世墓群	中世	古墓	32	東安田・北山1号墳	古墳	古墳
15	西安田・宮跡	奈良～中世	社寺	33	東安田・北山遺跡	中世	散布地
16	西安田・イヤガ谷北遺跡	平安	散布地	34	東安田中池遺跡	平安	散布地
17	西安田・イヤガ谷南遺跡	中世	不明	35	東安田1～3号墳	古墳	古墳
18	西安田・札の辻遺跡	奈良～中世	集落				

第3図 周辺遺跡分布図

安田平野では、特に寺院関連遺跡やそれに伴う生産遺跡、古墓の存在が特徴的である。寺院関連遺跡としては、9世紀にさかのぼりことが確認されている円満寺周辺の山中に広がる遺跡群。もう一つは中世後半期開山の縁起を持つ法幢寺周辺に広がる遺跡群である。これらの寺院はいくつかの堂塔や坊院を持つ広い寺域を持ち、当時の支配層と深くつながりを持ちながら、近世期まで展開していくものと思われる。生産遺跡では、円満寺東の谷遺跡で小鍛冶、銅製品鑄造遺構が発見されたほか、西安田・森ノ前遺跡において梵鐘鑄造遺構が検出されている。これらは上述の寺院と関連するものだが、中世期の技術・生産体制を考える上で貴重な資料である。また、中世墓群は西安田、中安田、東安田の各谷毎に分布している。いずれも未調査のため、詳細は不明ながら、中世期の葬送や寺院との関係を示していると思われる注目される。

### 3. 調査に至る経緯、調査体制

平成21年度、安田地区の圃場整備事業が計画された。事業対象地は、西安田・森ノ前遺跡、中安田・法幢寺遺跡が広がっているため、遺跡の広がりを確認するため、両遺跡の広がる地区について確認調査を行った。その結果、事業の工事計画との調整を行い、遺構に影響を及ぼす範囲について、平成21・22年度の2ヵ年にわたり全面調査を行った。

#### 【西安田・森ノ前遺跡】

- 〈確認調査〉平成21年5月28日～6月18日（工事対象面積 約2ha）
- 〈本発掘調査〉平成21年度10月9日～10月31日
- 〈調査面積〉約300㎡

#### 【中安田・法幢寺遺跡】

- 〈確認調査〉平成21年11月6日～平成22年1月9日（工事対象面積 約5ha）
- 〈本発掘調査〉第1次調査 平成22年1月13日～3月27日  
第2次調査 平成22年5月6日～7月31日
- 〈調査面積〉約2,600㎡

#### 【調査・整理体制】

- 〈調査主体〉多可町教育委員会
- 〈発掘整理作業〉発掘・整理担当 安平勝利  
調査補助員 藤田侑子 松田優子
- 〈発掘・整理作業従事者〉  
笹倉直也 杉本正蔵 竹内弘司 田中由香里 棚倉和也 坪内梅吉 中川虎男  
中道重夫 中道和三男 橋本己義 森野恵三郎 横谷勉 吉田衣里 吉田数男
- 〈調査・整理作業協力者、協力機関〉（敬称略）  
岡田章一 長谷川眞  
兵庫県教育委員会文化財室 多可町役場産業振興課 中安田地区 西安田地区  
西脇市・多可郡広域シルバー人材センター多可町支部 藤本電機(株) ジオテクノ関西(株)

## 第Ⅱ章 西安田・森ノ前遺跡

### 1. はじめに

西安田・森ノ前遺跡（旧称西安田遺跡以下省略）は平成2年～平成3年にかけて行われた町道新設、拡幅工事に伴う調査によってその一部が明らかになっている。調査では旧安田川流路が確認され、その兩岸に中世期の集落や梵鐘鑄造遺構が検出されたほか、縄文時代後期、弥生時代後期、奈良時代の遺物も出土しており、当該期の集落の存在が指摘されていた。

今回、工事に先立って、工区内に約28ヶ所のトレンチを設定し、確認調査を行ったところ、北側は旧安田川の流路内であるが、南側の川岸にあたる地点において、弥生時代後期～中世期にかけての遺構、遺物が確認され、工事計画と調整を行った結果、約300㎡について全面調査を行った。調査の結果、弥生時代後期、平安時代末期～鎌倉時代前半にかけての遺構群を検出した。

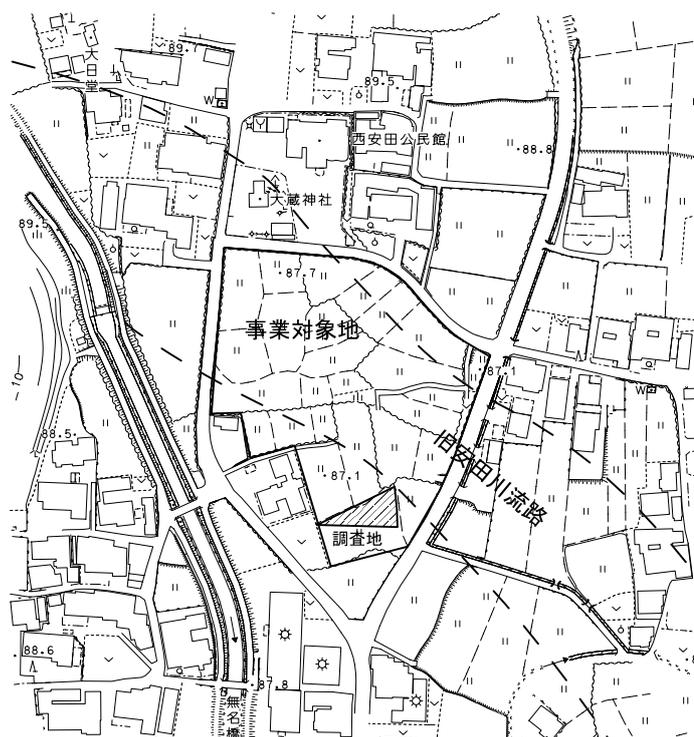
以下、概要を述べる。

### 2. 確認調査の概要

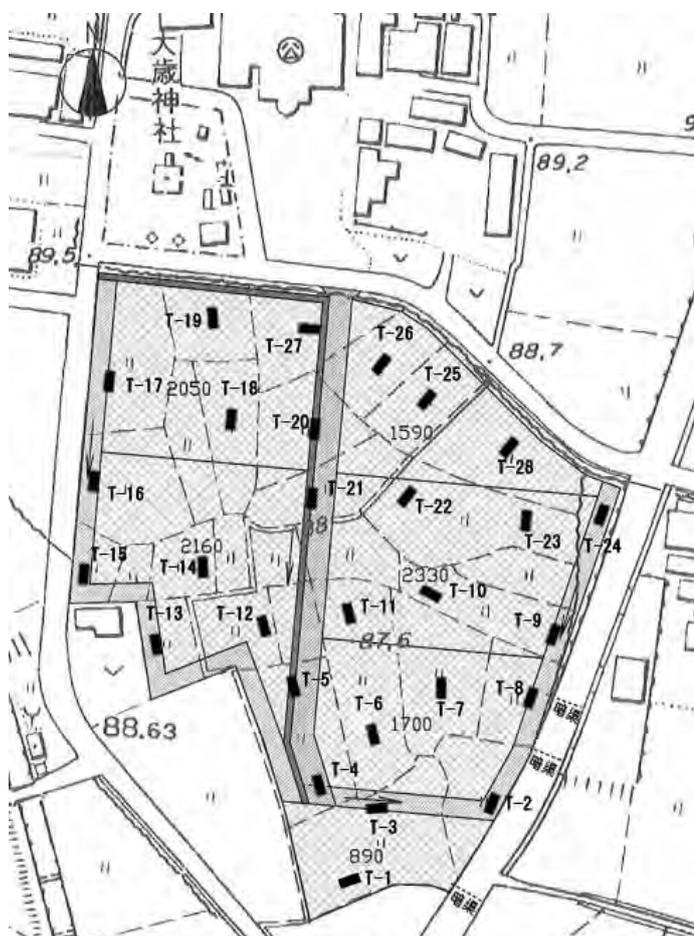
当該地は工区中央が、旧安田川の旧流路にあたるとみられ、中央部が若干低い圃場となっており、地下水位も高い状態にあることが地上で確認される。一方、工区南側や工区外にあたる北側は比較的高い地形となっており、特に南側は安定した圃場が広がっている。

基本層序は、南側では耕土－茶褐色土－灰褐色土（遺構面）もしくは耕土－茶褐色土－灰茶褐色砂礫層（包含層）－灰色砂礫土（ベース層）の順で堆積しており、地表下約30～60cmにおいて、古代～中世期にかけての遺構面（灰褐色土上面）もしくは遺物包含層（灰茶褐色砂礫土）が確認された。一方中央部より北側では耕土下に現圃場の整地層である茶褐色土がみられるが、その下層は砂礫層、粘質土の堆積が見られ、地表下約50cmで大量の湧水が噴出する状態にある。

各トレンチ埋土には、古代～近世期の



第4図 調査区位置図



第5図 確認調査トレンチ位置図

遺物が包含されるが、T-1、3が位置する圃場以外は、砂礫層やシルト質を中心とする堆積であり、旧安田川の流路内にあたる。T-1、3では奈良時代～鎌倉時代の遺構を確認した。

・ T-1

地表下約 50 cm で、古代～中世期の遺物を多く含む、約 10 cm の厚みのにぶい灰茶褐色の遺物包含層が堆積しており、その下層の灰茶褐色土上面において柱穴状遺構 2 基と東南側へ落ち込む遺構（溝もしくは土塋）を確認した。

柱穴状遺構は径 20 cm 前後、深さ約 12～13 cm で、P1 からは奈良時代の須恵器蓋、甕胴部の小片が出土したが図化し得なかった。

落ち状遺構は、深さ約 16 cm をはかり、暗茶褐色の埋土からは、奈良～平安期を中心とする遺物が出土している。

(1) は、小片ではあるが、7 世紀中葉に遡る須恵器坏 H。(2・3) は貼り付け高台を持つ坏 B で 9 世紀後半～10 世紀代に充てられる。(6) は、内側に弱く肥厚する口縁端部、ヘラケズリの底部で、内外面に赤色顔料が施される土師器坏（皿）。(7) とともに 8 世紀後半に比定される。

また、一部断割りを行った結果、遺構を確認した灰茶褐色土より下層にも、弥生時代にさかのぼる遺物 (8) が包含されており、さらに下層遺構面が存在する可能性が高い。

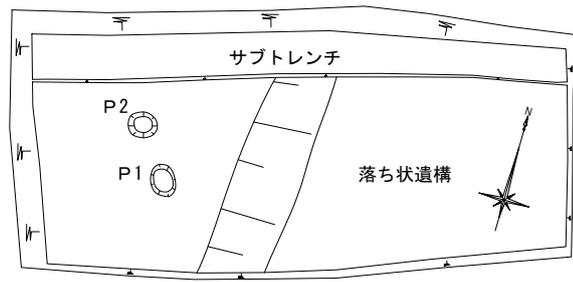
・ T-3

T-1 と同一圃場に設定したトレンチ。地表面より約 45 cm 下層において柱穴状遺構を 2 基確認した。そのうち、P36 の埋土からは、平安時代末～鎌倉時代の土器が出土した。（詳細は『第二章-3 全面調査の概要』の項で報告）

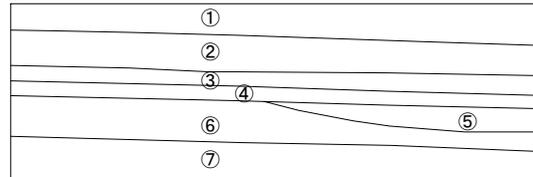
・ T-6

地表より約 55 cm 下層で東西にのびる石列を検出した。石列は、10～25 cm × 10～15 cm の細長い石を、南北に長軸をそろえるかたちで 1 列、1 段に配されており、高さは約 5 cm をはかる。地表より約 75 cm 下層で、にぶい黄灰色のベース面となる。第 4 層の茶褐色土層～第 7 層にぶい茶褐色砂礫層には平安時代～鎌倉時代前半期を中心とする遺物を包含している。なかでも、包含層から出土した石帯は、町内では初出の遺物であり特筆される。石帯は 1 辺約 40 cm の正方形で、1.3 cm × 2.4 cm の長方形の垂孔が施される。厚みは約 6 mm。材質は酸性凝灰岩。裏面の潜り穴は、上辺側は表まで出ないで貫通する 2 個 1 対で、そのうち 1 方は表まで貫通している。下辺側は 3 個 1 対で 1 つは表

T-1

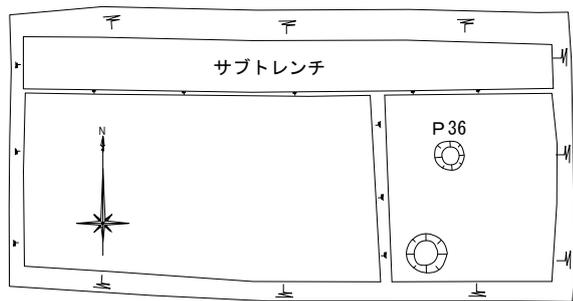


地表面仮0m

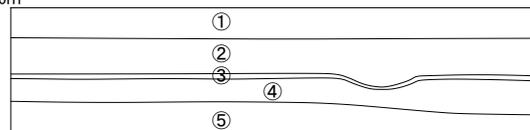


- ① 耕土
- ② にぶい茶褐色土
- ③ 黄橙色土
- ④ 灰茶褐色土（包含層）
- ⑤ 暗茶褐色土
- ⑥ 灰茶褐色土（遺構面）
- ⑦ 灰褐色 礫

T-3



地表面仮0m



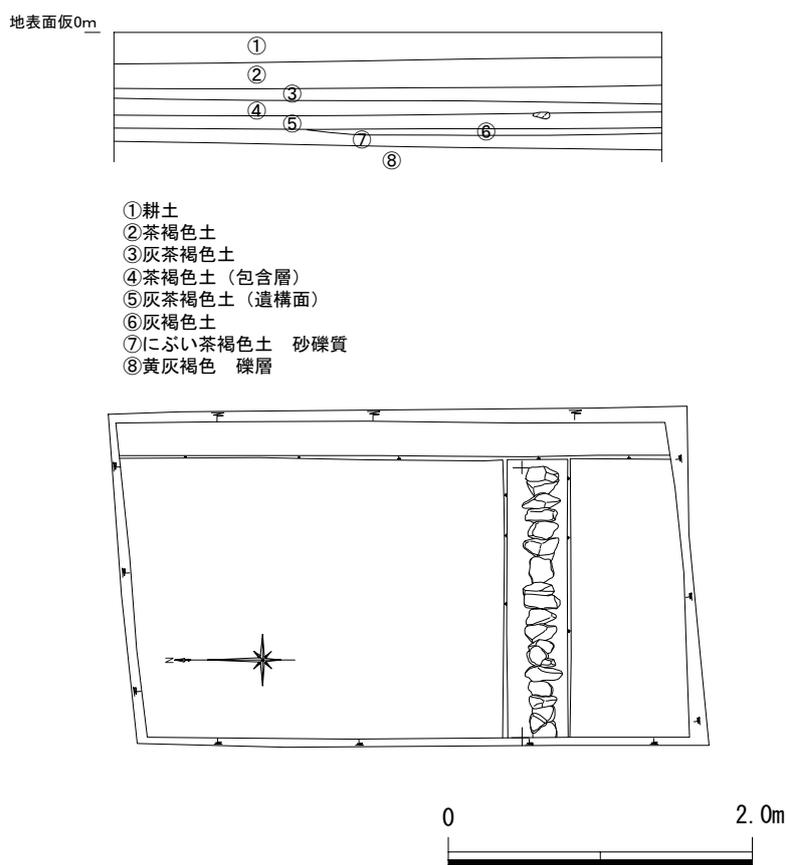
- ① 耕土
- ② にぶい茶褐色土
- ③ 黄橙色土
- ④ 灰茶褐色土（遺構面）砂礫質
- ⑤ にぶい黄橙色土 礫



第6図 確認調査 T-1・3

まで貫通し、あとの2つは、表に出ずに貫通している。表面の研磨によるツヤ等はみられない。

兵庫県下の銚帯を概観された渡辺氏によると、加古川流域では銅銚のみの出土例しか知られておらず、加古川流域においても初出となる。包含層出土のため、明確な時期は比定できないが、銅銚から石銚への変化が長岡京前後であると考えられていること、周辺のトレンチ等で、9世紀後半～10世紀代の遺物の出土が見られることから、同時期に充てられるものと思われる。



第7図 確認調査 T - 6

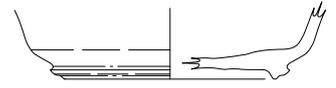
T-1



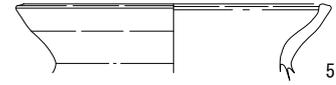
1



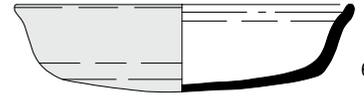
2



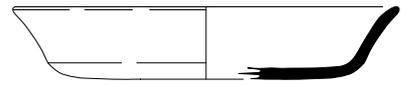
3



5



6



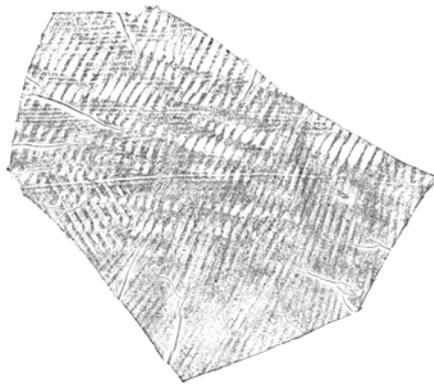
7



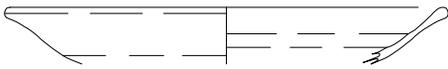
8



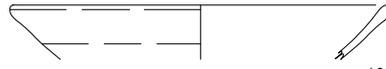
4



T-3



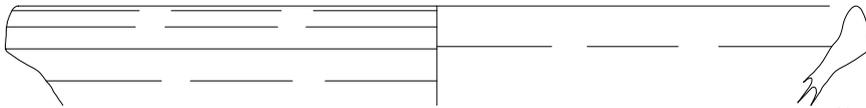
9



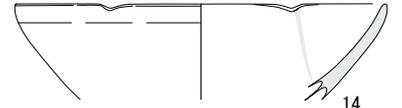
10



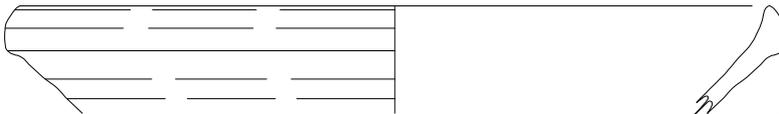
11



12



14



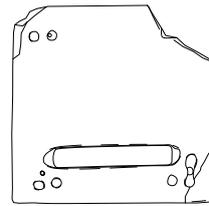
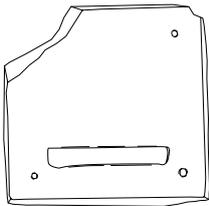
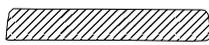
13



15



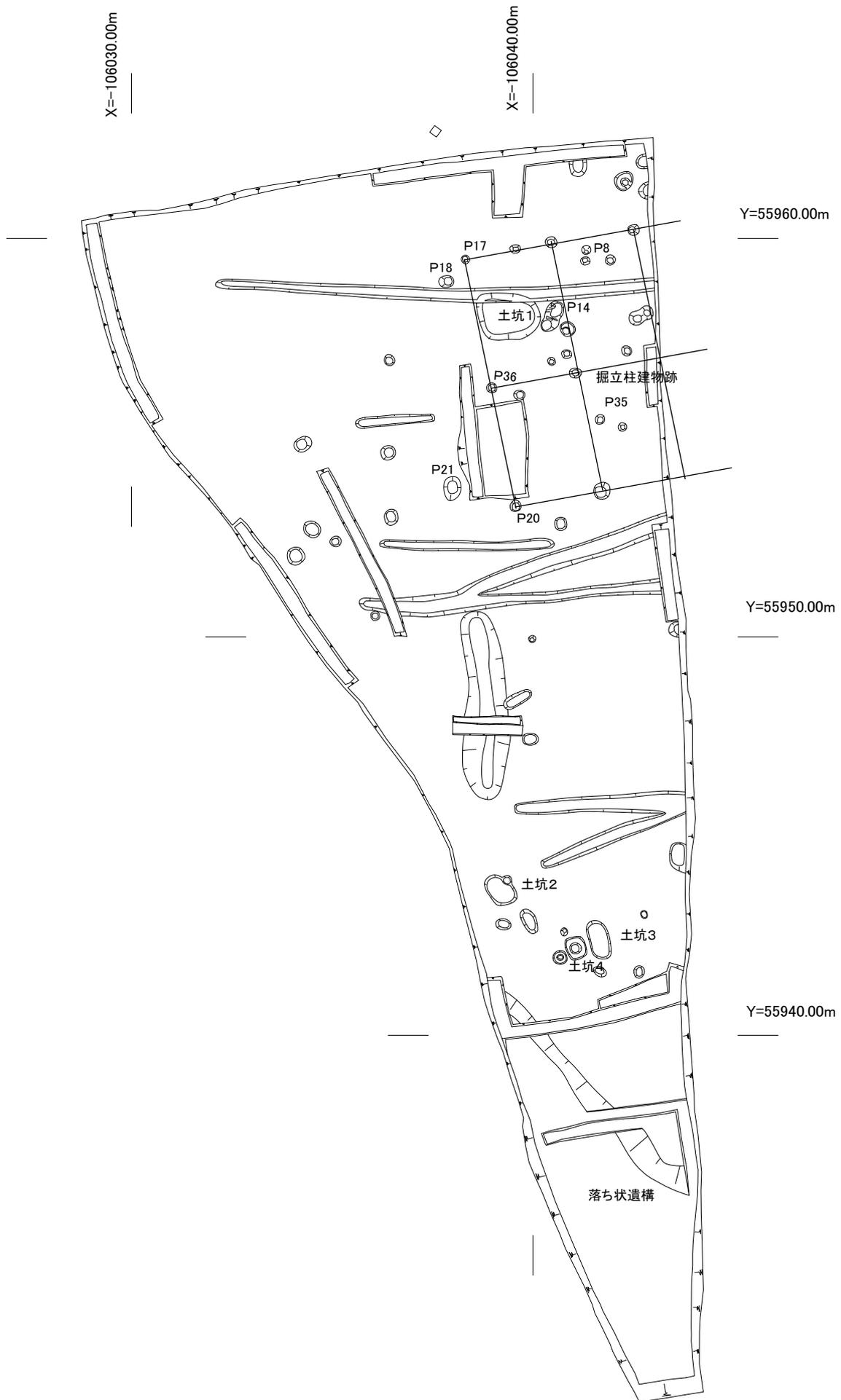
T-6



16



第8図 確認調査出土遺物



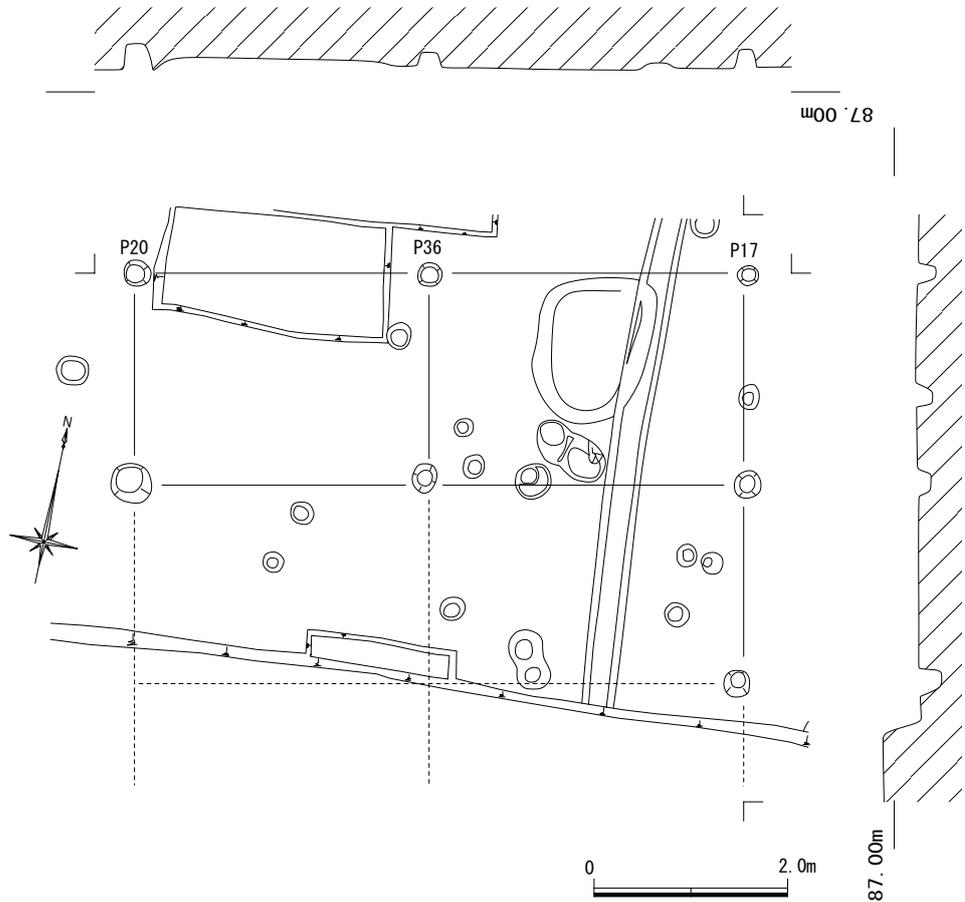
第9図 全面調査遺構全体図

### 3. 全面調査の概要

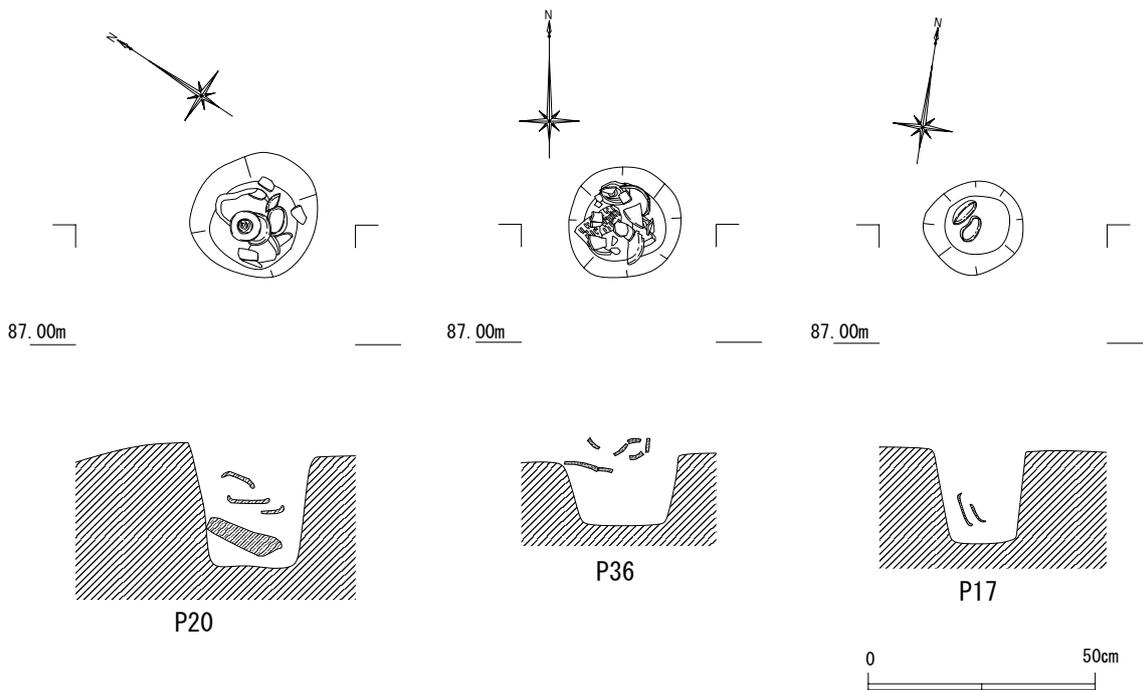
#### 1) 掘立柱建物跡

調査区東南端において、東西2間(約6.3m)×南北2間(約4.3m)以上の掘立柱建物跡を検出した。柱間は、東西が長く取られ約3m、南北は約2mをはかり、方位は南北を主軸とするとN-12°-Eである。東端の柱穴のみ、南へ2間分を検出した。柱穴径は25cm前後、深さは約15~26cmをはかる。建物を構成する柱穴のうち、北端の柱穴3基から土師器、須恵器の小皿が出土しており、特に北西端の柱穴からは須恵器小皿1枚、土師器小皿4枚が出土しており、地鎮等、何らかの呪術的、祭祀的な行為があった可能性がうかがえる。

北西端のP20からは(17)~(21)の5点が出土した。

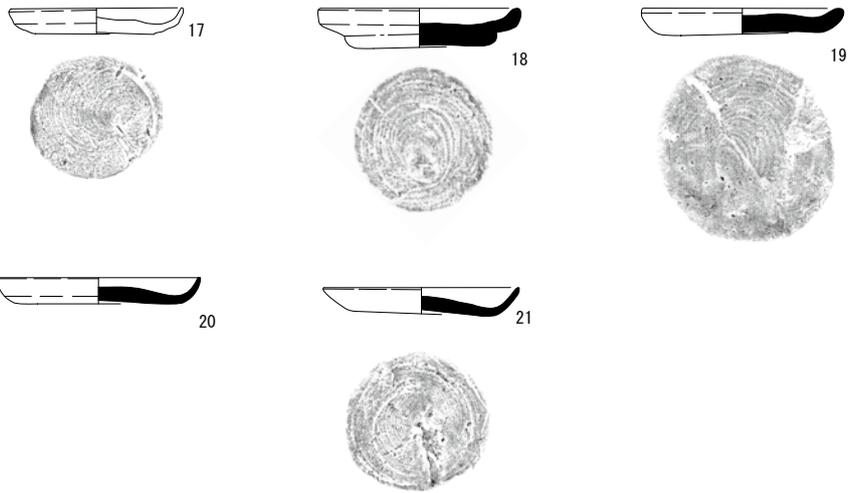


第10図 掘立柱建物跡

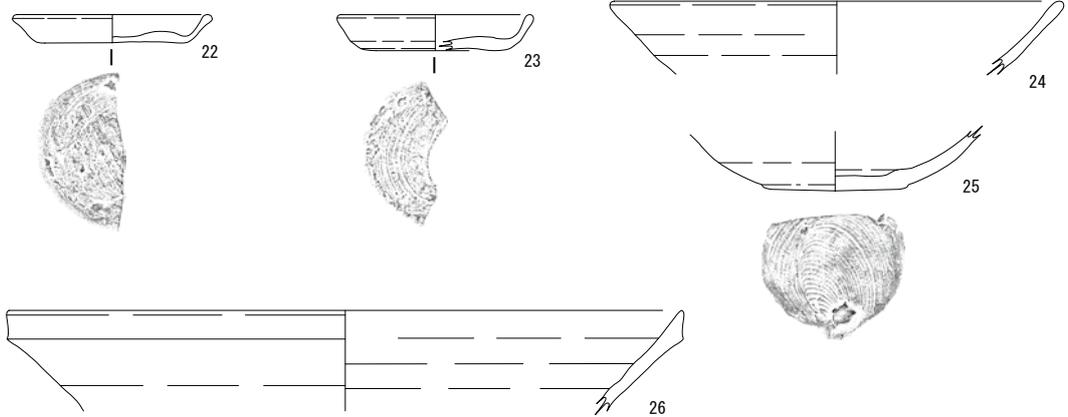


第11図 掘立柱建物跡柱穴

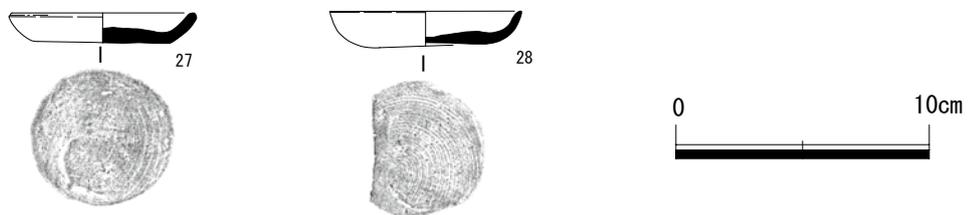
P20



P36



P17



第 12 図 掘立柱建物跡柱穴出土遺物

須恵器小皿（17）は、回転糸切りの底部から腰部で屈曲して内湾気味に立ち上がる。土師器小皿には、器壁が厚く、浅い器形をもつ（18）、（19）と、器壁が薄く内碗気味にたちあがる（20）、（21）がある。いずれも底部は回転糸切りによるが、（18）は底部が突出したようなしっかりした平高台をもつ。

P36からは須恵器小皿2点、須恵器山茶碗、鉢が出土しているがいずれも完形ではない。須恵器小皿は弱く外反しながら立ち上がる（22）と、腰部で弱く屈曲して内湾気味に立ち上がる（23）がある。山茶碗底部（25）はかろうじて見込み部が残る。

P17からは土師器皿2点が出土している。いずれも回転糸切りの底部に内湾気味の口縁部を持つが、器壁が厚い（27）と薄い（28）がある。

これら、掘立柱建物柱穴出土遺物はおおむね12世紀末～13世紀前半にあたる。

## 2) 土 坑

### ・土 坑 1

南北に長軸をとる楕円形の土坑。長径約 1.6 m、短径約 1.2 m、深さ約 12 cmをはかる。灰褐色の埋土からは、12 世紀後半～13 世紀前半の遺物が出土している。

### ・土 坑 2

長軸約 90 cm、短径約 60 cm、深さ 11.5 cmをはかる楕円形土坑。灰褐色埋土からは弥生土器小片が数点出土したが、図化できなかつた。

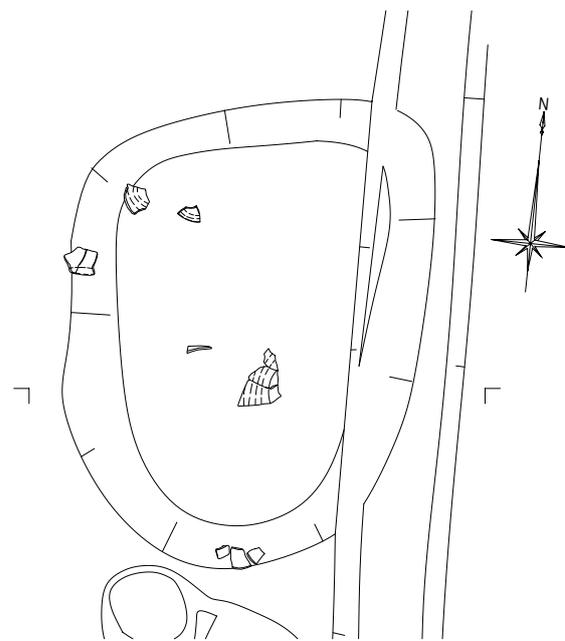
### ・土 坑 3

長軸約 1.0m、短径約 0.5m、深さ 8.5 cmをはかる楕円形土坑。灰褐色埋土からは弥生土器小片が数点出土したが図化できなかつた。

### ・土 坑 4

2 段掘りの隅丸長方形土坑で、長径約 58 cm、短径約 50 cm、深さ約 6 cmの掘り方に、径 28 cmの円形の穴が掘り込まれており、地表面からの深さは約 15 cmをはかる。埋土には焼土や炭が混じり、弥生時代後期の土器が出土している。焼土や炭が混じる埋土の状況等から竪穴住居址の中央穴の痕跡である可能性も考えられる。

(37) は甕胴部片で外面は平行タタキ、内面はハケ調整される。胴部中位の外面タタキ方向の変化により分割成形の痕跡が明瞭に残る、伝統的畿内V様式甕の胴部である。底部は小さいながらもまだしっかりとしている。高坏脚部は、坏部との接合部から大き開き、外面にはヘラミガキが施されるが、ハケ目調整の痕跡が部分的に残る。

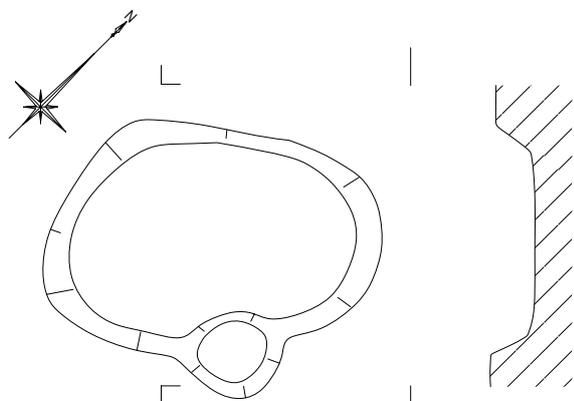


87.00m



0 50cm

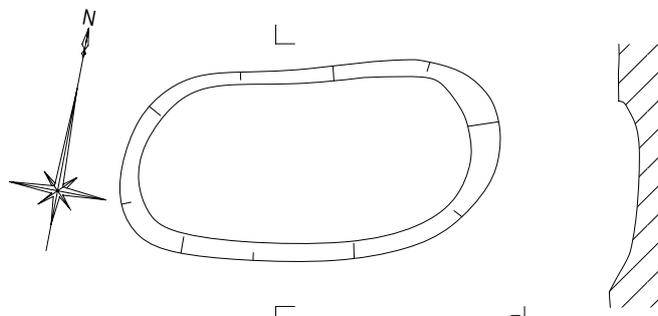
第 13 図 土坑 1



87.00m

0 50cm

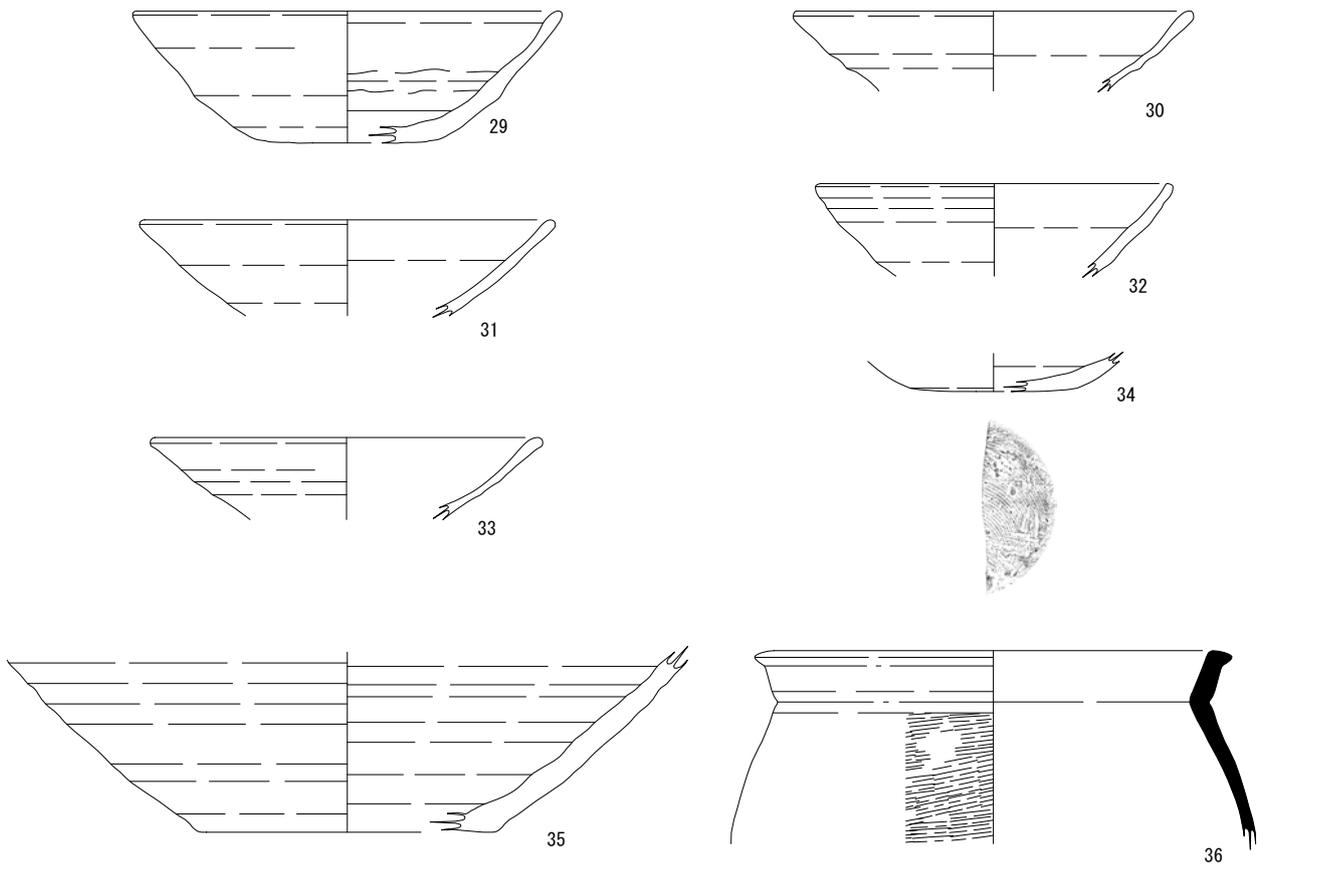
第 14 図 土坑 2



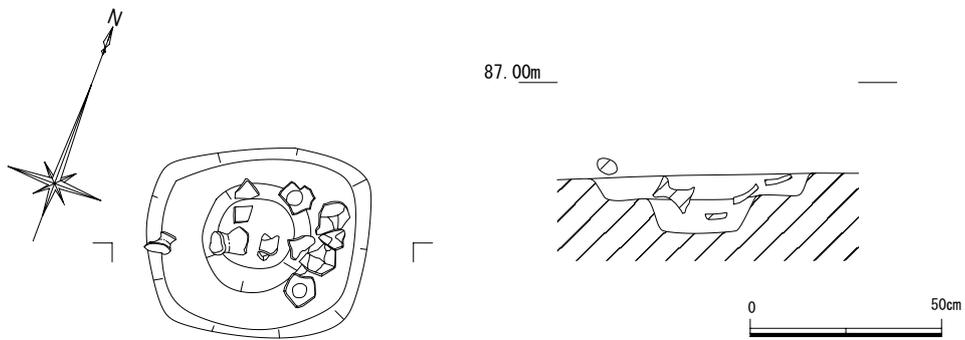
87.00m

0 50cm

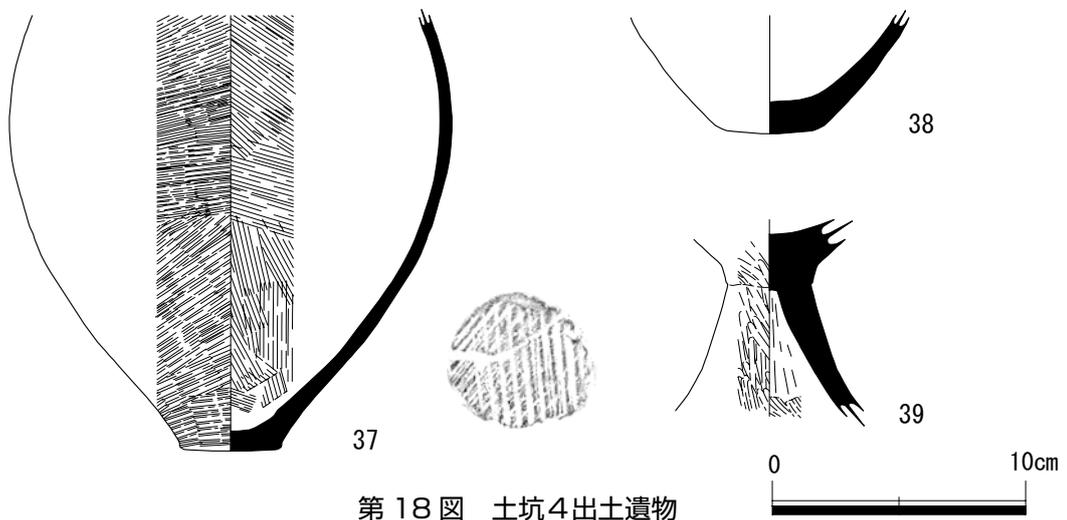
第 15 図 土坑 3



第 16 图 土坑 1 出土遺物



第 17 图 土坑 4



第 18 图 土坑 4 出土遺物

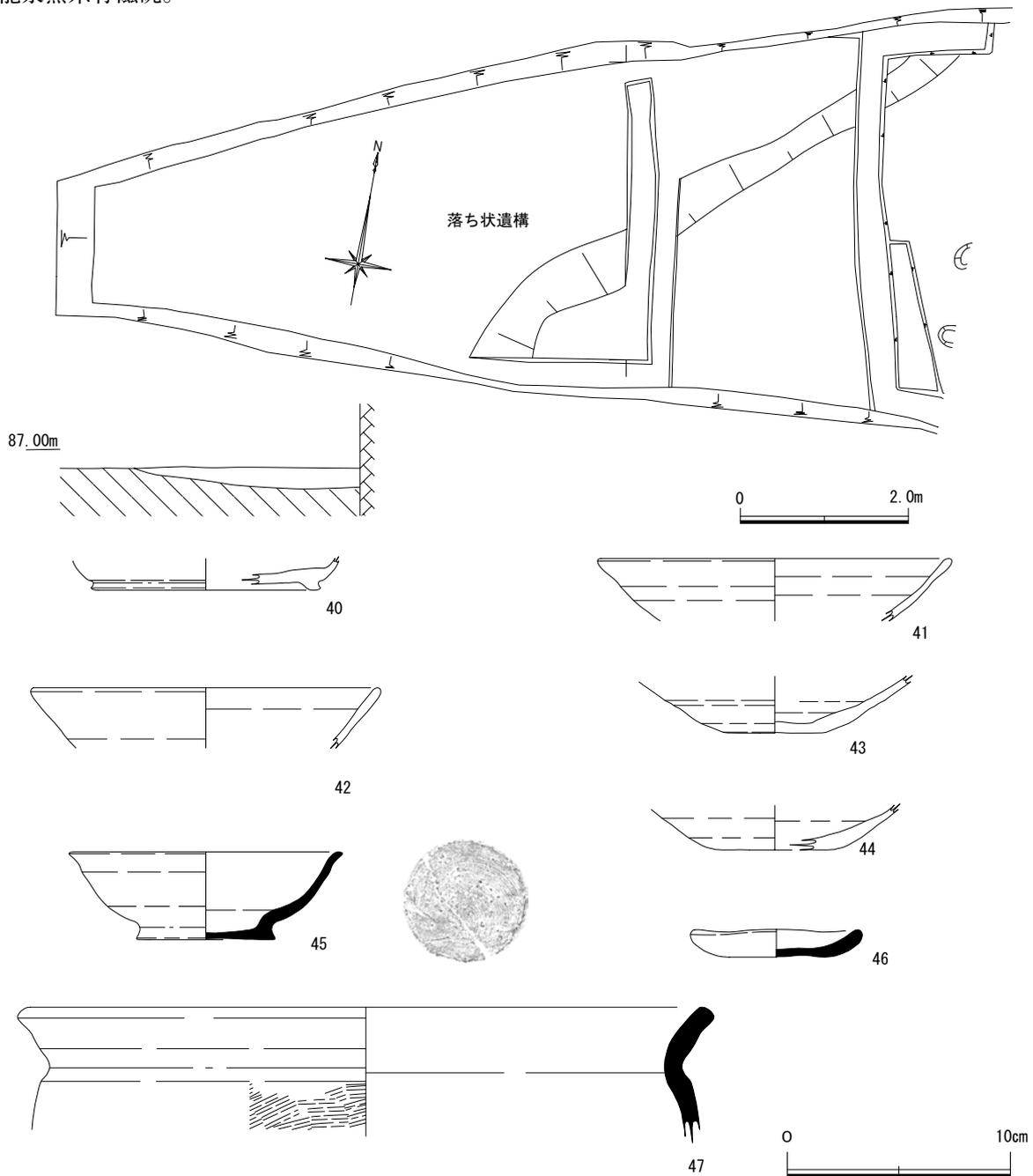
### 3) 落ち状遺構

調査区西端において、西側への落ち肩部を検出した。肩部は北東から南西方向へのびる。深さは最も深い部分で約 25 cmをはかる。埋土には多くの遺物を含むが、小片が多く図化に耐えうるものは少ない。時期は、弥生後期や 10 世紀代に遡る (40)、(45) 等が混じるものの、主として 12 世紀後半～13 世紀前半の遺物が多くを占める。

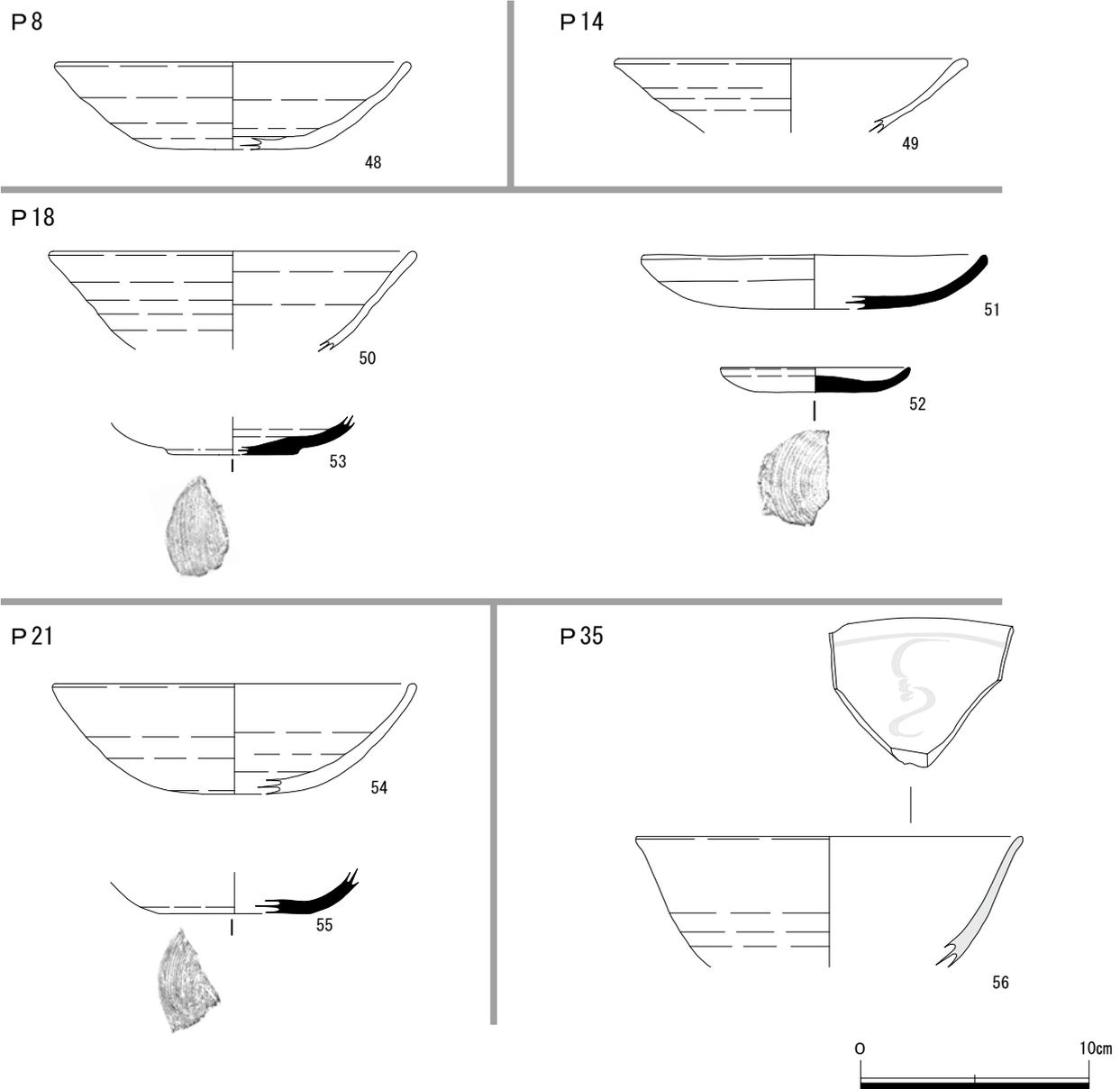
### 4) 柱穴状遺構

構成する建物は不明であるが、柱穴状の遺構を 37 基検出した。

埋土出土遺物は、図化できたものは少ないが、概ね 12 世紀後半～13 世紀前半を中心とするものである。(48) や (54) は須恵器山茶碗で、かろうじて見込み部が残る段階のもの。土師器碗 (53)、(55) についても底部回転糸切りによるが、高台部は痕跡程度にしか見られない。(56) は、内面に櫛描文を施した龍泉窯系青磁碗。



第 19 図 落ち状遺構及び出土遺物



第 20 図 柱穴状遺構出土遺物

## 5) その他の出土遺物

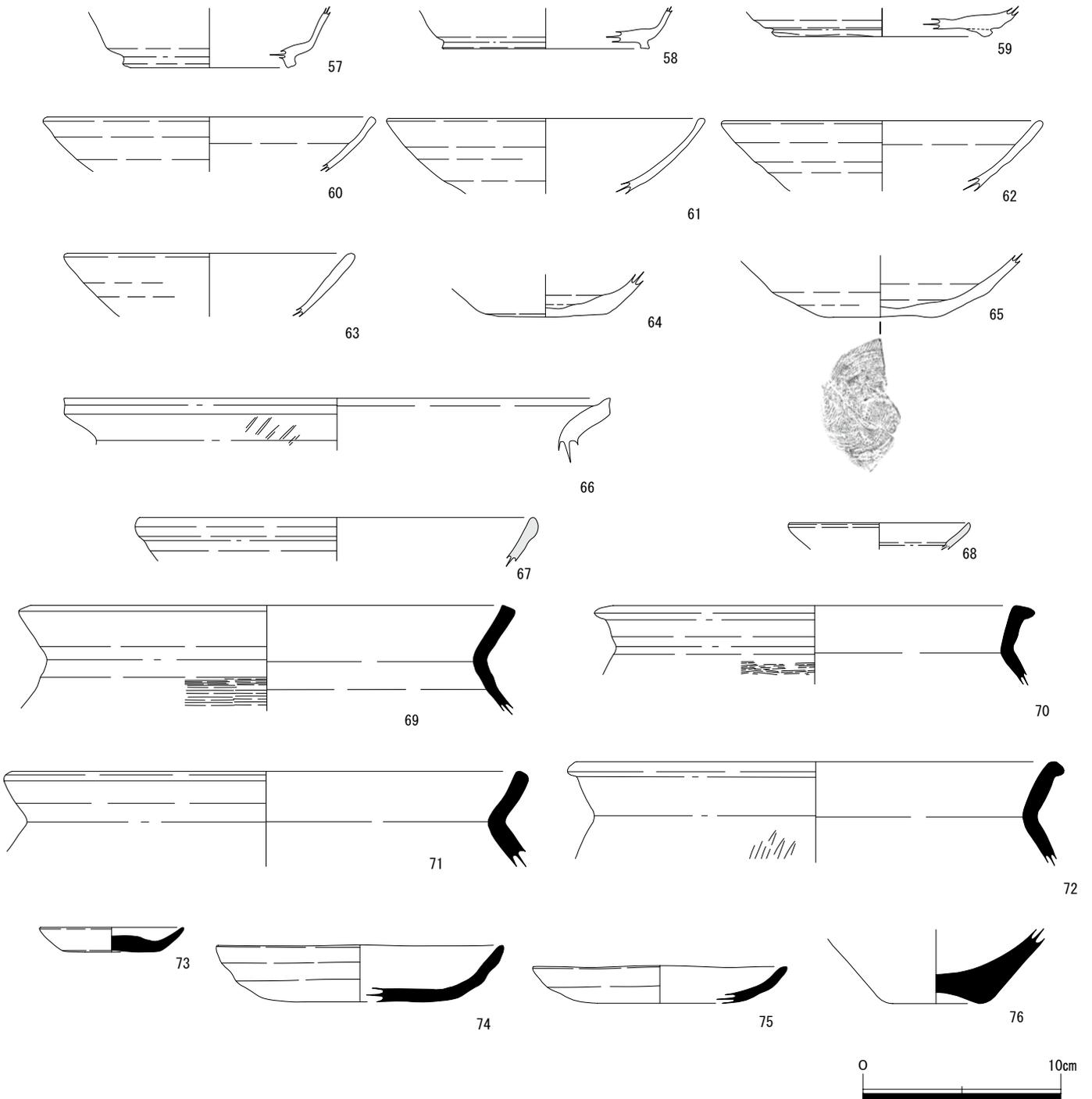
### (包含層)

包含層からは弥生時代後期 (76)、平安時代中頃～鎌倉時代前半期の遺物が出土している。(57)～(59)は底部に外側に張り出し気味の高台を持つ坏Bで、9世紀後半～10世紀代のもの。(60)～(65)は底部見込み部がかろうじて残る段階で、12世紀後半～13世紀前半の山茶碗。(67)は12世紀代の白磁碗。(69)～(72)の土塼は、比較的古様の、頸部で屈曲して開く口縁部をもつ(69)、(71)や口縁端部が外側に肥厚する(70)、(72)があるがいずれも12世紀後半～13世紀前半におさまる。皿では、底部回転糸切りによる小皿(73)や、手捏ね成形で底部未調整の(74)、(75)がある。

## 4. まとめ

西安田・森ノ前遺跡は、過去の調査において縄文時代中期～中世期にかけての遺構、遺物が確認されており、安田平野の中心的な集落の1つとして認識されている。今回の調査は、小面積ではあるものの、弥生時代後期の土坑や、平安時代後半～鎌倉時代前半期の掘立柱建物跡をはじめとする遺構群を検出したほか、確認調査のトレンチからは奈良時代後半期～平安時代前半期の遺物が出土しており、中でも石

帯や赤色顔料を塗布した土師器皿の出土は注目される。これら数点の遺物から官衛的施設の存在を述べるのは早計ではある。しかしながら、同時期の遺跡として、中区北部平野では多哥郡の郡衛にも推定されている思い出遺跡群、中区中部平野では多量の祭祀遺物が出土した安坂・城の堀遺跡が、一般集落とは異なる官衛的色彩の強い遺跡として知られており、今回の調査により、安田平野においても一連の特殊な様相を示す遺跡群のひとつとして、西安田・森ノ前遺跡があげられるのではないだろうか。また、西安田・森ノ前遺跡の位置する谷奥部には同期の寺院跡である、円満寺・東の谷遺跡の存在が確認されており、相互の何らかの関連も推測される。今後、奈良時代後半～平安時代前半にかけての、思い出遺跡群を中心とする中区各平野部の特殊な様相を示す遺跡のあり方や、相互の関連性を検討していくとともに、新たな調査によるデータの増加にも期待したい。



第21図 包含層出土遺物

西安田・森ノ前遺跡遺物観察表

遺物番号	出土場所	種類	器種	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	実測番号
1	T-1 落ち	須恵器	坏	9.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0052
2	T-1 落ち	須恵器	坏	13.7	10.0	4.3	ヨコナデ 底部ヘラキリ→ヨコナデ	ヨコナデ	0057
3	T-1 落ち	須恵器	坏	-	9.4	-	ヨコナデ 底部回転ヘラ切	ヨコナデ	0051
4	T-1 落ち	須恵器	甕	-	-	-	タタキ→ハケ	青海波文	0056
5	T-1 落ち	須恵器	壺	12.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0053
6	T-1 落ち	土師器	坏	13.2	9.6	3.5	ナデ 底部ヘラケズリ 赤色顔料	ナデ 赤色顔料	0050
7	T-1 落ち	土師器	坏	15.0	12.5	2.9	ヨコナデ 底部ヘラケズリ	ヨコナデ	0054
8	T-1 包含層	弥生土器	甕	-	5.4	-	タタキ		0055
9	T-6	須恵器	山茶碗	17.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0069
10	T-6	須恵器	山茶碗	14.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0068
11	T-6	須恵器	山茶碗	-	5.8	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0070
12	T-6	須恵器	鉢	33.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0067
13	T-6	須恵器	鉢	29.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0066
14	T-6		碗	14.6			口縁部輪花形	輪花部から縦に白色の分割線	0076
15	T-6	青磁	碗	-	6.3	-	高台内面まで施釉 底部露胎	文様あり (小片のため種類不明)	0077
16	T-6	石製品	石帯	縦：4.0	横：4.0	厚さ：0.6			0049
17	SB1 P20	須恵器	小皿	6.8	4.7	1.0	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0012
18	SB1 P20	土師器	小皿	7.8	6.0	1.6	ヨコナデ 底部回転糸切 底部貼り付けか？	ヨコナデ	0014
19	SB1 P20	土師器	小皿	7.8	6.3	1.0	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0013
20	SB1 P20	土師器	小皿	8.0	6.2	1.1	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0010
21	SB1 P20	土師器	小皿	7.7	5.2	1.0	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0011
22	SB1 P36	須恵器	小皿	7.6	5.7	1.1	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0005
23	SB1 P36	須恵器	小皿	7.5	5.9	1.4	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0006
24	SB1 P36	須恵器	山茶碗	17.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0065
25	SB1 P36	須恵器	山茶碗	-	5.8	-	ヨコナデ 部回転糸切	ヨコナデ→仕上げナデ	0064
26	SB1 P36	須恵器	鉢	26.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0063
27	SB1 P17	土師器	小皿	7.2	5.3	1.2	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0008
28	SB1 P17	土師器	小皿	7.5	4.5	1.4	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0009
29	SK1	須恵器	山茶碗	16.5	6.2	5.2	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ 体部中位粘土紐接合痕	0004
30	SK1	須恵器	山茶碗	15.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0030
31	SK1	須恵器	山茶碗	16.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0037
32	SK1	須恵器	山茶碗	13.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0061
33	SK1	須恵器	山茶碗	15.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0028
34	SK1	須恵器	山茶碗	-	6.6	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0062
35	SK1	須恵器	鉢	-	11.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0036
36	SK1	土師器	土埴	17.5	-	-	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	0007
37	SK4	弥生土器	甕	-	4.0	-	タタキ	ハケ	0046
38	SK4	弥生土器	底部	-	3.7	-	ナデ	ヘラケズリ	0048
39	SK4	弥生土器	高坏	-	-	-	ヘラミガキ	坏部ヘラミガキ 脚部ナデ 脚端部ハケ	0047

遺物番号	出土場所	種類	器種	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	実測番号
40	落ち状遺構	須恵器	碗	-	9.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0042
41	落ち状遺構	須恵器	山茶碗	15.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0044
42	落ち状遺構	須恵器	山茶碗	15.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0043
43	落ち状遺構	須恵器	山茶碗	-	4.5	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0045
44	落ち状遺構	須恵器	山茶碗	-	5.5	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ 仕上げナデ	0071
45	落ち状遺構	土師器	山茶碗	11.9	6.2	4.0	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0023
46	落ち状遺構	土師器	小皿	7.3	4.5	1.2	未調整	ナデ	0017
47	落ち状遺構	土師器	土埴	30.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ	口縁部ヨコナデ 体部板ナデ	0016
48	P8	須恵器	山茶碗	15.2	6.4	3.9	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0002
49	P14	須恵器	山茶碗	16.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0060
50	P18	須恵器	山茶碗	15.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0072
51	P18	土師器	皿	14.9	13.7	2.4	口縁部ナデ 底部未調整	ナデ	0058
52	P18	土師器	小皿	8.2	5.2	1.1	口縁部ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0059
53	P18	土師器	碗	-	5.7	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0073
54	P21	須恵器	山茶碗	15.7	5.8	4.9	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0003
55	P21	土師器	碗	-	6.6	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0074
56	P35	青磁	碗	16.9	-	-		口縁部圏線 クシ描文	0001
57	包含層	須恵器	坏	-	8.7	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0038
58	包含層	須恵器	碗	-	10.5	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0027
59	包含層	須恵器	坏	-	11.1	-	ヨコナデ 底部貼り付け高台	ヨコナデ	0022
60	包含層	須恵器	山茶碗	16.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0041
61	包含層	須恵器	山茶碗	15.9	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0040
62	包含層	須恵器	山茶碗	16.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0029
63	包含層	須恵器	山茶碗	14.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0033
64	包含層	須恵器		-	6.2	-	ヨコナデ 底部回転ヘラキリ	ヨコナデ	0032
65	包含層	須恵器	山茶碗	-	6.2	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ→仕上げナデ	0034
66	包含層	須恵器	甕	27.5	-	-	ヨコナデ（平行タタキ痕の こる）	ヨコナデ	0026
67	包含層	白磁	碗	19.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	0039
68	包含層	青磁	皿	9.1	-	-			0075
69	包含層	土師器	土埴	24.0	-	-	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	0035
70	包含層	土師器	土埴	20.6	-	-	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	0020
71	包含層	弥生土器	甕	25.6	-	-	口縁部ヨコナデ 体部荒れて不明	口縁部ヨコナデ 体部荒れて不明	0025
72	包含層（東断割り）	土師器	土埴	24.0	-	-	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ（荒れて不 鮮明）	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	0015
73	包含層	土師器	小皿	7.2	4.9	1.3	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	0019
74	包含層	土師器	皿	14.4	12.5	2.9	口縁部ナデ 底部未調整	ナデ	0021
75	包含層	土師器	皿	12.8	11.2	1.9	口縁部ナデ 底部未調整	ナデ 煤付着	0018
76	包含層	弥生土器	底部	-	5.4	-	ナデ	ナデ	0024

# 第三章 中安田・法幢寺遺跡

## 1. はじめに

中安田・法幢寺遺跡は臨濟宗妙心寺派大雄山法幢寺周辺に広がる中世期～近世期遺跡である。法幢寺は中世後期に夢窓国師によって開かれ、寛永11年(1634年)には、福井県大安寺を開いた名僧大愚宗築によって、中興されたと伝えられる、臨濟宗妙心寺派の禅宗寺院。現在の法幢寺周辺には圃場や住宅地が広がっているが、山麓部には人工的な平坦地が数箇所確認されており、中世～近世期の遺物が散布していることから、いくつかの坊院をもつ寺院関連の遺構が広がっている地域であると考えられている。

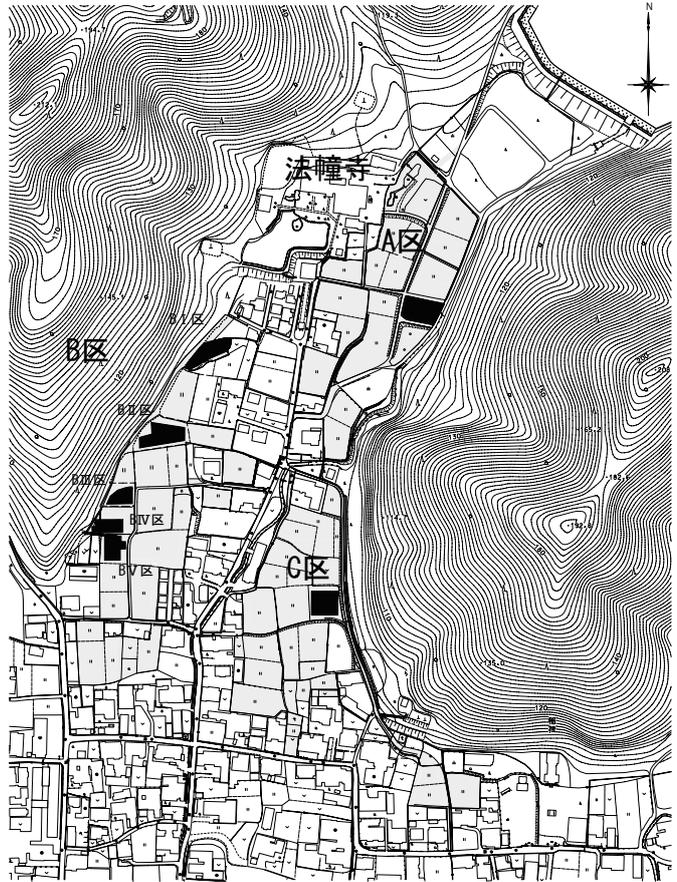
今回、中安田地区の圃場整備が計画され、遺跡の有無、広がりを確認するため、工区内に62ヶ所のトレンチを設定し、確認調査を行った。調査の結果、中世期～近世期の遺構、遺物が確認され、事業計画と調整後、遺構面に影響が及ぶ箇所について、全面調査を行った。事業対象面積は5haと広大であるため、便宜上、工区内をA～D地区に分け、B地区の全面調査区についてはI～V区にわけて調査を行った。

以下、概要について述べる。

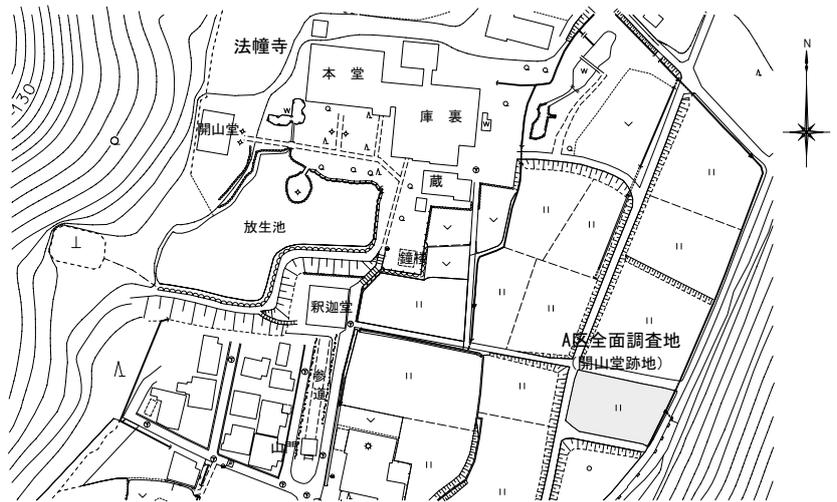
## 2. A区

### (1) 遺構の概要

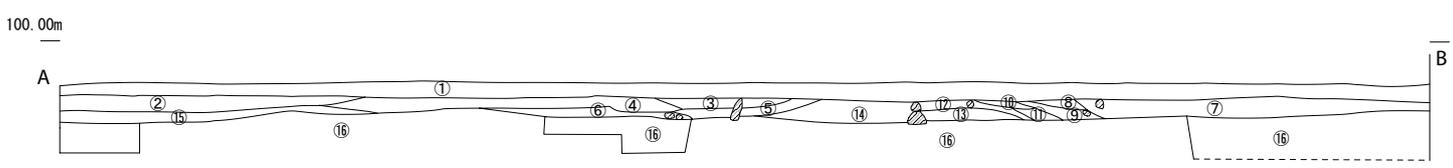
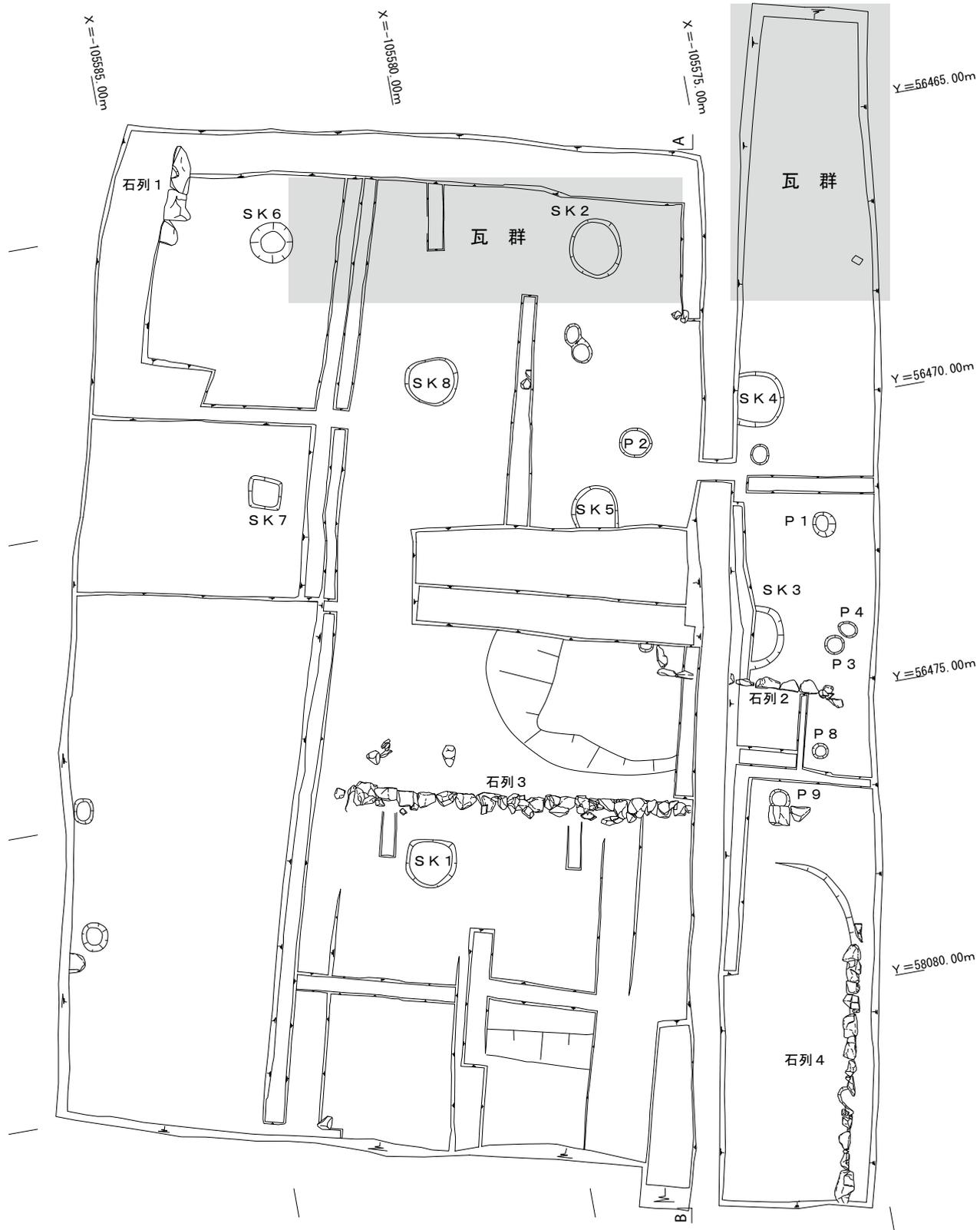
A地区全面調査地は、現法幢寺敷地内に、大正頃に移築された開山堂が建っていた場所にあたる。周辺の確認調査トレンチの観察では、当該地と現法幢寺の間には、砂礫層の堆積がみられ、北側の山から流れ出る谷川の流路であることが確認される。中安田地区所有の天保8年(1837年)の村絵図では、当該地に建つ開山堂と本堂、その間に南流する谷川が記されている。調査では、近世期の遺構と、部分的に下層で中世期の遺構を検出した。調査地は、傾斜地を造成することによって作りだされている。西側は緩やかに西へと傾斜していく地形を、中世期と思われる黒褐色土と、上層の江戸時代初頭～中頃の瓦を多く含むにぶい黄褐色土により、深い部分で約60cmの埋め立てによって現在の圃場の地形となっている。南側は現地形でも観察されるが、急激に南へ落ちていく地形を、約70cmの埋め立てによって成形している。



第22図 調査区位置図



第23図 A区位置図



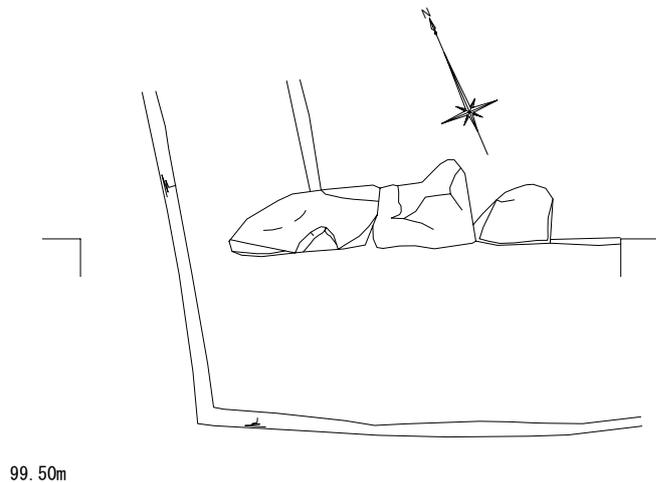
- ① 耕土
- ② 10YR3/3にぶい黄褐 瓦集積
- ③ 10YR4/4褐色
- ④ 10YR3/3褐色
- ⑤ 10YR3/2黒褐
- ⑥ 10YR6/6明黄褐
- ⑦ 10YR3/1黒褐 礫混じり
- ⑧ 10YR2/1黒
- ⑨ 10YR2/1黒+10YR5/4にぶい黄褐
- ⑩ 10YR2/1黒
- ⑪ 10YR2/1黒 小石混じり
- ⑫ 10YR3/2黒褐
- ⑬ 10YR3/1黒褐
- ⑭ 10YR2/1黒
- ⑮ 10YR3/2黒褐
- ⑯ 10YR2/1黒

第 24 図 A区遺構全体図

## 【石 列】

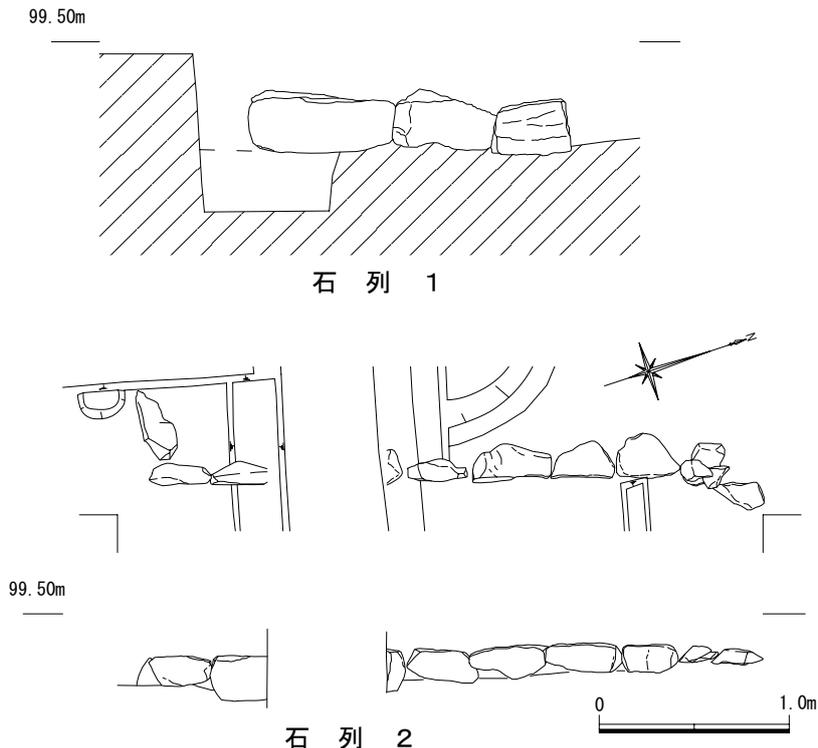
### 〈石 列 1〉

調査区南西端において、中世～近世期の遺構面が残る平坦地を区画する石垣。検出できたのは南面する3石のみ。幅35～70cm、高さ約30cmと、石列2、4よりひとまわり大きな石材を使用している。石列が区画する平坦部の盛り土、及び南側の埋土からは近世期の瓦が出土している。



### 〈石 列 2〉

調査区北西側をL字型に区画する石列。検出できたのは南東部の一角のみ。幅40cm前後、高さ15cm前後の石材を1段積み、東面7石、南面1石を検出した。石列角部の一角は、石列1の基底レベルより20～25cm高くなっている。しかしながら、石列が区画していたと思われる西側部は、後世の改変により、失われているものと思われる。石列角部の埋土より中世期の瓦が出土している。



### 〈石 列 3〉

石列3は西向きで、南北に延び、調査区東側の一角を区画する。横幅20～40cm、縦15cm前後の横長の石が1～2段積みされ、高さは、最も残りの良い部分約33cmをはかる。石列により区画されていたと思われる平坦地は、近世期以降の改修等により削平されていると思われる。石列西側の埋土より、中世後半期（13世紀代）の須恵器、土師器片が出土しているが、小片のため図化し得なかった。

### 〈石 列 4〉

調査区北東端を、北向きで東西にのびる石列。横15～35cm、縦10～15cmの横長の石が基底部のみが遺存する。石列西端は石は残っていないが、掘り方状の低い落ちが南の石列3の方へ回り込むようにめぐることから、石垣3と同一区画を構成するものと思われる。

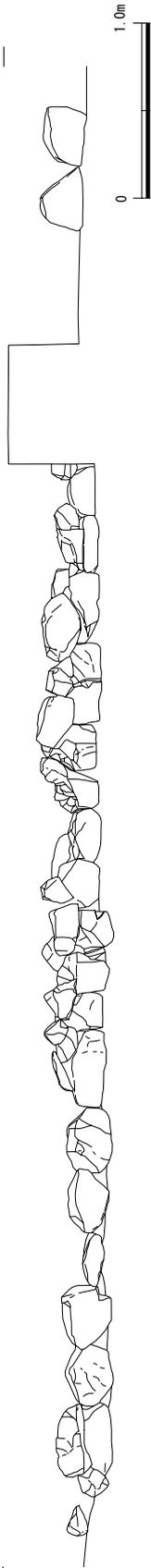
## 【土 坑】

円形もしくは隅丸方形の土坑を8基検出した。径0.7～1mの楕円形もしくは、一辺約50cmの方形を呈し、深さ10～30cmをはかる。いずれもほぼ同程度の規模であり、SK8を中心として、SK2、SK5、SK6、SK7が方形に配置されているようにもみえ、礎石等の抜き取り穴の可能性も考えられるが、柱間が5m前後と大きくなり、推測の域を出ない。土坑内からは江戸時代中頃以降の遺物小片や瓦片が出土している。また、SK1以外は瓦群を埋め込んだ敷地造成後に掘り込まれており、江戸時代中頃以降の時期のものである。

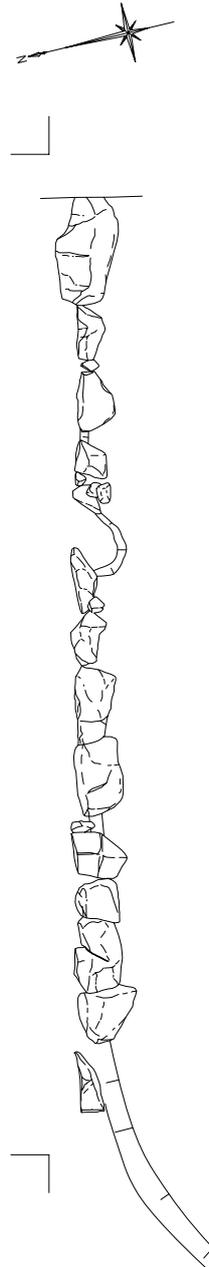


99.50m

第26图 石列3·4

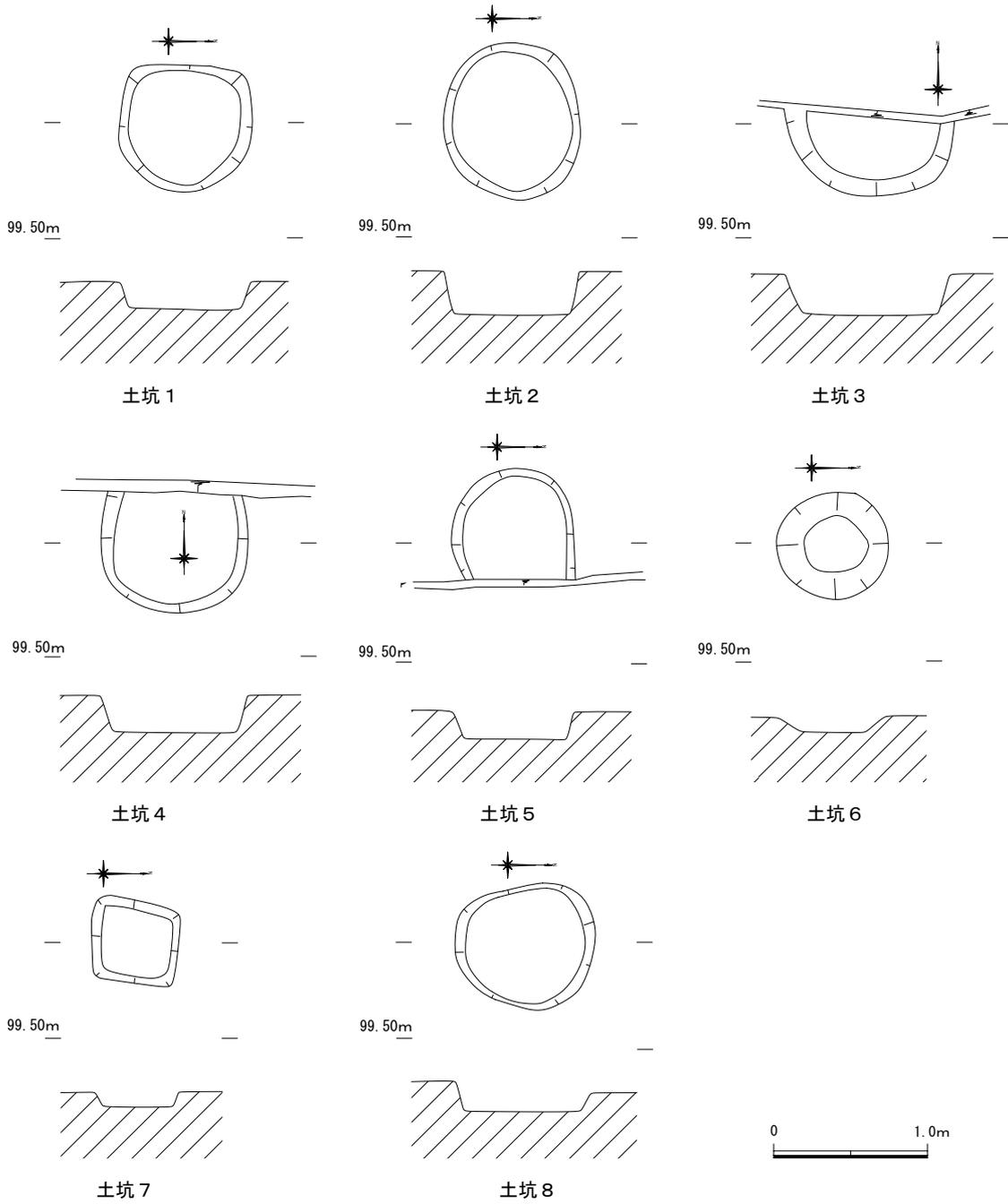


石列 3



99.50m

石列 4



第27图 土坑 1~8

## 【柱 穴 状 遺 構】

石列2周辺を中心に、7基の柱穴状遺構を検出した。建物の構成は不明。

P1、2は、SK1～SK8と同じ江戸時代中頃以降の遺構面から掘り込まれている。P3～P9は江戸時代中期以降の遺構面を作り出すためのにぶい黄褐色の造成土下層で検出され、埋土には、上層のにぶい黄褐色土が堆積している。各ピットからは少量の土師器小片が出土しているが時期比定、図化に耐えるものではない。

## 【瓦 群】

調査区西側は、西への緩傾斜地を造成することによって、近世最終期の遺構面をつくり出している。造成は数回行われているようであるが、最終の整地層であるにぶい黄褐色土中から、近世初頭～中頃にかけての瓦が敷き詰められたような状態で出土した。瓦はコンテナで30箱分出土しているが、建物1棟分の瓦とするには数は少ないものの、瓦の種類は多く、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦、雁振瓦がある。

### (2) 遺物の概要

#### 【石列2埋土】

(K1)は凸面不整方向のナデが施されるが部分的に縄目タタキ痕が残る。凹面は、粗いナデが施されるが、布目が明瞭に残り、ループ状の吊り紐痕がみられる。側面は、しっかりと面取りが施される。

## 【瓦 群】

### ・軒丸瓦

軒丸瓦は瓦当部で確認できる総点数は4点のみである。いずれも周囲に珠文を配する左巻き巴文で、圏線はみられない。巴頭部は比較的丸みを持ち、括れを有し、尾部は細長く伸び隣接する巴の尾部と接して圏線状を呈する。珠文は比較的大振りで、復元すると18個となる。外縁幅は約2.2cm、高さ7～8mmをはかり、内外側縁は面取りされる。瓦当と丸瓦の接合部は、瓦当と丸瓦を接合後、瓦当裏面に補充用の粘土板を接合しており、丸瓦の瓦当との接合部、補充用粘土板との接合部の端面には、接合を良くするためのかき目が施されている。凸面は縦方向の丁寧なナデ、凹面はコビキBで、軽いナデが施されるが布目がよく残り、布の重ね目部分と思われる痕跡がみられるものもある。瓦当裏面は不整方向のナデ調整。(K6)は、瓦当部が剥離しているが、玉縁部まで残っている。凹面側縁部、玉縁部側面はしっかりと面取りされており、尻部には、焼成前に穿たれた釘穴がみられる。

### ・軒平瓦

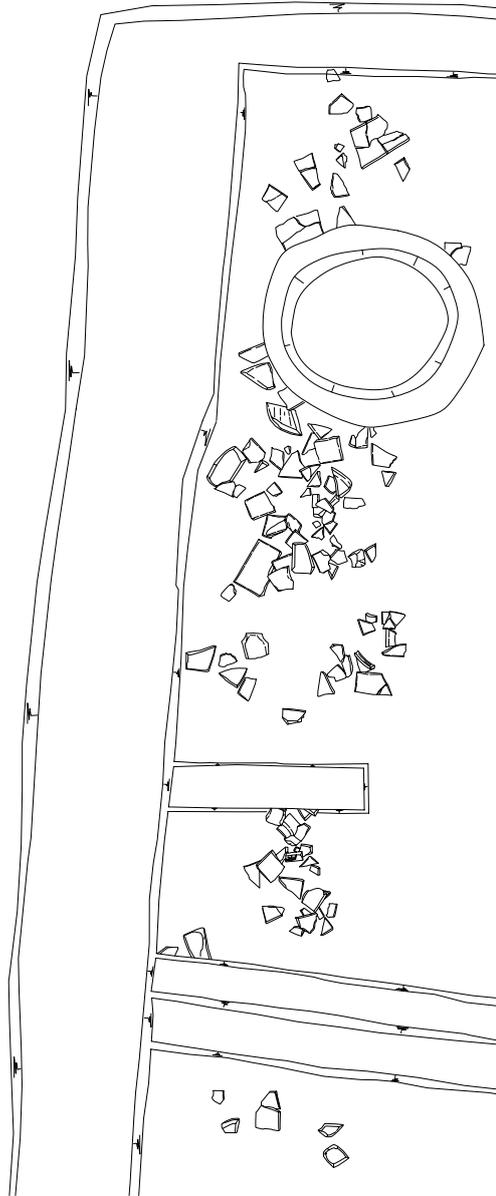
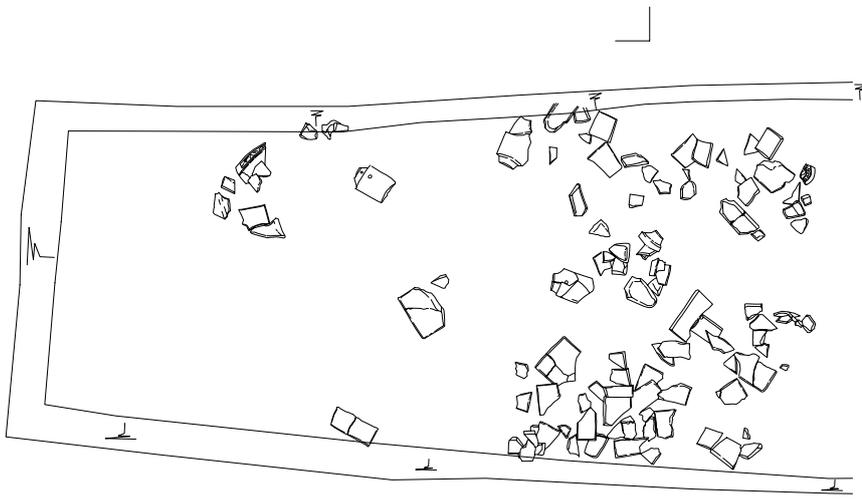
軒平瓦は図化できなかったものも含め、瓦当面で確認できる点数は9点である。

いずれも凹面両端に翼状の水返し袖がつく。瓦当文様は、橘唐草文で、中心飾りはシャープな星形を呈し、三葉文の左右先端は明瞭に二股にわかれる。均等唐草文は上下に3回反転し、両端先端は大きく二股にわかれる。瓦当面外縁内側、及び、上端部は比較的丁寧な面取りがされている。瓦当と平瓦の接合方法は顎部貼り付け技法により、瓦当裏面の接合部には強いヨコナデが施される。凸面はケズリの後粗いナデ、凹面は丁寧なナデが施される。(K7)は凸面に引っ掛け用の突起がつき、その後方に釘穴がみられる。平瓦と瓦当顎部、水返し部との接合部には粗いヘラ状工具によるクシ目や刺突が施されている。(K2)は出隅用の隅軒平瓦。一枚づくりの廻り隅で凸面側縁には水返しがつき、中央部には長方形の釘穴もしくは引っ掛け穴がみられる。先端部には隅巴がのっていた痕跡がみられる。瓦当文様は、中心飾りは三葉は直線的のび、2回反転する唐草文の先端は分離する。他の軒平瓦と文様を異にし、古手の様相を示す。瓦当面外縁内側、及び、上端部の面取りはみられず、凹凸面ともナデ調整。

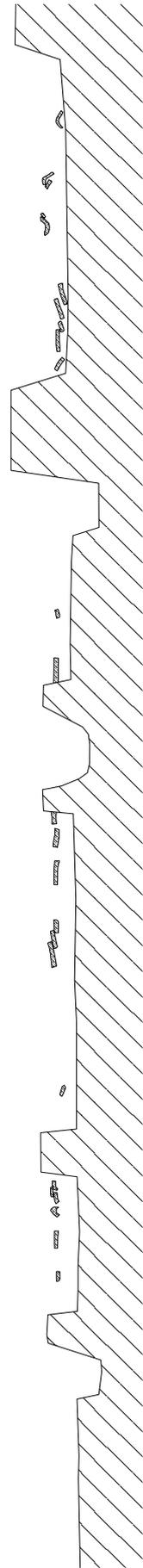
### ・丸 瓦

丸瓦には、6類に分類した。

I類(K14)は小片が出土したのみではあるが、最も古手の特徴を持つ。凸面はナデが施されるが、縄タタキの痕跡が残る。凹面には明瞭な布目を残し、板目状のナデが施され、側縁部はしっかりと面取



100.00m



0 2.0m

第 28 図 瓦群出土状況

りされる。同一個体と思われる丸瓦が、石垣2埋土から出土している。

Ⅱ類（K15～K17）は、玉縁側面の面取りが、胴側面部の面取りと連続しており、胴側縁部も幅広の面取りが施される。凸面は縦方向ミガキ調整され、玉縁部まで施されるもの（K15）と玉縁先端部のみのもの（K16）がある。凹面は、コビキBで、部分的にナデが施されるが布目が残る。Ⅰ類に比べると布目の密度は細かい。

Ⅲ類（K18～K20）はⅡ類同様、玉縁側面の面取りが、胴側面部の面取りと連続しているが、胴部側縁部の面取り幅は狭い。凸面は縦方向のミガキ調整が施され、玉縁部はナデのみのもの、先端部のみミガキ状に丁寧に仕上げられるものがある。凹面はコビキBで、細かい布目は明瞭に残る。また、布と布繋ぐ縫目痕と思われる、縦方向の刺し縫い状の細い紐状圧痕がみられる。

Ⅳ類は玉縁側面の面取りが、胴部側縁先端部につながらないもので、胴側縁部の面取りがしっかりし、幅の広いものⅣa類（K21・22）と丸みを帯び狭いものⅣb類（K23～K29）がある。いずれも凸面は磨き調整され、玉縁部はナデのみのもの、先端部のみミガキ状に丁寧に仕上げられるものがある。凹面はコビキBで、細かい布目が明瞭に残り、刺し縫い状の紐圧痕が縦横にみられる。また、（K23）、（K28）にはへら状工具による内タタキ痕がみられる。

Ⅴ類（K30・31）は凹面に滑り止め用の、半円形横棧を有し、胴部に釘穴、玉縁部に針金穴をもつ。横棧と胴部の接合部には接合強化のためのクシ目が施される。胴側縁部の面取りはⅣb類に似る。

## ・平瓦

平瓦は、調整によってⅥ類に分類した。

Ⅰ類は小片（K36）のみの出土であるが、凹面に粗いナデが施されるが、布目を残し、狭端面上縁に幅広の面取りがされており、中世末期に遡るもの。

Ⅱ類（K37・38）は、凸面にほとんどナデ調整が行われず、離れ砂の痕跡がよく残る。端面側には凹型成形台の痕跡がみられる。（K37）凸面には部分的に板ナデ状の痕跡がある。

Ⅲ類（K39～K43）の凸面は、板状工具による粗いナデの後、外縁に沿った仕上げのナデが簡易に施されるが、四方に部分的に凹型成形台の痕跡は残る。仕上げのナデは、凹型成形台使用時に、台からはみ出した粘土の盛り上がりを押さえるような、幅の狭いナデである。

Ⅳ類（K44～K52）は、粗い板ナデ、もしくはケズリの後、外縁に沿った仕上げのナデが施されるが、側面側、狭端面側を幅広く丁寧に仕上げる。広端面側はナデ調整されるが、凹型成形台の痕跡が残る。

Ⅴ類（K53～K60）（K99～K101）は基本的にはⅣ類と同じであるが、外縁に沿った仕上げのナデが、幅2～3cmと幅広く、狭広端面側、側面側とも丁寧に仕上げられる。広端面側に部分的に凹型成形台の痕跡は残る。（K60）、写真（K99～K101）は狭端面に○の刻印がみられる。

Ⅵ類（K61～K64）は、凸面調整はⅤ類と同じで、5本1単位のクシ状工具による掻き目がクロス状に施される。

これら、Ⅱ～Ⅵ類の凹面の調整は、丁寧に不整方向ナデが施され、狭端面上縁には、幅狭の、明確な面取りが施される。

## ・面戸瓦

面戸瓦は、図化できなかったものを含め、端面の残るものの総数は30点で、棟の両側のものがあり、建物に向かって右勾配用が11点、左勾配用が19点を数える。いずれも平行四辺形を呈する鰹面戸瓦である。凸面はへら状工具による丁寧に仕上げナデが施され、凹面はコビキBで布目が残る。吊り紐状の痕跡や刺し縫い状の痕跡、内タタキがみられるものがある。

## ・雁振瓦

雁振瓦は、非常に小さい玉縁部を持ち、凸面はへら上工具による丁寧にナデ、凹面はコビキBで、軽いナデが施されるが、離れ砂の痕跡が残る。凹面前端と側縁部は面取りされ、後端部は、後続の瓦の玉縁が接する部分を広く面取りする。（K78）の凹面には四角の枠取り内に『瀨（御？）瓦大工・・・』と押捺刻印銘がみられる。

### ・西側盛土内 その他出土遺物

西側盛土内からの出土遺物は大半が瓦で、土器等は少ない。瓦群に混じって14世紀～19世紀前半の幅広い時期の遺物が出土しているが、小片が多く図化し得るものは少ない。(5)は赤褐色の胎土を持つ中世備前焼で、中世5期(15世紀後半)にあてられる。(2)は17世紀前半の唐津焼碗底部で内面見込み部に砂目がみられる。時期の下るものでは、型打ち成形による染付磁器の八角形碗(1)や信楽焼の施釉灯明皿(3)など、19世紀前半のものもある。

(6)は厚みのある瓦質で、上面は離れ砂の痕跡がみられ、下面は粗いナデが施される。瓦専の可能性はある。

### 【包含層出土遺物】

#### ・中世包含層

近世遺構面を造成する埋土内から、中世期の須恵器・土師器小片が出土しているが図化できたものは少ない。

(7)は浅鉢形瓦質土器。内側に屈曲して上面に広い面を持つ口縁部で、口縁部直下に2条の突帯を貼り付け、突帯間に連続花菱文がスタンプされる。15世紀後半の時期に比定される。(8)は手捏成形の土師器皿で、底部外面には板状圧痕が残る。

#### ・近世包含層

瓦を除く、近世遺構面埋土からの遺物も少ない。このことは、開山堂という当該地に建っていた建物の性格によるものと思われる。近世期の遺物は19世紀前半を下限とするものである。

### (3) 瓦群について

A区出土遺物は、大半が、西側盛土内を中心に出土した瓦である。これらの瓦は、法幢寺に関連する建物に伴うものであると考えられる。

最も古い様相を示すものとしては、凸面に縄目タタキ痕が残る丸瓦(K1)、凹面に布目が残る平瓦(K36)がある。(K1)凸面の縄タタキの痕跡は、大部分が丁寧なナデにより消されて、かろうじて痕跡が残る程度に観察できる。また凹面の吊り紐紺はループ状で、布外側-布内側で結び目-布内側へとつながっている。吊り紐については、1372年頃を境として布の刺し縫いから外側への縫いつけへの変化が指摘されており、14世紀第3四半期をくだらない年代があてられる。(K36)については小片ではあるが、布目は粗く消される程度であり、(K1)と同時期にあたると思われる。

法幢寺の開山は、康永年間(1342-1345)、夢想国師の開基と伝えられる。今回出土した古手の瓦は、寺伝にとして伝わる開基時期に符合する時期にあたり注目される。

出土瓦の大半を占めるのは、近世期前半～中頃の瓦群である。

軒丸瓦瓦当の文様は、圏線がなく、巴頭部、珠文がやや大きく、横棧が断面板状の掛け瓦が存在することから前期Ⅱ(1650～1704)に相当するものと思われる。

橋唐草文軒平瓦は、山崎信二氏が大阪城の瓦の検討から、三葉文の中心飾りの左右や、唐草文先端が二股に分かれるものは近世Ⅳ期(1615～1624)にあらわれ、慶安年間(1648～1652)に完成するとされ、寛文年間(1661～1673)までは中心飾り下部の萼は二股に分かれないことが指摘されている。出



第29図 中安田村古絵図(開山堂)

土した軒平瓦当文様は、中心飾りの左右、唐草文先端、萼いずれも先端が二股にわかれており、近世Ⅵ期（1682～1724）、17世紀末頃に比定される。しかしながら、文様以外の特徴でみると、17世紀後半までみられるとされる、瓦当裏面の軒平部との接合部の強いナデや瓦当上縁部の中央幅広の面取りなど、瓦当文様の特徵より若干古い要素も観察されることから、ここでは、大きく17世紀後半におさまるものとしⅥ期としておきたい。

丸瓦はすべてコビキBで、凹面調整に大きく差はないが、凹面側縁の面取りや面取り幅、凸面調整で、ヘラナデが顕著なものや指ナデ状のものなど、若干時期差がみられる。

平瓦も、凸面調整に若干差異はみられるが、大きな時期差はみられない。ただし、Ⅵ類の凸面クシ目を有するタイプは江戸時代後期まで下るものと思われる。

以上のように、西側盛土内より出土した瓦は、14世紀第三四半期をはじめとし、17世紀後半を中心とするものである。法幢寺は14世紀中頃の夢想国師開基の後、天正年間に焼失、再建されるが、江戸時代初期には荒廃し、寛永11年（1634）に大愚宗築により中興される。さらに、万治2年（1659）再び火災に合うも、寛文年中には再建され、隆盛を誇ったと伝えられる。この寺歴に照らしてみると、今回出土した瓦は、古手のものが創建時期、17世紀後半のものが万治2年の火災以降再建された時期に相当するものであると考えられる。

### 3. B I 区

#### (1) 遺構・遺物の概要

B I 地区は、現在は圃場となっているが、旧法幢寺の寺域内にあたる西側山麓に位置する。中安田地区所有の古絵図（時期不明）では当該地は畑地とされ、付近に、『名主家』の記載がみられる。

調査区は西から東へと傾斜していく地形を切り盛りにより整地して形成されている。調査面積は約 180 m<sup>2</sup>と狭い範囲であるが、中世後期の遺構を検出した。

基本層所は、東南に向けて傾斜した黄橙色の地山面の上に黒色土（自然堆積）、その上層に、中世～近世期の遺物を包含する暗茶褐色土がのる。

#### 【溝】

暗茶褐色土を除去した、黄橙色地山面もしくは黒色土の上面で、調査区を不整楕円形にめぐる溝を検出した。溝 1 は、径約 14 m で、調査区東側を楕円形に囲む形でめぐり、調査区外へと伸びる。溝は幅約 80 cm、深さ約 50 cm をはかる。急傾斜で掘り込まれており、人為的に掘削されたと考えられる。溝の埋土には中世後期の土師器皿が多量に含まれており、南側の東へ廻り込む手前では集中して出土した。

溝 1 内の堆積は、下層にあまり遺物を含まない明黄褐色土と黒褐色土を中心とする 12 cm 前後の堆積があり、その上層に土師器皿を多量に含む暗褐色土が約 40 cm 堆積しており、出土した土師器群は最終埋没時に投棄されたものと思われる。溝 1 で囲まれた敷地内での遺構は検出されなかった。また、敷地は調査区外へと続

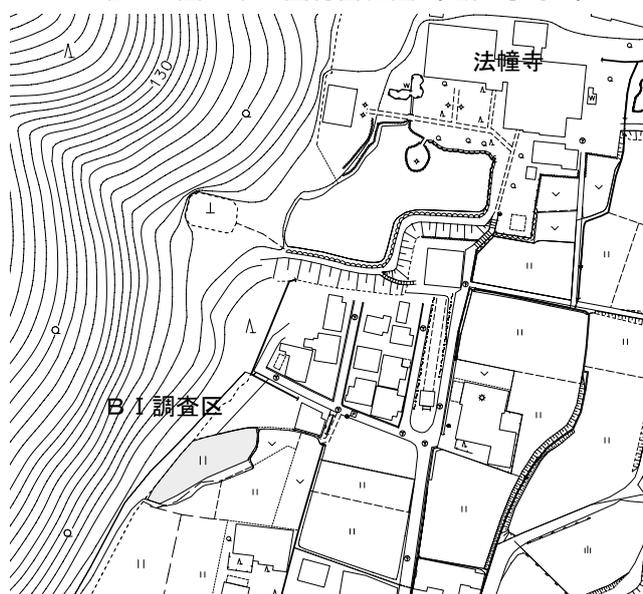
いていたと思われるが、現状の地形では、当調査区よりさらに 1 段低い圃場が東側に広がっていることから、現在の田畑造成時にかなり地形改変され、遺構面が削平されているものと思われる。

#### 【出土遺物】

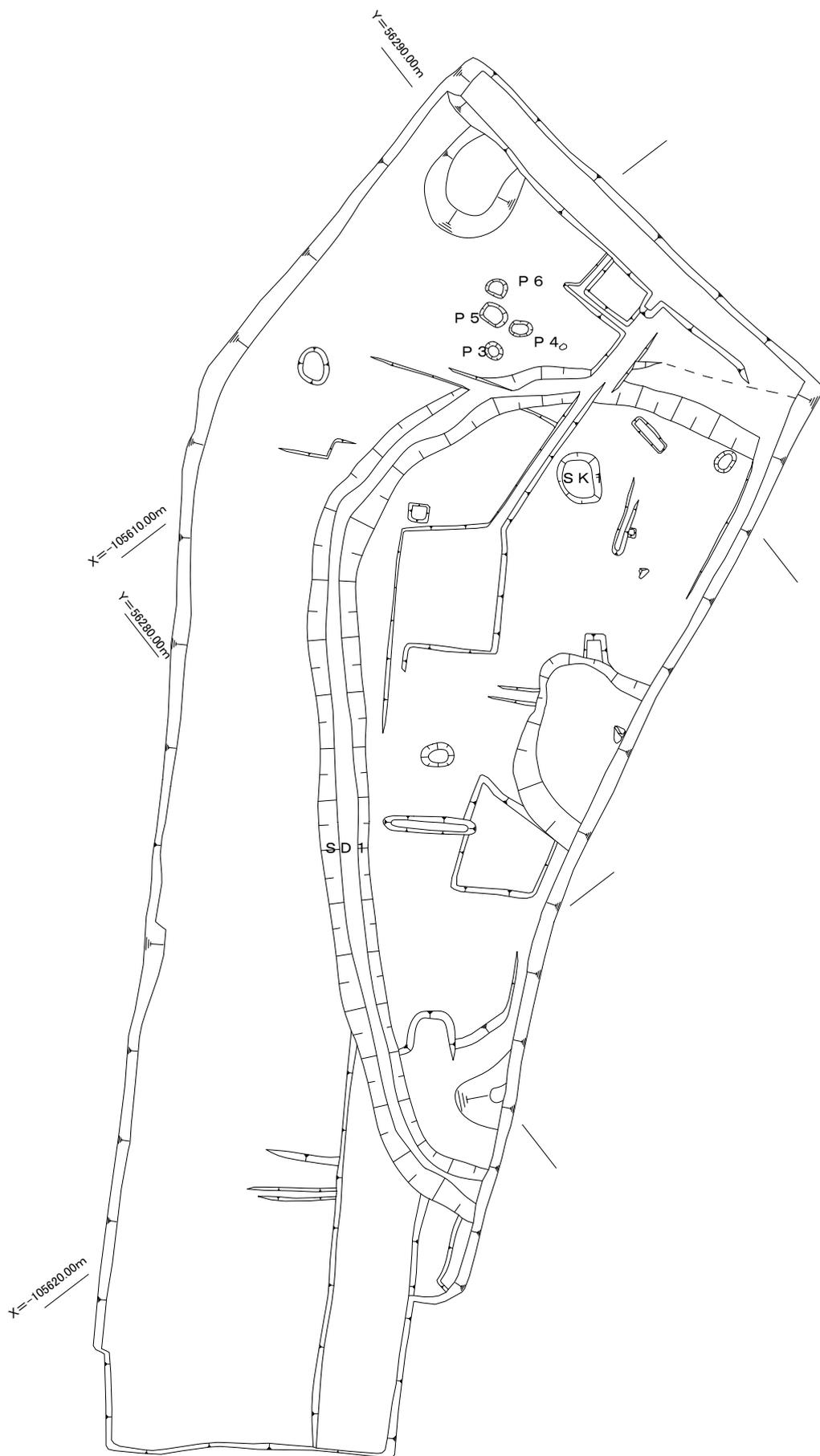
溝埋土から多量の土師器皿が出土した。土師器皿には口径 10 cm 以上の中皿と 10 cm 未満の小皿がある。中皿はいずれも浅黄橙色の手捏ね成形によるもので、内外面の調整によって大きく 3 タイプに分かれる。Ⅰ類は、口縁端部に幅の狭い横方向の強いナデが施され、幅の狭い段状の屈曲を持つ。Ⅱ類は口縁部に 2 段の横方向の強いナデが施されるため、体部中位に未調整の底部との境である屈曲部をもつ。Ⅲ類は、口縁部に 2～3 段の横方向の強いナデが施され、底部との境をより強くナデることによって、体部と底部の境に明瞭な屈曲がみられる。数量的にはⅡ・Ⅲ類が主体を占めており、Ⅰ類は少ない。小皿には、手捏ね成形で、外面未調整の比較的厚手の (60)～(67)、薄手で内面にハケナデ痕が残る (58)・(59)、京都系のヘソ皿 (56)、口縁端部が内碗する (57) がある。その他、須恵器 3 点、陶器 1 点の小片が出土しているが、図化できたのは (69) のみである。当地域での中世後期の土師器皿の編年が確立されておらず、詳細な時期は現段階では決定しがたいが、京都系土師器や須恵器の年代観を含めて考えると、



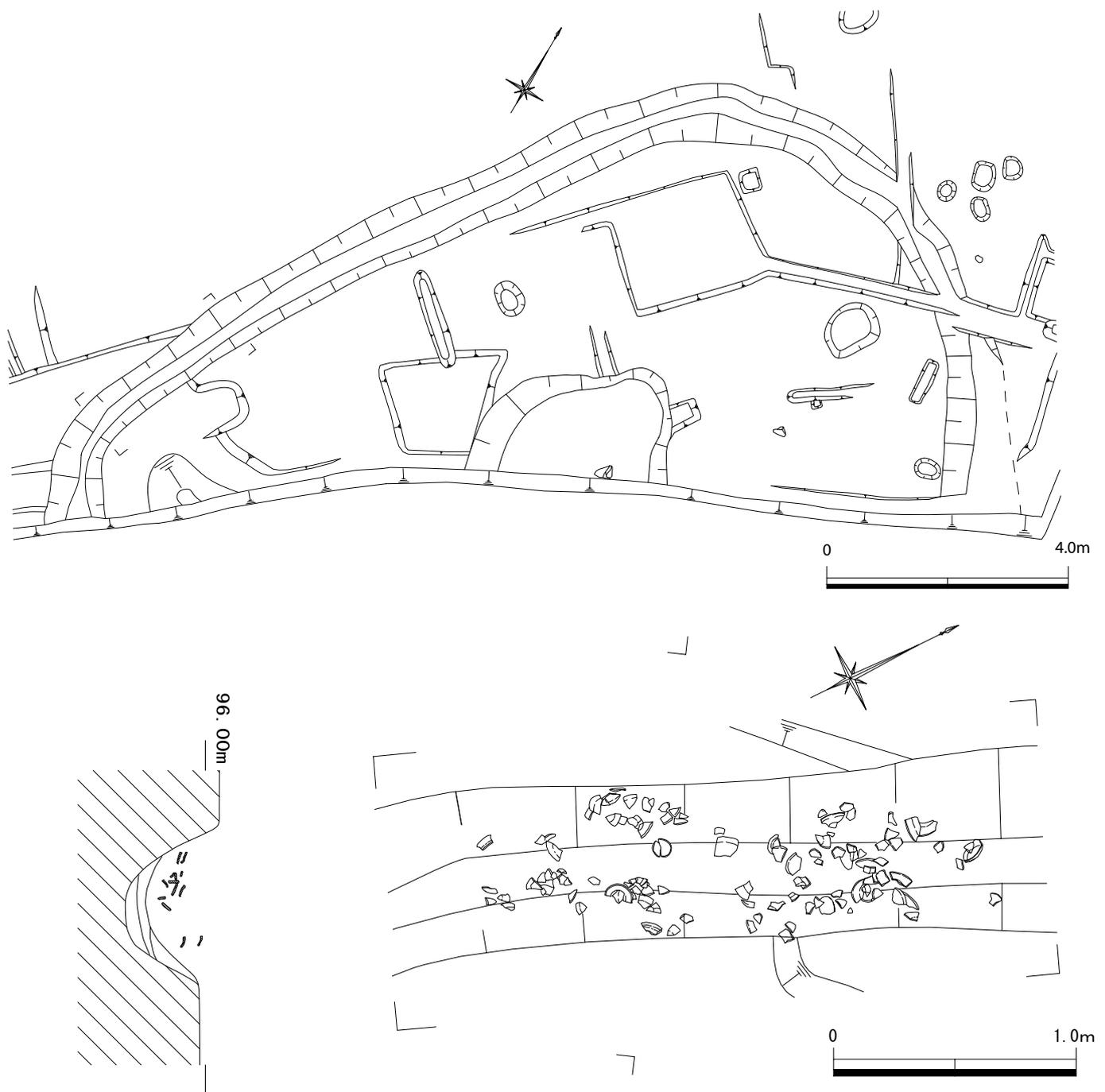
第 30 図 中安田村古絵図（法幢寺周辺）



第 31 図 B I 区位置図



第 32 图 B I 区遺構全体図



第33図 溝1

概ね14世紀後半～15世紀前半におさまるものと思われる。

## (2) 小 結

当調査区では、他の調査区に比べ近世期の遺構、遺物はみられず、中世後半期の遺構、遺物のみの出土であった。検出できた遺構は溝1本のみであるが、土師器皿が大半を占める出土遺物からは、当該地が中世寺院関連施設群の一画であることを示している。出土した土師器皿群は14世紀後半～15世紀前半にあたり、寺伝に照し合せると、法幢寺開基時期（康永年間）～天正年間の火災にあうまでに相当し、当期の坊院・堂塔等に関連する遺構であったと考えられる。

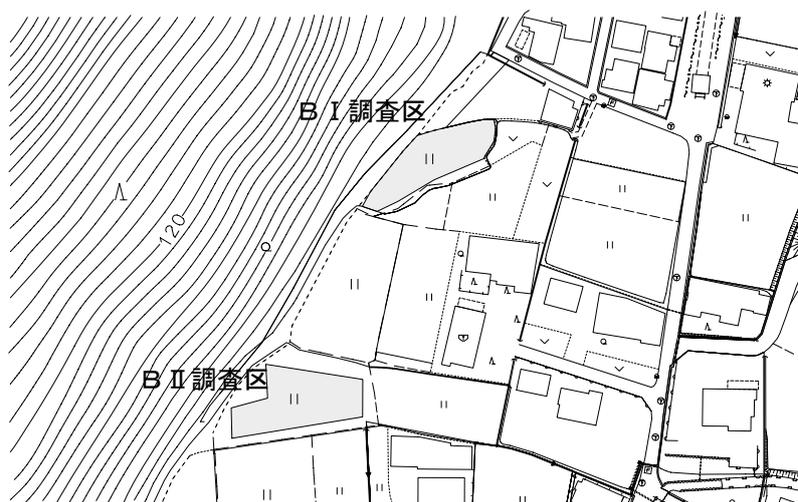
## 4. B II 区

### (1) 遺構の概要

B II 区は、西側山麓にあって、B I 区の圃場から比較的平坦な B II～B V 区の圃場に向けて、南へ階段状に圃場が下がってくる中位に位置し、B I 区との比高は約 2.5 m をはかる。

調査面積は約 320 m<sup>2</sup> で、近世期を中心とする遺構、遺物を検出した。

基本層所は、ほぼ耕土直下(地表面より 10～20 cm) で遺構面が検出された。



第 34 図 B II 区位置図

### 【掘立柱建物】

調査区内中央部において、2 棟の掘立柱建物を検出した。

掘立柱建物 1 を構成する柱穴は軸をほぼ南北にあわせ、南側 2 間分は東西 2 間、北側は東西 5 間の逆 L 字型で北側は調査区外へのびると思われる。柱穴は黄橙色地山面に掘り込まれており、径 50～60 cm、深さは 30～60 cm をはかり、P18、22、26 では根石が残る。柱間は南北が長めにとられている。

柱穴内からの遺物は少ないが、16 世紀～18 世紀後半の遺物が出土している。

掘立柱建物 2 は掘立柱建物 1 から約 2 m 南側に位置する、東西を軸にした 1 間 × 3 間の建物。柱穴は径 50～60 cm、深さは 40 cm 前後をはかる。柱穴内にはいずれも根石が残る。柱穴内の堆積は、下層に暗灰褐色の砂礫質土が堆積し、根石部より上層には地山を削った明黄褐色の山土がしっかりと詰められており、柱穴破棄時に意識的に埋められたものと思われる。柱穴内からの遺物は少ないが、18 世紀後半の遺物が出土している。

これらはの建物は、同じ時期に軸をそろえて配置されていることから、掘立柱建物 1 を主体とし、掘立柱建物 2 はそれに付属する施設であると思われる。また、当地区は法幢寺の寺域内に位置しており、寺院に関連する建物である可能性が強いが、礎石建物ではなく、掘立柱建物であることは、仏堂関連以外の施設である可能性が考えられる。

### 【土 坑】

#### 〈土 坑 1〉

径約 2.2 m、深さ約 52 cm をはかる円形の土坑。地山面に掘り込まれており、茶褐色砂礫質の埋土には炭が混じる。埋土より 18 世紀中頃の丹波焼が出土している。

#### 〈土 坑 2〉

径約 1.7×1.2 m、深さ約 18.5 cm をはかる楕円形土坑。地山の削り土である地山土である黄橙色土と茶褐色砂礫質土の埋土からは 17 世紀後半～18 世紀前半の当期が出土している。

#### 〈土 坑 3〉

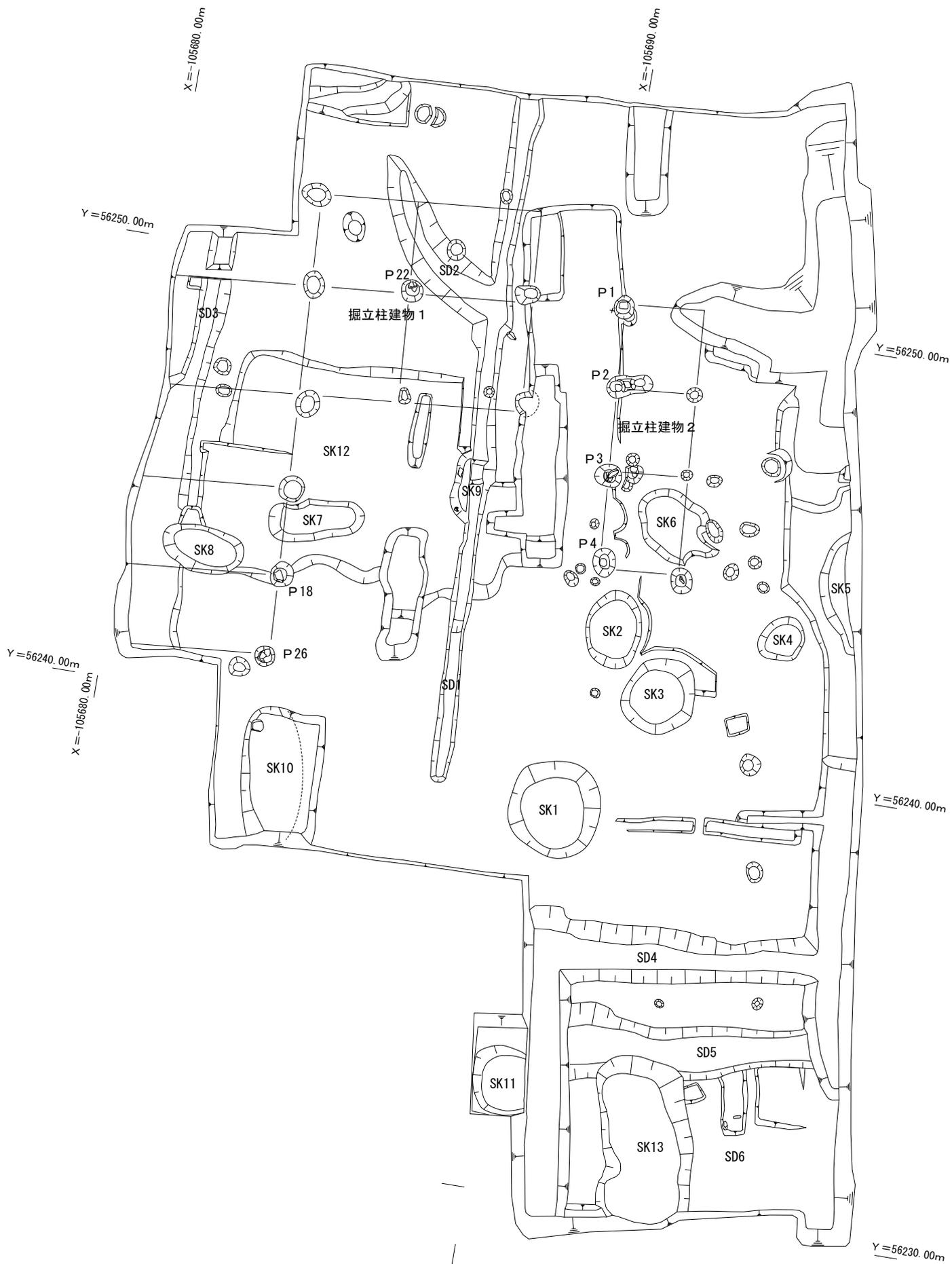
径約 1.6 m、深さ約 45 cm をはかる楕円形土坑。下層の灰褐色砂礫層の上に、地山土である黄橙色土が堆積しており、埋土より 15 世紀～18 世紀前半の遺物が出土している。

#### 〈土 坑 4〉

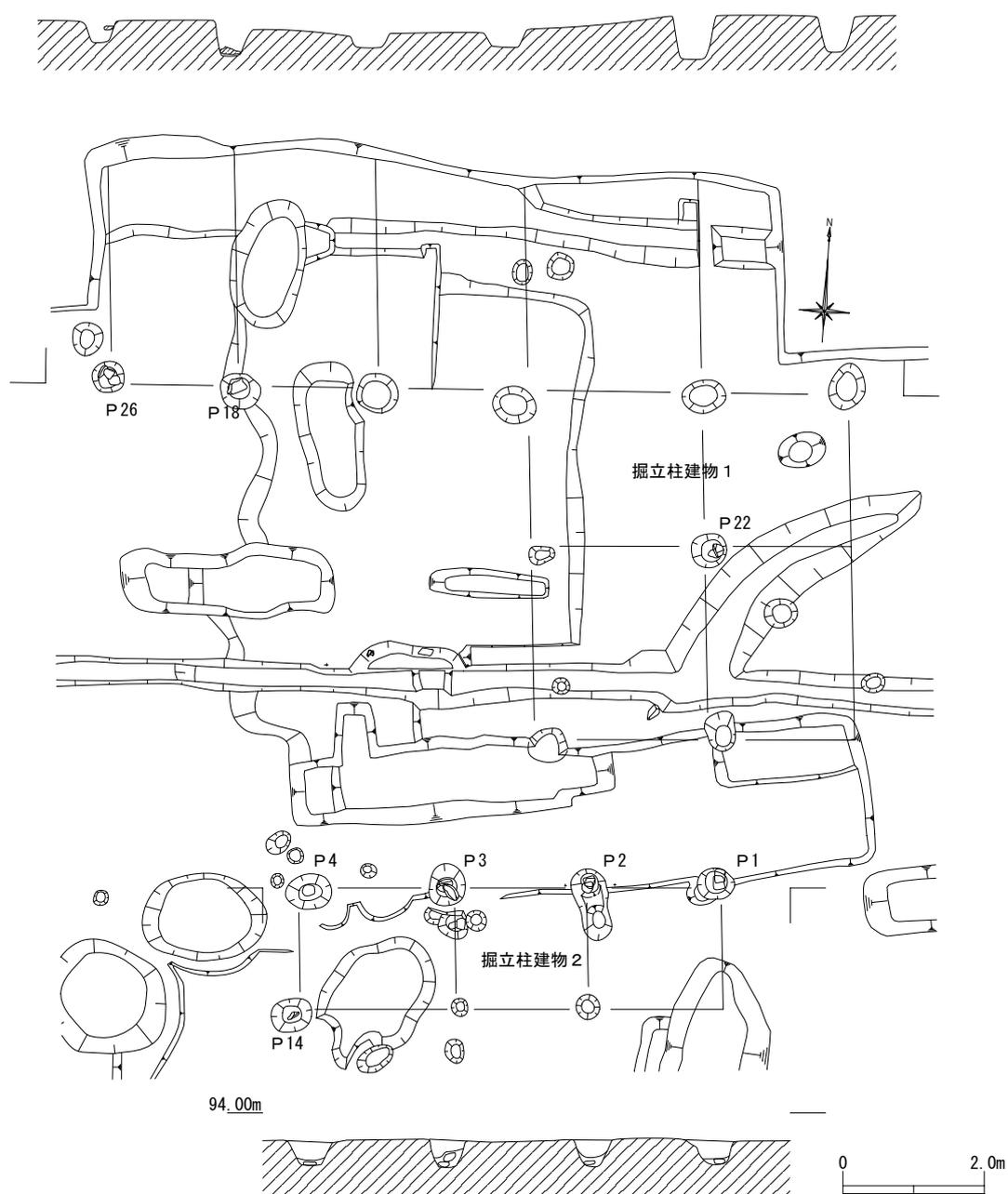
径約 94 cm、深さ約 23 cm をはかる不整形土坑。下層に茶褐色土、上層には焼土を多く含むが堆積している。遺構内からの出土遺物は無い。

#### 〈土 坑 5〉

調査区南側の落ち部で、一部を検出した楕円形土坑で、深さは約 45 cm をはかる。下層には地山削り土の黄橙色土や焼土が堆積し、上層に砂礫質の灰褐色土が堆積する。図化し得なかったが、下層より中



第 35 图 B II 区遺構全体図



第36図 掘立柱建物跡

世末～近世初頭の丹波焼甕の胴部片が出土した。

#### 〈土坑 6〉

径 $2.0 \times 1.4$  m、深さ14 cmをはかる楕円形土坑。焼土を含む灰褐色砂礫質層埋土から15世紀代の備前焼甕小片が出土している。

#### 〈土坑 7〉

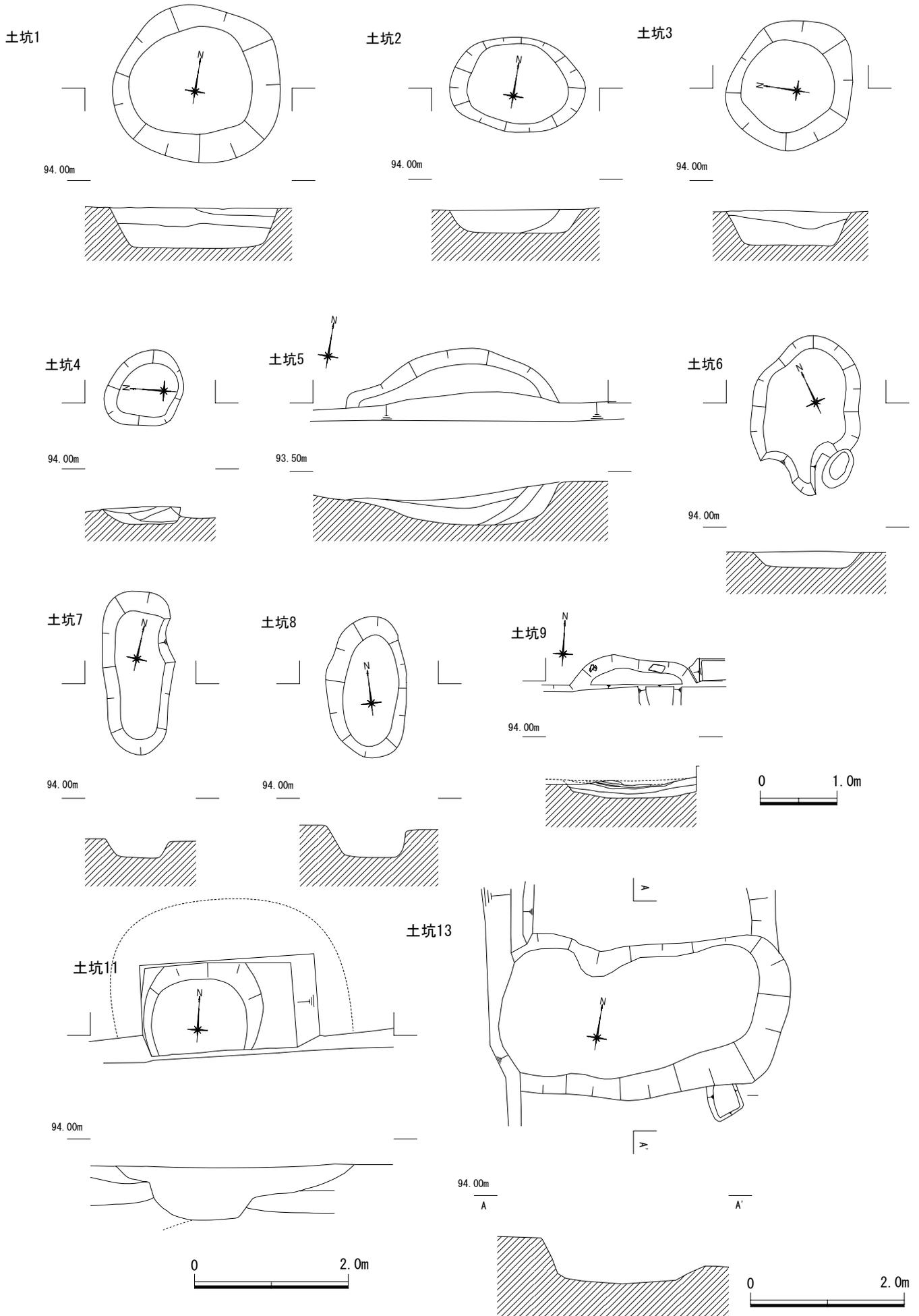
土坑8と同じく、土坑12の上から掘り込まれた可能性が強いが、土坑（落ち）12の底面で検出した、径約 $2.0 \times 0.95$  m、深さ約25 cmをはかる長楕円形土坑。埋土には地山の削り土の黄橙色土が堆積している。埋土からの遺物の出土はない。

#### 〈土坑 8〉

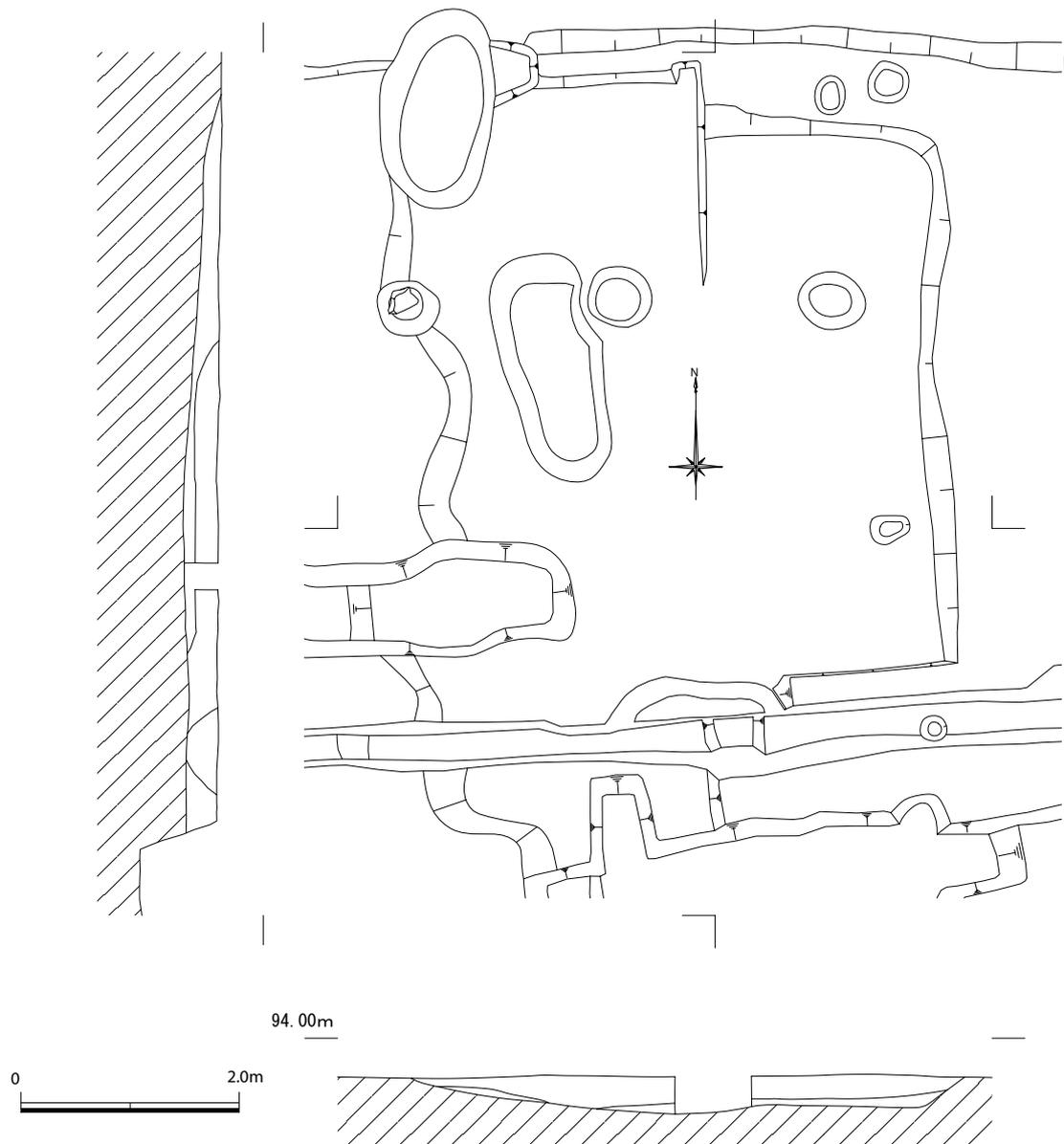
土坑12を切って掘り込まれた、径約 $1.9 \times 1.0$  m、深さ約41 cmの長楕円形土坑。埋土には地山の削り土の黄橙色土が堆積している。埋土からの遺物の出土はない。

#### 〈土坑 9〉

土坑12の底面で北側半分を検出した土坑。最下層に暗褐色砂質土、その上層に黄橙色土と灰褐色土



第37图 土坑1~9·11·13



第 38 図 土坑 12

が薄い互層となって堆積している。下層より 18 世紀前半の肥前青磁皿が出土している。

〈土坑 10〉

調査区西北端で、一部を検出した、長楕円形土坑。埋土から 18 世紀代の遺物が出土している。

〈土坑 11〉

調査区西北端の土層断面で確認し、調査区を拡張したが、地盤の崩落のため一部の検出にとどまった。土坑 6 埋没後に掘り込まれており、土坑内部は二段掘り（検出できたのは二段掘り部分）になっており、灰褐色の砂礫土が堆積している。埋土より 15 世紀末～19 世紀前半の幅広い時期の遺物が出土している。

〈土坑 12〉

東西約 5.0 m、南北 7 m 以上で、深さ約 31 cm をはかる隅丸長方形の落ち状の土坑。南側は確認調査時の断ち割りにより切られている。埋土には下層に灰褐色の砂礫質土、上層に黄橙色土が堆積しており、土層観察から、灰褐色土により埋まった後、再度南側が掘り込まれ上層の黄橙色土が堆積していると思われる。埋土からは 17 世紀後半～18 世紀前半の遺物が出土している。

〈土坑 13〉

調査区西端で検出された、南北約 2.0 m、東西 7.0 m 以上の長楕円形土坑で、西側は調査区外へのびる。SD6 と重複しており、輪郭が不鮮明で、北側土坑肩部は明確な地山面の落ちを確認できたが、南側は

黄橙色土の地山面においてかろうじて輪郭が検出できた。土坑内からは17世紀後半～18世紀後半の遺物が出土している。

### 【溝】

#### 〈溝 1〉

調査区を東西に走る、幅約50cm、深さ約10～18cmをはかる掘立柱建物1と軸線を揃えることから、建物に付属する溝の可能性もある。溝埋土からの遺物はほとんどなく、中世末～近世初頭の丹波焼小片が1点のみである。

#### 〈溝 2〉

南端は溝1と合流し、北側は途中で途切れる溝。幅約37cm、深さ約20cmをはかり、埋土には砂礫質土が堆積している。遺物の出土はみられない。

#### 〈溝 3と段状遺構〉

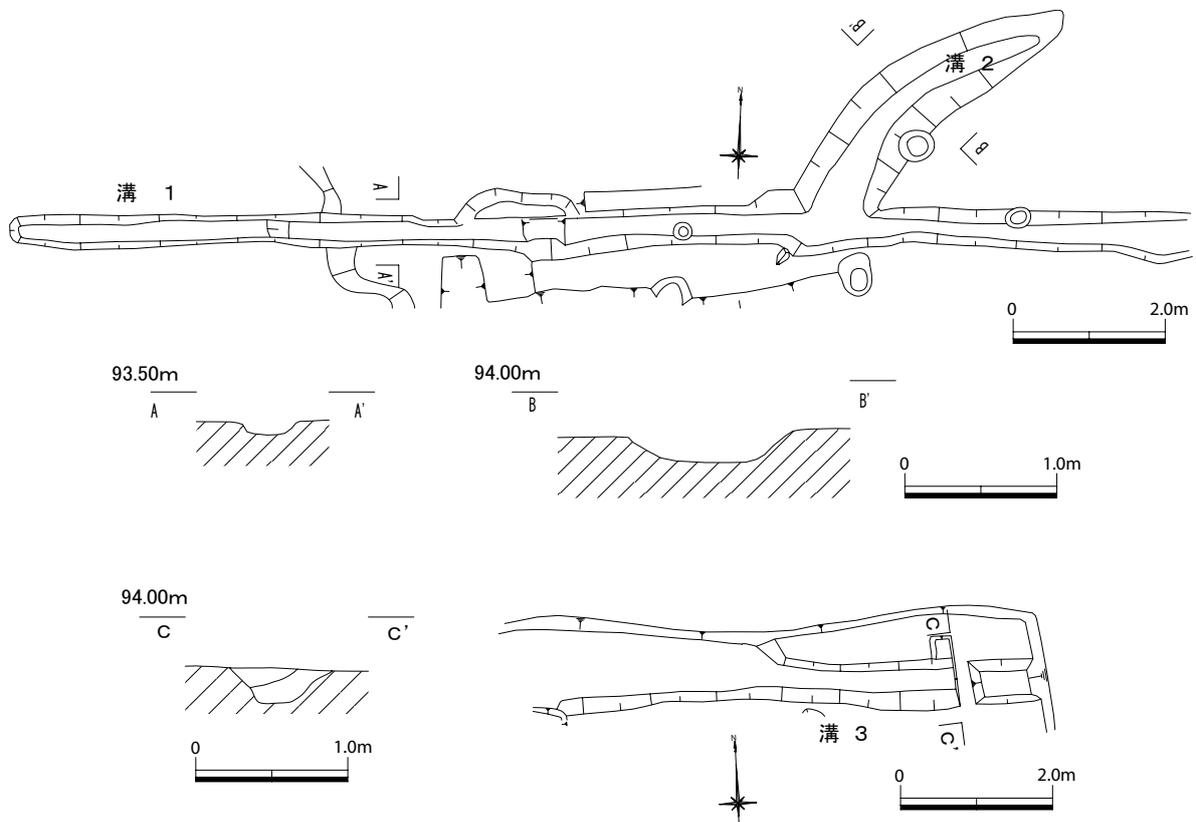
掘立柱建物1の北側は、建物の面より約10cm程度下がっており、低い段が東西にのびる。溝3はその段に添ったかたちで東側へのびる一部を検出した。幅約55cmをはかる。溝及び段状遺構には地山土混じりの灰褐色土が堆積しており、埋土より18世紀代の磁器や瓦の小片が出土しているが、図化し得なかった。掘立柱建物1、溝1、段状遺構、溝3はいずれも軸線をほぼそろえており、掘立柱建物1に関連する遺構であると思われる。

#### 〈溝 4〉

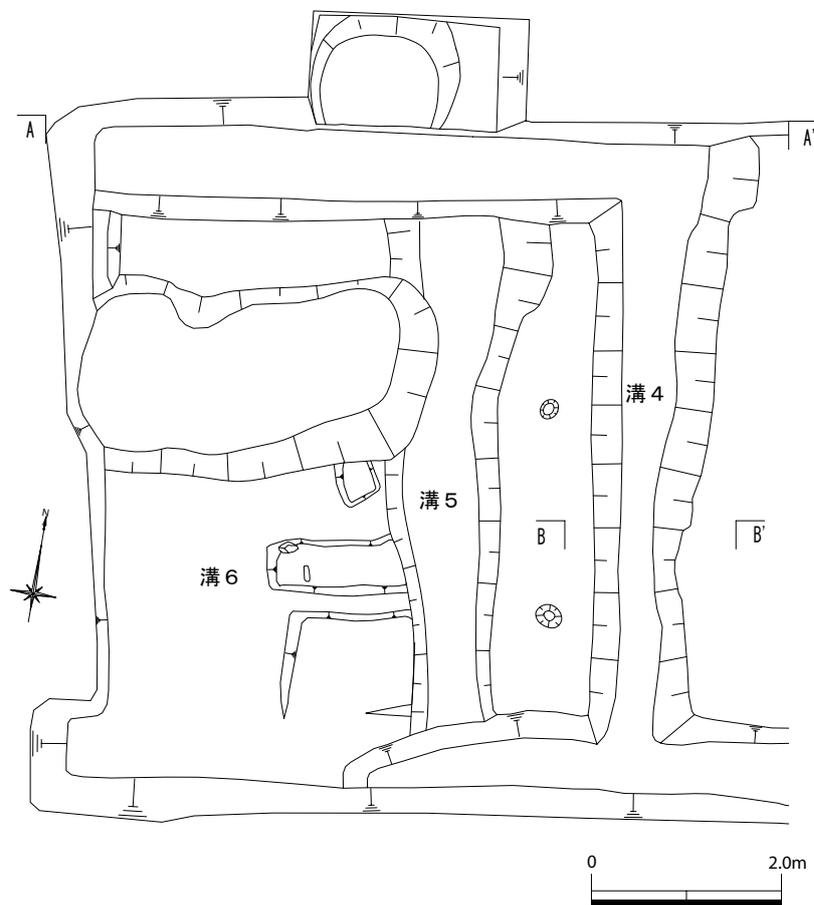
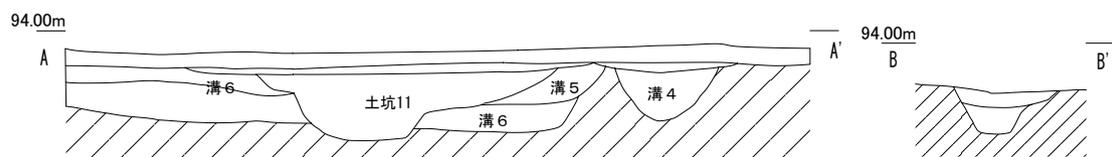
調査区西側を南北に流れる溝。幅0.8～1.2m、深さは約50cmをはかる。上層に灰褐色砂礫質土、下層にぶい黄橙色土が堆積し、埋土から18世紀後半の磁器類が出土している。

#### 〈溝 5〉

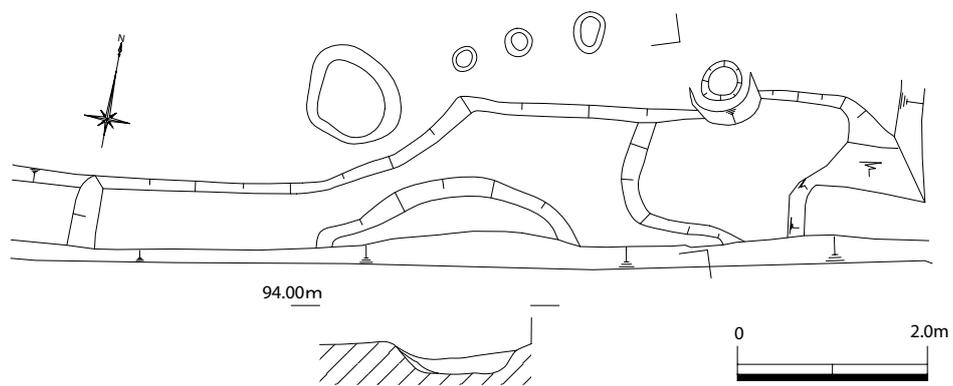
溝の東側肩部を溝6と同じくし、南北に流れる溝。西側肩部は、後の時期の溝6の流れや、土坑11によって不明瞭となっているが、幅約1.2m、深さ約37cmをはかる。埋土には灰茶褐色の砂礫質土が堆積しており、17世紀後半～18世紀後半の、磁器、土師器、瓦等の遺物が出土している。



第39図 溝1・2・3



第40圖 溝4・5・6



第41圖 南側段状遺構

## 〈溝 6〉

東肩部を溝5と同じくし、西側は調査区外へとひろがっている、大きな落ち状の遺構であるが、すぐ西が山裾にあたることから、山際を南北に流れる溝であると思われる。深さは65～90cmをはかる。埋土には、にぶい黄橙色や灰茶褐色土が混在する砂礫質土が中心である。17世紀後半～18世紀代の遺物が出土している。

### 【落ち状遺構】

掘立柱建物1、2は、北側で約10cm、南側で約20～30cmの段状の高まりとなった平坦地に位置する。北側段状遺構は建物等の遺構にほぼ平行にのびているが、南側段状遺構は、全体を検出することはできなかったが、湾曲したラインを描く。埋土には焼土や炭が多く含まれており、15世紀～18世紀前半の幅広い時期の遺物が出土している。この南側の落ち部は、傾斜を増しながら溝状となって南東にのびていくものと思われる。

## (2) 遺物の概要

### 〈須恵器〉

凶化しえたのは、溝3から出土した(116)のみである。内面に見込み部を持ち、低いながら高台部をもつ12世紀代のもの。

### 〈土師器〉

鍋類では、16世紀代に遡る、内面に播目状のハケを施した鍋(105・106)や、18世紀後半の型づくり成形による炮烙(127)がある。

土師器皿では、ロクロ使用のものと手捏ね成形によるものがある。前者は、口縁部が直線的にのびる(97)や口縁部が内碗気味立ち上がる(141)ものがある。いずれも17世紀後半～18世紀前半に充てられる。

### 〈陶器〉

#### ・丹波焼

もっとも多く出土しているのが丹波焼播鉢である。

中世期のものでは、丸くおさまる口縁端部を持ち、内面へラ描きの播目を持つもので15世紀末～16世紀前半の時期のもの(94・100・101・102・151)と、口縁端部に面取りを持つ16世紀後半のもの(150)がある。近世期のものでは、口縁部と体部を一体的に成形するI A 3類(142)、I B 3類(84・103)、口縁部が外面に肥厚するII類(104・113・114・143)、外面に凹線をほどこす縁帯部を持つIV類(81・82・115・126・145・147)がある。数量的にはIV類、II類が主体となっており、長谷川編年に照し合せると、17世紀後半～18世紀後半の時期幅を持ち、18世紀中頃～後半を中心とするものである。

その他、中世期のものでは、壺(77)や鉢(121)があり、15世紀後半～16世紀前半の時期が充てられる。近世期のものでは、丹波焼IV期(17世紀後半～18世紀前半)～V期(18世紀中頃～後葉)の徳利(83・110)や火入れ(122)、壺(140)、白丹波といわれる甕底部(158)のほか、VI期(18世紀末～19世紀前半)に下る甕(124)もある。

#### ・備前焼

備前焼は備前焼中世IV～V期に相当する(87)や(86)があるが、数は少ない。

#### ・唐津焼

唐津焼は、近世前半期のものが多い。17世紀前半に遡る碗(99・111)やいわゆる朝鮮唐津といわれる盤(125)のほか、17世紀後半～18世紀前半の白濁釉を施した盤(149)がある。

#### ・京焼系施釉陶器

京焼系陶器はいずれも、淡黄色の釉が全面に施されるもの(76)と、高台部露胎のもの(135・136)があり、後者の底部外面には『清(水)カ』の刻印がみられる。(76)は18世紀後半～19世紀前半、(135)・(136)は肥前で焼かれたものと思われ、17世紀後半～18世紀前半のもの。

#### ・その他

(139)は産地不明であるが、鉄釉を施し、外面にへラ描の波状文、直線文が記されている。(96)(123)は鉄釉が施された瀬戸美濃系と思われる灯明皿であるが、遺跡の性格から考えると、灯明皿の出土数は

少ない。

#### 〈磁器〉

##### ・肥前系磁器

磁器では肥前系が大半を占める。染付磁器、青磁があり、機種には碗、皿、蓋、小坏、ぐい飲み、仏飯具がある。

17世紀前半に遡る初期伊万里が数点出土している。(98)はぐい飲みで外面は縦筋のヘラ彫りがされ、『寿』の文字が描かれる。そのほか、文様構成は不明であるが、径の広い高台をもつもの(134)、比較的厚手の器壁で、外面に『虫食い』がみられもの(108・134・132)がある。

主体となるのは18世紀代のくらわんか系の碗が主体となり、外面に草花文、コンニャク印判が施されるものが多い。

青磁は、口縁部が外側に屈曲して段状を呈する皿(88・133・148)で、外面は体部下以下露胎、内面には蛇の目釉剥ぎがみられる。17世紀後半～18世紀前半の時期が充てられる。

そのほか、完全に磁器化していない半磁器では、内面に葡萄文が描かれた鉢(93)がある。

##### ・その他

(109)は京焼系の染付磁器の良品で、薄い器壁で、外面に草花文が描かれる。18世紀後半のもの。

#### 〈瓦〉

##### ・軒丸瓦

いずれも、瓦当文様は、周囲に珠文を配する左巻き巴文で、圏線はみられない。(K81)は巴頭部は丸味を持ち尾部は細長く伸び隣接する巴の尾部と接し圏線状を呈する。珠文は大振りで、復元すると18個となる。外縁幅2.2cm、高さ7mmをはかり内外縁は面取りされる。凸面は縦方向の丁寧なナデ、凹面はコビキBで、軽いナデが施されるが、布目や布と布の重ね目痕跡などがみられる。瓦当文様は、A区開山堂跡出土の軒丸瓦瓦当文様によく似ている。

(K82)・(K83)・(K84)は(K82)に比べ珠文が小さく配置の間隔が広い。巴頭部が残る(K83)をみると、しっかりとした括れを持ち、尾部はシャープで背部に稜線をもち、(K81)に比べ新しい要素が見られる。(K84)の瓦当部と丸瓦の接合面にはかき目がみられる。

##### ・平瓦

(K85)は凹面ナデ調整された凹面に布目が残り、狭端面に幅広の面取りがされる。凸面は粗いナデが施されるが、離れ砂、凹型成形台痕がみられる。中世末期に遡る磁器のもの。(K80)の凹面は、板状工具により丁寧なナデ、凸面は板状工具による弱いナデが施されるが、離れ砂の痕跡、凹型成形台の痕跡が残るⅡ類。A地区開山堂跡出土の近世瓦と同時期のもの。

#### 〈石製品〉

(S1)は暗灰色の基石で、径約2cm、厚み0.8cmをはかる。

(S2)は上臼の上面にあたる部分の破片で、復元径は約29cmをはかる

### (3) 小 結

#### ・遺構

BⅡ区では、2棟の掘立柱建物跡やそれに伴う溝や敷地区画遺構の他、溝、土坑等を検出した。

これらの遺構は、本地区が法幢寺の旧寺域内にあたることから、法幢寺に関連する遺構群であると思われる。これらの遺構群の性格を考える上で、注目されるのは、検出した2棟の建物が、礎石建物ではなく掘立柱建物であるという点である。すなわち、仏堂や堂塔等ではなく、各種坊院や宿坊、庫裏など寺院の日常生活にかかわる施設の可能性が考えられる。このことは、瓦が出土遺物の大半を占めるA区開山堂跡とは対照的に、染付磁器碗や陶器播鉢など多量の日常雑器を中心とした出土遺物からも伺える。

特に、土師器類が少なく、播鉢をはじめとする陶器類が多いことは貯蔵、調理に関係する性格が推測される。

#### ・時期

出土遺物は、法幢寺の寺伝、縁起なども考慮すると、大きく、15世紀後半～16世紀前半(Ⅰ期)、17世紀中頃～18世紀前半(Ⅱ期)、18世紀中頃～19世紀前半(Ⅲ期)のⅢ期にわけることができる。これらのうち、Ⅲ期前半の遺物が主体を占めており、建物をはじめとする本地区検出遺構群の主体とな

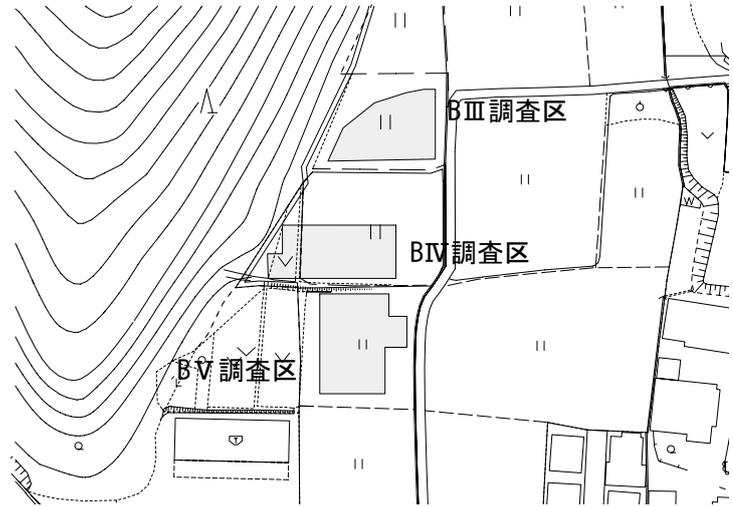
る時期をあらわしているものと思われる。このⅢ期は、当地区周辺が尼崎藩領となり、その中で強い影響力を持っていた地元大庄屋津田嘉兵衛と法幢寺のつながりが強かった時期にあたる。また、掘立柱建物柱穴埋土をはじめ、溝埋土等から18世紀後半～19世紀前半のものが少数出土しており、遺構群の下限を示している。

そのほか、量的には少ないものの、Ⅰ・Ⅱ期の遺物の存在は、法幢寺開山期、中興期にそれぞれ該当するものであると思われる。

## 5. BⅢ区

### (1) 遺構の概要

BⅢ～BⅤ区は、BⅠ区からBⅡ区へかけて比較的比高差をもって階段状に形成されてきた圃場が、比較的緩やかな段差にかわり、南に広がっていく地形の西側山裾の圃場に位置する。BⅢ区～BⅤ区は3枚の連続した圃場にあるが、調査の都合上3区に分けて述べる。BⅢ区は、南東を向く山裾を切り盛り造成によって形成されている。遺構面は現耕土直下において検出される自然堆積によるベース層である黒褐色土上面において検出された。この黒



第42図 BⅣ～Ⅴ地区位置図



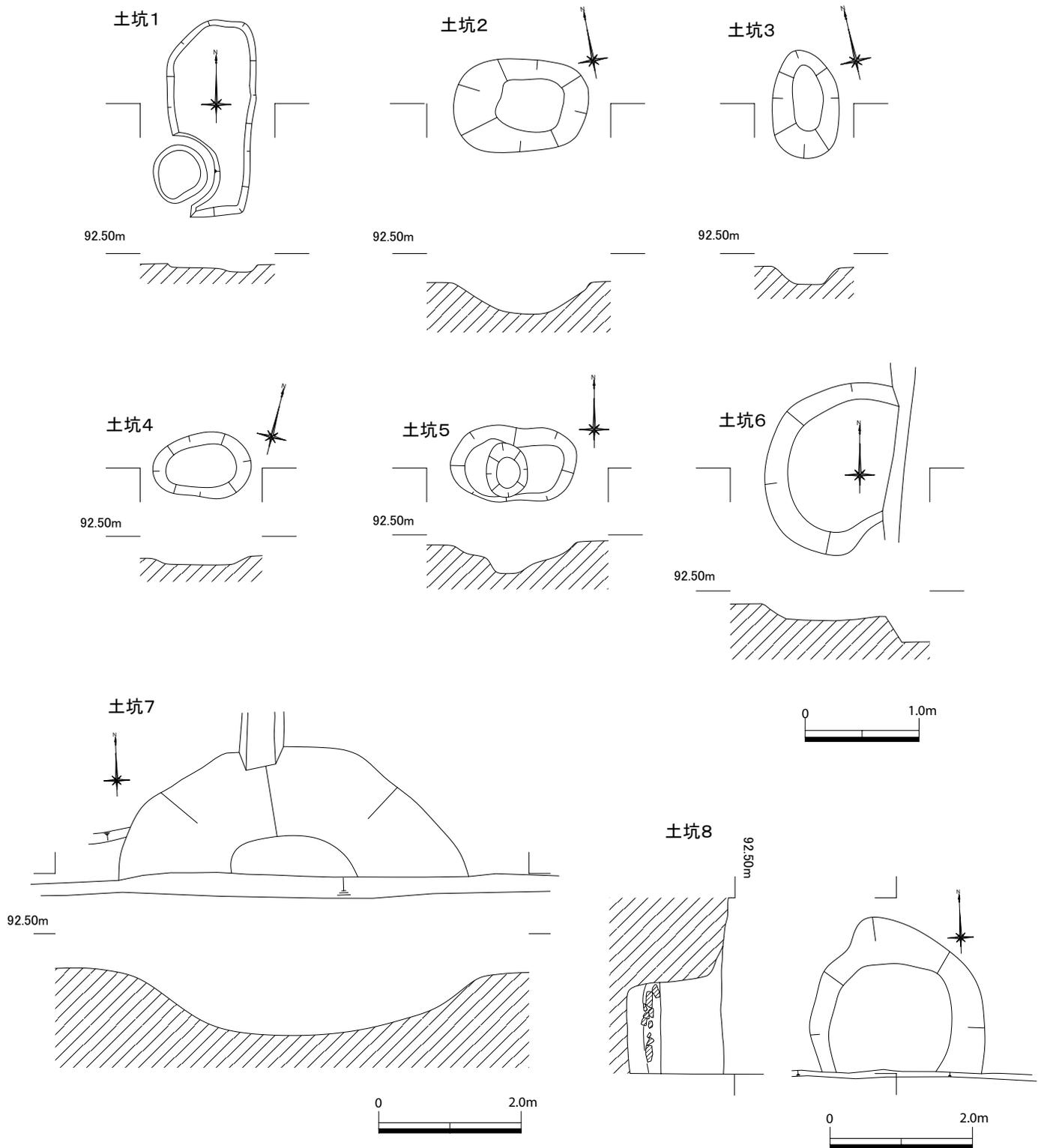
第43図 BⅢ区遺構全体図

褐色土遺構面は南東方向に向けて緩やかな傾斜となる。

## 【土坑】

### 〈土坑 1〉

1.5×0.75 mの不整長方形土坑。深さは約9 cmをはかる。埋土からは須恵器、土師器の小片瓦出土している。



第44図 土坑1～8

#### 〈土坑 2〉

径1.2×0.82 m、深さは約30 cmをはかる楕円形土坑。埋土からは磁器小片が出土している。

#### 〈土坑 3〉

径95×58 cm、深さ約17 cmをはかる楕円形土坑。埋土下層には地山の削り土である黄橙色土が堆積する。遺物は出土していない。

#### 〈土坑 4〉

径87×58 cm、深さ約8 cmをはかる楕円形土坑。埋土には焼土混じりのにぶい黄橙色土が堆積しており、18世紀代の肥前系染付半磁器碗や寛永通寶が出土している。

#### 〈土坑 5〉

径1.0×0.68 m、深さ約26 cmをはかる楕円形土坑。内部は2段掘り状になっている。埋土より寛永通寶が出土している。

#### 〈土坑 6〉

径約1.5 m、深さ約17 cmをはかる不整形土坑。埋土からは土師器小片が出土している。

#### 〈土坑 7〉

緩やかに南へ傾斜していく調査区北端ではほぼ半分を検出した。復元径5.0 m、深さ1.0 mをはかる不整形土坑。土坑の底部には径10～30 cmの集石がみられるが、人為的な貼り石状ではなく、自然堆積によるものと思われる。暗茶褐色の埋土からは15世紀代を中心とする土師器、瓦器が出土している。

#### 〈土坑 8〉

調査区西北端で、全体の約2/3を検出した。径約2.5 m、深さ1.3 mをはかる不整形土坑。上層に砂礫質の灰褐色土、中層に地山土の黄橙色土と灰褐色砂礫質土の混じる層、下層に地山土の黄橙色土が堆積しており、中層と下層の境に、10～30 cmの石の集石がみられる。集石に混じって石臼の破片が出土したほか、17世紀中葉の丹波焼播鉢などが出土している。

### 【柱穴状遺構】

柱穴状遺構は46基を検出したが、明確な建物構成ははみられなかった。これらの柱穴状遺構の中には風倒木痕と思われるものも含まれている。埋土からは、中世～近世中頃にかけての須恵器、土師器、陶器、磁器が出土しているが、小片が多い。

## (2) 遺物の概要

### 〈須恵器〉

小片が多く図化し得たものは少ない。(159)は山茶碗底部で、内面に見込み部を持ち、低いながら高台部をもつ12世紀代のもの。(190)・(191)は7世紀中頃に遡る坏Hで、周辺に古墳時代終末期の遺跡の存在をうかがわせるもので注目される。

### 〈土師器〉

土師器皿が、土坑5、南東落ち部から多く出土している。すべて手捏ね成形によるもの。ヘソ皿、(169～172・194)や、大きく開く口縁部を持ち端部に内碗気味のナデを施す(171)、(172)のいわゆる京都系土師器皿と、外面未調整の在地産のものがある。15～16世紀代に比定される。そのほか、播但型土塙(168)や鉄かぶと型土塙(193)などがあり、いずれも15世紀代に充てられる。  
がある。

### 〈瓦質土器〉

(165)は体部下部に1条の突帯を持つ浅鉢型で、底部には離れ砂のような痕跡がみられる。(192)は口縁端部が段状に屈曲する深鉢型。いずれも、15世紀代に充てられる。

### 〈陶器〉

(183)は丹波焼壺で、短い頸部から屈曲して外反する口縁部を持ち、端部は丸くおさめる。丹波焼壺B類V期にあたり、15世紀前半の時期が充てられる。そのほか、図化し得なかったが、口縁部と体部が一体成形で、口縁端部に面を持つ丹波焼播鉢IB類(17世紀中頃～末)がある。

(162)は、産地不明であるが、明赤褐色の色調を呈し、内面にヘラ描の卸目を施し、底部外面は回転糸切による卸皿。

### 〈磁器〉

#### ・肥前系磁器

(164) は半磁器で、外面に草花文が描かれる。(182) は外面に幾何学文を施す染付磁器。いずれも18世紀代のもの。

### 〈石製品〉

SK9から出土した(S3)は下白の破片で、復元径は約28cmをはかる。上面には比較的粗い溝が刻まれている。

### (3) 小 結

BⅢ地区では中世末期、近世中頃の遺構、遺物を検出した。現圃場成形時の造成の影響により、残念ながら明確な建物遺構等は確認できなかったが、15世紀代の遺物を出土した土坑8は、法幢寺Ⅰ期にあたり、法幢寺開山～天正年間の中世法幢寺にかかわる遺構の広がりを示すものであり注目される。

## 6. BⅣ区

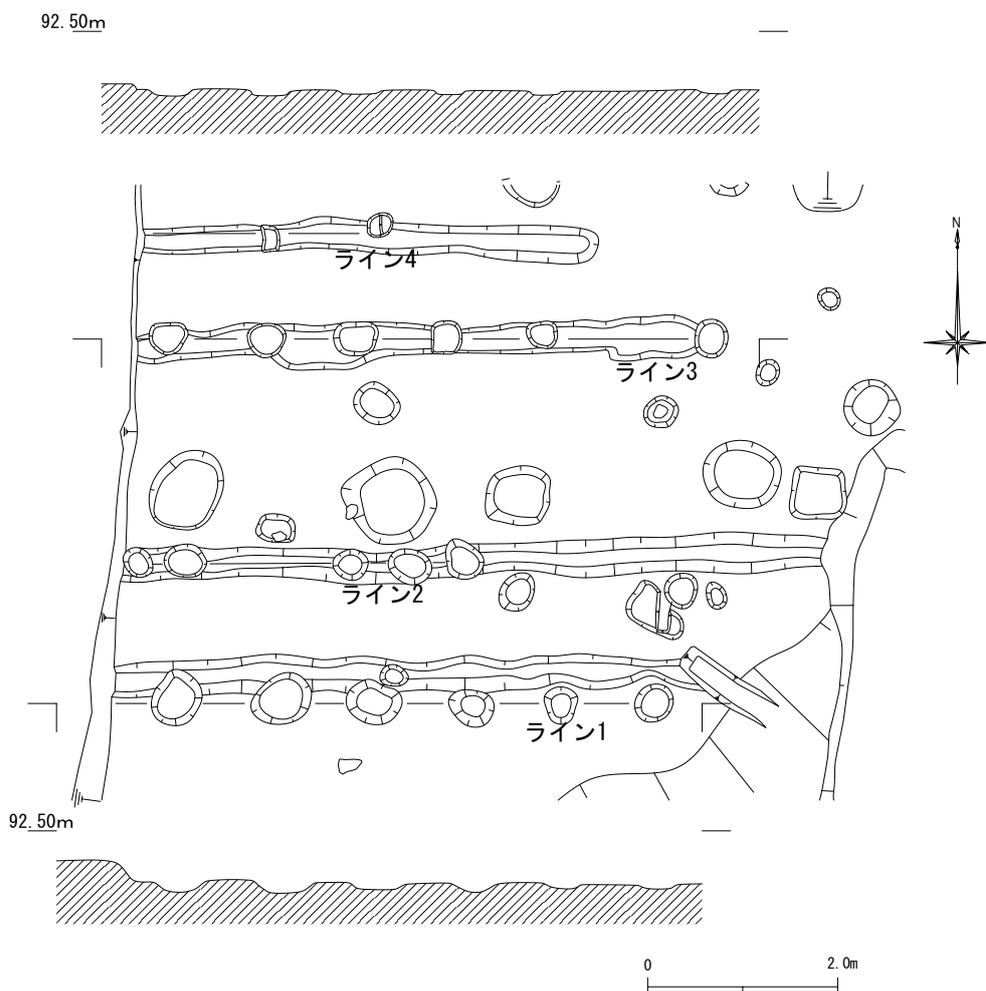
### (1) 遺構の概要

BⅣ区は西側山裾の圃場に位置し、BⅢ区との比高差約50cm、BⅤ区との比高差約1.0mをはかる。西側山裾内には江戸中期～後期の大庄屋津田氏の墓地がある。

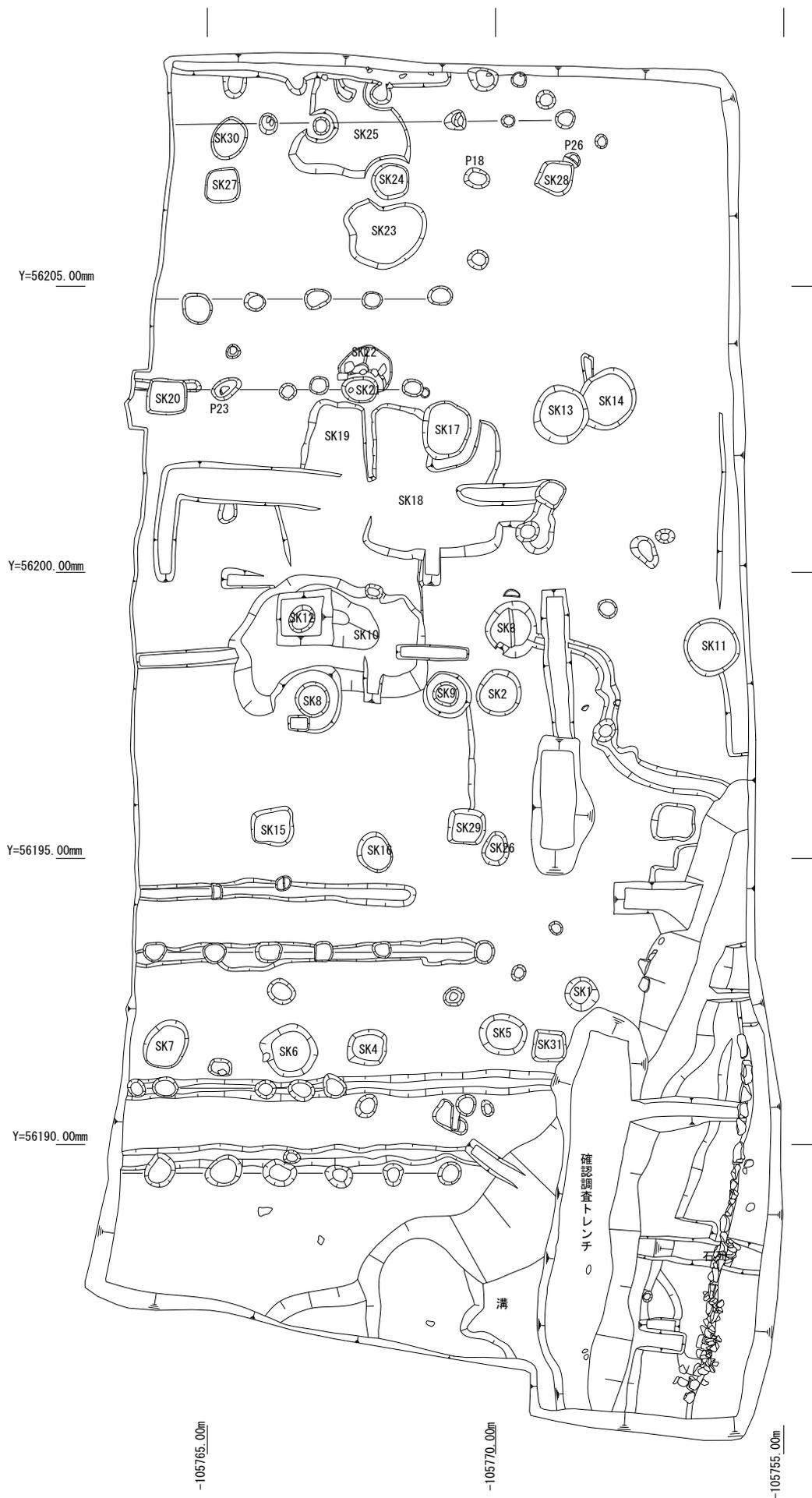
南東を向く山裾を削平によって形成されており、遺構面は現耕土直下において検出される自然堆積によるベース層である黒褐色土上面において検出された。

#### 【柱穴列】

柱穴状遺構は60基を検出したが、明確な建物構成を示すものは確認できなかった。しかしながら、調査区西側と東側で、南北に柱穴が並ぶラインが7本抽出できる。また、東側は削平によりほとんど遺存していないが、西側は柱穴列にそって布掘り状の溝が確認できる。残りのよい西側を詳しくみると、ライン1が最も残りがよく、柱穴が南北に等間隔(約1.0m前後)に6基並ぶ。



第45図 柱穴列



第46図 BIV区遺構全体図

柱穴は径 35～60 cm、深さは 13 cm 前後と浅い。これらの柱穴はライン 3 の柱穴にほぼ対応する配置を取る。一方、各ラインの間隔をみると、ライン 2～ライン 3 の間隔が約 2.5 m と幅広く、ライン 1 とライン 2、ライン 3 とライン 4 (約 1.0～1.5 m 幅) が幅の広い部分をはさんでセットになるようにもみえる。また、後述する土坑が、幅広い部分に、柱穴列と同じ南北の配列が抽出できる。東側の柱穴列においても、各ラインに同様の関連性が伺える。これらの柱穴列が構成するものとして、建物とするには、柱穴の間隔や対応関係の点において疑問であり、そのほか、廊下や塀などの施設も考えられるが、明確な構成はみえてこない。したがって、ここでは、『何らかの人為的な構造物』としてとらえておきたい。柱穴内からの遺物は少なく、須恵器、土師器、磁器の小片が出土しているが図化しえるものは無い。時期は近世期のものであろう。

## 【土 坑】

### 〈土 坑 1〉

径約 60 cm、深さ約 21 cm をはかる円形土坑。上層に灰褐色土、下層に暗褐色土が堆積しており、検出した遺構上面及び埋土より 15 世紀代の土師器小皿が出土した。

### 〈土 坑 2〉

径約 77 cm、深さ約 53 cm をはかる円形土坑。土坑内部の側面及び底面には粘土質の黄橙色土が幅約 10 cm の厚みで貼り巡らされている。埋土には上層に砂礫質の灰黄褐色土、下層ににぶい黄褐色砂礫質土が堆積しており、上層と下層にはさまれて薄い炭層がみられる。土坑底面からは、20 cm 前後の角礫にまじって、丸瓦が出土している。

### 〈土 坑 3〉

径約 1.0 m、深さ約 70 cm をはかる円形土坑。土坑 2 と同じく内部の側面及び底面には粘土質の黄橙色土が、検出時で幅約 3～5 cm の厚みで貼られているが、かなり崩落して埋土に混じっており、当初は土坑 2 と同じく 10 cm 程度の厚みがあったと思われる。埋土からは 18 世紀代の丹波焼播鉢、土師器灯明皿が出土している。

### 〈土 坑 4、5、6、7、31〉

西側柱穴列と平行して並ぶ土坑列で、方形、不整円形の土坑。いずれも深さ約 10 cm と浅く、礎石の抜き取り穴とも考えられるが、構成する建物配列は抽出できない。埋土からは須恵器、土師器の小片が出土しているが埋土は柱穴列と同じで、近世期のものであると思われる。

### 〈土 坑 8〉

径約 62 cm、33 cm をはかる円形土坑。土坑 10 を切り込んで掘り込まれており、土坑 2、3 と同じく内部の側面及び底面には粘土質の黄橙色土が貼られている。10～20 cm 前後の角礫が多く埋め込まれた埋土からは 18 世紀～19 世紀の磁器、陶器が出土している。

### 〈土 坑 9〉

径約 49 cm、深さ約 13 cm の円形土坑。SK2、3、8 同様底面及び側面に黄橙色粘質土が巡らされる。しかしながら、貼ったような状態ではなく、黄橙色粘質土の塊を地面に埋め込み、その上から土坑を掘り込んだような状態にある。土坑底面からは、須恵器大甕の胴部片が、土坑内面の湾曲にあわせて据えたような状態で出土した。当遺構の時期は、SK2、3、8 同様近世期のものと思われ、須恵器は転用されたものと思われる。

### 〈土 坑 10〉

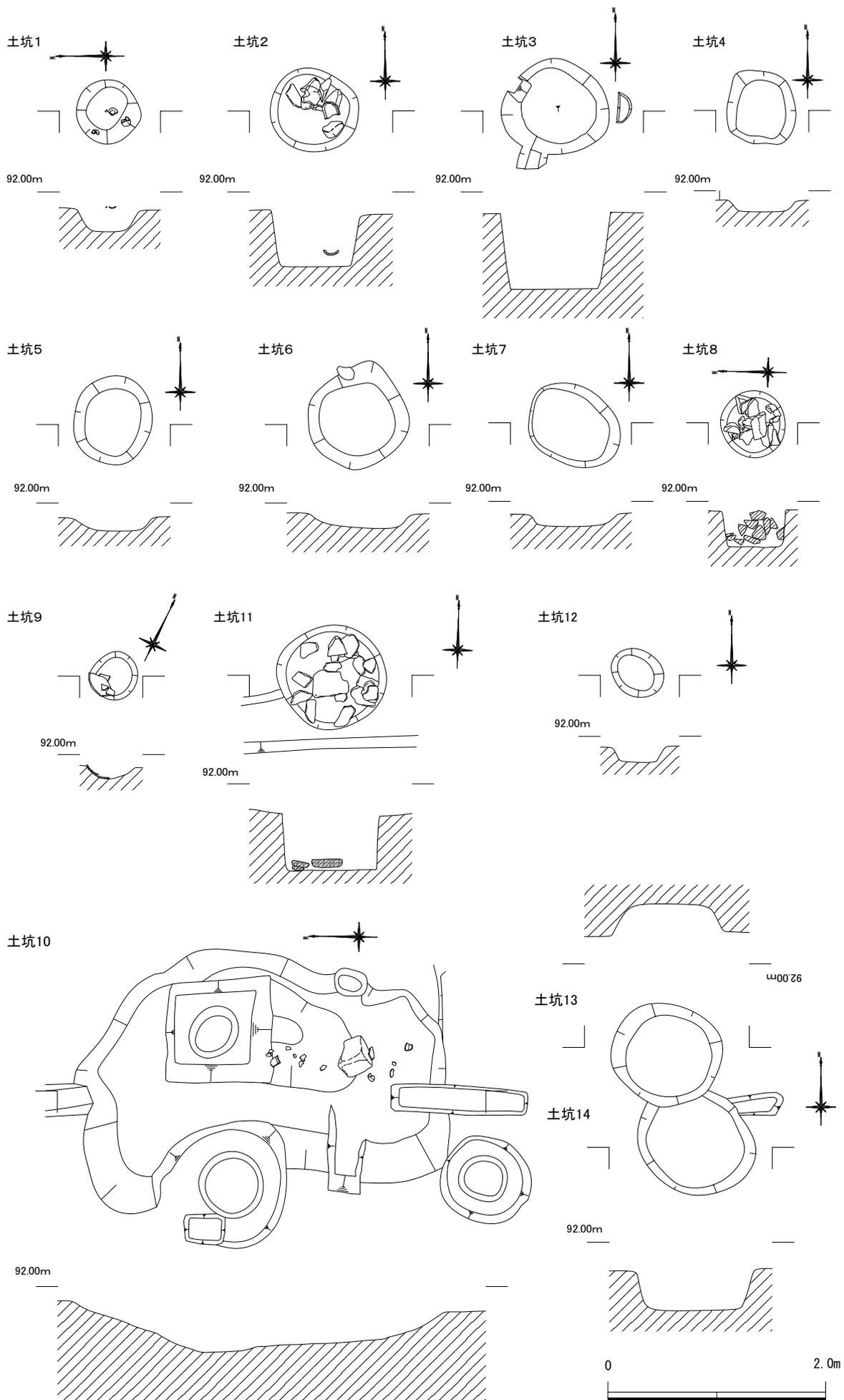
径約 3.6m×2.0m、深さ約 46 cm をはかる不整楕円形土坑。内部は播鉢状を呈し、茶褐色の埋土には 30 cm 前後の礫が混じる。埋土より、15 世紀代の土師器皿を中心とする土器が出土している。

### 〈土 坑 11〉

径約 97 cm、深さ約 51 cm をはかる楕円形土坑。土坑内部の側面及び底面には粘土質の黄橙色土が幅約 10 cm の厚みで貼られている。埋土は灰褐色の砂礫質土層を主とし焼土が混じる。土坑底面には角礫が堆積している。埋土から 17 世紀後半～18 世紀の遺物が出土している。

### 〈土 坑 12〉

径約 50 cm×42 cm、深さ 15 cm をはかる楕円形土坑。土坑 8 と同じく、黄橙色粘質土の塊を地面に埋め込み、その上から土坑を掘り込んだような状態にある。埋土には焼土が混じる。



第47图 土坑1~14

#### 〈土坑 13〉

径約 1.0m、深さ約 25 cmをはかる円形土坑。土坑 13 を切って掘り込まれており、土坑内部の側面及び底面には粘土質の黄橙色土が、検出時で幅約 3～5 cmの厚みで貼られているが、かなり崩落して埋土に混在している。土師器小片が出土している。

#### 〈土坑 14〉

径約 1.0m、深さ約 37 cmをはかる円形土坑。土坑 1 と切り合い関係にあり、土坑内部の側面及び底面には粘土質の黄橙色土が、幅約 5 cmの厚みで貼られている。埋土に黄橙色土は混じらない。須恵器、近世磁器小片が出土している。

#### 〈土坑 15〉

径約 66 cm×74 cm、深さ約 12 cmをはかる不整形土坑。埋土からは須恵器、土師器小片が出土している。

#### 〈土坑 16〉

径 60 cm×70 cm、深さ約 13 cmをはかる不整形土坑。土師器細片が出土している。

#### 〈土坑 17〉

径約 1.0m×0.84m、深さ約 34 cmをはかる不整形土坑。土坑内部に貼られていたと思われる黄橙色粘質土が崩壊して内面周囲に残る。埋土から 18 世紀代の近世磁器小片が出土している。

#### 〈土坑 18〉

一辺約 2.5m、深さ約 13 cmをはかる方形土坑。埋土には焼土が多く含まれており、土師器小皿や近世磁器片が出土している。

#### 〈土坑 19〉

確認調査のトレンチと土坑 18 によって切られているため、一部のみ検出した。埋土から土師器小片が出土している。

#### 〈土坑 20〉

径 71 cm×63 cm、深さ約 13 cmをはかる方形土坑。埋土からの遺物の出土は無い。

#### 〈土坑 21〉

径 62 cm×45 cm、深さ約 13 cmをはかる楕円形土坑。土坑 22 を切り込んで掘り込まれている。埋土からは土師器細片が出土している。

#### 〈土坑 22〉

径約 94 cm、深さ約 23 cmをはかる円形土坑。埋土には角礫が多く含まれており、内部には約 3～5 cmの厚みで黄橙色粘質土が貼られている。遺物の出土は無い。

#### 〈土坑 23〉

径約 1.41m×1.26m、深さ約 13 cmの不整形土坑。埋土には灰褐色の砂礫質土が堆積しており、京都系土師器皿など土師器皿を中心とする小片が多く含まれている。15 世紀後半の時期が充てられる。

#### 〈土坑 24〉

径約 62 cm、深さ約 12 cmをはかる円形土坑。土坑 23・25 を切り込んで掘り込まれている。埋土より土師器皿が出土している。

#### 〈土坑 25〉

調査区東端にかかる不整形土坑で、径約 0.9m×1.7m 以上、深さ約 10 cmをはかる。埋土には土師器小皿を多量に包含しており、特に京都系土師器が多いことが注目される。時期は 15 世紀後半。

#### 〈土坑 26〉

径約 61 cm×47 cm、深さ約 19 cmをはかる楕円形土坑。埋土からは土師器細片が出土している。

#### 〈土坑 27〉

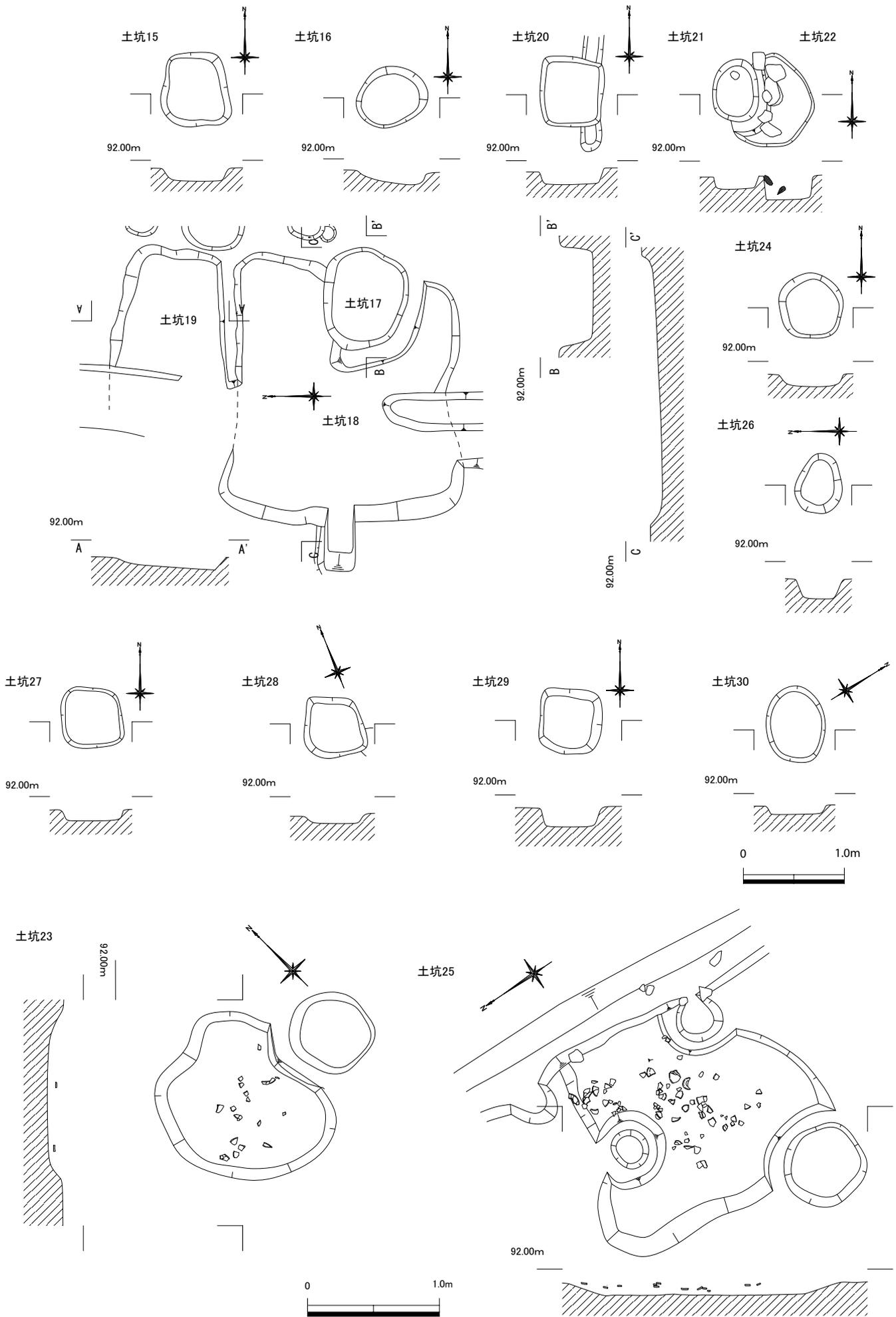
一辺約 61 cm、深さ約 10 cmをはかる方形土坑。埋土からは土師器小片が出土している。

#### 〈土坑 28〉

一辺約 58 cm、深さ約 7 cmをはかる方形土坑。埋土には黄橙色粘質土が堆積している。遺物の出土はみられない。

#### 〈土坑 29〉

一辺約 62 cm、深さ約 18 cmをはかる方形土坑。遺物の出土はみられない。



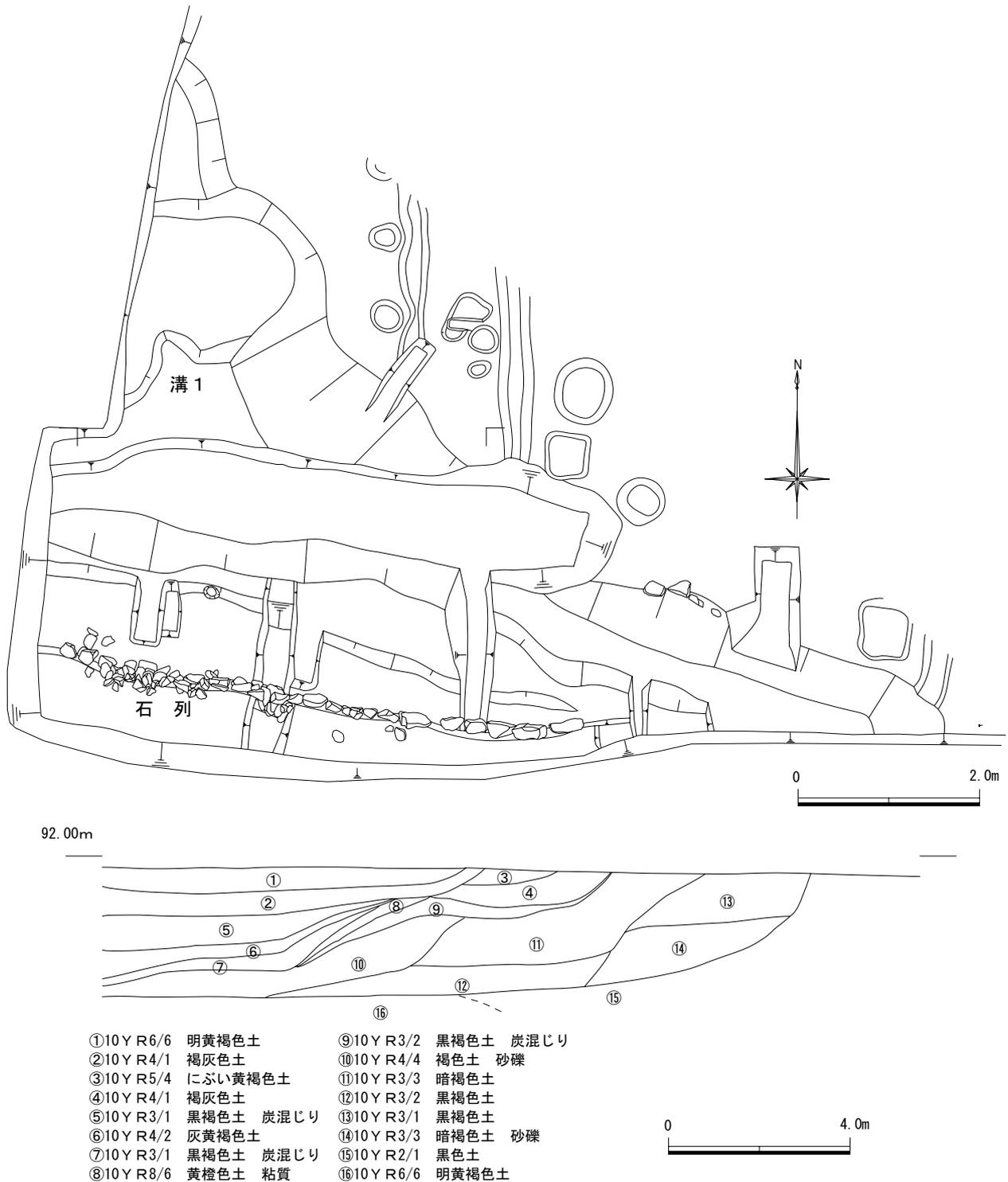
第48图 土坑15~30

## 〈土坑 30〉

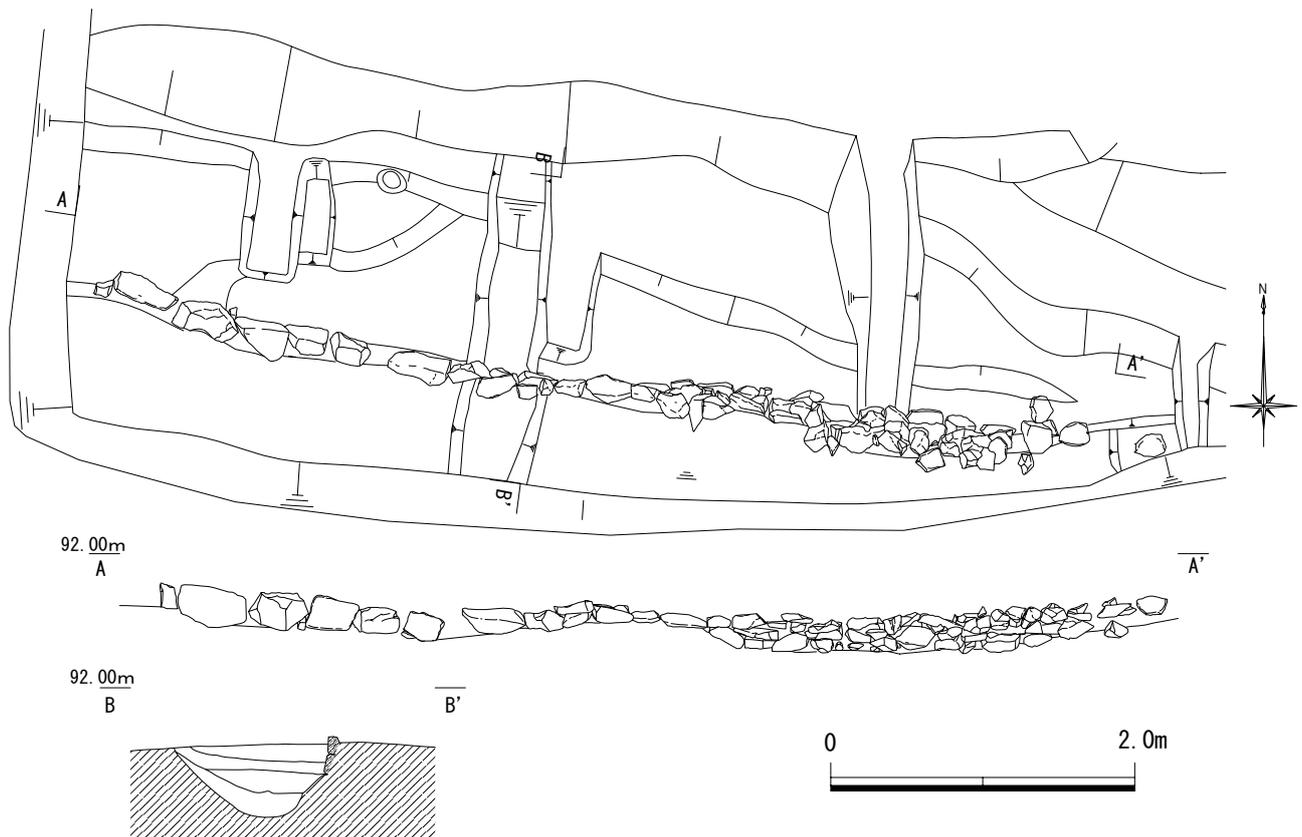
径約 77 cm × 58 cm、深さ約 9 cm の楕円形土坑。遺物の出土はみられない。

### 【溝】

調査区西端の山際を南東方向に流れる溝を検出した。溝幅は広い部分で約 4.2 m、深さ約 71 cm、狭い部分で幅 1.2 m、深さ約 51 cm をはかり、南向きから南東方向へ流れを変える蛇行部分にあたると思われる。溝内の堆積は砂礫層を主とし、炭の混じらない砂礫質の暗褐色土や黒褐色土を中心とする第 10～14 層、炭や焼土が多量に混じる第 3 層～第 9 層、溝の最終埋没層である第 1～2 層の大きく 3 つにわけることができる。他の遺構内にも焼土や炭が多く混じる堆積が見られることから、火災等の事象



第 49 図 溝 1



第50図 石列

が起ったことが考えられ、火災以前-火災後の堆積の差があらわれているものと思われる。  
溝内からは大量の中世末～近世後半期の磁器、陶器、土師器、須恵器等が出土している。

### 【石 列】

調査区西南はしにおいて東西に走る石列を検出した。石列は溝の南肩部に沿ってのびており、基底部レベルは西から東へとゆるい傾斜となっている。山際に当たる東側は、横長20～50cm、高さ約18cmの横長の石の長辺を面として使用した1段積みで、低くなっている東側では、高さ約5cm程度の薄い石が乱積みされ、2～3段積み上げられる。石列前面にあたる北側の溝南肩部との間は、溝状に若干低くなっている。溝状部分の断割土層では、石列基底部まで溝もしくは自然地形の落ちが埋まった後、さらに、石列を埋め込んで石列天端の高さまで造成されている様子が観察され、数度の改変の跡が確認される。この石列はおそらく道状の遺構の両側を区画するものであると思われる、このことは、現在、西側の山へ行く畦道が当遺構と重なっていることから伺える。石列全面すなわち北側の埋土からは中世期の須恵器土師器が出土したほか、石列裏込めから中世備前焼が出土している。しかしながら、いずれも小片で図化し得なかった。

## (2) 遺物の概要

### 〈須恵器〉

(364)、(391)は平安時代前半に遡る碗。(365)は12世紀代の山茶碗底部。(209)(210)は土坑9において転用されていたと思われる同一固体の須恵器大甕胴部片。外面に矢羽タタキが施されており、12世紀後半～13世紀のものであろう。これら、法幢寺創建以前に遡る時期の遺物は、数は少ないもののB地区全体で見られ、当期の遺跡の存在を示すものとして注目される。

### 〈土師器〉

土師器皿は、P18、SK1、SK10、SK23、SK25、SD1を中心に出土している。

中世期のものはいずれも手捏成形によるもので、いわゆる京都系と在地系のものがある。

京都系では、ヘソ皿(201・202・214～216・260～265)と薄手で大きく開く口縁端部に強いナデを施すもの(217～219、253～256、267～273)があり、在地系土師器皿を中心としたB1区の溝とは対照的に、一定量を占めている。在地系のものでは、中皿では、口縁部外面にナデを施すもの(198・220～222)、内碗気味に立ち上がる口縁部外面にナデ弱いナデを施すもの(223～227・274)、外面未調整のもの(225～230・376・377)があり、底部外面に板状圧痕が残るものが数点ある。小皿はいずれも外面未調整もしくは弱いナデを施し、内面に粗いハケ状の工具痕が残るもの(238～240)や、平面形状が円ではなく楕円形を呈するもの(241～243)もある。

これら中世期の土師器皿は、京都系土師器皿の編年観から、概ね15世紀代におさまるものであると思われる。

近世期のものは回転代を使用し、底部回転糸切によるもの(206・369～375)がSD1を中心に出土しており、18世紀代に充てられる。

鍋類にも、中世期のものと近世期のものがある。

中世期のものには羽釜形タイプの(244)、(378)、土埇タイプの(245)、(396)があり、いずれも15世紀代に比定される。近世期のものでは、18世紀代の炮烙がSD1より出土している。型づくり成形によるもので、口縁部が内傾する(379)～(381)、(384)と、直線的に伸びやや外傾する(382)、(383)がある。

### 〈瓦質土器〉

(385)は火鉢の胴部片であると思われる。体部中位に細かく乱雑な竹管上の刺突文の文様帯をもち、刺突文の上から、『京巳□庵』の文字が型押しされている。内外面にはススが付着している。

### 〈陶器〉

#### ・丹波焼

陶器類の大半を占めるのが、丹波焼播鉢である。

中世期に遡るものは(354)のみである。断面三角形状で、内碗気味に引き上げられ、播目はヘラ描によるタイプで、丹波焼播鉢Ⅲb1類にあたり15世紀代の時期が充てられる。

近世期のものでは、口縁部と体部を一体成形し、口縁端部を若干肥厚して面を持つIB3類(356)、2～3条の沈線を有する口縁帯をもち、口縁帯が直立気味となるIVA類(357)、外形気味となるIVB類(359)、高台をもつV類(362)がある。丹波焼播鉢編年では、IB3類が17世紀中～18世紀前半、IV類が18世紀代、V類が18世紀末～19世紀前半の時期にあたる。

壺(346)は、内傾気味の口頸部に小さい玉縁状の口縁部をもつⅢ類で、17世紀後半のもの。

甕では、17世紀後半～18世紀前半の体部に飛び掛けによる灰釉を施した(344)や、外傾する口頸部に玉縁状の口縁部をもつ(345)のほか、若干時期が下り、18世紀後半に比定される、T字状口縁部の上端部に幅広の面を持つ(348)がある。

そのほか、外面に施釉を施した18世紀の火入れ(333)、(334)や無釉の鉢(338)のほか、口縁部輪花型で、口縁部外面及び内面に暗オリーブ色の釉を施釉した19世紀代の盤(336)がある。

#### ・備前焼

SD1から甕口縁部が(363)1点のみ出土している。備前IV期(15世紀)にあたる。

#### ・唐津焼

皿、碗、鉢がある。

皿では、外面体部中位～内面にかけて灰オリーブ釉を施釉し、削り出しによる高台をもつもので、内

面底部には3箇所、砂目痕がみられる。無文の(211)と内面に草花文を施した(332)がある。17世紀代のもの。碗(329)は、暗茶褐色の態度で、内外面に白濁釉によるハケ目を施している。18世紀前半に比定される。鉢には(340)と(339)がある。(340)は、直線的に開く体部に、内側へつまみ出したように肥厚する口縁部をもち、内面に黄オリーブ釉を施釉し、底部内面に3箇所の砂目痕がみられる。17世紀前半に比定される。(339)は玉縁状の口縁部をもち、内面には灰釉、外面には白濁釉によるハケ目が施される。17世紀後半～18世紀前半の時期が充てられる。

#### ・瀬戸・美濃焼

(212)、(213)は皿もしくは碗で、(213)は内面及び外面腰部まで浅黄色釉が施される。15～16世紀代に遡るものであろう。(327)は、回転ヘラケズリ成形で、内面～外面腰部まで浅黄色に発色した灰釉が施され内外面に貫入が入る碗で、17世紀後葉～18世紀前葉の時期が充てられる。

#### ・瀬京焼系施釉陶器

碗では、径の大きい高台を持ち外面に風景文が描かれ、露胎の底部には刻印が施される(207)や、小さい高台部で、外面に色絵による草花文を描いた(325)、オリーブ色釉が施された無文の(326)がある。そのほか、底部周辺に豆粒状の突起をもつ鍋底部(343)などもある。いずれも18世紀後半～19世紀前半の時期に充てられる。

#### ・その他

(347)は産地不明の小型の無釉陶器壺。頸部にはヘラ描の文様がみられる。仏具関係の器種の可能性がある。

#### 〈土製品〉

(386)、(387)は手捏による土鈴で、横長楕円形のものと円錐形のものがある。

#### 〈磁器〉

##### ・肥前系磁器

磁器はSD01から大半が出土しており、肥前系のものが大半を占める

(278)は厚手の碗で、底部外面には虫食いが顕著にみられる。17世紀前半に遡る初期伊万里。で17世紀前半に遡るもの。

(279)～(297)はいわゆるくらかわんか手の碗で、外面には雪輪文、梅花文、松葉文、二重網目文、風景文など手描きによるものと、コンニャク印判による蔦の葉文などがある。底部外面に渦福文、『太明年製』の略字を記すもの(279、283、286)や、底部内面を蛇の目釉剥されるもの(281・282)、内面見込み部に五弁花文(291)、菊文(288)がみられるものなどがある。

(298)～(305)は坏で、外面には雁ヶ音文、笹葉文、コンニャク印判による菊文などが描かれる。数は少ないが若干磁器が下る、色絵を使った(305)などもある。

皿では、口縁部内面に墨引きによるS字状文や草花文、五弁花文が描かれる。内面見込み部に蛇の目釉剥ぎ痕がみられるもの(315)もある。

(318)～(321)は貝形の紅皿。(323)・(322)は香炉で、内面に離れ砂と思われる砂が多く付着する。これらの磁器類は概ね18世紀代を中心とするものであるが、初期伊万里(278)のように17世紀前半に遡るもの、(305)、(308)など19世紀前半に下るものが若干含まれる。

##### ・輸入磁器

(324)は外面に片切彫り連弁文を施した青磁。14世紀前半の時期が充てられる。

#### 〈瓦〉

##### ・軒丸瓦

(K88)は瓦当部の小片。珠文は比較的小さい。

##### ・丸瓦

丸瓦はSK2から1点のみ出土している。凸面は丁寧なナデが施され、凹面にはコビキBで、布目がよく残る。玉縁部側縁の面取りは胴部側縁先端部につながっており、胴部側縁部の面取り幅は狭いⅢ類。

##### ・平瓦

SD1から出土している。(K87)は凸面のナデ調整はほとんどなされず側縁に凹型成形台の痕跡が残るⅡ類。(K89)は丁寧なつくりで、凸面は弱いナデの後、四方に幅広の仕上げナデが施されるⅣ類もしくはⅤ類。(K90)は凸面側縁部のみ幅の狭い仕上げナデがみられるⅢ類で、凹面には離れ砂が残る。

### 〈石製品〉

(S4) は砥石。砂岩製で舟形を呈し、4面供に使用痕が見られる。(S6) は凝灰岩質泥岩を使用し、比較的薄手の製品。両面供に使用痕状のものが観察され、砥石として使用されたものと思われる。

### 〈金属製品〉

SD01 より鉄釘 (F5) と銅製煙管吸口 (F4) が出土している。

## (3) 小 結

B IV 地区では、中世末期と近世中期の2時期遺構を検出した。

中世期の遺構はSK1、10、18、23、25である。各遺構からは15世紀代の土師器皿を中心とする遺物が出土しており、中でも、京都系土師器皿が一定量を占めていることは注目される。このことは、当寺院が夢想国師開山、足利尊氏建立の伝承を持つように、都である京都との繋がりが深かったことをうかがわせる。

また、B I 区の在地系の土師器皿を主体とした溝と当地区の土坑群の京都系土師器皿が一定量を占める出土のあり方の違いは、共に15世紀代の法幢寺にかかわる遺構群であることから、それぞれが関連する施設等の役割、機能の差異をあらわすものであると思われる。

近世期の遺構は18世紀を中心とする溝と土坑群、柱穴列がある。

柱穴列は7列が検出され、布掘り状の浅い溝を伴う。各柱穴列は平行に南北に平行に柱穴を配しているが、各列の柱穴同士を結ぶ建物構造は捉えられなかった。しかしながら、各列の配置には一定の規則性が見受けられ、何らかの建造物の存在が伺える。土坑はいずれも内部周囲に粘土張り巡らせたもので、水溜、手水、貯蔵穴等の機能が考えられる。また、調査区西端で検出された溝は、B 2 区西端で検出された溝群とつながり、山裾を南流するものと思われるが、埋土から出土する遺物は、古代、中世後期、近世期の幅広い時期の遺物を包含しており、法幢寺遺跡の存続時期を示している。その中でも、18世紀代のものが中心であることは、近世中頃の法幢寺の隆盛が伺える。

## 7. B V 区

### (1) 遺構の概要

B V 区は、B IV 区の南に隣接する圃場に位置し、B IV 区圃場との比高差は約50 cmをはかる。南東を向く山裾を削平によって形成されており、遺構面は、耕土直下にいて検出される、自然堆積のベース層である黒褐色土上面において検出した。

### 【土 坑】

当調査区の遺構の大半を占める。それぞれ、長方形、方形もしくは三角形を基本とする形状を呈し、SE01 から南西方向へ帯状に配列されているような、規則的な配置が伺える。

#### 〈土 坑 1〉

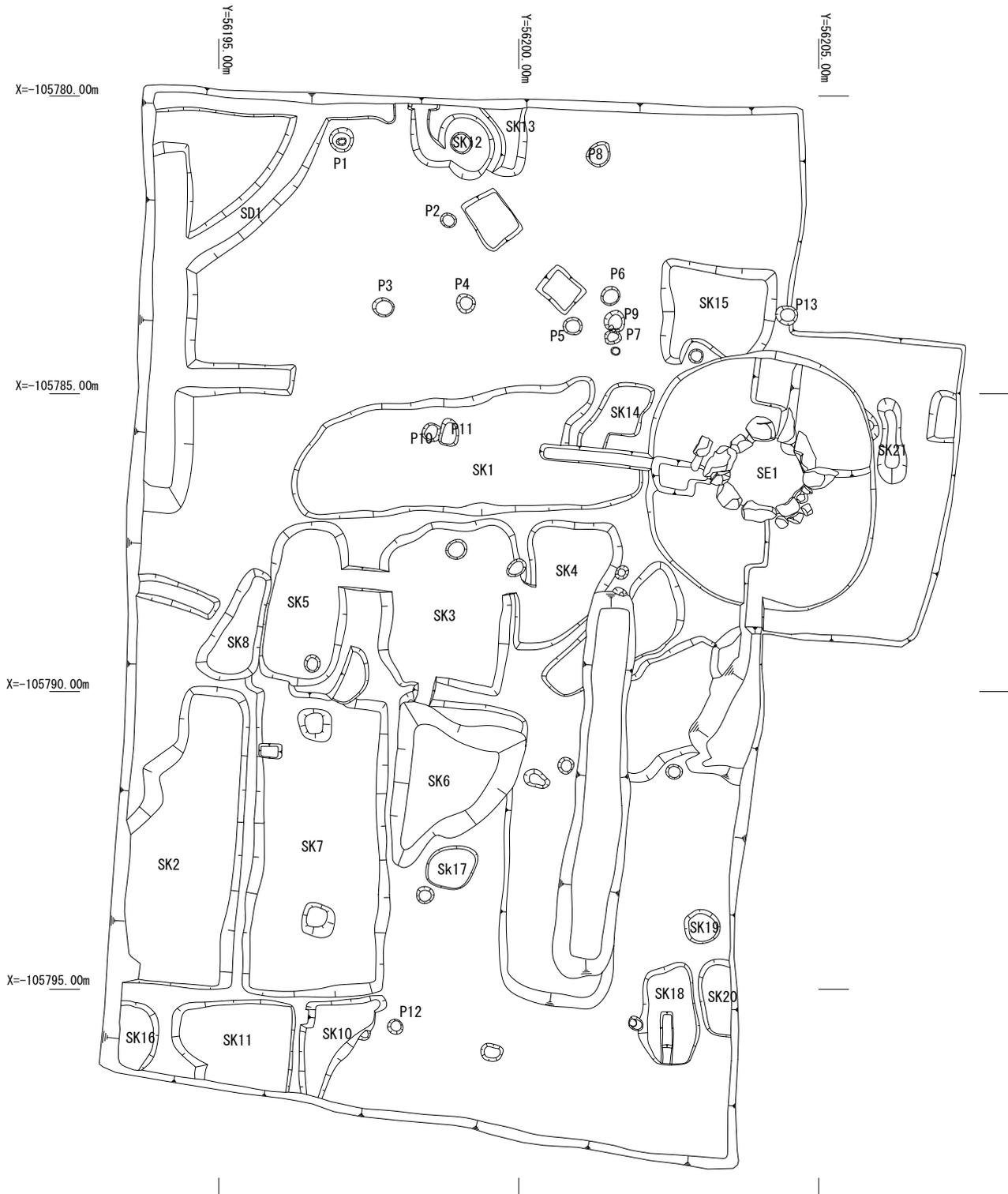
長辺約5.9 m × 短辺約2.0 m、深さ約12 cmをはかる隅丸の不整長方形土坑。埋土にはにぶい黄褐色土が堆積している。埋土からの遺物の出土は少なく、わずかに中世須恵器、土師器の細片が出土しているのみ。

#### 〈土 坑 2〉

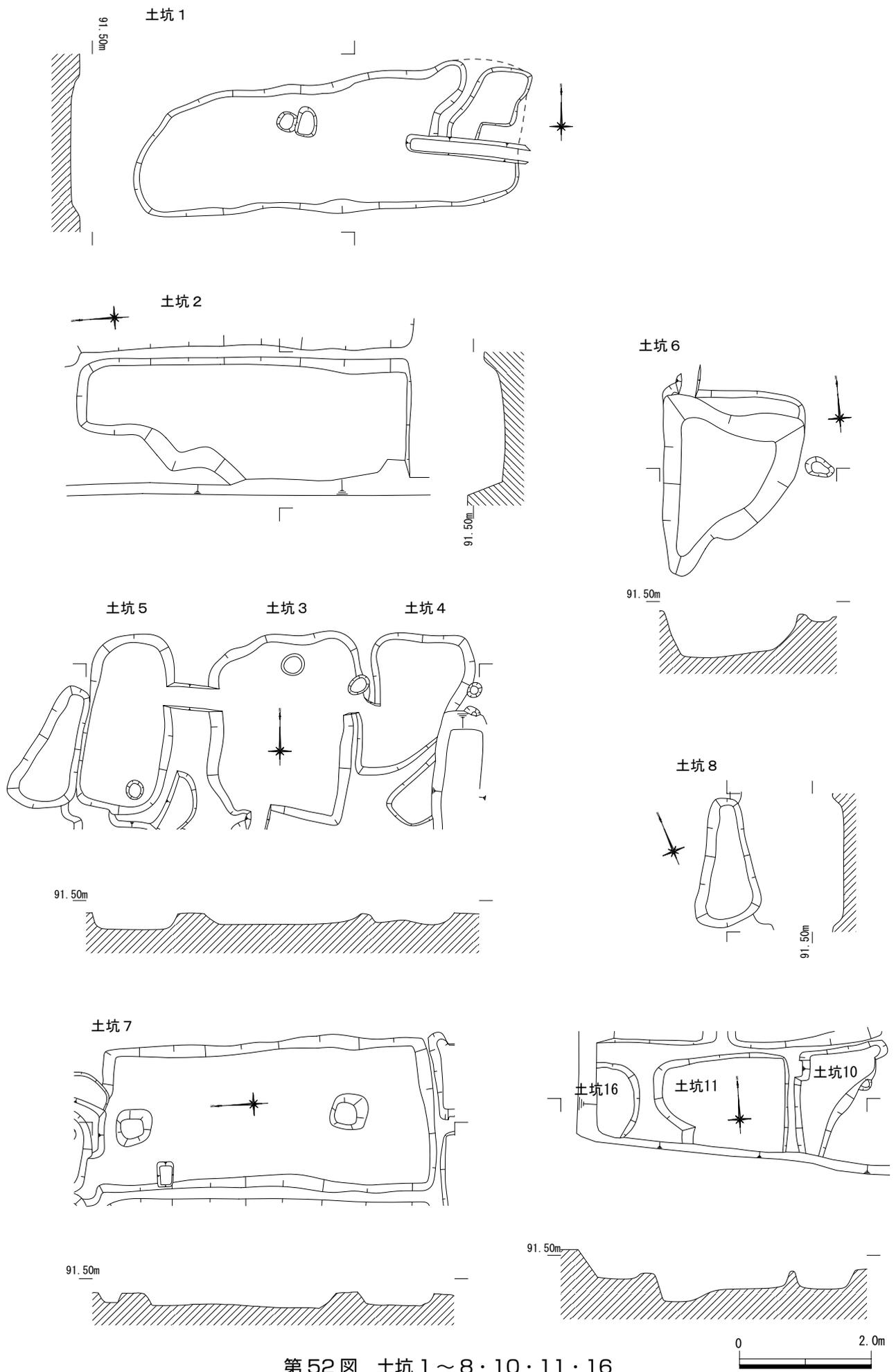
長辺約5.0 m × 短辺約2.0 m以上、深さ約30 cmをはかる不整長方形土坑。西北側の角はなく、三角と四角をあわせたような形状となるが西端は調査区外へと伸びる。土坑7と並んで配置されている。埋土には砂礫質のにぶい黄褐色土が堆積しており、埋土からは18世紀～19世紀前半の遺物が多く出土している。

#### 〈土 坑 3〉

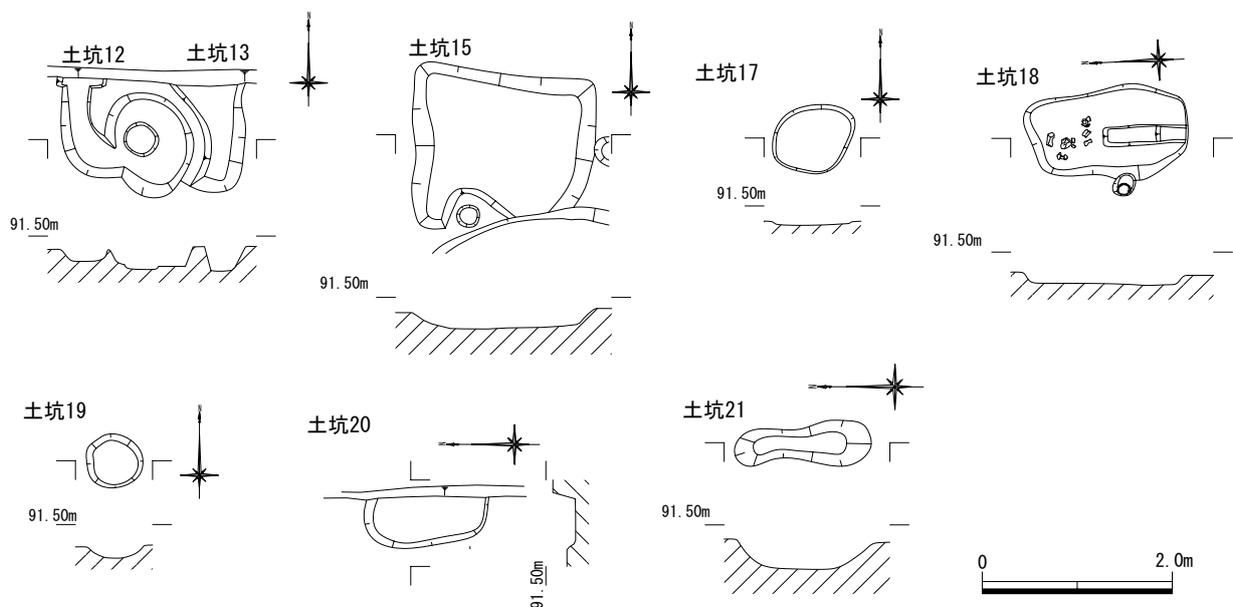
長辺約2.8 m × 短辺約2.2 m、深さ約17 cmの不整形の土坑。埋土には砂礫質のにぶい黄褐色土が堆積しており、中世須恵器細片が出土している。



第 51 图 BV区遺構全体図



第 52 图 土坑 1 ~ 8 · 10 · 11 · 16



第53図 土坑12・15・17～21

〈土坑4〉

長辺2.1m×底辺約1.3m、深さ約16cmをはかる、三角形形状の土坑。埋土には砂礫質のにぶい黄褐色土が堆積しており、遺物の出土はみられない。

〈土坑5〉

長辺約2.7m×短辺約1.1m、深さ2.6mの隅丸長方形土坑。埋土には砂礫質のにぶい黄褐色土が堆積しており、埋土から18世紀～19世紀前半の遺物が出土している。

〈土坑6〉

一辺2.2m～2.7m、深さ73cmをはかる三角形形状の土坑。埋土には上層に砂礫質の黒褐色土、下層に砂礫質のにぶい黄褐色土が堆積しており、埋土からは中世須恵器、土師器小片が出土している。

〈土坑7〉

土坑2に並列して配置される、長辺約5.0m×短辺約2.1m、深さ約20cmをはかる長方形土坑。土坑の東西の中軸線上には、北辺と南辺寄りの2箇所円錐台状の高まりが見られるこの円錐台状の高まりは、上屋がありその柱の基礎になる可能性も考えられるが、ほかに対応する遺構は検出されていない。

埋土には灰黄褐色土、にぶい黄褐色土が堆積しており、埋土からは18世紀代の遺物に混じって12世紀後半～13世紀前半の遺物も多く出土している。

〈土坑8〉

SK5に並んで配置された、長辺約2.0m×短辺約1.0mの三角形形状土坑で、東側の肩部をSK5と共有する。埋土からは18世紀代の遺物が出土している。

〈土坑9〉

土坑5と7を切り込んで掘り込まれた円形土坑。遺物の出土は無い。

〈土坑10〉

一辺約2.0m、深さ約30cmをはかる三角形形状土坑。埋土からは中世須恵器、土師器小片が出土している。

〈土坑11〉

南側が調査区外へ延びるが、一辺約2.0m、深さは浅い部分で27cm、深い部分で約42cmをはかる土坑。砂礫質のにぶい黄褐色土埋土からは中世須恵器、土師器、近世陶器小片が出土している。

〈土坑16〉

土坑11に隣接し、西側は調査区外へのびる。深さは約8cmをはかる。近世陶器小片が出土している。

〈土坑12〉

調査区北橋で、土坑13を切って掘り込まれた円形土坑。径約96cm、深さ約24cmをはかる。土坑西

側から北へ溝状の遺構がのびている。土坑底面は浅い2段掘りとなる。埋土には灰褐色の砂礫質土が堆積しており、埋土から12世紀後半～13世紀前半の須恵器片が出土している。

#### 〈土坑 13〉

大半が土坑12によって切られているが、深さは約27cmをはかり、北側調査区外へと伸びる。埋土には暗灰褐色の砂礫質土が堆積しており、12世紀後半～13世紀前半の遺物が出土している。

#### 〈土坑 15〉

長辺約2.0m×短辺約1.7m、深さ約20cmをはかる方形土坑。埋土には砂礫質のにぶい黄褐色土が堆積しており、中世須恵器、土師器片が出土している。

#### 〈土坑 17〉

径約70cm、深さ約4cmをはかる円形土坑。埋土からは中世土師器小片が出土している。

#### 〈土坑 18〉

長辺約1.6m×短辺約0.92m、深さ約12cmをはかる隅丸長方形土坑。埋土には焼土混じりの灰茶褐色土が堆積しており、中世土師器甕が出土している。

#### 〈土坑 19〉

径約60cm、深さ約12cmをはかる円形土坑。灰茶褐色土の埋土からは、中世土師器片が出土している。

#### 〈土坑 20〉

長径約1.3m、深さ約9.5cmをはかる楕円形土坑。東側は調査区外へと伸びる。中世須恵器、土師器小片が出土している。

#### 〈土坑 21〉

井戸東側に位置する楕円形土坑。長径約1.4m×短径約0.4m、深さ約33cmをはかる。埋土には井戸掘り方と同じにぶい灰黄褐色土が堆積するが、遺物の出土はみられない。井戸に伴う遺構の可能性もある。

### 【井戸】

井戸は4.2×3.8mの楕円形の掘り方をもつ。井戸は検出面では径約1.4m、基底部分で約1.3mのほぼ直立した円形の石組み井戸。もっとも石組みが残る部分からの深さは約3.36mをはかる。石組みは上部～中位には35cm～60cmの横長の石材を使用し、下部には20～30cmの小振りの石材を使い、基底部分の石には40cm×30cmの石材を使用している。井戸底面には、径20～10cm、厚み5cm前後の丸味を持つ川原石の敷石が施されている。最下部の胴木は認められない。

井戸内は調査中でも湧水があり、ポンプ排水を行わないと、1日で約3m地点まで水位が上がる状態である。

井戸内の堆積は、上層（検出面から74cm）には、あまり礫を含まない灰茶褐色系の土層、中層①（約38cm）には石組み上部の崩落によるものなど、大小の礫を多く含む砂礫質の黒褐色土層、中層②（約40cm）には大きな礫の少ない砂礫混じりの褐灰色土層、中層③（約30cm）には再び石組みの崩落石を含む黒褐色の砂礫層、下層（約1.4m）には石組みの崩落石を多く含む青灰砂泥層、明黄褐砂泥層が堆積する。堆積状況から、井戸石組みの崩落石を含む層が下層、中層③と、大きな礫を含まない中層②をはさんで中層①にみられることから、井戸は2段階で破棄されたような状況が伺える。

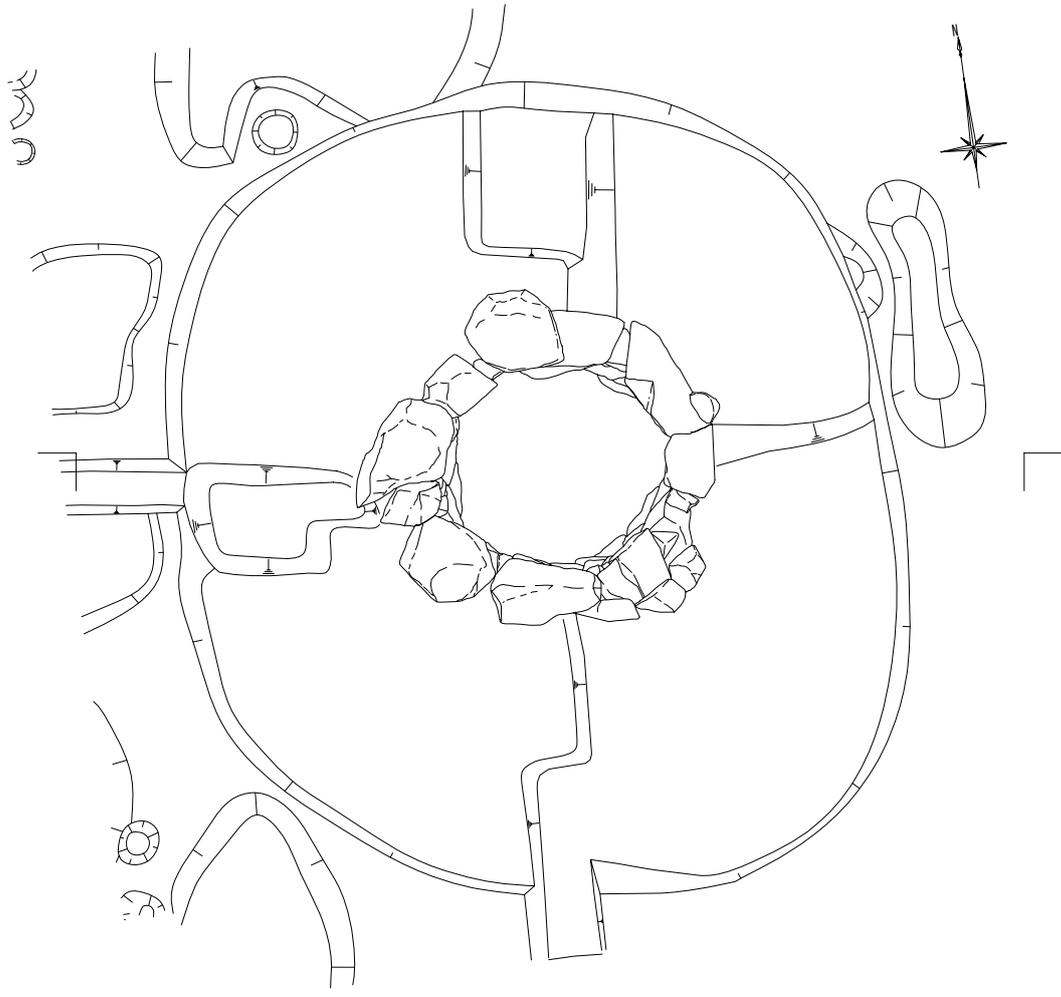
石組みの断ち割りは行えなかったが、上部の石組み裏込めの観察では、裏込め石は見られず、砂礫質の黒褐色土と地山土である黄橙色土を互層で積み上げている状況が観察できる。

井戸内からは、12～13世紀代の須恵器や15～16世紀代の陶器、土師器のほか、瓦、宝篋印塔の一部、石臼、土錘などが出土している。大半が井戸の埋没過程において紛れ込んだものであるが、底付近から16世紀の甕胴部片が出土している。また、井戸内出土の最も新しい時期を示すもので、16世紀末～17世紀初頭のものがあり、井戸の廃棄時期を示すものであると思われる。

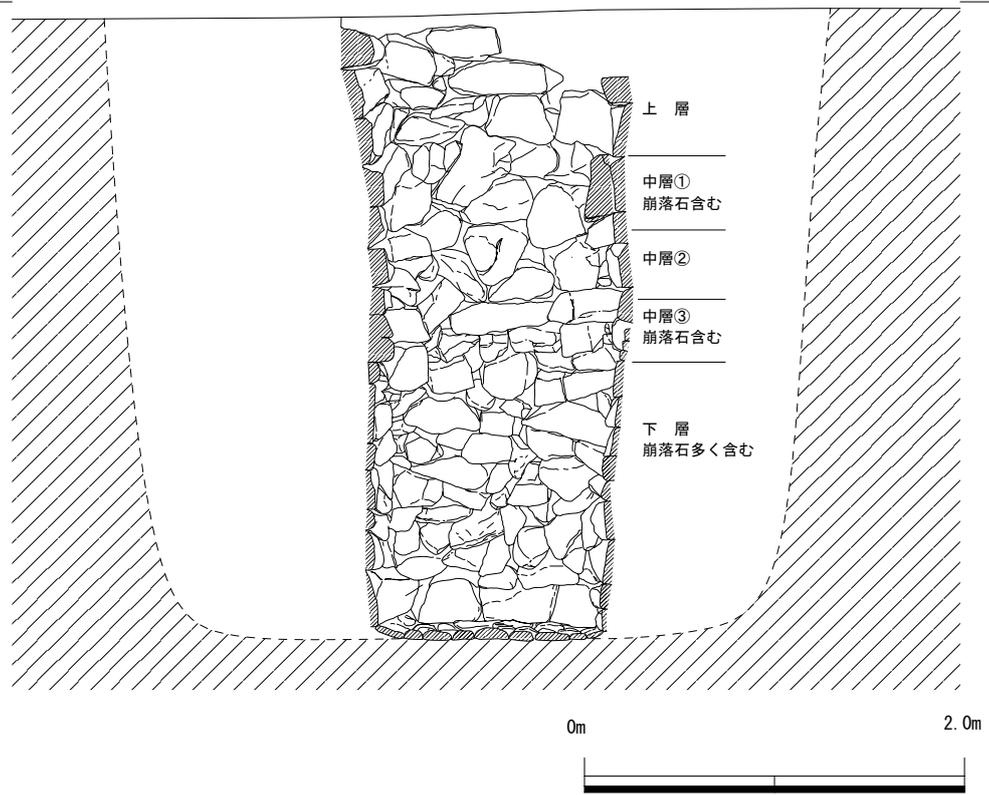
### 【溝】

調査区北西隅において一部を検出した。溝幅約59cm、深さ約16cmをはかる。

位置的にはBⅣ区の溝につながる位置にあるが、BⅣ区との比高差が50cm近くあるため、上部は削平され、溝の底部分のみが検出できたと思われる。埋土には灰茶褐色砂礫層が堆積しており、18世紀代の土師器小皿や瓦が出土している。



91.50m



第54図 井戸1

### 【柱穴状遺構】

柱穴状遺構は、13基を検出したが、建物等を構成する配置は抽出できなかった。柱穴内からは流れ込みによるものと思われるが、中世期の遺物小片が出土している。

### (2) 遺物の概要

#### 〈須恵器〉

山茶碗（432～434・454・455・457・470～472・484）では、口縁部が直線的に大きく開き、かろうじて高台部、内面見込み部が残る段階のもの。小皿（435・436・456・498）は内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ。概ね12世紀後半～13世紀前半の時期が充てられる。（497）は包含層からの出土であるが、7世紀後半の坏Hで、当期に遡る遺物が他のB地区調査区内からも数点出土しており注目される。

#### 〈土師器〉

煮沸具では7世紀後半～8世紀代に遡るもの（441・459・460）と16世紀末～17世紀前葉に比定される炮烙の初現形態を呈し、外面に平行タタキや格子タタキを施した土塼（474～476）がある。

小皿は、中世期のものでは内湾気味に立ち上がる口縁部で、底部回転糸切による（438、439）直線的に大きく開く口縁端部にナデを施すいわゆる京都系土師器皿（477）がある。近世期では回転糸切による比較的大きな底部に内湾気味の短い口縁部をもつもの（449・499・488・489・485）がある。

#### 〈陶器〉

##### ・丹波焼

出土陶器類の大半を占める。

播鉢は、凹線を持つ口縁部をもつ丹波焼分類ではIV A類が主体で、口縁端部を上方に摘み上げるタイプ（450～452）と外側に摘み出すタイプ（421・453）がある。甕では、肩部から体部中位にかけて22本の凹線（条線）をもち、肩部には不遊環を貼り付けた（418）がある。そのほか、腰部の括れ部にしっかりとした稜線を持つ火入れ（417）などがある。いずれも17世紀末～18世紀におさまるものである。SE1からは14世紀中頃～末に遡る中世期の壺口縁部（467）のほか、甕もしくは壺の胴部片（466・468）胴部と一体成形による口縁部で、端部を若干肥厚して面を持ち、クシ描きの播目を施した（469）など16世紀後半～17世紀前半のものも出土している。

##### ・備前焼

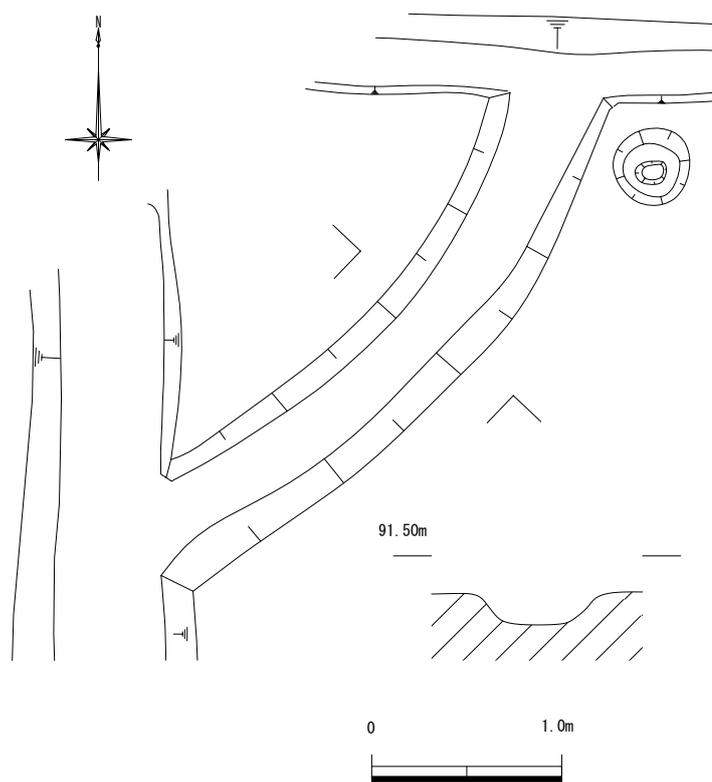
SE1から中世備前焼が出土している。

（463）は玉縁の口縁部をもつ甕。（464）は肩部にクシ描きによる4～5条の沈線を施す壺胴部片。（465）は凹線を施した凹縁部をもち、尖り気味におさめた口縁端部からやや下がった内面にも段を持つ播鉢で、備前焼編年中世6 b期（16世紀中頃～第3四半期）にあたる。

##### ・唐津焼

17世紀前半のものとしては、外面凹線状のロクロ目を残す灰釉皿（413）や直線的に開く口縁部をもち、白泥釉を施した皿（447）、内面から外面胴部下側まで灰釉を施し、露胎の高台部は削りだしによる（448）がある。（448）内面底部には砂目跡がみられる。

若干時期の下るものとしては、内外面に白濁釉によるハケ目を施した碗（410）、肉厚の器壁をもち、しっかりした高台豊付には離れ砂が残る碗（409）があり、17世紀中頃～後半の時期に充てられる。



第55図 溝1

#### ・瀬戸美濃焼

(462)は浅黄色の釉がかけられ、ロクロ目を明瞭に残し、高台部は露胎で貼り付けによる。(446)は濃緑色の釉が全面に施釉され、高台部は削りだしによる。いずれも16世紀後半のものであろう。

#### ・京焼系施釉陶器

浅黄色の釉が施釉された内湾気味に立ち上がる口縁部を持つ碗(407・408・428・444)と、体部が屈曲して立ち上がる碗(412・414・494)がある。前者のうち、(408)、(444)の底部には『清水』などの刻銘がみられる。いずれも18世紀後半～19世紀前半の時期に充てられる。

#### 〈磁器〉

#### ・肥前系磁器

くらわんか系の碗を中心として、坏、蕎麦猪口などがある。外面に草花文、一重網目文、二重網目文などを描く。内面見込み部には手描きによる花卉文(397)、コンニャク印判による五弁花文(398)がみられるほか、蛇の目釉剥ぎされたもの(493)もある。外面底部には渦福文(397)や崩れた『太明年製』の文字(427、492)がみられる。18世紀代のものを主体とし、若干19世紀前半に下るものが含まれる。

#### 〈瓦〉

#### ・軒丸瓦

(K96)と(K95)は同一個体であると思われる。瓦当文様は、周囲に小振り高さのある珠文を配する左巻き巴文で、珠文外側に圏線がみられる。巴頭は小さく丸味を持ち括れ、尾に向けてシャープに長く伸びる。珠文は復元すると15～16個となる。丸瓦と瓦当の接合部にはカキ目が施され、A地区で出土した近世期の丸瓦のような、瓦当裏面への補充用の粘土板の痕跡はみられない。凸面はヘラ状工具により丁寧になでられるが、部分的に縄目タタキ痕が残る。凹面はコビキAで、目の細かい布目がみられ、尻側にはループ状の吊り紐痕がのこる。吊り紐の頂部は、布内側に通し縫いされ、結び目状の痕跡はみられない。側縁部のしっかり面取りされ、玉縁部の凹面側周縁も面取りされる。玉縁部側縁の面取りは幅広でしっかりしており、丸瓦部側縁先端までしっかりとつながっている。瓦当文様や、丸瓦部の特徴から15世紀代に遡るものと思われる。

#### ・丸瓦

(K92)がある。凸面はヘラ状の工具による丁寧なナデ、凹面はコビキBで、布目が明瞭に残り、ヘラタタキ痕がみられる。

#### ・平瓦

(K91)は7世紀後半の古代瓦。かなり磨耗しているが、凸面には比較的粗い斜格子タタキがみられる。

(K97)は薄手で、凸面は弱いナデが施されるが離れ砂の痕跡が残る。側縁には凹型成形台の痕跡がみられる。凹面には丁寧なナデが施されるが部分的に布目痕が残る。中世末期に遡るもの。

(K93)、(K94)は、凸面に弱いナデの後、四方に幅広の仕上げナデが施されるIV類もしくはV類。

#### 〈石製品〉

#### ・宝篋印塔

SE1より、宝篋印塔の笠部が出土している。(S13)は軒上5段、軒下2段で、隅飾りは若干内湾気味にやや外傾気味にたちあがる。相輪の受け部の径は約7cmをはかる。隅飾りの杵や軒は線刻で表現され、軒下2段も低い。町内に現存する中世期の宝篋印塔の中では、加美区観音寺に所在する長享3年(1489)銘を持つものに似るが、軒上が5段であることや隅飾りの杵の表現、軒下部の高さなどに省略傾向がみられ、やや時期が下るものであると思われる。井戸内から出土した土器は16世紀後半を中心とし、17世紀前半期までのものが出土しており、当宝篋印塔もその時期におさまるものと思われるが、上記の笠部の特徴からは、17世紀には下らないものであると考えられる。

#### ・五輪塔

(S9)は五輪塔の火輪の笠の一部。一方側面には蚤の痕跡がよく残っている。また、もう一方の側面には、砥石として転用されたような使用痕がみられる。

#### ・石臼

(S11・S12)とも凝灰岩製の石臼。(S11)は径28.0cm、軸受径2.0cm、厚み9.3cmをはかり、復元した溝の切り方は6分画となる。(S12)は径29.6cm、軸受径1.2cm、厚み9.2cmをはかり、復元した溝の切り方は8分画となる。

・砥石

(S10) は、平面長方形、縦断面舟形状を呈する砥石で、側面3面に使用痕がみられる。

・碁石

(S8) は灰色で、長径約 1.6 cm、短径約 1 cm、厚さ 0.4 cmをはかる楕円形を呈する。

〈木製品〉

井戸内より、加工痕をもつ (W1) が出土している。L字型の臍状の突起を持ち、下部には紐などの掛かりのための切り込みがみられる。釣瓶等の構造物の一部であろう。

〈土製品〉

土錐はいずれも土師質で7点出土している (図化できたのは6点)。

### (3) 小 結

B V区においても、B III・IV区同様、中世末期と近世期の二時期の遺構を検出した。

明確な中世期の遺構としては、石組み井戸1がある。比較的大きな掘り方を持ち、井戸底部には敷石をもつ丁寧なつくりの井戸である。井戸内からは、埋没過程に包含された12世紀後半～17世紀前半の遺物が出土しているが、16世紀代のものを中心とする。井戸底付近から16世紀の甕胴部片(468)が出土していることから、主として16世紀代に最も機能していた井戸であると考えられ、17世紀に入ってその役割を終えたものであると思われる。したがって、法幢寺の寺歴に照し合せると、大愚宗築による中興以前の開山期に伴う遺構であると思われる。

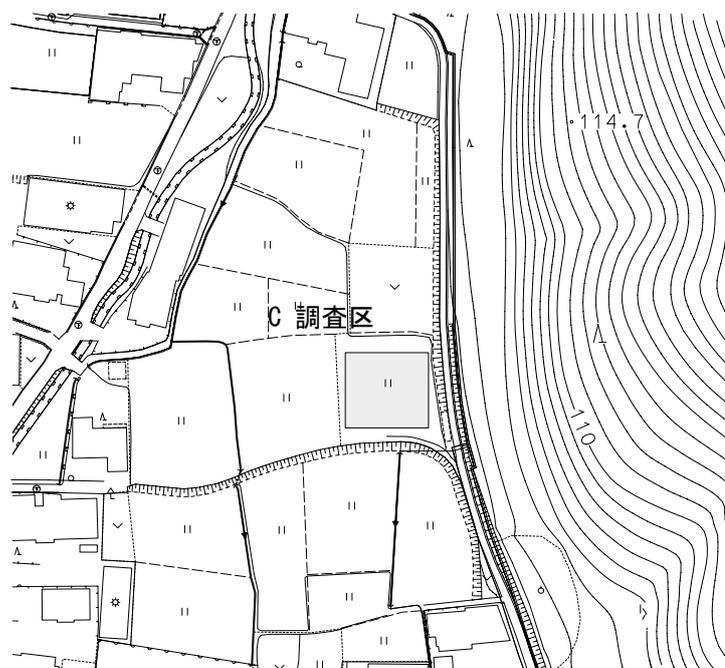
一方、近世期の遺構は18世紀代を中心とする土坑群がある。これらの機能は不明であるが、粘土採掘坑のような不規則なものではなく、それぞれの土坑は、長方形もしくは不整形、不整形三角形状を呈し、南西方向に一定の幅を持って土坑群がのびていくような規則的な配置がみられる。また、土坑7の柱の基壇上の高まりは、なんらかの上屋の存在をもうかがわせる。出土遺物は生活雑器を中心とするものであり、B IV区における生活機能に伴う遺構群に関連するものであると推測される。

## 8. C区

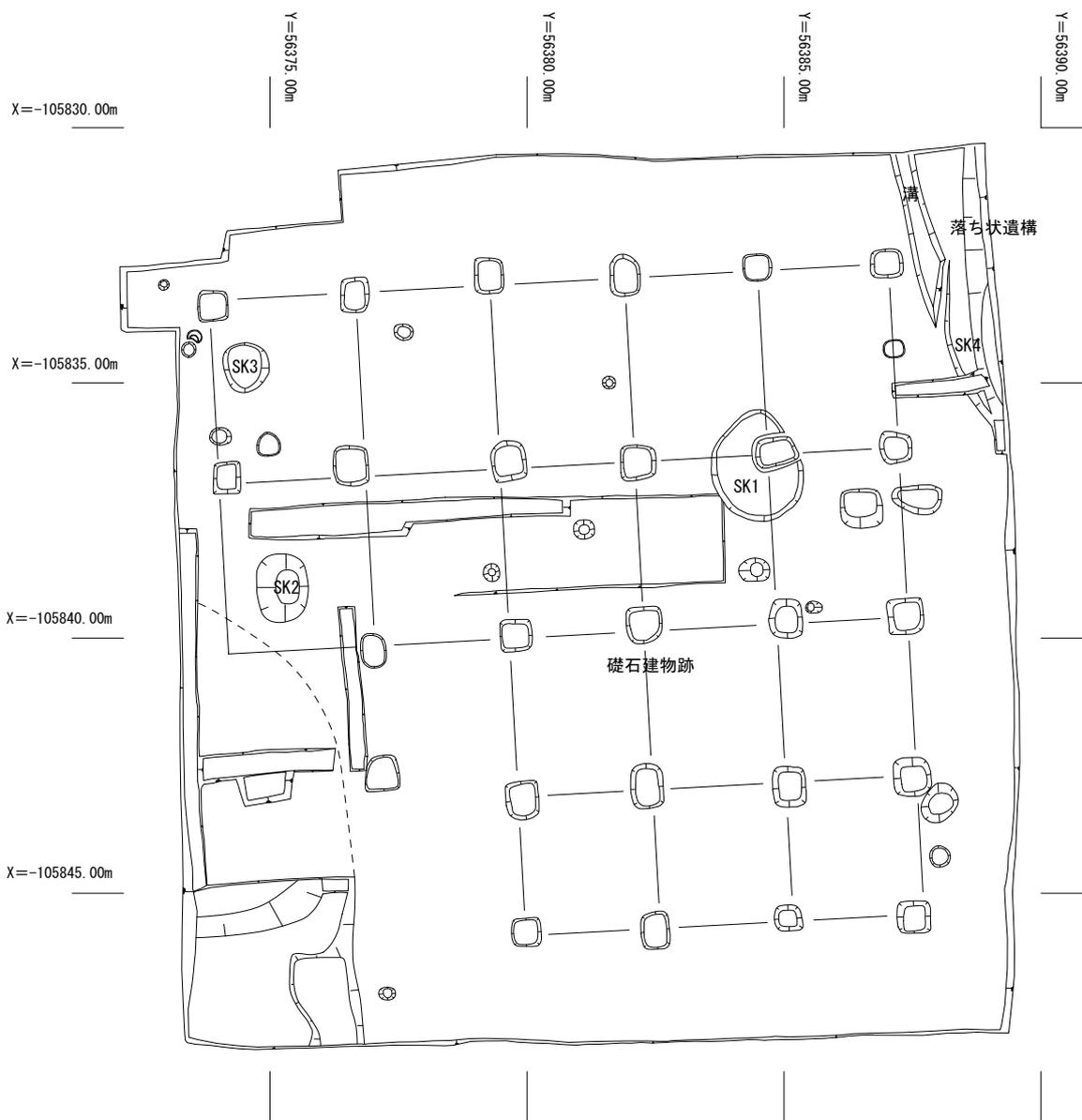
### (1) 遺構の概要

C区は、谷川をはさんでB地区の反対側、東側山裾に位置する。近世絵図では調査区周辺に当時の大庄屋津田家の屋敷が描かれている。なお、地元の伝承では、大庄屋屋敷はC調査区の南西の圃場にあったと伝えられており、確認調査時のトレンチでは、18世紀後半～19世紀にかけての屋敷跡と思われる、土坑や用排水の土管などの遺構が確認されている。

調査区は東から西への傾斜地を切り盛りによる整地によって形成されている。調査面積は約300㎡をはかる。

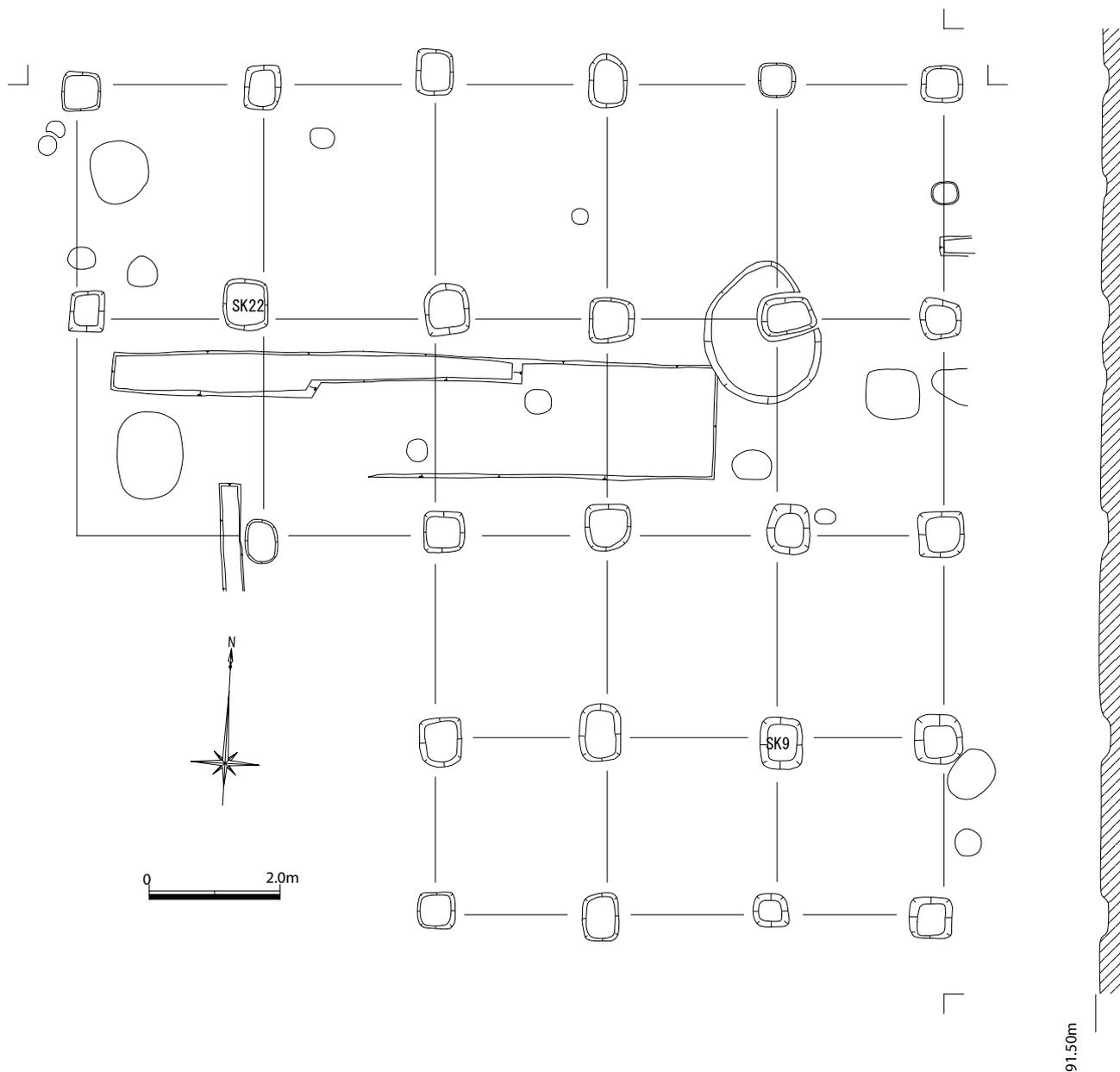


第56図 C区位置図



第57図 C区遺構全体図

91.50m



第 58 図 礎石建物跡

遺構面は、耕土直下において検出される黄橙色地山面または、自然堆積による黒褐色土上面において検出した。

#### 【礎石建物】

ほぼ調査区全面に広がっている柱跡の配列を確認した。各柱跡は一辺 50～70 cm の隅丸の方形もしくは長方形で、深さは 8～10 cm と浅く、建物礎石の抜き取り穴であると思われる。

礎石跡は南北 4 間 × 東西 5 間で、南西角 2 間 × 2 間分がくびれた、南側に開いた L 字状に配置された建物を構成する。柱間は南北約 3.6 m、東西約 2.5 m をはかる。各柱跡の埋土には、灰褐色土が堆積しており、近世後半期の磁器小片、瓦小片のほか、中世須恵器、土師器の細片などが出土しているが、図化できるものは無い。

#### 【土坑】

##### 〈土坑 1〉

土坑 1 は、径約 2.2 × 1.8 m、深さ約 32 cm をはかる楕円形土坑。礎石建物の礎石跡に切られている。

遺物の出土はみられない。

### 〈土坑 2〉

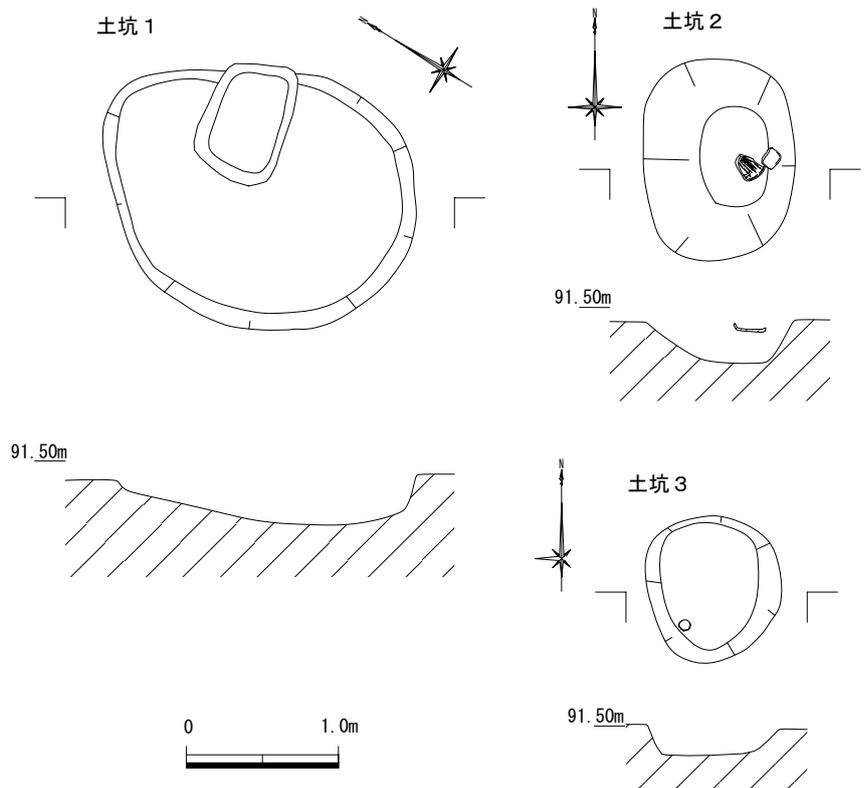
径約 1.3×1.0 m、深さ 28 cm の楕円形土坑。埋土には灰褐色土-黄橙色土-暗褐色土の順で堆積しており、15 世紀前半の遺物が出土している。

### 〈土坑 3〉

径約 96 cm、深さ約 20 cm をはかる円形土坑。埋土には暗褐色土が堆積しており、底より 16 世紀代の瀬戸美濃焼が出土している。

### 【溝】

調査区東端において南流する溝。幅約 53 cm、深さ約 10 cm をはかる。上部がかなり削平され、南側は落ち状遺構によって切られている。溝内からの遺物は見られない



第 59 図 土坑 1～3

### 【落ち状遺構】

#### 〈落ち状遺構 1〉

調査区東端で一部がかかるかたちで検出した。東側が山裾にあたるため、山際を流れる溝の肩部の可能性もある。溝内からは中世末～近世後半期の遺物が出土している。

#### 〈落ち状遺構 2〉

調査区の西南部分は盛土によって平坦面がつくり出されており、一部の断ち割りを行った。地山面は西方へ傾斜し、埋土には砂礫質の灰褐色土、下層に黄橙色土が盛土されている。盛土内より中世期後半～末期の遺物小片が出土している。

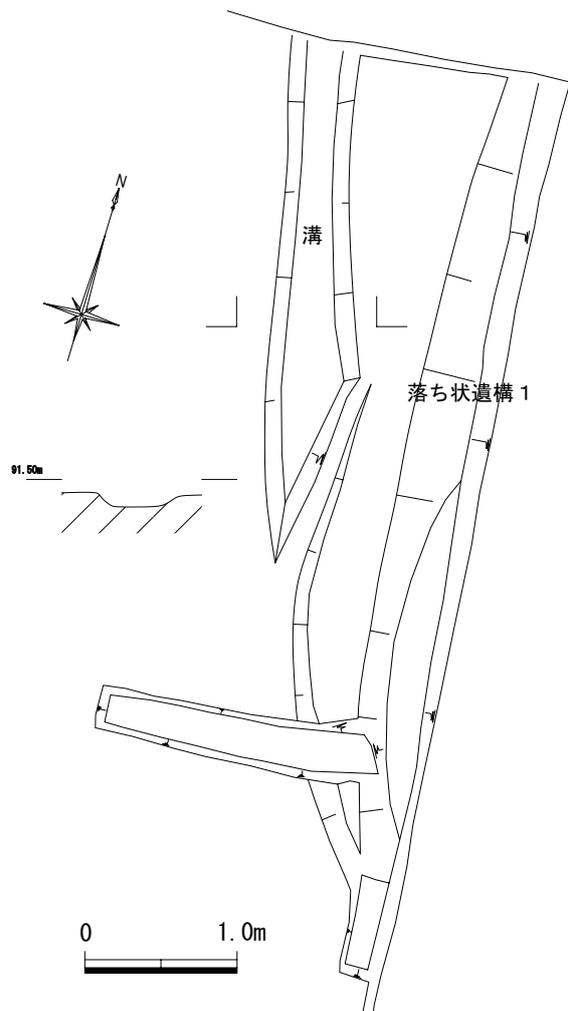
## (2) 遺物の概要

### 〈須恵器〉

(500)、(501)、(510) は須恵器山茶碗底部で高台部が残る 12 世紀代のもの。

### 〈土師器〉

(502)、(508) は土埴で、いわゆる鉄かぶと形の (502) と羽釜の退化タイプ (508) がある。前者は 15 世紀前半、後者は 16 世紀後半に比定される。(503) は口縁部に強いナデを施す皿で、京都系もしくはその模倣タイプと思われる。(512) の小皿は回転糸切の底部から短く内湾気味に立ち上がる口縁部をもつ。



第 60 図 溝・落ち状遺構 1

## 〈陶 器〉

### ・丹波焼

(504)は内側に屈曲し、端部が尖り気味におさめられる口縁部をもち、ヘラ描の播目が施された播鉢で、丹波焼播鉢Ⅲ B 1 b 類にあたり、15世紀前半にあてられる。(507)はT字状の口縁端部に幅広の面を持ち、肩部には凹線帯をもつ甕で、17世紀後半～18世紀前半の時期に比定される。

### ・備前焼

(515)は輪花型の口縁部を呈する鉢で、16世紀前半のもの。

### ・瀬戸美濃焼

(505)は高台畳付以外はオリーブ色の釉が施釉され、内面見込み部に印花文、底部外面には輪トチン痕がみられる16世紀代の皿。

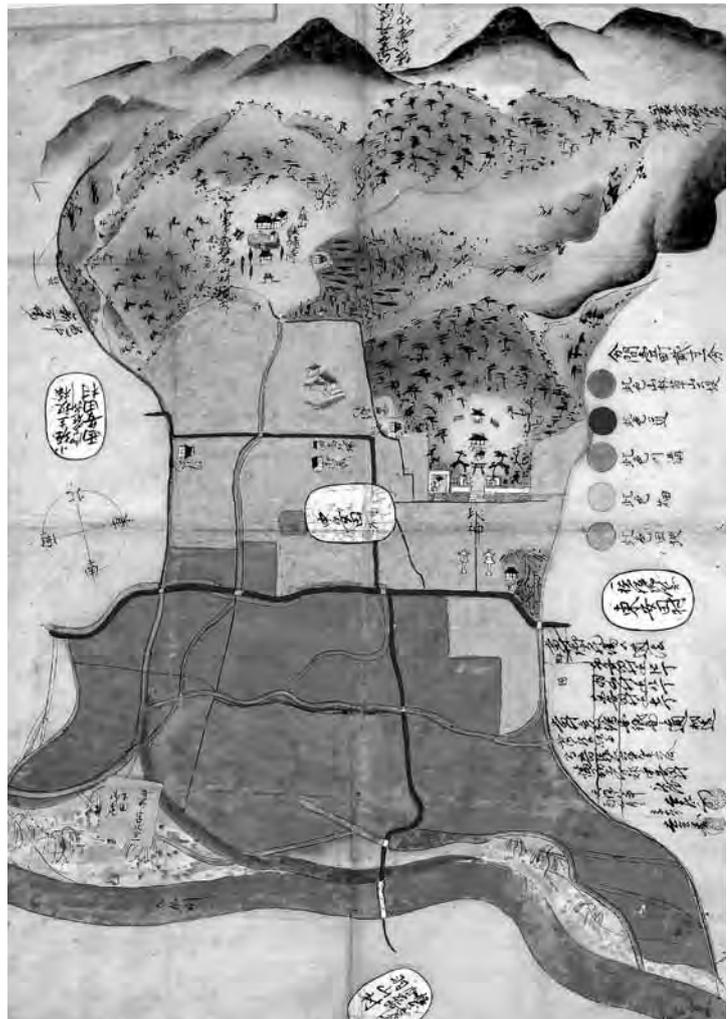
## (3) 小 結

C区では、南北4間(約12.7m)×東西5間(13.1m)の、L字型を呈する礎石建物跡を検出した。建物の時期を決定する遺物は少ないものの、灰褐色の抜取穴埋土からは近世後半期の磁器小片が出土している。また、当地区の中世期の遺構埋土は暗褐色土を主とするものであり、灰褐色の建物跡の埋土は中世期に遡らない堆積層であると思われる。遺構検出時の包含層などから出土した遺物の時期から判断すると、概ね18世紀～19世紀前半の時期の建物である可能性が強い。

当地区周辺は、天保8年(1837)の中安田村絵図には、18世紀～19世紀に活躍した大庄屋津田家の屋敷地が描かれており、検出された建物跡はこの大庄屋屋敷に関する建物であった可能性が強い。また、B区の近世期の磁器碗や皿を中心とした出土状況と異なり、ほとんど近世期の生活雑器が出土していないことから、蔵などの日常生活に伴わない建物機能が伺える。

一方、中世期の遺構は、土坑が2基のみではあるが、包含層や盛土内からは多くの中世後半期の遺物が含まれて

いることから、近世期の整地により中世期の遺構がかなり破壊されたのではないと思われる。



第61図 中安田村古絵図

## 9. 総括

今回の調査では、中世～近世期にかけての遺構群が検出され、往時の法幢寺に関連する堂塔、坊院などが、現在の法幢寺の南側の谷平野の山裾に広がっていたことがあきらかとなった。

大雄山法幢寺は、康安年間（1342～1345）夢想国師によって開山、足利尊氏により建立されたと伝えられる、臨済宗妙心寺派の寺院。

天正9年（1581）に兵火により焼失、天正11年（1583）に再建。慶長9年には姫路藩主池田輝政より20石を受領されるが、元和3年（1617）には本田忠正により没収され、一時期衰退したようである。しかしながら、寛永11年（1634）、福井県大安寺を開山した大愚宗築によって中興される。万治2年（1659）にも火災に会うが、寛文年中（1661～1672）には再び再興される。その後、明治9年（1876）にも火災の記録がある。

一方、今回の調査で出土した遺構、遺物をもてみると、大きく4時期に分けることができる。

I期は法幢寺開山期以前のもので、7世紀後半～8世紀の古代に遡るものと、10～13世紀の中世期のもの。どちらも遺構は検出されておらず、遺物のみの出土である。7世紀後半の須恵器坏は、現法幢寺北側山中に中安田古墳群が位置しており、そこからの流出による可能性がある。一方、古代瓦は、周辺には当期の瓦を伴うような遺跡の存在は現在確認されておらず注目される。また、中世後半期の遺物の存在は、法幢寺の前身となる遺跡の存在の可能性を示す。

II期は14世紀中頃～16世紀後半の時期のもので、法幢寺開山から天正年間の焼失、再興までの時期に当たる。遺構は、近世期に入ってから地形改変によって多くは遺存していないが、A、BⅠ、BⅢ～Ⅴ区において、土坑や井戸が検出されている。当期のものとしては特に、土師器皿において京都系土師器皿が一定の割合で出土しており、開山期に京都との繋がりが強かったことが伺える。また、当期の遺構がA・B地区全体に広がっており開山当初より、広い敷地を占める寺院として隆盛を誇っていた姿が浮かび上がる。焼失の原因は、宝暦12年（1762）頃成立したとされる『播磨鑑』によると、当町八千代区中野間に所在する、在田氏の居城である野間城から兵が来て放火されたことがしるされているが、詳細は不明である。

III期は、17世紀にあたる。寺歴では、大愚宗築中興開山（1634）から万治2年（1659）火災後の寛文年間（1661～1672）の再興までの時期にあたる。A区の開山堂の瓦群の大半は当期にあたる。開山堂は蔵勝堂と呼ばれていたことが播磨鑑に記載されており、現在も延宝元年（1744）の作ではあるが『蔵勝塔』の扁額が残る。この開山堂は、当初、調査を行ったA区にあったものが大正期に現在の場所へ移設されている。明治5年の中安田地区古絵図にも移設前の開山堂が描かれている。また、現在の境内には、建築様式から、同時期と考えられる釈迦堂が現存しており、方3間の禅宗仏殿様式の方形造りで、17世紀後半の禅宗様構造をよく残す建物とされ、寛文年間再興時のものと考えられており、移設された開山堂も同様の様式を残している。また、現開山堂には、同一仏師の手によると思われる夢想国師像、大愚宗築像、義雲紹真像の3体が祀られており、義雲紹真像の体部内面には寛文9年（1669）製作、安永3年（1774）修理の銘がみられる。一方、調査で出土した瓦の年代は17世紀後半が充てられ、寛文年間の再興後の建



第62図 現在の法幢寺釈迦堂



第63図 現在の法幢寺開山堂



第64図 『蔵勝塔』扁額（延享元年）

物に使用されていたものであろうと思われるが、現在の両建物は茅葺で、銅版により被覆されていることから、少なくとも開山堂は寛文年間の再興時には瓦葺であった可能性が強いと考えられる。

また、B区においても、広く当期の遺物が出土しており、大愚宗築により、開山当時の広く堂塔、坊院を備える姿に中興された様が伺える。特に、17世紀でも後半の遺物が多く出土していることは、中興以前、元和3年(1617)の本田忠正による領地没収などにより、寺勢が衰えていた時期の状態を示しているものと思われる。

IV期は18世紀～19世紀前半で、検出遺構の大半がこの時期のものである。当期は、当地区の津田氏が、大庄屋となり活躍していた時期にあたる。津田氏は大愚宗築を慕って、丹後から当地に移り住んできた伝えられており、中興や寛文年間再興時にも財政的支援を行っており、明和6年(1769)、当地域が尼崎藩領となると、大庄屋に任命される。この津田氏の支援もあり、法幢寺は、当期も引き続き隆盛を保っていたと思われる。調査では、B・C区を中心に遺構が検出され、特にB区では生活雑器が多量に出土しており、宿坊や院などの生活に伴う施設が広がっていたと考えられる。19世紀にはいと遺物量は大きく減少することは、明治9年の火災以降、廃仏毀釈、身分解放など、近代社会の変革の中で、近世寺院から現在の近代寺院へとそのあり方が変化して現在に至ったものと考えられる。

以上のように、今回の調査では、中世末から近世期にかけての法幢寺の歴史が、伝承やいくつかの資料に残る寺歴にそうかたちで検出され、地方の近世寺院のあり方を示す一資料を得ることができた。

今後、歴史資料も含めた新たな資料の発掘、調査を行うことによって、中世末～近世期にかけての多可町内の寺院と地域社会の関係の一端を明らかにしていきたい。



第 65 図 夢想国師像 (開山堂内)



第 66 図 大愚宗築像 (開山堂内)



第 67 図 義雲紹眞像 (開山堂内)



第 68 図 義雲紹眞像内銘文

中安田・法幢寺遺跡土器観察表

遺物番号	地区	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	内面調整	外面調整	実測番号
1	A	西側盛土	染付磁器	小碗	8.3	-	-	草花文	草花文? 型うちによる八角形碗	A-611
2	A	西側盛土	施釉陶器(唐津)	皿	-	5.1	-	胎土日(砂日) 灰釉	高台部砂日痕 灰釉	A013
3	A	西側盛土	施釉陶器(信楽)	灯明皿	10.6	3.5	1.6	透明釉	口縁部施釉 口縁部以外露胎 口縁部ヨコナデ 体部~底部回転ヘラケズリ	A010
4	A	西側盛土	陶器(備前)	甕	-	16.5	-	ナデ	ナデ	A011
5	A	西側盛土	無釉陶器(丹波・明石)	擂鉢	-	17.0	-	クシガキ卸日	ナデ	A012
6	A	西側盛土	瓦質	瓦專	-	-	-	上面:離れ砂	下面:ナデ	A-610
7	A	中世包含層	瓦器	浅鉢形瓦質土器	35.9	-	-	ナデ	ナデ(ヘラミガキ?)	A001
8	A	中世包含層	土師器	皿	9.6	6.4	2.3	ナデ	ナデ 底部板状圧痕	A002
9	A	中世包含層	土師器	小皿	5.9	5.5	0.8	ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	A008
10	A	包含層	施釉陶器(京焼系)	碗	9.4	-	-	透明釉 貫入	透明釉 貫入	A003
11	A	包含層	染付磁器(肥前系)	小坏	9.1	-	-	透明釉 口縁部境界線	透明釉 口縁部境界線 草花文	A006
12	A	包含層	染付磁器	皿	10.7	-	-	透明釉 染付け(文様不明)	口縁部輪花形 透明釉 口縁部鉄軸	A005
13	A	包含層	施釉陶器(京焼系)	皿	10.8	-	-	透明釉	透明釉 体部下露胎	A007
14	A	包含層	土師器	皿	11.0	-	-	ナデ	ナデ	A004
15	A	包含層	土師器	土塙	27.4	-	-	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タキ	A014
16	A	包含層	土製品	土人形	2.7	-	-			9
17	B I	SD01	土師器	皿	11.4	6.5	2.0	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-048
18	B I	SD01	土師器	皿	11.6	8.0	2.4	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-049
19	B I	SD01	土師器	皿	10.8	6.3	2.7	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-050
20	B I	SD01	土師器	皿	11.4	5.8	2.9	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-051
21	B I	SD01	土師器	皿	12.1	7.5	3.5	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-052
22	B I	SD01	土師器	皿	12.7	7.2	2.8	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-040
23	B I	SD01	土師器	皿	12.0	6.6	2.7	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-041
24	B I	SD01	土師器	皿	12.2	6.3	3.0	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-042
25	B I	SD01	土師器	皿	11.8	6.6	3.1	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-043
26	B I	SD01	土師器	皿	13.3	7.4	2.8	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-044
27	B I	SD01	土師器	皿	12.3	6.2	3.1	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整 底部板状圧痕	B1-045
28	B I	SD01	土師器	皿	12.7	7.3	2.9	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-046
29	B I	SD01	土師器	皿	13.3	7.7	3.4	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-047
30	B I	SD01	土師器	皿	10.0	7.5	2.2	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B1-035
31	B I	SD01	土師器	皿	10.7	8.1	2.6	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-036
32	B I	SD01	土師器	皿	13.0	7.3	2.5	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B1-037
33	B I	SD01	土師器	皿	11.3	5.5	3.2	ナデ 煤附着	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-038
34	B I	SD01	土師器	皿	11.7	5.6	3.1	口縁部板ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-039
35	B I	SD01	土師器	皿	12.0	7.9	2.8	口縁部ハケ→ナデ 底部ナデ	ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-055
36	B I	SD01	土師器	皿	12.2	7.6	2.3	ナデ	板ナデ→ナデ 底部未調整 煤附着	B1-056
37	B I	SD01	土師器	皿	12.0	8.3	2.5	板ナデ(口縁部~底部)	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-057
38	B I	SD01	土師器	皿	12.4	8.1	2.7	口縁部板ナデ→ナデ 底部ナデ	口縁上半ナデ 口縁部下半ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-058
39	B I	SD01	土師器	皿	12.6	9.0	3.1	口縁部板ナデ→ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B1-059
40	B I	SD01	土師器	皿	12.4	8.7	2.1	板ナデ(口縁部~底部)	口縁上半ナデ 口縁部下半ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-060
41	B I	SD01	土師器	皿	12.1	8.1	2.8	口縁部板ナデ→ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-061
42	B I	SD01	土師器	皿	12.0	8.5	2.5	板ナデ→ナデ(口縁部~底部)	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-062
43	B I	SD01	土師器	皿	11.7	7.7	2.8	板ナデ→ナデ(口縁部~底部)	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-063
44	B I	SD01	土師器	皿	12.0	8.5	2.6	板ナデ→ナデ(口縁部~底部)	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-064
45	B I	SD01	土師器	皿	12.4	8.0	2.5	口縁部板ナデ→ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-065
46	B I	SD01	土師器	皿	11.6	7.3	2.1	口縁部板ナデ→ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B1-066
47	B I	SD01	土師器	皿	12.8	8.6	2.5	口縁部板ナデ→ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B1-067
48	B I	SD01	土師器	皿	11.5	6.8	1.9	口縁部板ナデ→ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-068
49	B I	SD01	土師器	皿	12.0	7.8	2.3	板ナデ→ナデ(口縁部~底部)	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-069
50	B I	SD01	土師器	皿	13.0	7.9	2.2	板ナデ→ナデ(口縁部~底部)	口縁部ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-070
51	B I	SD01	土師器	皿	11.3	7.6	2.0	板ナデ→ナデ(口縁部~底部)	口縁部ナデ 底部未調整	B1-071
52	B I	SD01	土師器	皿	12.5	7.9	2.1	口縁部板ナデ→ナデ 底部ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B1-072
53	B I	SD01	土師器	皿	11.5	7.1	2.4	板ナデ→ナデ(口縁部~底部)	口縁部ナデ 底部未調整	B1-073
54	B I	SD01	土師器	皿	12.0	-	-	板ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-053
55	B I	SD01	土師器	皿	11.4	7.3	2.9	ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-054
56	B I	SD01	土師器	小皿(ヘソ皿)	6.6	2.7	1.8	ナデ	ナデ	B1-028
57	B I	SD01	土師器	皿	12.5	-	-	ナデ	ナデ	B1-029
58	B I	SD01	土師器	小皿	6.8	-	1.0	ハケ	未調整	B1-021
59	B I	SD01	土師器	小皿	7.6	-	1.3	ハケ→ナデ	未調整	B1-023
60	B I	SD01	土師器	小皿	8.0	-	1.5	ナデ	未調整	B1-017
61	B I	SD01	土師器	小皿	8.0	-	1.7	ナデ	未調整	B1-018
62	B I	SD01	土師器	小皿	8.0	-	1.7	ナデ	未調整	B1-019
63	B I	SD01	土師器	小皿	8.6	-	1.4	ナデ	未調整	B1-027
64	B I	SD01	土師器	小皿	9.0	-	0.9	ナデ	未調整	B1-026
65	B I	SD01	土師器	小皿	7.8	-	1.2	ナデ	未調整	B1-022
66	B I	SD01	土師器	小皿	9.6	-	1.6	ナデ	未調整	B1-024
67	B I	SD01	土師器	小皿	7.1	-	1.2	ナデ	未調整	B1-025
68	B I	SD01	土師器	小皿	8.1	-	1.6	ナデ	未調整	B1-020
69	B I	SD01	須恵器	鉢	25.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B1-015
70	B I	包含層	土師器	皿	12.0	6.1	3.1	ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B1-034
71	B I	包含層	土師器	皿	11.2	6.9	2.4	ナデ	ナデ 底部未調整 板状圧痕	B1-033
72	B I	包含層	土師器	皿	13.0	6.9	2.7	ナデ	ナデ	B1-032
73	B I	包含層	土師器	小皿(ヘソ皿)	7.1	2.7	2.0	ナデ	ナデ	B1-030
74	B I	包含層	土師器	小皿(ヘソ皿)	6.7	-	-	ナデ	ナデ	B1-031
75	B I	包含層	施釉陶器	香炉	1.6	3.1	4.6	ナデ 露胎	緑釉	B1-016
76	B II	SB01P18	施釉陶器(京焼系)	碗	9.3	4.1	6.5	施釉 貫入	施釉 貫入 畳付露胎	B2-112
77	B II	SB01P18	無釉陶器(丹波)	壺	10.4	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ナデ 指頭圧痕	ヨコナデ	B2-113
78	B II	SB02P14	施釉陶器(丹波)	底部	-	6.3	-	施釉 底部砂日跡	施釉 削り出し高台	B2-114
79	B II	SK01	染付磁器(肥前系)	蓋	9.7	-	-		草花文	B2-077
80	B II	SK01	染付磁器(肥前系)	小坏	-	3.6	-		草花文 底部『太明年製』	B2-078

遺物 番号	地区	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	内面調整	外面調整	実測 番号
81	B II	SK01	陶器(丹波)	播鉢	32.8	12.5	13.8	ヨコナデ 口縁端部凹線1条 体部6条1単位クシ描き幅目 底部外周クシ描きによる円	ヨコナデ 口縁端部凹線2条	B2-074
82	B II	SK01	陶器(丹波)	播鉢	29.3	-	-	ヨコナデ 体部7条1単位クシ描き幅目 鉄軸	ヨコナデ 口縁端部凹線2条 口縁縁部鉄軸 以下露胎	B2-076
83	B II	SK02	陶器(丹波)	徳利	-	-	-	ヨコナデ 露胎	ヨコナデ 鉄軸	B2-075
84	B II	SK03	陶器(丹波)	播鉢	39.5	-	-	口縁部凹線 5本1単位クシ描き幅目 赤土部	ヨコナデ	B2-081
85	B II	SK03	陶器(備前)	播鉢	-	13.9	-	10本1単位のクシ描き幅目	ヨコナデ	B2-079
86	B II	SK03	陶器(備前)	播鉢	-	10.3	-	12本1単位のクシ描き幅目	ヨコナデ	B2-080
87	B II	SK06	陶器(備前)	甕	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B2-085
88	B II	SK09	青磁(肥前系)	皿	13.5	5.7	3.4	底部蛇ノ日軸剥ぎ	体部下部～底部露胎	B2-084
89	B II	SK10	陶器(丹波)	播鉢	-	16.3	-	8本1単位クシ描き幅目 底部外周クシ描きによる円	ヨコナデ 体部下部指頭圧痕	B2-083
90	B II	SK11	磁器(肥前系)	仏具碗	-	4.1	-		底部蛇の日高台状に削る 露胎	B2-088
91	B II	SK11	染付磁器(肥前系)	碗	-	3.9	-		丸に草花文 丸に斜格子文 体部下部界線1条 高台上端界線1条 壺付露胎	B2-089
92	B II	SK11	染付磁器(肥前系)	碗	10.2	-	-		コンニャク印判による菊花文、紅葉文	B2-090
93	B II	SK11	半磁器(肥前系)	鉢	22.0	10.6	9.1	葡萄文 底部界線2条	体部下部界線1条 高台上端界線2条	B2-091
94	B II	SK11	陶器(丹波)	播鉢	-	-	-	ヘラ描き幅目	ヨコナデ	B2-087
95	B II	SK11	陶器(丹波)	播鉢	-	14.3	-	8本1単位クシ描き幅目 底部外周クシ描きによる円	ヨコナデ 体部下部指頭圧痕	B2-086
96	B II	SK11	施釉陶器(瀬戸)	灯明皿	10.7	5.4	1.4	ヨコナデ 鉄軸	ヘラケズリ→ヨコナデ 鉄軸	B2-092
97	B II	SK11	土師器	皿	8.9	6.3	4.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B2-093
98	B II	SK12	染付磁器(肥前系)	小坏	6.1	-	-		ヘラ彫り 寿文	B2-131
99	B II	SK12	施釉陶器(唐津)	碗	-	4.6	-	鉄軸	鉄軸+灰軸 体部下半～底部露胎 体部回転ヘラケズリ 削り出し高台	B2-125
100	B II	SK12	無釉陶器(丹波)	播鉢	26.0	-	-	ヨコナデ 9本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ	B2-128
101	B II	SK12	無釉陶器(丹波)	播鉢	-	-	-	ヨコナデ クシ描き幅目	ヨコナデ	B2-123
102	B II	SK12	無釉陶器(丹波)	播鉢	25.1	-	-	ヨコナデ ヘラ描き幅目	ヨコナデ	B2-122
103	B II	SK12	無釉陶器(丹波)	播鉢	38.7	-	-	ヨコナデ 5本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ 白色土部	B2-124
104	B II	SK12	無釉陶器(丹波)	播鉢	38.5	-	-	ヨコナデ 9本1単位クシ描き幅目 赤土部	ヨコナデ	B2-127
105	B II	SK12	土師器	土鍋	-	-	-	ヨコナデ クシ状工具による幅目	ヨコナデ	B2-126
106	B II	SK12	土師器	土鍋	22.7	-	-	ヨコナデ ハケ状工具による幅目	ヨコナデ	B2-130
107	B II	SK12	土師器	小皿	8.6	-	-	ナデ	ナデ	B2-129
108	B II	SK13	染付磁器(肥前系)	皿	14.3	-	-	草花文?	無文	B2-157
109	B II	SK13	染付磁器(京焼系)	碗	11.1	6.9	5.8	無文	草花文 体部下部貫入	B2-158
110	B II	SK13	陶器(丹波)	徳利	-	13.4	-	ヨコナデ	ヨコナデ 赤土部	B2-082
111	B II	SK13	施釉陶器(唐津)	碗	-	4.5	-	施釉	削り出し高台 露胎	B2-159
112	B II	SK13	土師器	小皿	10.4	8.5	1.8	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B2-156
113	B II	SK13	陶器(丹波)	播鉢	35.9	13.5	12.7	ヨコナデ 9本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ 体部下部指頭圧痕	B2-098
114	B II	SK13	無釉陶器(丹波)	播鉢	38.9	-	-	ヨコナデ 9本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ 体部中位以下指頭圧痕(指摺り痕)	B2-155
115	B II	SK13	施釉陶器(丹波)	播鉢	34.4	-	-	ヨコナデ 7本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ 体部指頭圧痕	B2-154
116	B II	SD3	須恵器	山茶碗	-	5.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B2-105
117	B II	SD3	施釉陶器	播鉢	30.0	-	-	ヨコナデ 7本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ 体部ヨコナデ後不規則な間隔で縦ハケ	B2-108
118	B II	SD3	無釉陶器(丹波)	播鉢	43.9	-	-	ヨコナデ 6本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ	B2-106
119	B II	SD4	染付磁器(肥前系)	碗	10.6	-	-		雪輪梅花文	B2-110
120	B II	SD4	染付磁器(肥前系)	碗	10.7	4.1	5.5		唐草文 底部文字文 体部下部界線1条 高台側面界線2条	B2-111
121	B II	SD4	無釉陶器(丹波)	鉢	27.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B2-109
122	B II	SD5	陶器(丹波)	火入れ	-	8.6	-	露胎	灰軸付着	B2-101
123	B II	SD5	施釉陶器	灯明皿	11.7	-	-	ヨコナデ 鉄軸	口縁部ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ 鉄軸	B2-103
124	B II	SD5	陶器(丹波)	甕	22.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 鉄軸	B2-099
125	B II	SD5	陶器(唐津)	盤	35.1	-	-	白濁釉	白濁釉	B2-100
126	B II	SD5	陶器(丹波)	播鉢	36.8	-	-	ヨコナデ 6本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ	B2-102
127	B II	SD5	土師器	炮烙	28.0	30.2	-	ナデ	口縁部ナデ 体部下半指頭圧痕 底部未調整	B2-104
128	B II	SD6	染付磁器(肥前系)	碗	9.5	4.1	5.5	無文	草花文 体部下部界線1条 高台側面界線2条 底部界線1条	B2-149
129	B II	SD6	染付磁器(肥前系)	碗	-	4.2	-	蛇ノ日軸剥ぎ	草花文 体部下部界線1条 高台側面界線2条 底部界線1条 壺み付き砂付着	B2-146
130	B II	SD6	染付磁器(肥前系)	小碗	8.7	-	-		コンニャク印判による菊花文	B2-147
131	B II	SD6	染付磁器(肥前系)	碗	11.1	-	-		草花文	B2-148
132	B II	SD6	染付磁器(肥前系)	皿	19.5	-	-	草花文	無文	B2-150
133	B II	SD6	青磁(肥前系)	皿	-	4.7	-	底部蛇ノ日軸剥ぎ	体部下部以下露胎	B2-142
134	B II	SD6	染付磁器(肥前系)	皿	13.8	5.6	3.7	文様あり	削り出し高台 壺み付き砂付着 無文	B2-143
135	B II	SD6	施釉陶器(京焼系)	碗	9.2	-	-	施釉 貫入あり	施釉 貫入あり	B2-145
136	B II	SD6	施釉陶器(京焼系)	碗	-	5.1	-	施釉	体部～高台側面施釉 壺み付き～底部露胎 底部「清水」刻印	B2-144
137	B II	SD6	無釉陶器(丹波)	甕	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B2-141
138	B II	SD6	陶器	壺	-	13.8	-	指すり状のナデ	ヨコナデ	B2-137
139	B II	SD6	施釉陶器	壺	26.0	-	-	ヨコナデ 赤土部	ヨコナデ 赤土部 ヘラ描き文(文様不明)	B2-138
140	B II	SD6	施釉陶器(丹波)	壺	11.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 赤土部	B2-139
141	B II	SD6	土師器	小皿	8.9	5.5	1.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B2-140
142	B II	SD6	無釉陶器(丹波)	播鉢	37.8	-	-	ヨコナデ 6本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ	B2-135
143	B II	SD6	無釉陶器(丹波)	播鉢	29.9	-	-	ヨコナデ 6本1単位クシ描き	ヨコナデ	B2-133
144	B II	SD6	無釉陶器(丹波)	播鉢	34.5	-	-	ヨコナデ 7本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ	B2-153
145	B II	SD6	無釉陶器(丹波)	播鉢	36.4	19.9	13.0	ヨコナデ 5本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ	B2-132
146	B II	SD6	無釉陶器(丹波)	播鉢	-	15.4	-	6本1単位クシ描き幅目	ヨコナデ	B2-136
147	B II	SD6	無釉陶器(丹波)	播鉢	-	-	-	ヨコナデ 7本1単位クシ描き幅目 赤土部	ヨコナデ 口縁部赤土部 体部露胎	B2-134
148	B II	南側落ち	青磁(肥前系)	皿	13.7	-	-	底部蛇ノ日軸剥ぎ	体部下部以下露胎	B2-118
149	B II	南側落ち	施釉陶器	盤	25.5	-	-	白泥釉	白泥釉 体部下半以下露胎	B2-119
150	B II	南側落ち	無釉陶器(丹波)	播鉢	33.0	-	-	ヨコナデ ヘラ描き幅目	ヨコナデ	B2-117
151	B II	南側落ち	無釉陶器(丹波)	播鉢	34.4	16.2	14.3	ヨコナデ ヘラ描き幅目	ヨコナデ 体部中位指頭圧痕	B2-116
152	B II	包含層	染付磁器(肥前系)	小碗	-	3.3	-	草花文 体部底部境界線1条	高台側面界線1条 底部界線1条	B2-160
153	B II	包含層	染付磁器(肥前系)	碗	9.9	4.1	5.6	無文	コンニャク印判による菊花文・笹文	B2-164

遺物番号	地区	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	内面調整	外面調整	実測番号
154	B II	包含層	染付磁器(肥前系)	碗	10.8	4.8	5.8	無文	草花文 口縁部界線2条 底部下部界線1条 高台側面界線2条	B2-165
155	B II	包含層	無釉陶器(丹波)	壺	7.0	-	-			B2-167
156	B II	包含層	施釉陶器(瀬戸美濃)	壺	-	8.6	-		鉄釉	B2-166
157	B II	包含層	施釉陶器(丹波)	甗	-	9.6	-		体部カキ目一緑釉 体部下以下露胎	B2-168
158	B II	包含層	無釉陶器(丹波)	甗	-	18.6	-	オリープ色の自然釉	白泥	B2-169
159	B III	P06	須恵器	山茶碗	-	5.9	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B3-207
160	B III	P14	土師器	皿	12.6	-	-	ナデ	未調整	B3-209
161	B III	P27	磁器	皿	13.4	-	-	透明釉	透明釉	B3-208
162	B III	P33	無釉陶器	卸皿	-	6.0	-	卸目	底部回転糸切	B3-205
163	B III	P35	土師器	小皿	6.0	2.7	1.3	ナデ	未調整	B3-206
164	B III	SK4	染付半磁器(肥前系)	碗	-	4.7	-	無文 貫入あり	草花文 体部下境界線1条 高台側面界線2条	B3-186
165	B III	SK7	瓦質土器	火鉢	-	43.0	-	ナデ 体部指頭圧痕 底部ハケ目	ナデ 底部縁辺部のみナデ(ほか未調整)	B3-170
166	B III	SK7	須恵器	山茶碗	14.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B3-188
167	B III	SK7	土師器	甗	13.6	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ハラナデ?	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	B3-172
168	B III	SK7	土師器	土鍋	19.6	-	-	ヨコナデ スス付着	ヨコナデ 体部平行タタキ	B3-171
169	B III	SK7	土師器	小皿(ヘソ皿)	8.0	3.1	1.9	ナデ	ナデ	B3-174
170	B III	SK7	土師器	小皿(ヘソ皿)	7.9	5.3	2.0	ナデ	ナデ	B3-175
171	B III	SK7	土師器	小皿(ヘソ皿)	13.9	-	-	ナデ	ナデ	B3-185
172	B III	SK7	土師器	小皿(ヘソ皿)	12.8	-	-	ナデ	ナデ	B3-177
173	B III	SK7	土師器	皿	9.7	3.9	2.5	ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B3-173
174	B III	SK7	土師器	皿	11.1	-	2.9	ナデ	ナデ?	B3-176
175	B III	SK7	土師器	小皿	10.5	5.4	2.4	ナデ	未調整	B3-179
176	B III	SK7	土師器	小皿	11.0	7.0	2.0	ナデ	未調整	B3-180
177	B III	SK7	土師器	小皿	9.2	4.3	2.3	ナデ	ナデ	B3-181
178	B III	SK7	土師器	小皿	9.8	-	-	ナデ	未調整	B3-182
179	B III	SK7	土師器	小皿	8.9	-	-	ナデ	未調整	B3-183
180	B III	SK7	土師器	小皿	6.8	3.2	1.3	ナデ	未調整	B3-178
181	B III	SK7	土師器	皿	11.7	6.6	1.8	ナデ	口縁部ナデ 底部未調整 型作り?	B3-184
182	B III	SK8	染付磁器(肥前系)	碗	12.0	-	-	口縁部界線3条 文様あり	文様あり	B3-187
183	B III	南東落ち	無釉陶器(丹波)	壺	13.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 自然釉	B3-196
184	B III	南東落ち	土師器	小皿	6.5	-	1.7	ナデ	未調整	B3-190
185	B III	南東落ち	土師器	小皿	7.6	-	1.6	ナデ	未調整	B3-193
186	B III	南東落ち	土師器	小皿	7.4	-	1.7	ナデ	未調整	B3-194
187	B III	南東落ち	土師器	小皿	8.0	-	1.9	ナデ	未調整	B3-195
188	B III	東南落ち	土師器	小皿	10.9	7.2	1.5	ナデ	未調整	B3-191
189	B III	東南落ち	土師器	小皿	9.3	4.5	1.6	ナデ	未調整	B3-192
190	B III	包含層	須恵器	坏身	12.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B3-197
191	B III	包含層	須恵器	坏身	10.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B3-198
192	B III	包含層	瓦質土器	深鉢形	-	-	-	ナデ	ナデ	B3-199
193	B III	包含層	土師器	土鍋	28.6	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部タタキ	B3-200
194	B III	包含層	土師器	小皿(ヘソ皿)	7.4	3.3	1.6	ナデ	ナデ	B3-203
195	B III	包含層	土師器	小皿	7.9	4.6	1.5	ナデ	未調整	B3-204
196	B III	包含層	土師器	小皿	11.1	7.6	1.6	ナデ	未調整	B3-201
197	B III	包含層	土師器	小皿	9.8	-	-	ナデ	未調整 指頭圧痕	B3-202
198	B IV	P18	土師器	皿	12.2	7.0	2.5	口縁部板ナデ 底部ナデ	ナデ 底部未調整 板状圧痕	B4-371
199	B IV	P23	無釉陶器(丹波)	播鉢	-	9.9	-	7本1単位クシ描き襦目	ヨコナデ	B4-400
200	B IV	P26	土製品	土錘	-	-	-		401	
201	B IV	SK1	土師器	小皿(ヘソ皿)	5.8	1.9	1.9	ナデ	ナデ 体部指頭圧痕	B4-325
202	B IV	SK1	土師器	小皿(ヘソ皿)	8.1	3.1	2.1	ナデ	ナデ	B4-326
203	B IV	SK1	土師器	小皿	7.7	-	1.4	ナデ	未調整	B4-327
204	B IV	SK1	土師器	小皿	7.6	-	1.2	ナデ	未調整	B4-328
205	B IV	SK3	無釉陶器(丹波)	播鉢	-	19.2	-	5本1単位クシ描き襦目	ヨコナデ 底部周辺ハラケズリ	B4-323
206	B IV	SK3	土師器	小皿	9.8	8.0	2.0	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-324
207	B IV	SK8	施釉陶器(京焼系)	碗	9.0	5.6	5.6	淡黄釉	口縁部~体部淡黄釉 オリープ釉により施文 高台部~底部 露胎 底部刻印文字	B4-321
208	B IV	SK8	染付磁器(肥前系)	碗	9.3	4.1	5.0	無文	口縁部界線1条 草花文 体部下境界線1条 体部高台部境界線1条 壺付露胎 砂付着	B4-322
209	B IV	SK9	須恵器	甗	-	-	-	ナデ	矢羽タタキ	B4-320
210	B IV	SK9	須恵器	甗	-	-	-	ナデ	矢羽タタキ	B4-319
211	B IV	SK10	施釉陶器(唐津)	皿	13.5	4.3	2.6	灰オリープ釉 底部砂目跡3ヶ所	口縁部~体部中位 灰オリープ釉 体部下部分の一部~底部露胎 回転ハラケズリ	B4-334
212	B IV	SK10	施釉陶器(瀬戸美濃)	皿?	13.2	-	-	口縁部灰オリープ釉		B4-335
213	B IV	SK10	施釉陶器(瀬戸美濃)	碗	-	-	-	浅黄色釉	浅黄色釉 体部下以下露胎 回転ハラケズリ	B4-336
214	B IV	SK10	土師器	小皿(ヘソ皿)	8.2	-	-	ナデ	ナデ	B4-363
215	B IV	SK10	土師器	小皿(ヘソ皿)	7.3	2.5	2.0	ナデ	ナデ	B4-364
216	B IV	SK10	土師器	小皿(ヘソ皿)	8.5	3.6	2.0	ナデ	ナデ	B4-365
217	B IV	SK10	土師器	皿	20.6	-	-	ナデ	ナデ	B4-349
218	B IV	SK10	土師器	皿	17.8	-	-	ナデ	ナデ	B4-361
219	B IV	SK10	土師器	皿	12.6	-	-	板ナデ	ナデ	B4-353
220	B IV	SK10	土師器	皿	13.0	6.8	2.6	ナデ	ナデ 底部未調整	B4-337
221	B IV	SK10	土師器	皿	12.0	6.8	2.6	板ナデ	ヨコナデ 底部未調整 板状圧痕	B4-333
222	B IV	SK10	土師器	皿	12.2	9.0	-	ナデ	口縁部ナデ 以下未調整	B4-356
223	B IV	SK10	土師器	皿	13.3	10.4	2.5	ナデ	ナデ 底部未調整 板状圧痕	B4-342
224	B IV	SK10	土師器	皿	10.7	7.3	1.9	ナデ	ナデ 底部未調整 板状圧痕	B4-338
225	B IV	SK10	土師器	皿	10.1	6.0	2.2	ナデ	ナデ 底部未調整	B4-341
226	B IV	SK10	土師器	小皿	9.8	-	2.0	ナデ(不整方向)	口縁部ナデ 以下未調整	B4-339
227	B IV	SK10	土師器	皿	11.1	7.0	1.9	ナデ	ナデ 底部未調整 板状圧痕	B4-340
228	B IV	SK10	土師器	皿	13.4	7.6	2.8	口縁部横方向ナデ 体部以下縦方向ナデ	未調整もしくは弱いナデ 指頭圧痕	B4-344
229	B IV	SK10	土師器	皿	11.2	5.7	2.1	板ナデ	ナデ 底部未調整 板状圧痕	B4-343
230	B IV	SK10	土師器	皿	11.7	7.3	1.8	ナデ(タテ)	ナデ	B4-345
231	B IV	SK10	土師器	小皿	6.0	-	1.6	ナデ	弱いナデ	B4-359
232	B IV	SK10	土師器	小皿	7.1	-	-	ナデ	未調整	B4-358
233	B IV	SK10	土師器	小皿	6.6	3.7	1.1	ナデ	弱いナデ	B4-360

遺物 番号	地区	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	内面調整	外面調整	実測 番号
234	BIV	SK10	土師器	小皿	7.1	4.6	1.3	ナデ	口縁部ナデ 底部調整 板状圧痕	B4-351
235	BIV	SK10	土師器	小皿	7.8	-	2.1	ナデ	未調整	B4-352
236	BIV	SK10	土師器	小皿	7.1	-	1.5	ナデ	未調整	B4-350
237	BIV	SK10	土師器	小皿	9.4	-	2.0	ナデ	弱いナデ	B4-362
238	BIV	SK10	土師器	小皿	6.8	-	1.3	板ナデ	未調整	B4-354
239	BIV	SK10	土師器	小皿	6.4	-	1.9	板ナデ	未調整	B4-355
240	BIV	SK10	土師器	小皿	7.6	3.5	1.8	板ナデ	未調整	B4-357
241	BIV	SK10	土師器	小皿	長径: 7.8 短径: 5.1	-	1.4	ナデ	弱いナデ	B4-346
242	BIV	SK10	土師器	小皿	長径: 8.4 短径: 6.1	-	1.5	ナデ	ナデ 底部未調整 板状圧痕	B4-347
243	BIV	SK10	土師器	小皿	長径: 9.6 短径: 7.3	-	1.4	ナデ	ナデ 底部板状圧痕	B4-348
244	BIV	SK10	土師器	土壺	21.3	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ 底部スス付着	B4-331
245	BIV	SK10	土師器	土壺	24.2	-	-	口縁部ナデ 体部板ナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ	B4-332
246	BIV	SK11	土師器	仏飯具	7.7	-	-	ナデ	ナデ 坏底部回転糸切	B4-380
247	BIV	SK11	土師器	小皿	8.0	5.1	1.9	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-381
248	BIV	SK18	白磁(肥前系)	小杯	9.1	-	-	無文	無文	B4-379
249	BIV	SK18	土師器	小皿	6.9	-	1.9	ナデ	未調整	B4-366
250	BIV	SK18	土師器	小皿	7.3	4.8	1.3	ナデ	未調整	B4-370
251	BIV	SK18	土師器	小皿	9.2	-	1.4	口縁部板ナデ 体部以下ナデ	弱いナデ	B4-377
252	BIV	SK23	須臾器	小皿	8.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B4-368
253	BIV	SK23	土師器	皿	12.4	-	-	ナデ	ナデ	B4-373
254	BIV	SK23	土師器	皿	14.3	-	-	ナデ	ナデ	B4-367
255	BIV	SK23	土師器	皿	13.1	-	-	ナデ	口縁部ナデ(ヨコ) 体部不整ナデ	B4-374
256	BIV	SK23	土師器	皿	15.2	-	-	ナデ	口縁部ナデ(ヨコ) 体部不整ナデ	B4-375
257	BIV	SK23	土師器	小皿	6.2	-	1.7	ナデ	未調整	B4-376
258	BIV	SK23	土師器	小皿	8.2	-	1.4	板ナデ	未調整	B4-378
259	BIV	SK24	土師器	皿	12.3	-	-	ナデ	口縁部ナデ(ヨコ) 体部以不整ナデ	B4-372
260	BIV	SK25	土師器	小皿(ヘソ皿)	6.7	2.7	1.5	荒れて不明	荒れて不明	B4-382
261	BIV	SK25	土師器	小皿(ヘソ皿)	7.4	-	-	ナデ	ナデ	B4-383
262	BIV	SK25	土師器	小皿(ヘソ皿)	6.1	1.7	1.3	ナデ	ナデ	B4-384
263	BIV	SK25	土師器	小皿(ヘソ皿)	6.7	-	-	ナデ	ナデ	B4-385
264	BIV	SK25	土師器	小皿(ヘソ皿)	6.6	2.5	1.9	ナデ	ナデ	B4-386
265	BIV	SK25	土師器	小皿(ヘソ皿)	8.4	3.4	1.9	ナデ	ナデ	B4-397
266	BIV	SK25	土師器	皿	11.8	-	-	ナデ	ナデ	B4-394
267	BIV	SK25	土師器	皿	17.9	7.5	3.3	ナデ	口縁部ナデ 体部以下未調整	B4-392
268	BIV	SK25	土師器	皿	13.1	-	-	ナデ	ナデ	B4-393
269	BIV	SK25	土師器	皿	17.7	-	-	ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B4-395
270	BIV	SK25	土師器	皿	14.9	-	-	ナデ	ナデ	B4-396
271	BIV	SK25	土師器	皿	14.8	-	-	ナデ	口縁部ナデ(ヨコ) 体部以下不整方向ナデ	B4-398
272	BIV	SK25	土師器	皿	13.7	-	-	ナデ	口縁部ナデ(ヨコ) 体部不整ナデ	B4-399
273	BIV	SK25	土師器	皿	15.7	8.4	2.3	ナデ	口縁部ナデ(ヨコ) 体部以下弱い不整ナデ	B4-387
274	BIV	SK25	土師器	皿	12.4	8.6	1.8	ナデ	口縁部ナデ 底部未調整	B4-391
275	BIV	SK25	土師器	小皿	8.8	-	1.4	ナデ	未調整	B4-388
276	BIV	SK25	土師器	小皿	8.6	-	2.3	ナデ	未調整	B4-390
277	BIV	SK25	土師器	小皿	10.0	-	-	ナデ	未調整	B4-389
278	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	-	4.2	-	無文	体部中位界線1条 底部下半以下虫食い	B4-247
279	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	9.2	3.3	5.2	無文	コンニャク印判による葦の葉文 体部下部界線 底部渦福文	B4-210
280	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	9.4	3.8	5.1	無文	コンニャク印判による井桁に葦の葉文 体部下部界線 底部有文(不明) 壺付露胎	B4-211
281	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	10.3	6.6	5.0	無文 底部蛇の日輪刺	梅花文 体部下部界線1条 高台側面界線2条 壺付露胎	B4-221
282	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	10.6	4.1	4.9	無文 底部蛇の日輪刺	梅花文 体部下部界線1条 高台側面界線2条 壺付露胎	B4-222
283	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	9.5	3.8	4.9	無文	雪輪文 体部下部界線1条 高台側面2条 底部『天明年製』の略字の文字文?	B4-232
284	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	10.4	-	-	無文	雪輪文	B4-227
285	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	9.5	-	-	無文	雪輪文	B4-219
286	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	-	4.0	-	無文	草花文 体部下部界線 高台側面界線2条 底部天明年製の略の「人」	B4-220
287	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	11.2	-	-	口縁部界線1条 体部界線1条	口縁部界線2条 菊文	B4-216
288	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	9.0	4.1	5.0	底部界線2条と菊文 内面貫入有	二重網目文 体部下部界線1条 高台側面界線2条 高台壺付砂付着 露胎 底部コンニャク印判の菊文(文様不明)	B4-223
289	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	10.0	-	-	一重網目文	二重網目文	B4-224
290	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	10.2	-	-	無文	二重網目文 高台側面界線	B4-215
291	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	12.6	6.0	5.9	口縁部幾何学文 界線2条 底部界線2条 五弁花文 蛇の日輪刺	折れ松葉文 体部下部界線1条 高台側面界線2条	B4-225
292	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	11.3	-	-	口縁部界線1条 底部界線1条	口縁部界線1条 笹文	B4-217
293	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	9.3	-	-	無文	船と旭日文	B4-218
294	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	9.1	-	-	無文	手描きによる丸に巾着	B4-233
295	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	10.0	-	-	無文	草花文(色絵)	B4-251
296	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	碗	10.4	4.4	5.1	無文	松葉文?	B4-226
297	BIV	SD1	白磁(肥前系)	碗	8.6	3.8	5.5	無文	無文 壺付露胎	B4-214
298	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	坏	7.1	3.2	4.1	無文	草花文 体部下部界線1条 高台側面界線1条 白泥釉	B4-228

遺物番号	地区	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	内面調整	外面調整	実測番号
299	BIV	SD1	半磁器(肥前系)	坏	6.8	3.2	4.0	無文	草花文 甞付露胎	B4-260
300	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	坏	7.7	2.7	3.9	無文	雁ヶ音文	B4-234
301	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	坏	7.7	2.7	4.0	無文	雁ヶ音文 甞付露胎	B4-229
302	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	坏	6.7	2.8	2.7	無文	コンニャク印判による桐文 甞付露胎	B4-230
303	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	坏	7.2	2.8	3.5	無文	笹葉文	B4-261
304	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	坏	6.9	3.6	2.1	無文	無文	B4-231
305	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	坏	7.6	-	-	無文	草花文(色絵)	B4-256
306	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	仏飯具	7.9	-	-	無文	草花文? 界線1条	B4-250
307	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	仏飯具	-	3.8	-	無文	草花文 底部露胎	B4-246
308	BIV	SD1	染付青磁(肥前系)	蕎麦猪口	6.1	-	-	四方襷文	青磁釉	B4-252
309	BIV	SD1	染付青磁(肥前系)	碗	-	3.7	-	界線2条 底部コンニャク印判による五弁花文	青磁釉施釉 底部濁福文 甞付露胎	B4-212
310	BIV	SD1	染付青磁(肥前系)	碗	-	4.1	-	界線2条 底部コンニャク印判による五弁花文	青磁釉施釉 底部濁福文 甞付露胎	B4-213
311	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	皿	13.3	7.6	3.7	草花文 底部界線2条 五弁花文	唐草文 体部下境界線1条 高台側面界線2条 底部界線1条 濁福文 甞付露胎 砂付着	B4-235
312	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	皿	9.4	3.6	2.9	四方襷文 底部界線1条 退化文字文	草花文 高台側面2条界線	B4-249
313	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	皿	13.5	7.9	2.6	墨引きのS字状文 底部界線2条 五弁花文	簡易な唐草文 体部下境界線1条 高台側面界線1条 底部界線 甞付露胎 砂付着	B4-237
314	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	皿	12.3	7.4	3.7	墨引きS字状文 底部界線1条 五弁花文	簡易な唐草文 体部下境界線1条 高台側面界線1条 底部界線 甞付露胎	B4-239
315	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	皿	12.8	7.7	2.6	草花文 底部界線1条 五弁花文 蛇の日釉剥ぎ	唐草文 甞付露胎	B4-238
316	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	皿	13.2	7.9	2.5	墨引きによるS字状文 界線3条	簡易な唐草文 体部下境界線1条 高台側面界線1条 底部界線1条 甞付露胎 砂付着	B4-236
317	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	壺(油壺)	-	4.7	-	無文 露胎	草花文 露胎状文 体部中位界線1条 下部界線1条 高台側面界線1条	B4-248
318	BIV	SD1	白磁(肥前系)	紅皿	5.1	1.6	1.6	透明釉	型押し放射状花卉 口縁部端部まで施釉 以下露胎	B4-253
319	BIV	SD1	白磁(肥前系)	紅皿	4.7	1.6	1.3	透明釉	型押し放射状花卉 口縁部端部まで施釉 以下露胎	B4-255
320	BIV	SD1	白磁(肥前系)	紅皿	4.4	1.3	1.3	透明釉	型押し放射状花卉 口縁部端部まで施釉 以下露胎	B4-254
321	BIV	SD1	施釉陶器(肥前)	紅皿	4.3	-	-	淡黄灰白色釉	型押し放射状花卉 口縁部端部まで施釉 以下露胎	B4-416
322	BIV	SD1	染付磁器(肥前系)	香炉	8.4	-	-	口縁部施釉 頸部以下露胎 底部砂付着	手描きによる○に×文	B4-241
323	BIV	SD1	白磁(肥前系)	香炉	13.3	5.5	5.7	口頸部施釉 体部以下露胎 底部砂が厚く付着	無文 施釉 甞付露胎	B4-240
324	BIV	SD1	青磁	碗	-	-	-	-	片切彫り連弁文	B4-259
325	BIV	SD1	施釉陶器	碗	9.0	3.1	5.4	無文	草花文の色絵 体部下～底部露胎	B4-245
326	BIV	SD1	施釉陶器(京焼系)	碗	9.3	3.2	5.3	貫入有	底部下部まで施釉 底部下部以下露胎 貫入有	B4-242
327	BIV	SD1	施釉陶器(瀬戸美濃)	碗	9.6	4.5	6.6	灰釉 貫入	口縁部～体部下半灰釉 貫入 体部下以下露胎 回転ヘラケズリ	B4-257
328	BIV	SD1	半磁器	鉢	10.1	5.7	5.0	貫入有	草花文 口縁部界線2条 貫入有 甞付露胎	B4-244
329	BIV	SD1	施釉陶器(唐津)	碗	-	4.2	-	褐色釉→白濁釉によるハケ目	褐色釉→体部白濁釉によるハケ目 ヘラケズリ	B4-258
330	BIV	SD1	半磁器(肥前)	碗	-	4.1	-	底部蛇の日釉剥ぎ	体部下境界線1条 高台側面界線2条 甞付露胎	B4-414
331	BIV	SD1	施釉陶器(京・信楽系)	灯明皿	10.6	5.2	1.7	灰白色釉	口縁部施釉 体部～底部回転ヘラケズリ 露胎	B4-278
332	BIV	SD1	施釉陶器(唐津)	皿	13.7	4.0	3.4	草花文 砂目(3箇所)	口縁部～体部上半施釉 体部中位以下露胎	B4-243
333	BIV	SD1	施釉陶器(丹波)	鉢(火入れ)	8.7	-	-	露胎 口縁部のみ施釉	体部中位まで暗オリーブ釉 以下露胎	B4-273
334	BIV	SD1	施釉陶器(丹波)	火入れ	8.6	-	-	口縁部のみ施釉 以下露胎	オリーブ黄色釉施釉	B4-276
335	BIV	SD1	無釉陶器(丹波?)	鉢	16.2	-	-	無釉	口縁部のみオリーブ褐色釉がかかる。	B4-274
336	BIV	SD1	施釉陶器(丹波)	盤	22.7	16.5	5.2	暗オリーブ釉	口縁部～体部中位暗オリーブ釉 体部中位以下露胎 口縁部輪花型	B4-269
337	BIV	SD1	施釉陶器	皿	18.7	13.0	3.6	浅黄色釉	口縁部～体部下施釉(褐釉) 底部露胎	B4-275
338	BIV	SD1	無釉陶器(丹波)	鉢	41.2	-	-	-	口縁部条線	B4-277
339	BIV	SD1	施釉陶器(唐津)	鉢	20.1	8.5	10.8	灰オリーブ釉	口縁部露胎 口縁部～体部中位灰オリーブ釉 白泥による刷毛目 体部下半～底部露胎 ヘラケズリ	B4-279
340	BIV	SD1	施釉陶器(唐津)	鉢	20.0	12.6	-	口縁部露胎 口縁部～底部オリーブ褐釉 底部砂目2ヶ所	露胎	B4-280
341	BIV	SD1	施釉陶器(丹波)	壺	-	10.9	-	オリーブ褐色釉	-	B4-292
342	BIV	SD1	陶器	皿	-	7.4	-	ヨコナデ	回転ヘラケズリ	B4-415
343	BIV	SD1	施釉陶器(京焼系)	鍋	-	7.2	-	オリーブ色釉	体部下半オリーブ色釉 体部下部～底部 露胎 スス付着 底部周辺貼り付け浮文	B4-412
344	BIV	SD1	施釉陶器(丹波)	甕	16.7	-	-	オリーブ褐釉 ナデ	口縁部端オリーブ褐釉 口縁部以下露胎 体部飛び掛けによる灰釉 ナデ	B4-281
345	BIV	SD1	無釉陶器(丹波)	甕	43.7	-	-	赤土部	ナデ	B4-282
346	BIV	SD1	施釉陶器(丹波)	壺	9.6	-	-	露胎 口縁部一部釉がかかる	暗オリーブ釉施釉	B4-272
347	BIV	SD1	無釉陶器(丹波)	小壺	-	-	-	ヨコナデ 頸部しぼり痕	ヨコナデ	B4-411
348	BIV	SD1	施釉陶器(丹波)	甕	26.1	-	-	緑釉	灰釉を筒描き手法により施釉	B4-271
349	BIV	SD1	施釉陶器(丹波)	底部	-	10.4	-	無釉	体部暗オリーブ釉 底部露胎	B4-270
350	BIV	SD1	施釉陶器	底部	-	11.5	-	黄褐色釉 ロクロ引き痕明瞭	露胎 体部ヨコナデ 底部周辺ヘラケズリ 底部離れ砂	B4-288
351	BIV	SD1	施釉陶器	壺	-	7.0	-	オリーブ黄色釉	ヘラケズリヨコナデ 露胎	B4-291
352	BIV	SD1	無釉陶器(備前)	底部	-	7.3	-	ヨコナデ ロクロ引き痕明瞭	板ナデ	B4-290
353	BIV	SD1	施釉陶器	壺	-	15.4	-	ヨコナデ	暗褐色釉 体部下ヘラケズリ 底部露胎	B4-413
354	BIV	SD1	無釉陶器(丹波)	播鉢	-	-	-	ヨコナデ ヘラ描揺目	ヨコナデ	B4-308

遺物 番号	地区	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	内面調整	外面調整	実測 番号
355	BIV	SD1	無軸陶器	擂鉢	20.6	-	-	クシ描き擂日(単位不明 7本以上)ヨコナ デ	ヨコナデ	B4-286
356	BIV	SD1	無軸陶器(丹波)	擂鉢	34.7	-	-	口縁部ヨコナデ(ヨコナデ後擂日) 7本1単位クシ描き擂日	ヨコナデ	B4-295
357	BIV	SD1	無軸陶器(丹波)	擂鉢	26.2	-	-	口縁部ヨコナデ(擂日→ヨコナデ) 7本1単位クシ描き擂日	ヨコナデ	B4-294
358	BIV	SD1	無軸陶器(丹波)	擂鉢	30.9	14.5	19.5	口縁部ヨコナデ(擂日→ヨコナデ) 6本1単位クシ描き擂日	口縁部～体部ヨコナデ 体部下側ヘラケズリ	B4-293
359	BIV	SD1	無軸陶器(丹波)	擂鉢	-	17.5	-	9本1単位クシ描き卸日 底部同心円状に 擂日	ロクロ引き痕明瞭 ナデ	B4-283
360	BIV	SD1	無軸陶器(丹波)	擂鉢	-	12.3	-	6本1単位のクシ描き擂日	ヨコナデ ロクロ引き痕明瞭	B4-289
361	BIV	SD1	無軸陶器(丹波)	擂鉢	-	16.7	-	擂日単位不明(8本以上)	指頭圧痕 ナデ	B4-284
362	BIV	SD1	無軸陶器(丹波)	擂鉢	-	22.0	-	8本1単位クシ描き擂日 底部同心円状クシ描き擂日	ヨコナデ	B4-285
363	BIV	SD1	無軸陶器(備前)	甕	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B4-287
364	BIV	SD1	須恵器	碗	9.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B4-299
365	BIV	SD1	須恵器	山茶碗	-	5.0	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-296
366	BIV	SD1	須恵器	小皿	8.0	4.5	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-298
367	BIV	SD1	須恵器	小皿	8.4	5.8	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-297
368	BIV	SD1	須恵器	鉢	23.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B4-300
369	BIV	SD1	土師器	小皿	9.3	5.6	1.4	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-309
370	BIV	SD1	土師器	小皿	7.6	4.7	1.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切 口縁部スス付着	B4-310
371	BIV	SD1	土師器	小皿	7.9	4.3	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切 口縁部スス付着	B4-311
372	BIV	SD1	土師器	小皿	9.4	5.2	1.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-314
373	BIV	SD1	土師器	小皿	7.7	4.1	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-312
374	BIV	SD1	土師器	小皿	6.4	2.5	1.6	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-313
375	BIV	SD1	土師器	小皿	7.3	3.5	1.3	柿軸	ヨコナデ 底部回転糸切 露胎	B4-315
376	BIV	SD1	土師器	皿	10.9	5.5	2.4	ナデ	未調整 底部板状圧痕	B4-301
377	BIV	SD1	土師器	皿	11.0	5.8	2.5	口縁部板ナデ 底部ナデ	未調整 底部板状圧痕	B4-302
378	BIV	SD1	土師器	土塀	21.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ スス付着	B4-307
379	BIV	SD1	土師器	炮烙	33.5	34.1	-	口縁部～体部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部～体部ヨコナデ 底部ナデ 型づくり成形 スス付着	B4-263
380	BIV	SD1	土師器	炮烙	33.6	34.6	-	口縁部～体部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部以下ナデ 型づくり成形 スス付着	B4-264
381	BIV	SD1	土師器	炮烙	27.6	28.3	5.4	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部以下ナデ 型づくり成形 スス付着	B4-265
382	BIV	SD1	土師器	炮烙	26.8	25.0	5.2	口縁部～体部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部～体部上半ヨコナデ 体部下半以下ナデ 型づくり成形 スス付着	B4-266
383	BIV	SD1	土師器	炮烙	26.8	25.5	3.3	口縁部ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 底部ナデ 型づくり成形 スス付着	B4-267
384	BIV	SD1	土師器	炮烙	24.5	26.7	-	口縁部ヨコナデ 体部以下ナデ	口縁部ヨコナデ 体部以下ナデ 型づくり成形 スス付着	B4-268
385	BIV	SD1	瓦質土器	火鉢	-	-	-	ナデ	刺突状の型押しか? 刻銘「京王〇庵」	B4-306
386	BIV	SD1	土製品	土鈴	2.4					262
387	BIV	SD1	土製品	土鈴	2.1					303
388	BIV	包含層	白磁(肥前系)	碗	8.4	3.1	5.0	灰白色釉 無文	灰白色釉 無文	B4-407
389	BIV	包含層	染付磁器(肥前系)	小杯	8.9	-	-	無文	雨降り文	B4-408
390	BIV	包含層	染付磁器(肥前系)	碗	9.3	-	-	無文	コンニャク印判による菊花文	B4-409
391	BIV	包含層	須恵器	稜碗	13.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B4-404
392	BIV	包含層	土師器	小皿	7.8	-	1.2	板ナデ	未調整	B4-410
393	BIV	包含層	土師器	小皿	9.0	-	1.8	ナデ	未調整	B4-403
394	BIV	包含層	土師器	小皿	8.0	4.9	1.6	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B4-406
395	BIV	包含層	土師器	皿	12.1	8.0	2.1	ナデ	未調整	B4-405
396	BIV	包含層	土師器	土塀	22.6	-	-	ナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タキ	B4-402
397	BV	SK2	染付磁器(肥前)	碗	-	4.5	-	底部界線2条 見込み部草花文	草花文 高台部界線1条 底部渦福文 豎付露胎 砂付	B5-446
398	BV	SK2	染付磁器(肥前系)	碗	11.5	4.0	6.1	口縁部 簡略化した草花文? 体部下部界線1条 底部コンニャク印判による菊花文 界線2条	菊唐草文 口縁部界線1条 体部下部界線1条 高台側面界線2条 高台内側面界線1条 豎付露胎 砂付	B5-457
399	BV	SK2	染付磁器(肥前)	碗	9.8	3.9	5.7	無文	草花文 体部下部界線2条 高台側面界線1条 底部界線1条	B5-453
400	BV	SK2	染付磁器(肥前系)	碗	9.5	3.3	4.7	無文	草花文 豎付露胎	B5-462
401	BV	SK2	染付磁器(肥前系)	碗	9.4	3.8	5.2	無文	二重網目文 底部下部界線 高台側面界線2条 豎付露胎 砂付	B5-461
402	BV	SK2	染付磁器(肥前系)	碗	11.1	4.8	5.9	無文	簡略化した草花文? 体部下部界線1条 高台側面界線2条 底部界線1条	B5-458
403	BV	SK2	染付磁器(肥前)	碗	10.0	4.1	4.4	無文	草花文 高台側面界線1条	B5-452
404	BV	SK2	染付磁器(肥前系)	蕎麦猪口	7.6	5.1	6.0	貫入 口縁部露胎	豎付露胎 貫入 草花文 口縁部界線1条 体部下部界線1条 高台側面界線2条 底部界線2条	B5-456
405	BV	SK2	染付磁器(肥前系)	碗	-	4.5	-	無文 貫入	草花文 底部渦部界線 高台側面界線2条 豎付露胎	B5-460
406	BV	SK2	染付磁器(肥前)	碗	8.4	3.4	4.8	無文	草花文 体部下部界線1条 高台側面界線1条	B5-448
407	BV	SK2	施釉陶器(京焼系)	碗	-	3.4	-	無文 貫入	無文 貫入 体部下端～底部露胎	B5-459
408	BV	SK2	施釉陶器(京焼系)	碗	-	4.3	-	無文	無文 体部下部～底部露胎 底部文字刻印	B5-451
409	BV	SK2	施釉陶器(唐津)	碗	-	5.0	-	貫入 無文	貫入 無文 豎付露胎	B5-455
410	BV	SK2	施釉陶器(唐津)	碗	-	4.2	-	白濁釉によるハケ目	白濁釉によるハケ目 豎付露胎	B5-454
411	BV	SK2	施釉陶器(京焼系)	碗	9.4	3.8	4.9	貫入	草花文(鉄絵) 高台部～底部露胎	B5-445
412	BV	SK2	施釉陶器(京焼系)	碗	9.0	3.0	5.2	無文 貫入	貫入 無文 高台部露胎	B5-449
413	BV	SK2	施釉陶器(唐津)	碗	11.0	-	-	無文 貫入	無文 貫入	B5-450
414	BV	SK2	施釉陶器(京焼系)	碗	11.4	-	-	無文	オリーブ色釉で草花文	B5-447
415	BV	SK2	施釉陶器(丹波)	鉢	21.8	-	-	赤土部	露胎	B5-441
416	BV	SK2	施釉陶器(丹波)		-	11.8	-	赤土部→暗オリーブ色釉	下赤土部	B5-440
417	BV	SK2	無軸陶器(丹波)	火入れ	-	7.7	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-438

遺物番号	地区	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	内面調整	外面調整	実測番号
418	BV	SK2	無釉陶器(丹波)	甕	23.1	-	-	ヨコナデ	体部上位凹線22本 肩部不遊環	B5-439
419	BV	SK2	無釉陶器(丹波?)	-	-	-	-	ヨコナデ	ヘラ描き沈線7本 ヨコナデ	B5-435
420	BV	SK2	無釉陶器(丹波)	甕	-	12.9	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-436
421	BV	SK2	無釉陶器(丹波)	擂鉢	33.7	-	-	6本1単位クシ描き擂日	ヨコナデ	B5-434
422	BV	SK2	土師器	炮烙	28.1	-	-	ナデ	ナデ スス付着	B5-437
423	BV	SK2	土師器	炮烙	25.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ スス付着	B5-443
424	BV	SK2	土師器	炮烙	32.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ スス付着	B5-442
425	BV	SK2	土師器	小皿	9.3	6.2	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-444
426	BV	SK2	土師器	小皿	-	6.0	-	ヨコナデ スス付着	ヨコナデ 底部回転条切	B5-469
427	BV	SK5	染付磁器(肥前)	碗	10.5	4.2	5.4	無文	草花文 体部下境界線1条 高台側面界線2条 底部「太明年製」の扇れ文字印	B5-471
428	BV	SK5	施釉陶器(京焼系)	碗	11.9	4.0	4.3	見込み部草花文 貫入	無文 貫入 高台~底部露胎	B5-463
429	BV	SK5	土師器	小皿	-	5.5	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切 スス付着	B5-470
430	BV	SK6	土師器	小皿	9.0	5.4	1.4	ナデ	未調整	B5-464
431	BV	SK7	染付磁器(肥前)	碗	-	3.8	-	無文	二重網目文 高台露胎 砂付着	B5-482
432	BV	SK7	須恵器	山茶碗	16.3	5.8	4.4	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-472
433	BV	SK7	須恵器	山茶碗	17.1	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-473
434	BV	SK7	須恵器	山茶碗	16.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-474
435	BV	SK7	須恵器	小皿	7.6	4.6	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-480
436	BV	SK7	須恵器	小皿	9.0	4.8	1.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-476
437	BV	SK7	土師器	小皿	7.2	-	-	ナデ	ナデ	B5-477
438	BV	SK7	土師器	小皿	9.1	6.2	1.1	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-478
439	BV	SK7	土師器	小皿	7.0	4.9	1.5	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-483
440	BV	SK7	土師器	碗	-	12.0	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-479
441	BV	SK7	土師器	甕	29.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-475
442	BV	SK8	染付磁器(肥前系)	小碗	9.7	-	-	無文	草花文	B5-496
443	BV	SK8	染付磁器(肥前系)	小杯	7.9	3.2	4.4	無文	体部下境界線1条 高台側面界線1条 壺付露胎 砂付着	B5-492
444	BV	SK8	施釉陶器(京焼系)	碗	-	4.8	-	無釉 貫入	体部下~底部露胎 底部「清水」刻印	B5-487
445	BV	SK8	施釉陶器(京焼系)	土瓶・土鍋 (底部)	-	7.8	-	灰釉	灰オリープ色釉 体部下~底部露胎 スス付着	B5-490
446	BV	SK8	施釉陶器(瀬戸美濃)	皿	9.3	4.9	2.2		回転ヘラケズリ 削り出し高台	B5-491
447	BV	SK8	施釉陶器(唐津)	皿	14.4	-	-	白泥釉	白泥釉	B5-489
448	BV	SK8	施釉陶器(唐津)	碗	-	4.9	-	砂目跡	壺付~底部露胎 ヘラケズリ	B5-488
449	BV	SK8	土師器	小皿	10.7	6.9	2.1	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-495
450	BV	SK8	無釉陶器(丹波)	擂鉢	25.7	-	-	ヨコナデ 7本1単位クシ描き擂日	ヨコナデ	B5-494
451	BV	SK8	無釉陶器(丹波)	擂鉢	41.3	25.0	12.4	ヨコナデ 7本1単位クシ描き擂日	ヨコナデ	B5-484
452	BV	SK8	無釉陶器(丹波)	擂鉢	27.2	-	-	ヨコナデ 7本1単位クシ描き擂日	ヨコナデ	B5-486
453	BV	SK8	無釉陶器(丹波)	擂鉢	32.3	-	-	ヨコナデ 7本1単位クシ描き擂日	ヨコナデ	B5-493
454	BV	SK12	須恵器	山茶碗	16.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-502
455	BV	SK13	須恵器	山茶碗	15.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-497
456	BV	SK13	須恵器	小皿	10.4	6.7	1.3	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-498
457	BV	SK13	須恵器	山茶碗	17.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-501
458	BV	SK14	土師器	甕	19.4	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-504
459	BV	SK15	土師器	甕	26.2	-	-	荒れて不明	口縁部ヨコナデ 体部ハケ	B5-500
460	BV	SK15	土師器	碗	10.4	-	-	ヨコナデ	荒れて不明	B5-503
461	BV	SK18	土師器	甕	17.21	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-499
462	BV	SE1	施釉陶器(瀬戸美濃)	皿	10.3	6.4	2.3	灰釉	灰釉 底部露胎	B5-514
463	BV	SE1	無釉陶器(備前)	甕	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-510
464	BV	SE1	無釉陶器(備前)	壺	-	-	-	ヨコナデ	体部上半 ヨコナデ クシ描き条線 体部下半 ヘラケズリ	B5-509
465	BV	SE1	無釉陶器(備前)	擂鉢	25.2	10.2	10.0	ヨコナデ 12本1単位擂日	ヨコナデ 体部下端ヘラケズリ	B5-524
466	BV	SE1	無釉陶器(丹波)	壺・甕	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-526
467	BV	SE1	無釉陶器(丹波)	壺	13.8	-	-	ヨコナデ 自然釉	ヨコナデ 自然釉	B5-518
468	BV	SE1	無釉陶器(丹波)	甕	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-517
469	BV	SE1	無釉陶器(丹波)	擂鉢	-	-	-	ヨコナデ クシ描き擂日	ヨコナデ	B5-516
470	BV	SE1	須恵器	山茶碗	13.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 体部下ヘラケズリ	B5-506
471	BV	SE1	須恵器	山茶碗	15.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-507
472	BV	SE1	須恵器	山茶碗	16.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-508
473	BV	SE1	須恵器	山茶碗	-	5.0	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-505
474	BV	SE1	土師器	土鍋	27.7	-	-	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ スス付着	B5-519
475	BV	SE1	土師器	土鍋	23.7	-	-	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部格子タタキ スス付着	B5-525
476	BV	SE1	土師器	土鍋	-	-	-	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ 体部格子タタキ スス付着	B5-527
477	BV	SE1	土師器	小皿	10.2	-	-	ナデ	ナデ	B-612
478	BV	SE1	土製品	土錘	3.6	-	-			511
479	BV	SE1	土製品	土錘	3.7	-	-			512
480	BV	SE1	土製品	土錘	3.3	-	-			513
481	BV	SE1	土製品	土錘	3.6	-	-			522
482	BV	SE1	土製品	土錘	-	-	-			523
483	BV	SE1	土製品	土錘	3.9	-	-			528
484	BV	P5	須恵器	山茶碗	17.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-432
485	BV	P9	土師器	小皿	8.8	6.2	2.2	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-433
486	BV	P12	施釉陶器(瀬戸美濃)	碗	11.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-431
487	BV	SD1	青磁	碗	12.7	-	-		貫入	B5-418
488	BV	SD1	土師器	小皿	9.2	5.4	2.0	ヨコナデ 口縁部スス付着	ヨコナデ 底部回転条切 口縁部スス付着	B5-417
489	BV	SD1	土師器	皿	10.9	6.7	1.2	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転条切	B5-419
490	BV	包含層	染付磁器(肥前)	小碗	7.6	3.0	4.5	無文	口縁部雨降り文 体部下境界線2条 高台側面界線1条 壺付露胎	B5-421
491	BV	包含層	染付磁器(肥前)	碗	9.7	-	-	無文	一重網目文 口縁部界線1条	B5-424

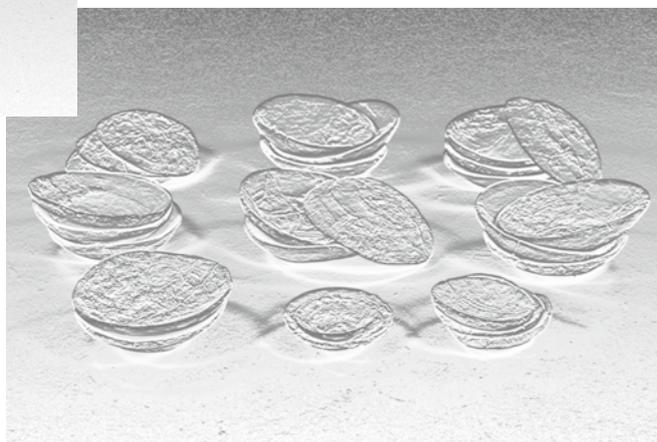
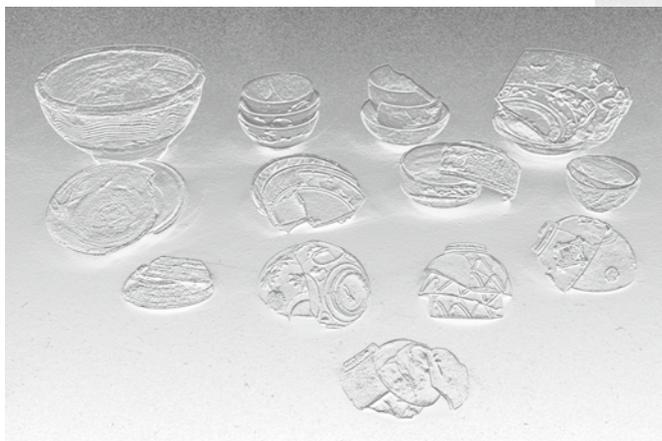
遺物番号	地区	出土場所	種類	器種	口径	底径	高さ	内面調整	外面調整	実測番号
492	BV	包含層	染付磁器(肥前)	碗	-	4.0	-	無文	草花文 体部下境界線1条 高台側面境界線2条 底部界線1条 崩れた「大明年製」? 畳付露胎 砂付者	B5-422
493	BV	包含層	染付磁器(肥前)	碗	-	4.1	-	底部蛇の目軸刺ぎ	草花文 体部下境界線1条 高台側面境界線2条 底部崩れた「大明年製」	B5-423
494	BV	包含層	施釉陶器	鉢	13.9	-	-	無文 貫入	草花文 貫入	B5-426
495	BV	包含層	須忠器	鉢	29.8	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	B5-427
496	BV	包含層	ぬ袖陶器(丹波)	播鉢	-	11.8	-	8本1単位クシ描幅目	ヨコナデ 指摺り痕	B5-430
497	BV	包含層	須忠器	坏	11.3	6.9	4.4	ヨコナデ 底部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部下回転ヘラケズリ 底部溝移転ヘラ切	B5-429
498	BV	包含層	須忠器	小皿	8.8	5.7	1.8	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B5-428
499	BV	包含層	土師器	皿	11.5	8.9	1.7	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	B5-425
500	C	SK9 (礎石建物跡)	須忠器	山茶碗	-	6.1	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	C-536
501	C	SK22 (礎石建物跡)	須忠器	山茶碗	-	5.5	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	C-537
502	C	SK2	土師器	土鍋	34.1	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ スス付着	C-534
503	C	SK2	土師器	皿	18.5	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	C-535
504	C	SK2	無袖陶器(丹波)	播鉢	24.0	12.0	12.4	ヘラ描き播日 ヘラ記号あり	ヨコナデ	C-533
505	C	SK3	施釉陶器(瀬戸美濃)	皿	-	4.9	-	見込み部印花文	畳付露胎 底部輪トナン痕	C-540
506	C	落ち状遺構1	染付陶器	碗	-	3.9	-	緑灰色の釉で草花文 一部赤絵 貫入	体部下部施釉 体部下部～底部露胎	C-539
507	C	落ち状遺構1	無袖陶器(丹波)	甕	25.2	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	C-541
508	C	落ち状遺構1	土師器	土鍋	24.5	-	-	口縁部ヨコナデ 体部ナデ	口縁部ヨコナデ 体部平行タタキ スス付着	C-538
509	C	包含層	須忠器	山茶碗	15.0	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	C-547
510	C	包含層	須忠器	碗	-	5.0	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部ヘラケリ	C-546
511	C	包含層	須忠器	山茶碗	-	6.8	-	ヨコナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	C-544
512	C	包含層	土師器	小皿	8.1	6.5	1.1	ヨコナデ 底部仕上げナデ	ヨコナデ 底部回転糸切	C-542
513	C	包含層	土師器	皿	10.9	-	1.6	ナデ(ハケ日残る)	未調整	C-543
514	C	包含層	白磁	碗	-	6.0	-	-	露胎	C-545
515	C	包含層	無袖陶器(備前)	鉢	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ 口縁輪花型	C-548

### 中安田・法幢寺遺跡出土瓦観察表

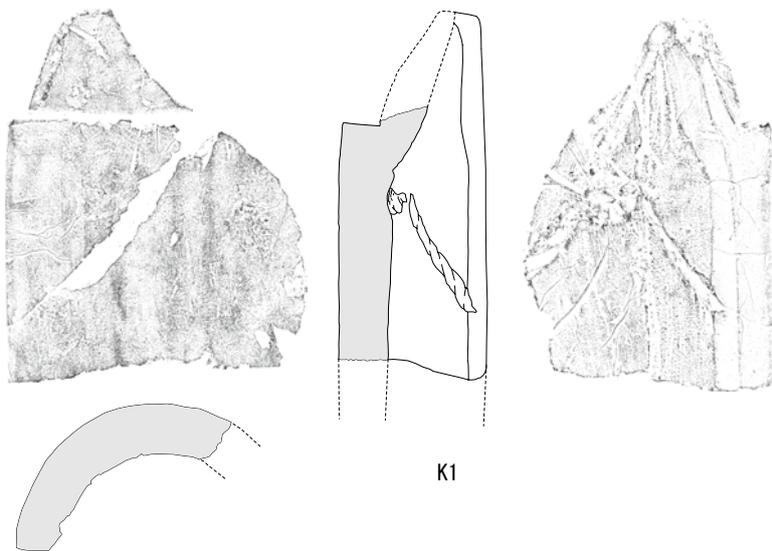
遺物番号	地区	出土場所	種類	調	整	実測番号
K01	A	石列3埋土	丸瓦	凹面：布日残る 紐痕	凸面：縄目タタキ痕残る	A-566
K02	A	南側盛土	隅軒平瓦	ナデ	ナデ	A-542
K03	A	西側盛土	軒丸瓦	凹面：コピキB 軽いナデ 布日残る 布重ね痕	凸面：丁寧なナデ	A-532
K04	A	西側盛土	軒丸瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：丁寧なナデ	A-534
K05	A	西側盛土	軒丸瓦	凹面：ナデ	凸面：丁寧なナデ	A-533
K06	A	西側盛土	軒丸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：丁寧なナデ 瓦当面剥離	A-544
K07	A	西側盛土	軒平瓦	凹面：丁寧なナデ 水返し	凸面：ケズリ→ナデ 瓦当との接合部強い横ナデ 瓦当裏ナデ	A-535
K08	A	西側盛土	軒平瓦	凹面：丁寧なナデ	凸面：ケズリ→ナデ	A-536
K09	A	西側盛土	軒平瓦	凹面：丁寧なナデ	凸面：ケズリ→ナデ	A-537
K10	A	西側盛土	軒平瓦		凸面：ケズリ→ナデ	A-541
K11	A	西側盛土	軒平瓦	凹面：丁寧なナデ	凸面：ケズリ→ナデ	A-538
K12	A	西側盛土	軒平瓦		凸面：ケズリ→ナデ	A-540
K13	A	西側盛土	軒平瓦	凹面：丁寧なナデ	凸面：ケズリ→ナデ	A-539
K14	A	西側盛土	丸瓦	凹面：布日	凸面：ナデ 縄目タタキ残る	A-543
K15	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り	凸面：丁寧なナデ 玉縁部荒い縦ナデ	A-545
K16	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り	丁寧なナデ	A-546
K17	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り	丁寧なナデ	A-547
K18	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り	丁寧なナデ	A-548
K19	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 布縫い合わせ痕 玉縁部側面取り	丁寧なナデ	A-549
K20	A	西側盛土	丸瓦		丁寧なナデ	A-550
K21	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り	凸面：丁寧なナデ 玉縁部は粗いナデ	A-553
K22	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り 布縫日跡	凸面：丁寧なナデ 玉縁部はナデ	A-554
K23	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 打ちタタキ 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り	凸面：丁寧なナデ 玉縁部はナデ	A-555
K24	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り	凸面：丁寧なナデ	A-556
K25	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 布縫い合わせ痕 玉縁部側面取り	凸面：丁寧なナデ 玉縁部はナデ	A-557
K26	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 布縫い合わせ痕 玉縁部側面取り	凸面：丁寧なナデ 玉縁部はナデ	A-558
K27	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 玉縁部側面取り	凸面：丁寧なナデ 玉縁部はナデ	A-559
K28	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 打ちタタキ 粗いナデ 布日残る 布縫い合わせ痕	凸面：丁寧なナデ	A-560
K29	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 布日残る 布縫い合わせ痕	凸面：丁寧なナデ	A-561
K30	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 布縫い合わせ痕 玉縁部側面取り 引っ掛け用の筋	凸面：丁寧なナデ 玉縁部は粗いナデ	A-551
K31	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 粗いナデ 布日残る 紐痕 玉縁部側面取り 引っ掛け用の筋	凸面：丁寧なナデ	A-552
K32	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 布日残る 布縫い合わせ痕	凸面：丁寧なナデ 玉縁部はナデ	A-562
K33	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 布日残る 布縫い合わせ痕	凸面：丁寧なナデ	A-563
K34	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 布日残る 布縫い合わせ痕	凸面：丁寧なナデ	A-564
K35	A	西側盛土	丸瓦	凹面：コピキB 布日残る 布縫い合わせ痕	凸面：丁寧なナデ	A-565
K36	A	西側盛土	平瓦	凹面：ナデ 布日残る	凸面：ナデ	A-567
K37	A	西側盛土	平瓦	凹面：横方向ナデ→側縁ナデ	凸面：ケズリ 粗いナデ 離れ砂	A-568
K38	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：離れ砂	A-569
K39	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方ナデ 凹型成形台痕	A-570
K40	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ→四方ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方ナデ 凹型成形台痕	A-571
K41	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ→四方ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方ナデ 凹型成形台痕	A-572

遺物番号	地区	出土場所	種類	調	整	実測番号
K42	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ→四方ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方ナデ 凹型成形台痕	A-573
K43	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ→四方ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方ナデ 凹型成形台痕	A-574
K44	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→三方ナデ 凹型成形台痕	A-575
K45	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→三方ナデ 凹型成形台痕	A-576
K46	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→三方ナデ 凹型成形台痕	A-577
K47	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→三方ナデ 凹型成形台痕	A-578
K48	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→三方ナデ	A-579
K49	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→三方ナデ	A-580
K50	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-581
K51	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-582
K52	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-583
K53	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-584
K54	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-585
K55	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-586
K56	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-587
K57	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-588
K58	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-589
K59	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ	A-590
K60	A	西側埋土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→四方幅広ナデ 狭端部端面○刻印	A-591
K61	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→周囲ナデ クシの掻き目	A-592
K62	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→周囲ナデ クシの掻き目	A-595
K63	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→周囲ナデ クシの掻き目	A-593
K64	A	西側盛土	平瓦	凹面：不整方向ナデ	凸面：ケズリ→粗いナデ→周囲ナデ クシの掻き目	A-594
K65	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る 布縫い合わせ痕	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-596
K66	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-597
K67	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-598
K68	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-599
K69	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-600
K70	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-601
K71	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る 横方向の刺し縫い痕	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-602
K72	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-605
K73	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-603
K74	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-604
K75	A	西側盛土	鑿面戸瓦	凹面：コピキB 布日残る 内タタキ	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-606
K76	A	西側盛土	雁抜瓦	凹面：離れ砂 粗いナデ	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-607
K77	A	西側盛土	雁抜瓦	凹面：離れ砂 粗いナデ	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-608
K78	A	西側盛土	雁抜瓦	凹面：離れ砂 粗いナデ 刻銘「御瓦大工・・・」	凸面：ヘラ状工具による縦ナデ	A-609
K79	B II	SD4	平瓦	凹面：ナデ 離れ砂	ヘラケズリ→ナデ 凹型台痕跡	B2-107
K80	B II	SD5	平瓦	凹面：板ナデ 狭端部、側縁ナデによる狭い面	凸面：凹型成型台圧痕 粗いナデ はなれ砂	B2-096
K81	B II	SD5	軒丸瓦	凹面：コピキB 布日 側縁面取り 瓦当裏面ナデ	凸面：ミガキ 瓦当：外縁ナデ 外縁内端面取り 瓦当面はなれ砂	B2-094
K82	B II	SD5	軒丸瓦	凹面：コピキB 布日 瓦当裏面ナデ	凸面：ミガキ 瓦当：外縁ナデ 外縁内端面取り 瓦当面はなれ砂	B2-095
K83	B II	SD6	軒丸瓦			B2-151
K84	B II	SD6	軒丸瓦			B2-152
K85	B II	南側落ち	平瓦	凹面：ナデ 布日残る	離れ砂	B2-120
K86	B IV	SK2	丸瓦	凹面：布日 ナデ	凸面：丁寧なナデ	B4-329
K87	B IV	SD1	平瓦	凹面：丁寧なナデ 離れ砂	凸面：板ナデ 成形台痕	B4-318
K88	B IV	SD1	軒丸瓦			B-613
K89	B IV	SD1	平瓦	凹面：丁寧なナデ	凸面：板ナデ後周囲ナデ	B4-317
K90	B IV	SD1	平瓦	凹面：板ナデ 砂日残る 広端部、側縁部ナデ	凸面：板ナデ側縁丁寧なナデ	B4-316
K91	B V	SK2	平瓦			B-614
K92	B V	SK5	軒丸瓦	凹面：布日 板状痕	凸面：丁寧なナデ	B5-468
K93	B V	SK5	平瓦	凹面：丁寧なナデ	凸面：板ナデ→丁寧なナデ (部分的にナデ残しあり)	B5-466
K94	B V	SK5	平瓦	凹面：丁寧なナデ	凸面：板ナデ→側縁丁寧なナデ	B5-467
K95	B V	SE1	丸瓦	凹面：布日 つり紐痕	凸面：ナデ 縄日残る	B5-531
K96	B V	SE1	軒丸瓦	凹面：コピキA 布日 瓦当裏面ナデ	凸面：ナデ 瓦当：瓦当面はなれ砂	B5-530
K97	B V	SE1	平瓦	凹面：ナデ 布日残る	凸面：ナデ 砂日	B5-515
K98	B V	SD1	丸瓦	凹面：内叩き 布日	凸面：丁寧なナデ	B5-420

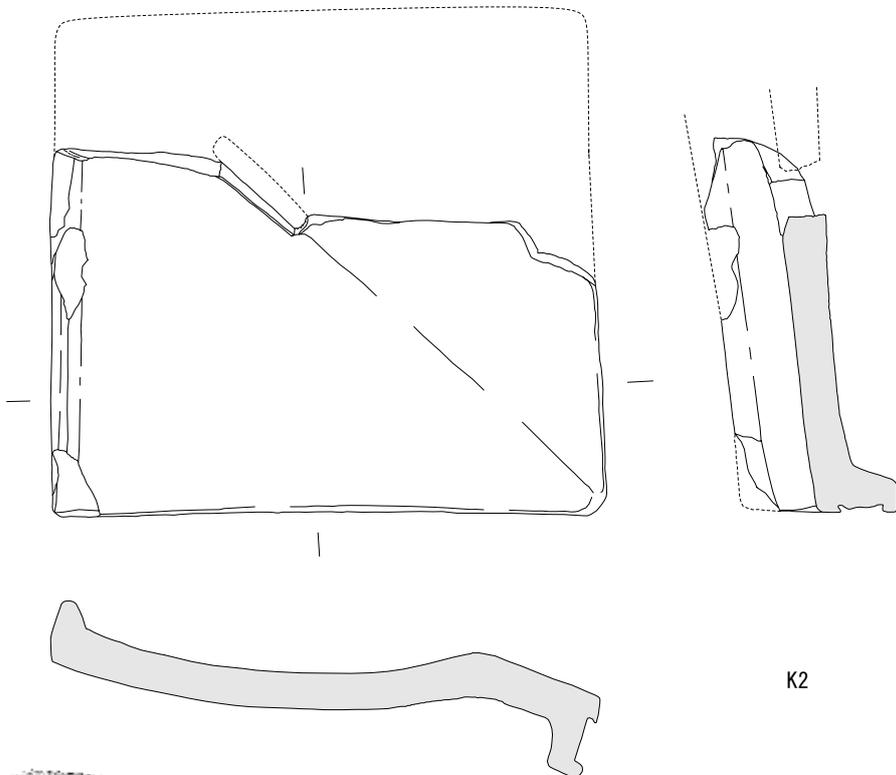
# 中安田・法幢寺遺跡／図版



A区



K1



K2

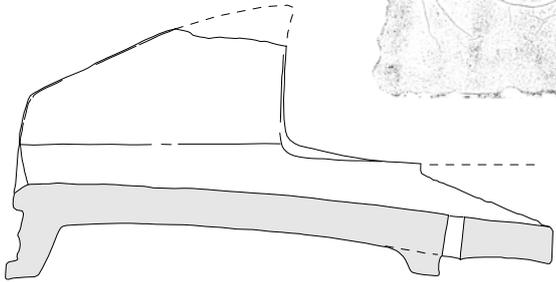
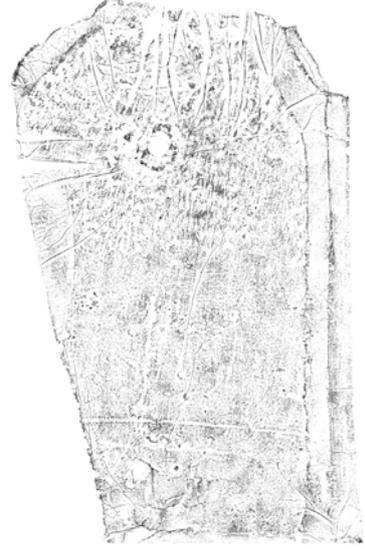
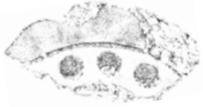
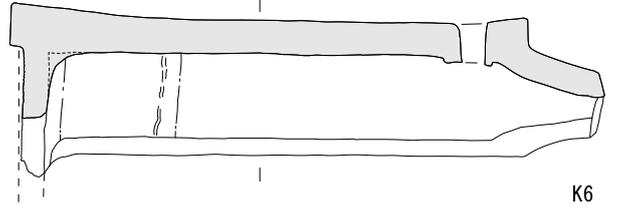
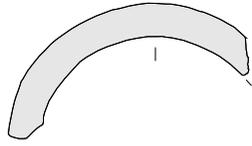
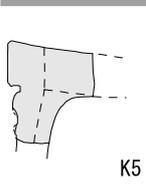
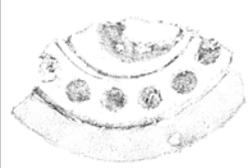
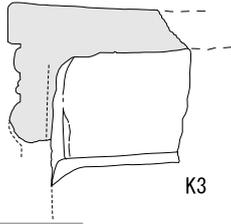


凸面

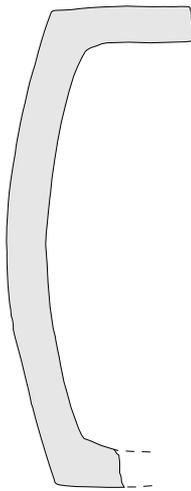
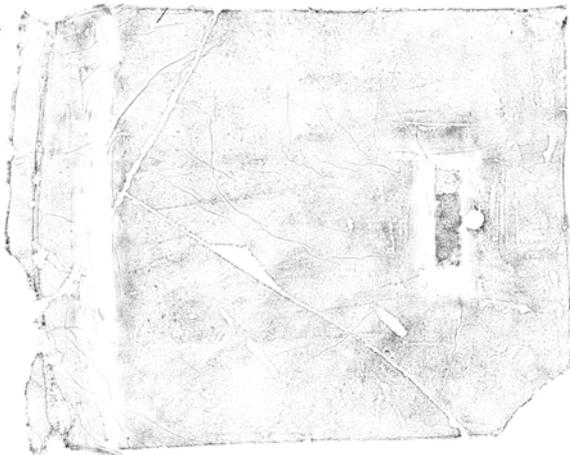


凹面

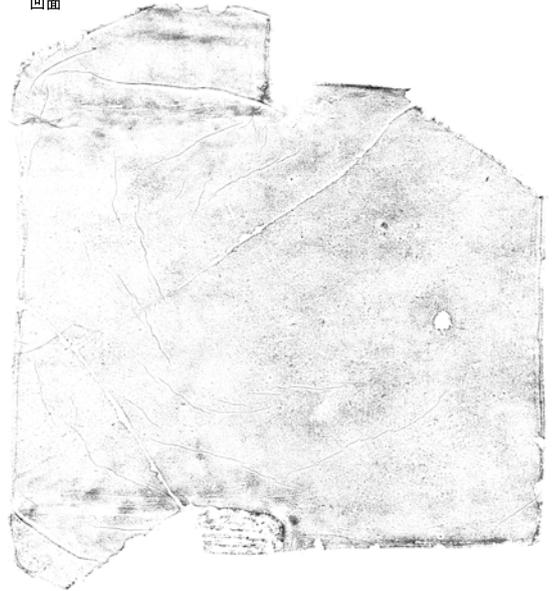


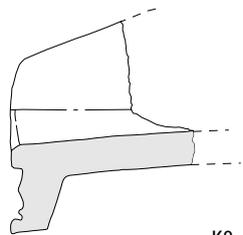


凸面



凹面

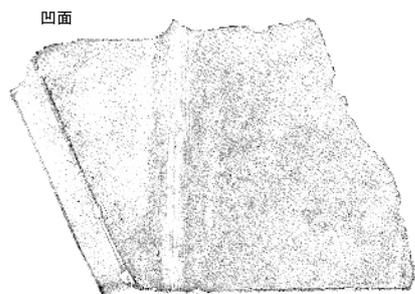




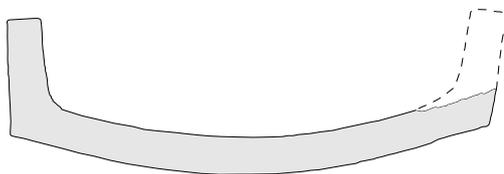
K8



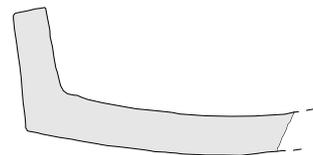
凹面



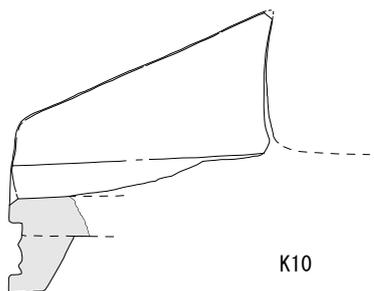
凹面



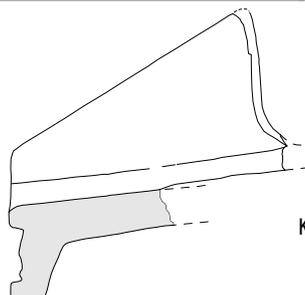
凸面



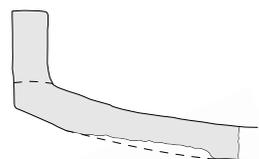
凸面



K10



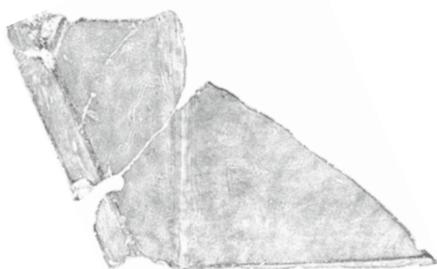
K9



凹面



K11

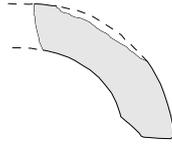


K12

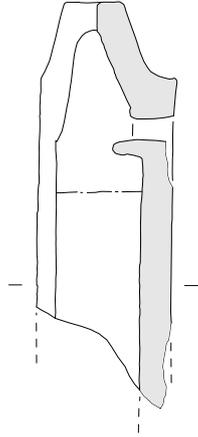
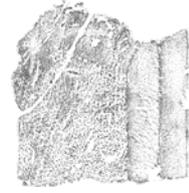


K13

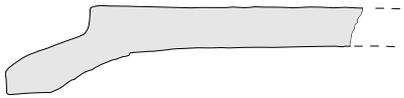
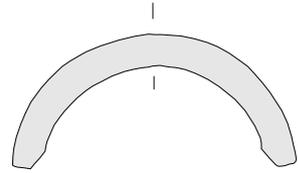
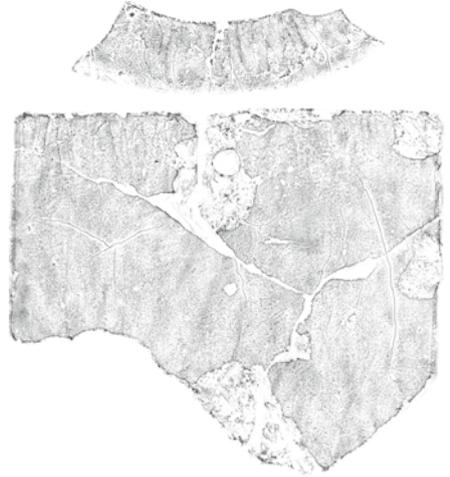




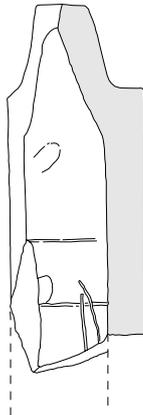
K14



K15

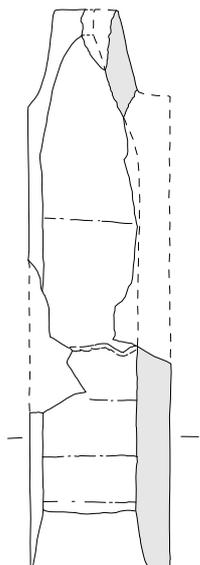


K16

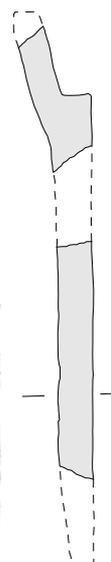
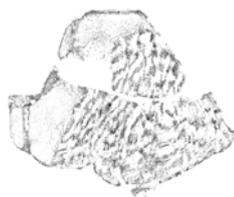


K17

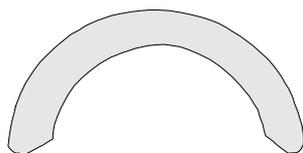
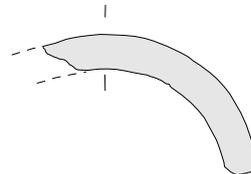
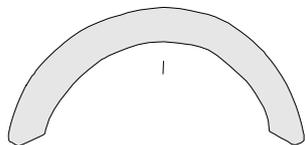




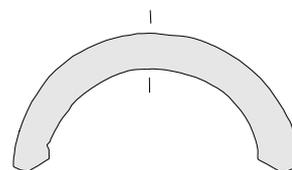
K18



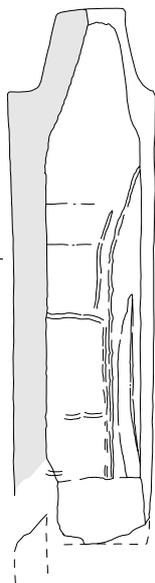
K19



K20

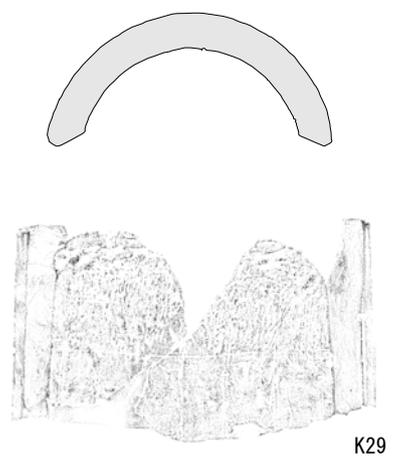
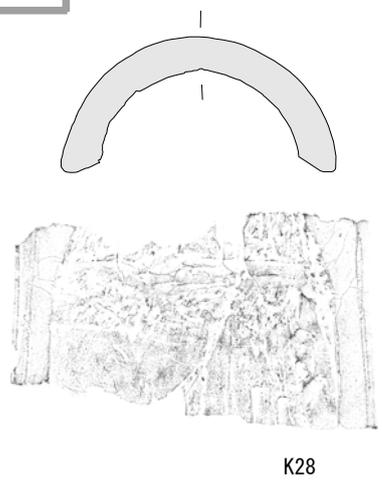
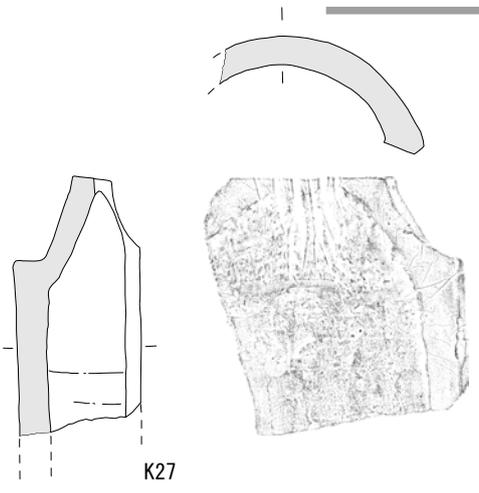
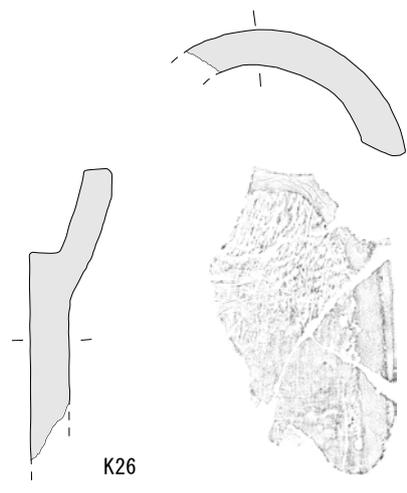
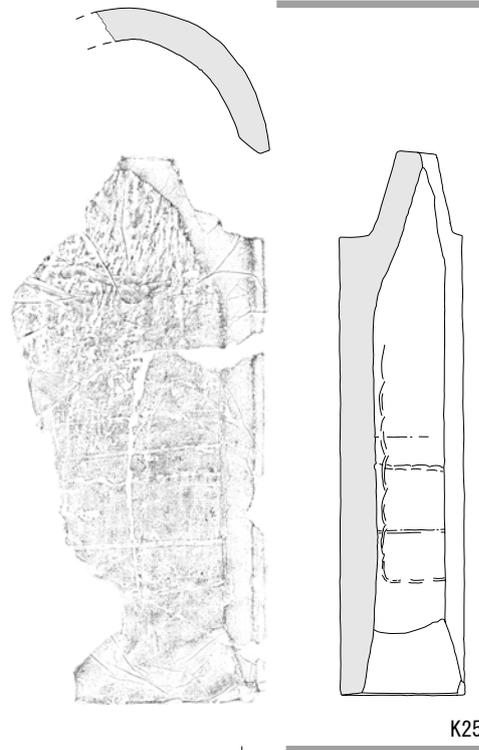
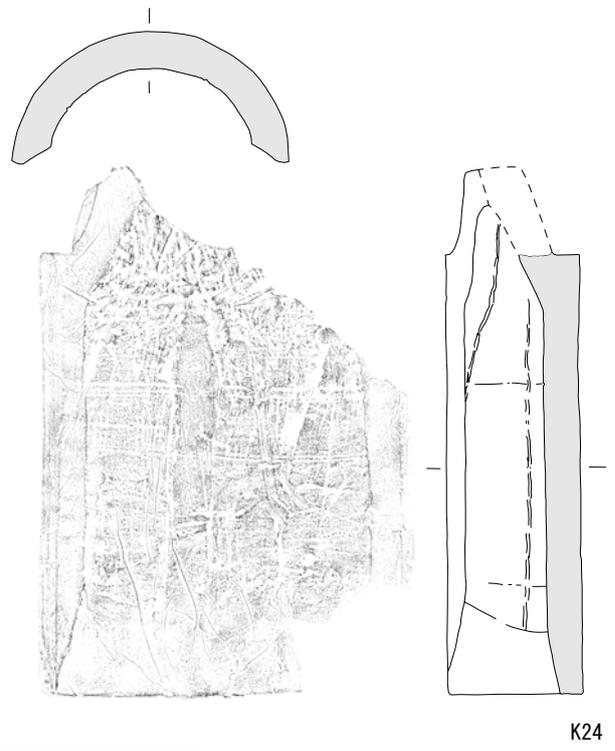
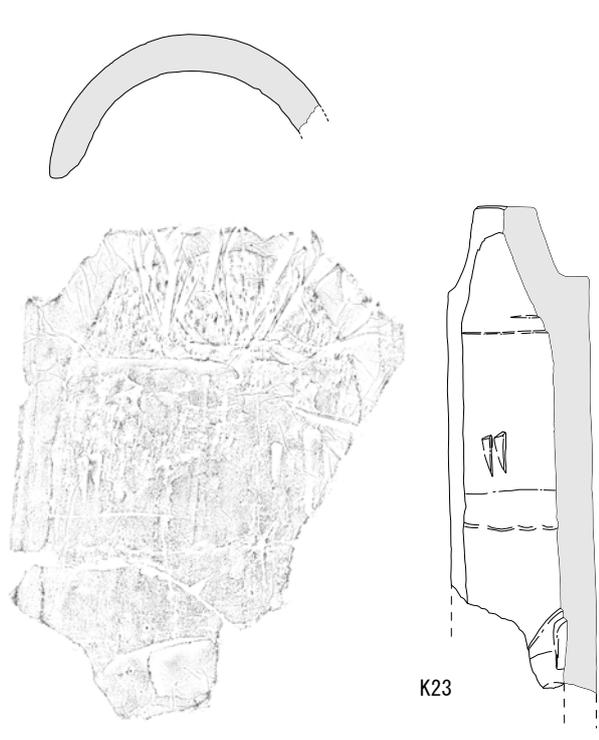


K21

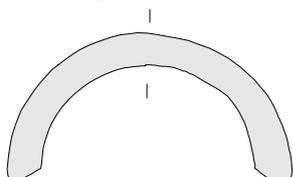
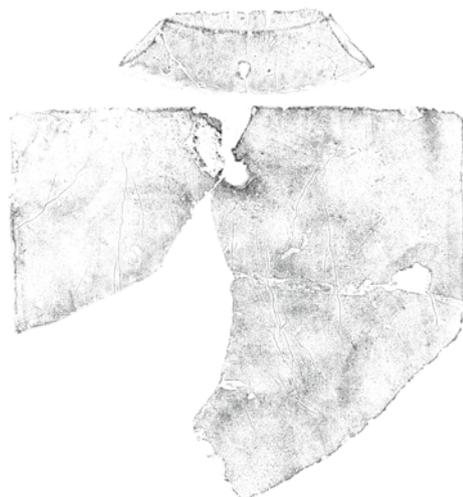
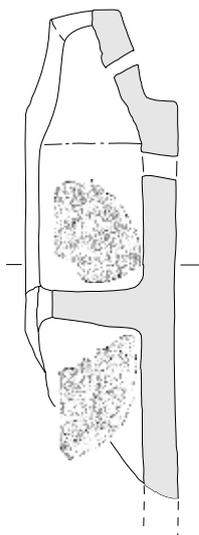


K22

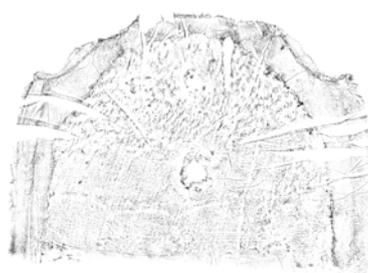
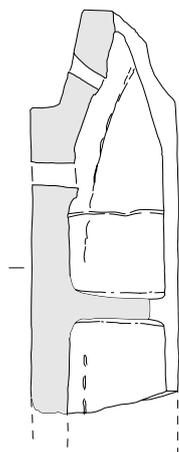
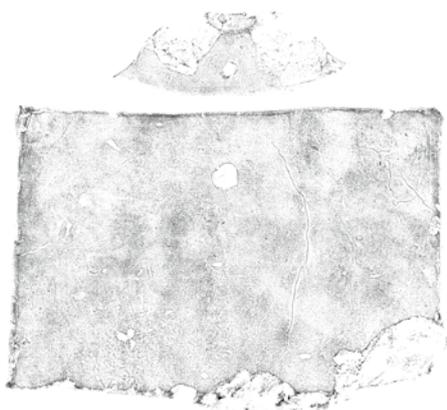
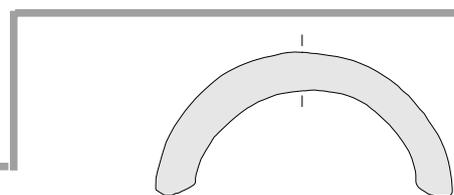




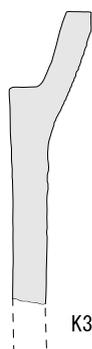
0 10cm



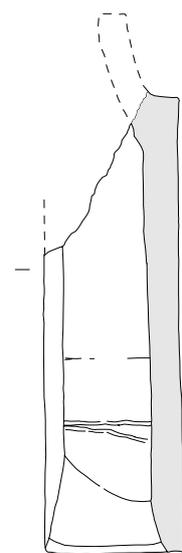
K30



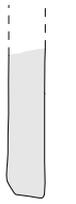
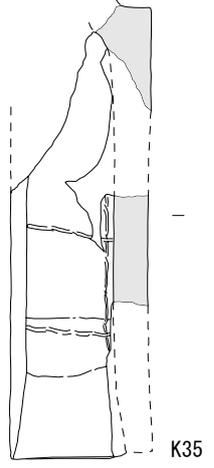
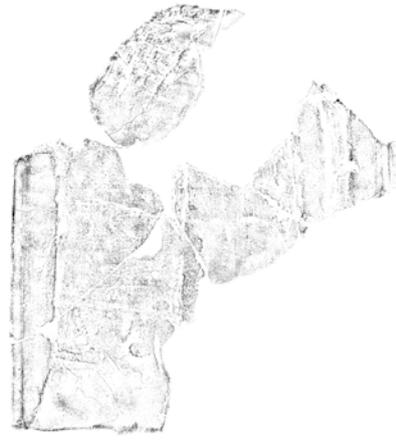
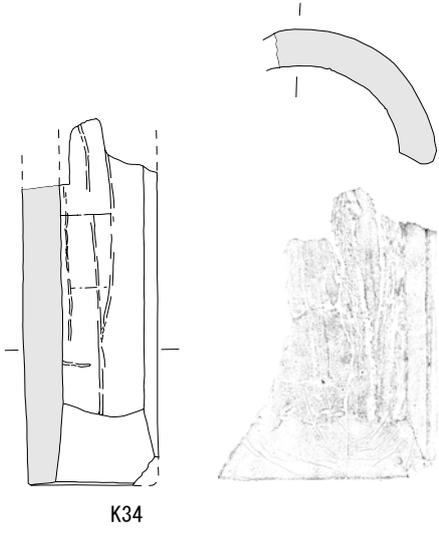
K31



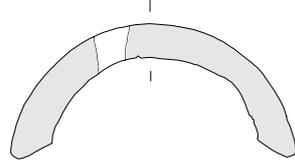
K32



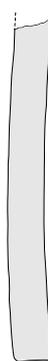
K33



K36

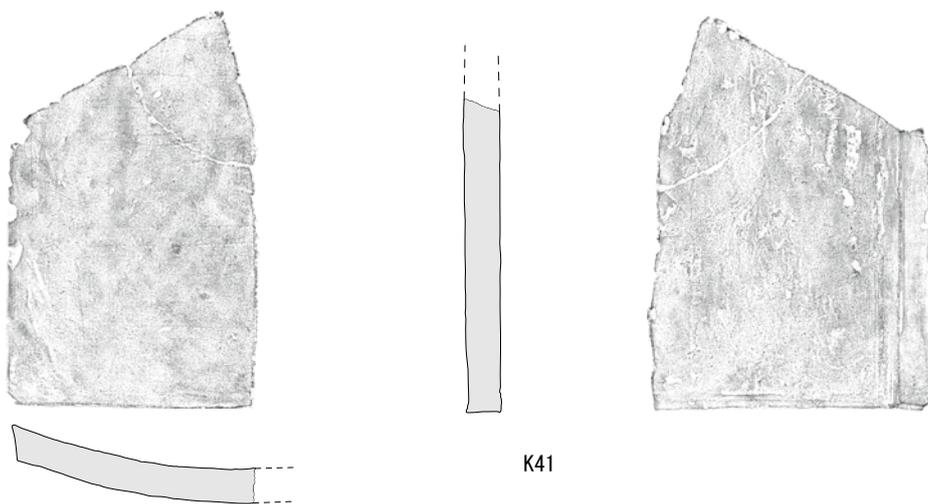
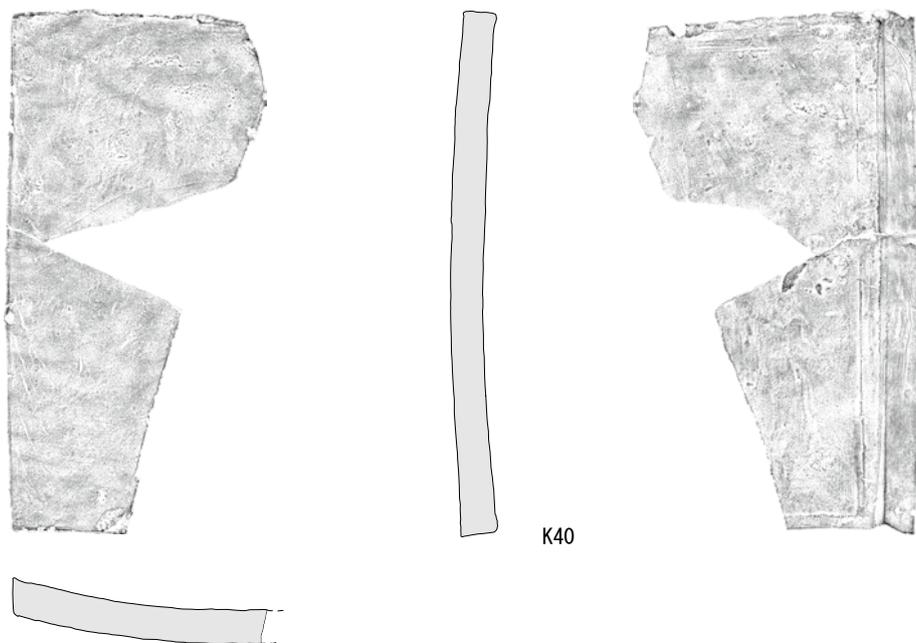
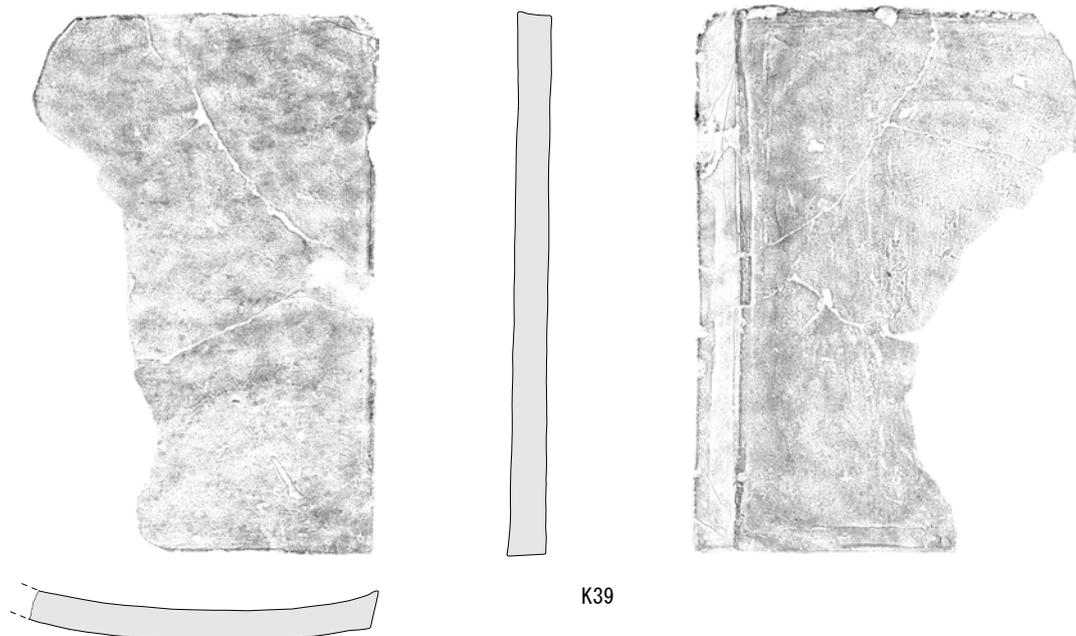


K37



K38

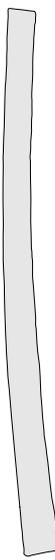
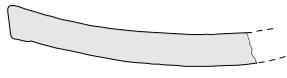
0 10cm



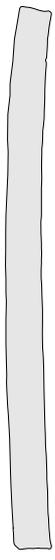
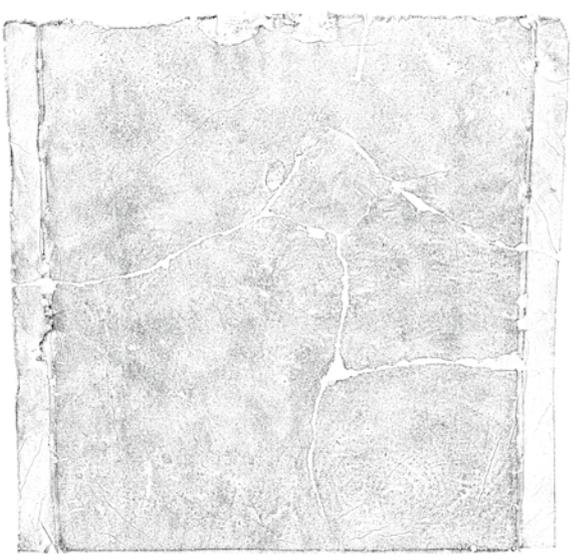
0 10cm



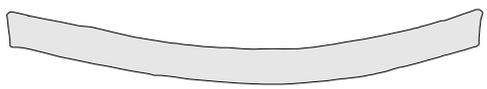
K42

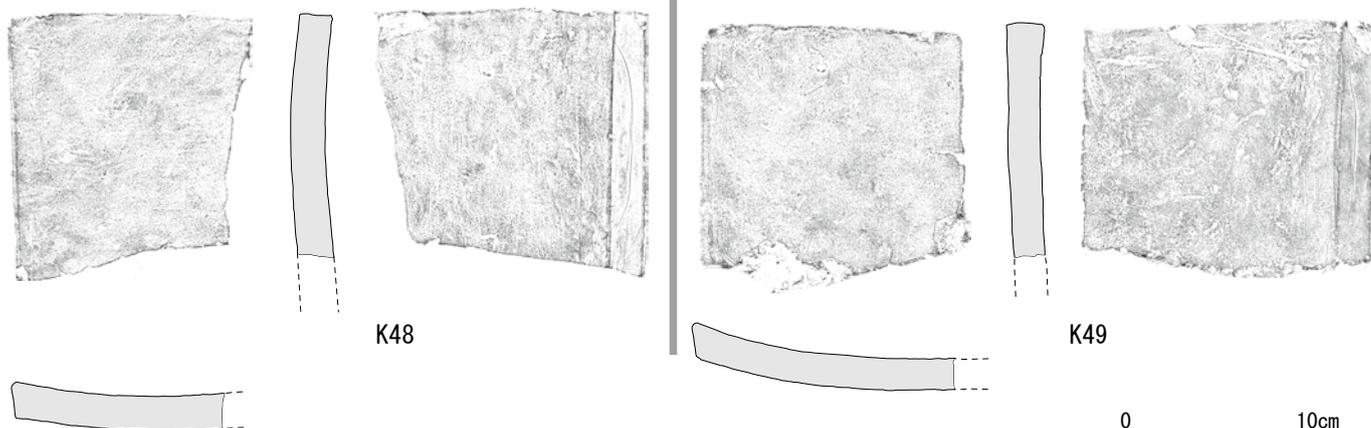
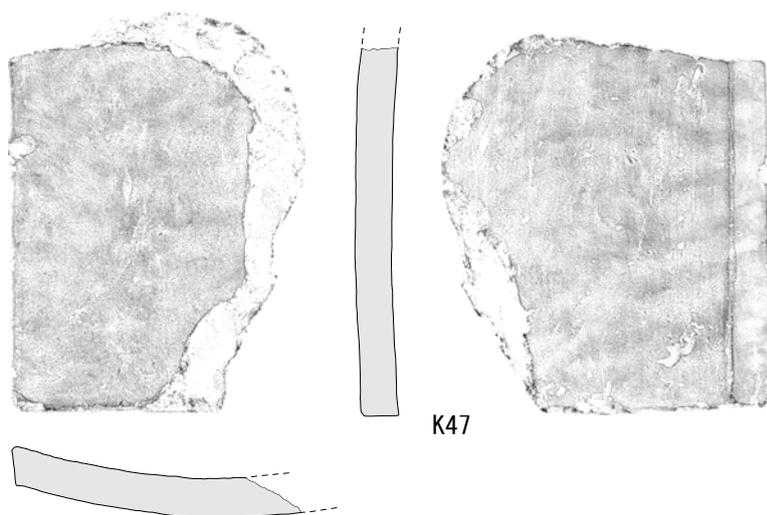
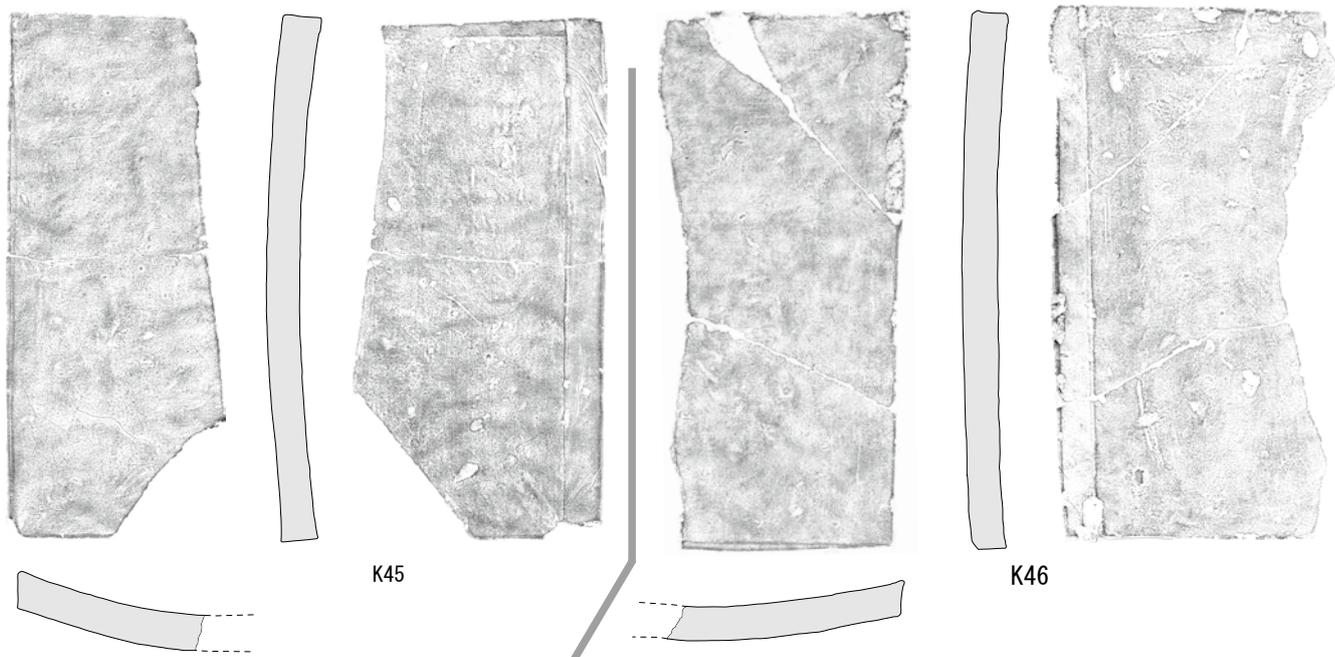


K43

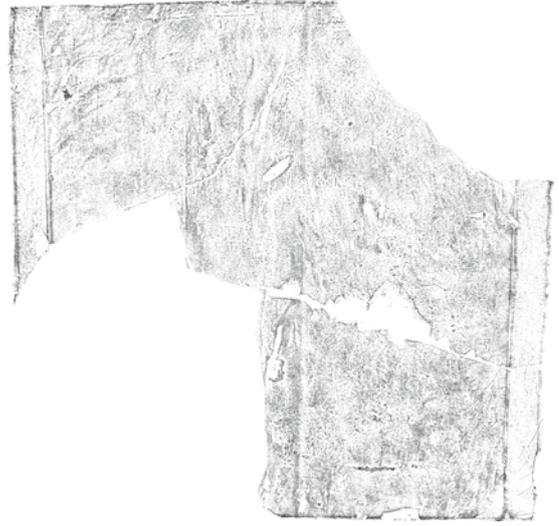


K44

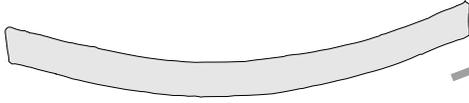




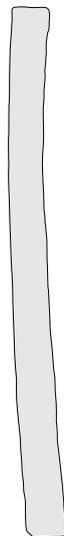
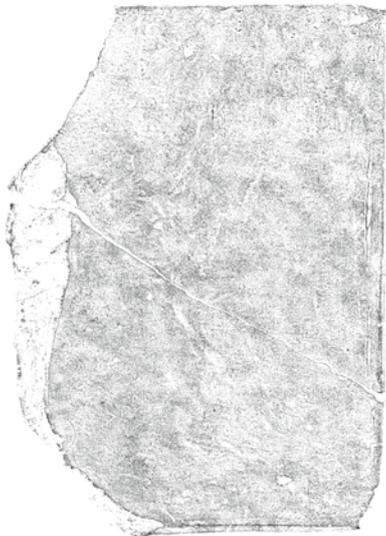
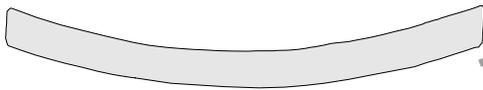
0 10cm



K50



K51



K52



0 10cm



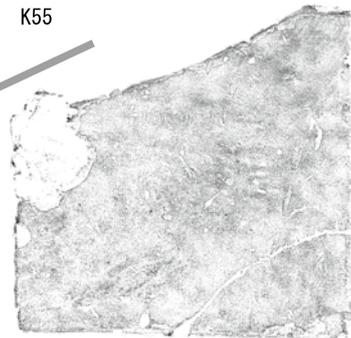
K53



K54



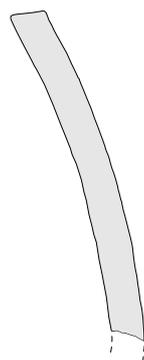
K55

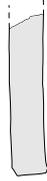
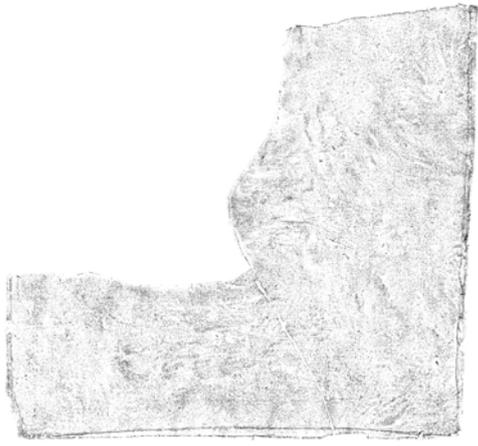


K57

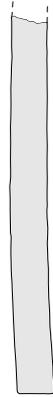
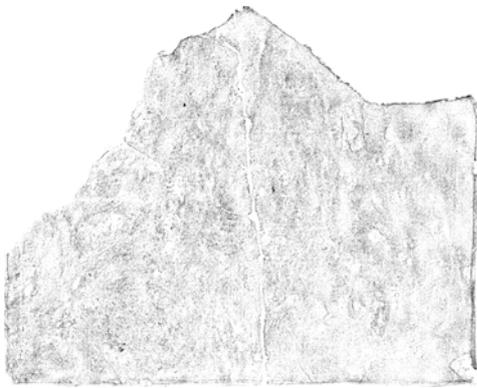
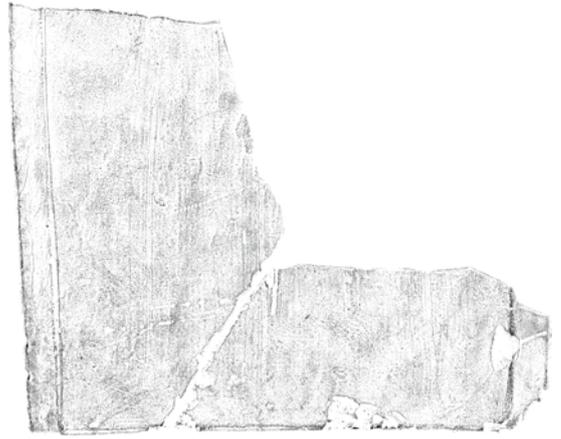


K56





K58



K59



K60



K99

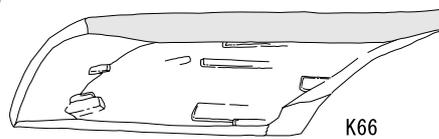
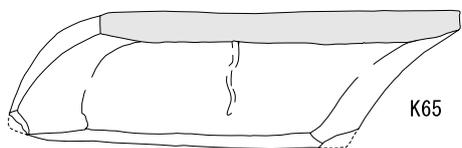
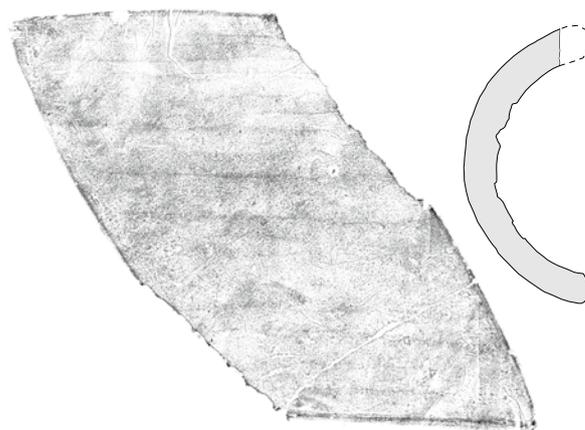
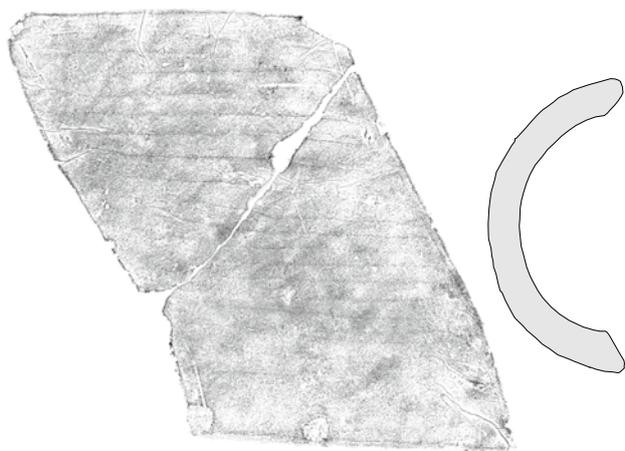
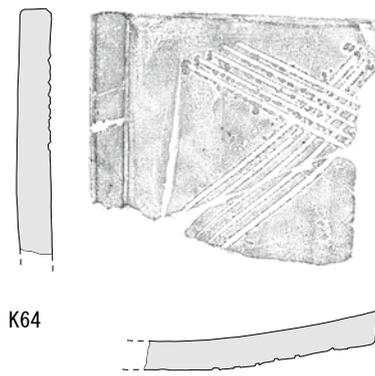
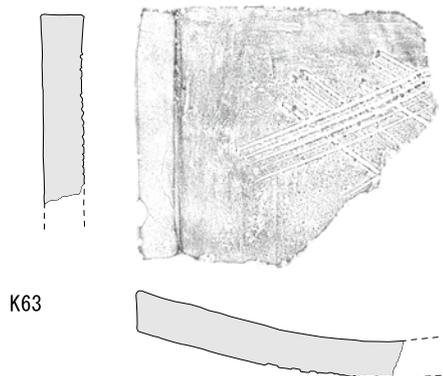
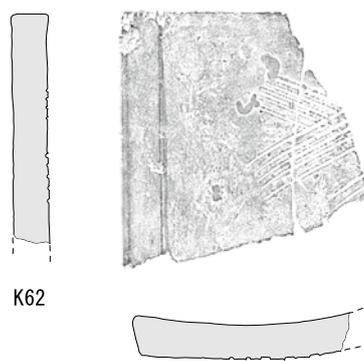
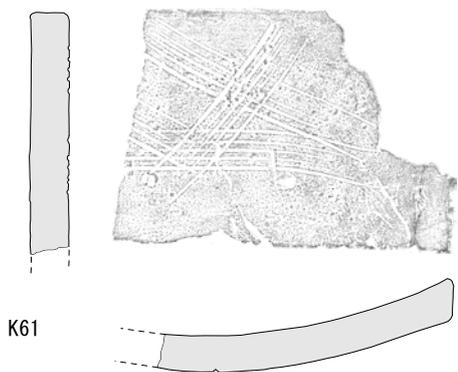


K100

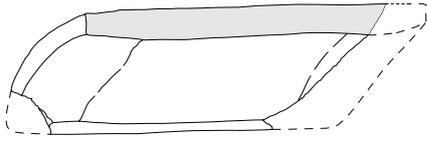
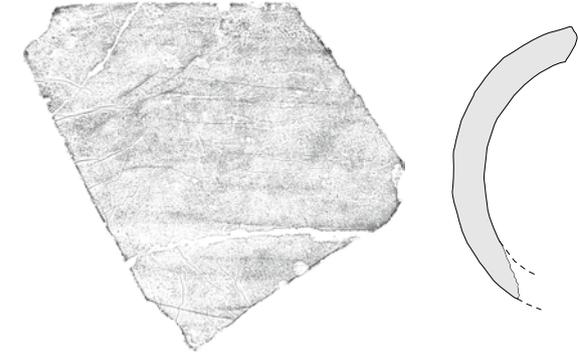


K101





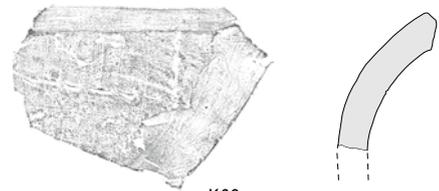
0 10cm



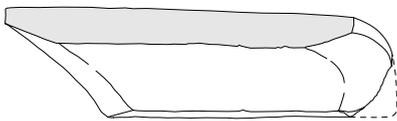
K67



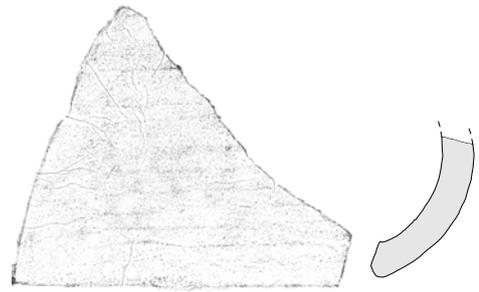
K68



K69



K70



K71





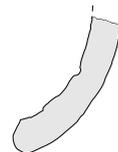
K72



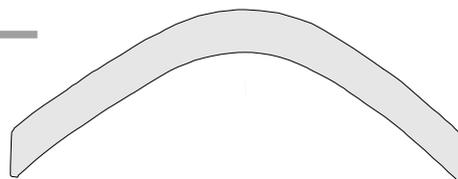
K73



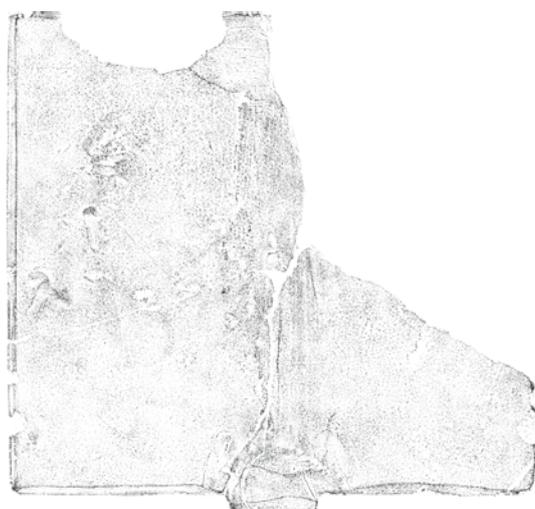
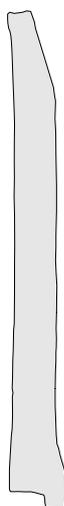
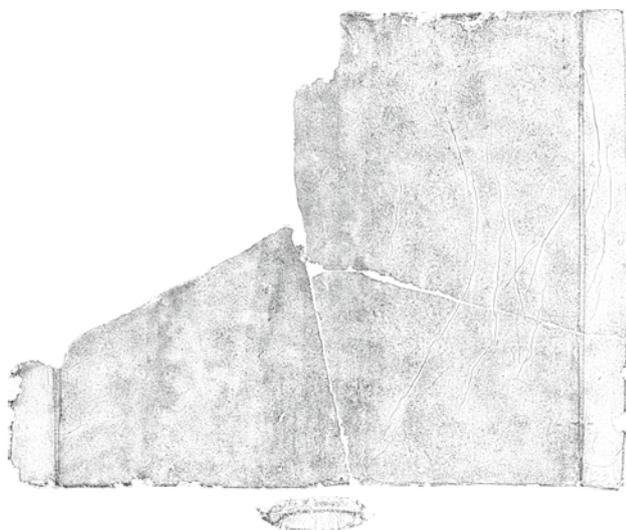
K74

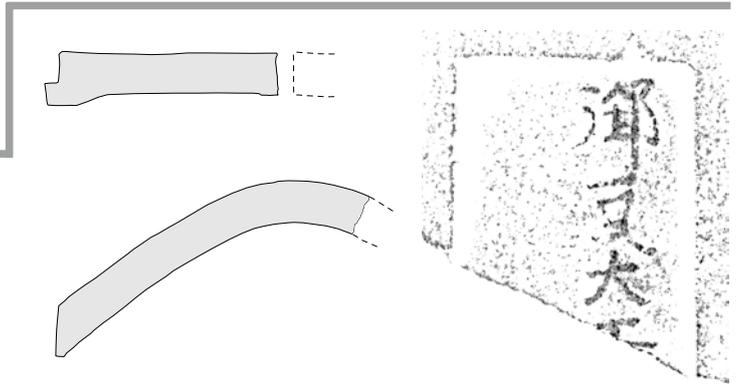
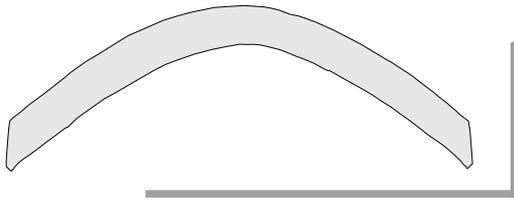
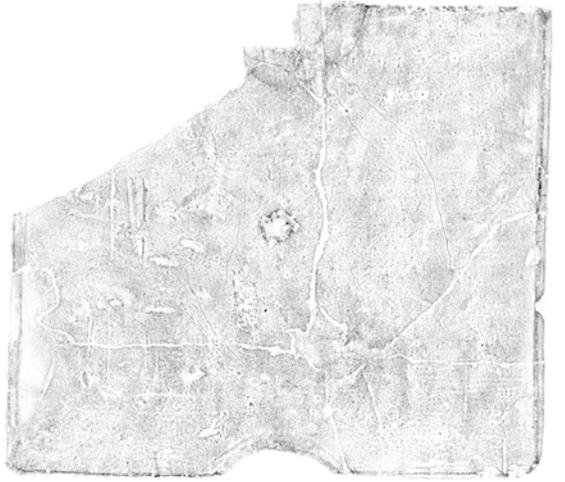
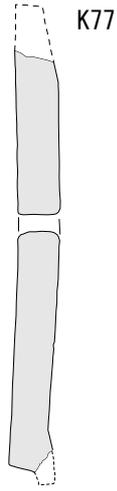
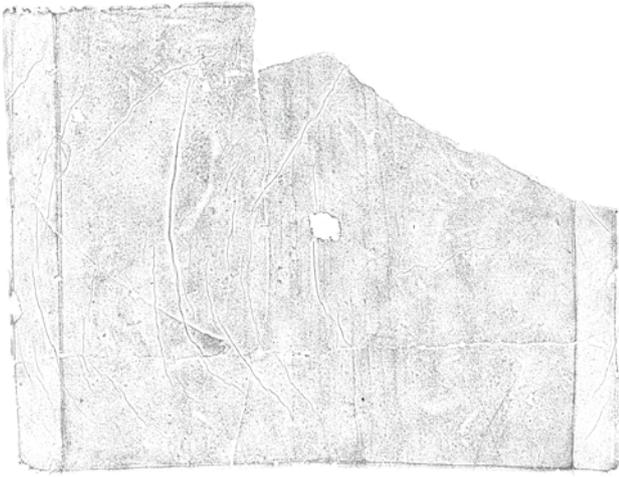


K75

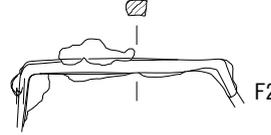
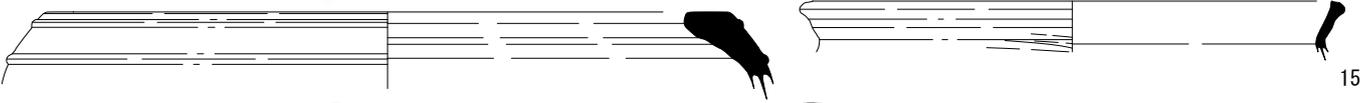
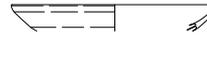
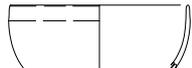
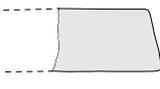
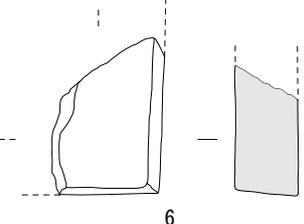
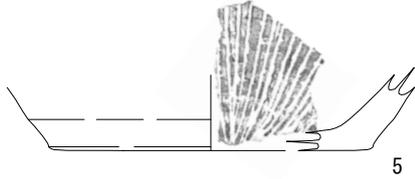
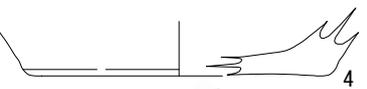
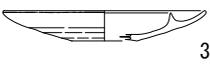
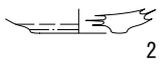
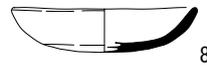


K76

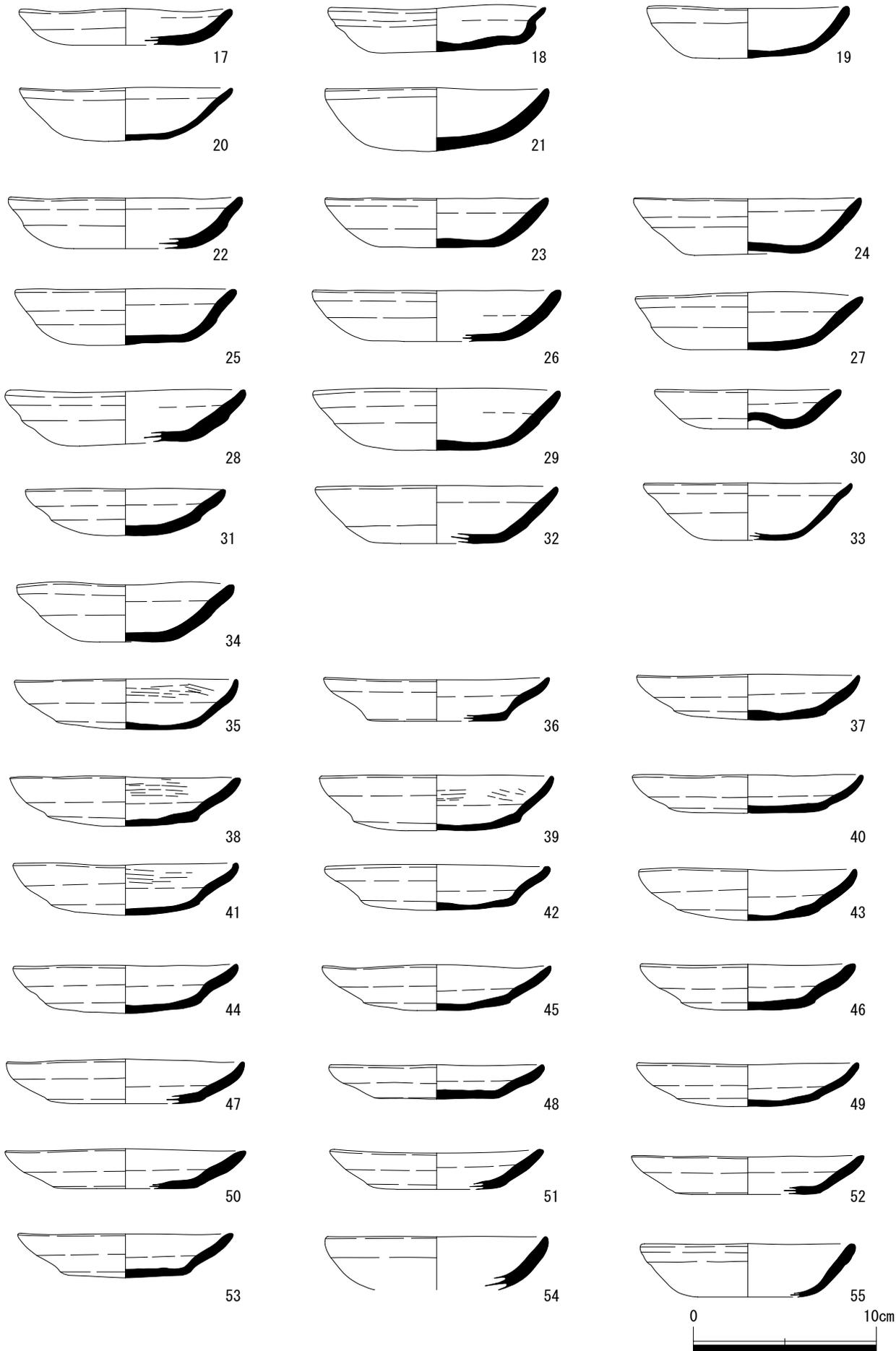




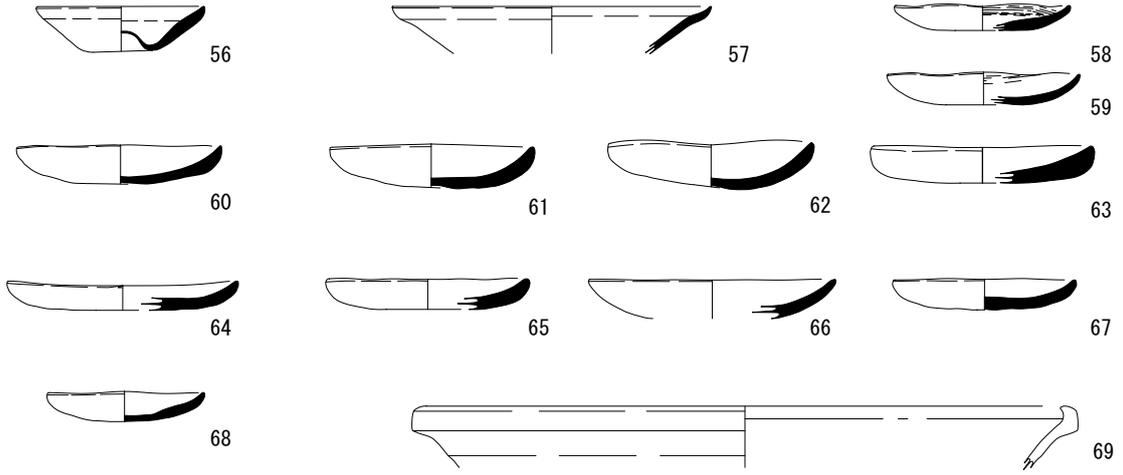
K78



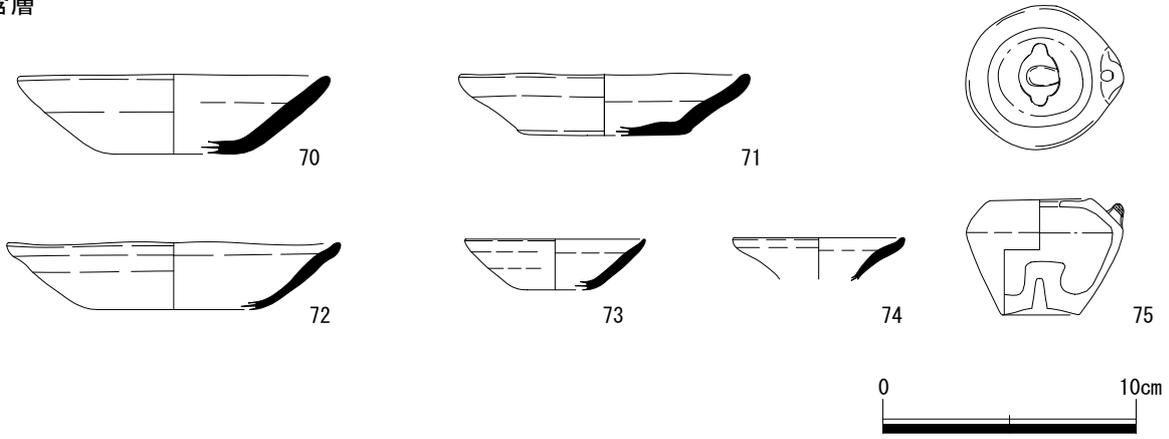
SD1



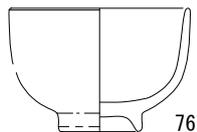
SD1



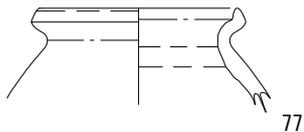
包含層



P18

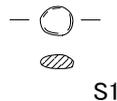


76



77

P21



S1

SK1



80

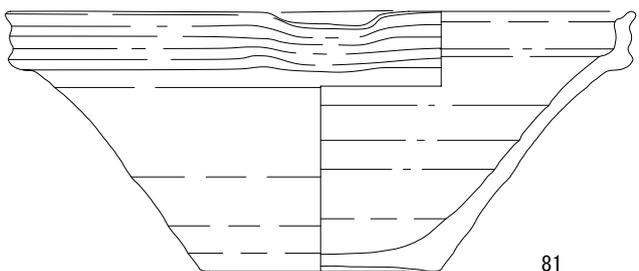
P14



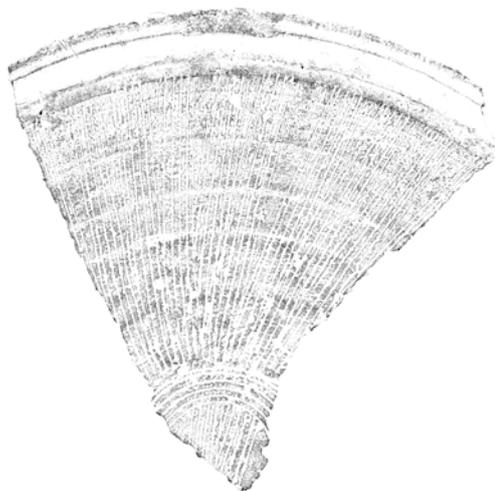
78



79

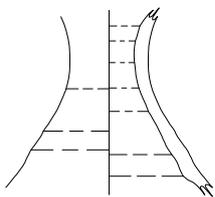


81



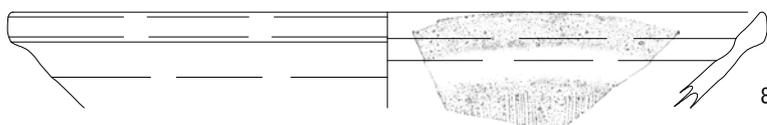
82

SK2

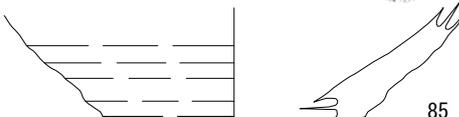
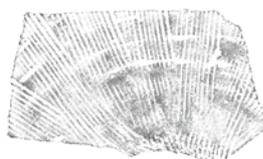


83

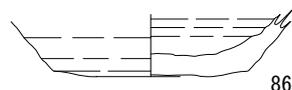
SK3



84

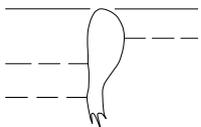


85



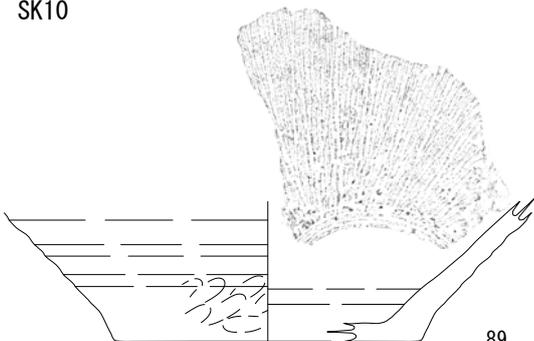
86

SK6



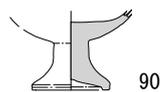
87

SK10



89

SK11

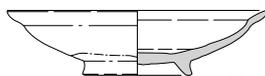


90



91

SK9



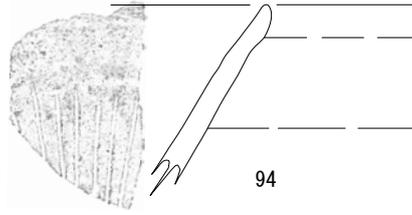
88



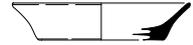
92



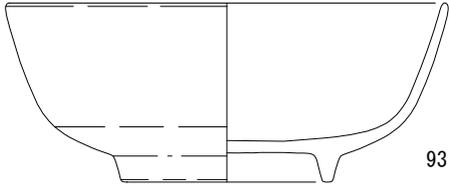
SK11



96



97



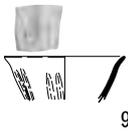
93



95



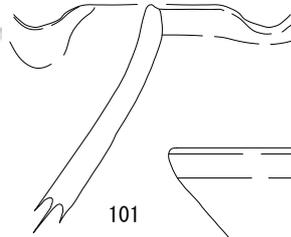
SK12



98



99



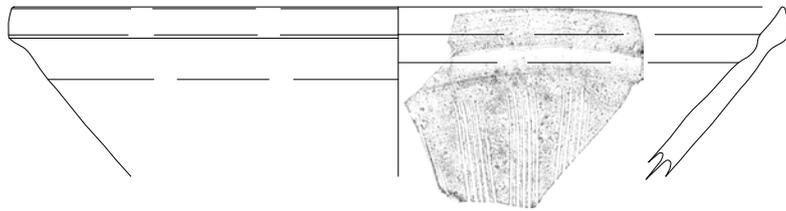
101



102



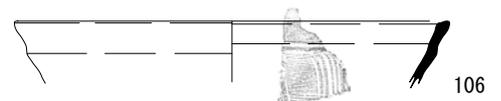
100



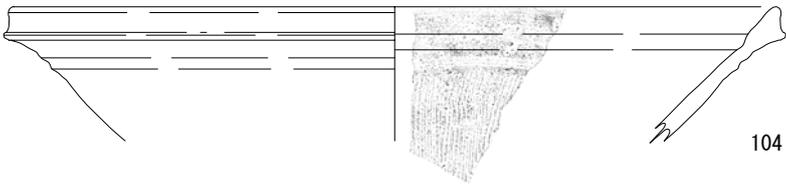
103



105



106



104

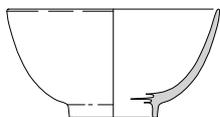


107

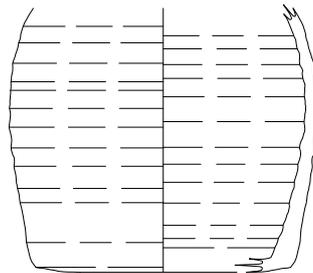
SK13



108



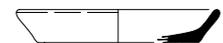
109



110



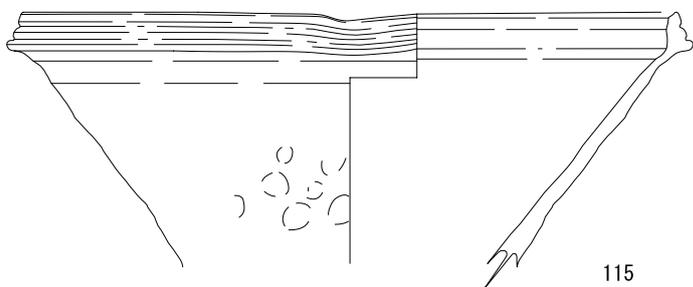
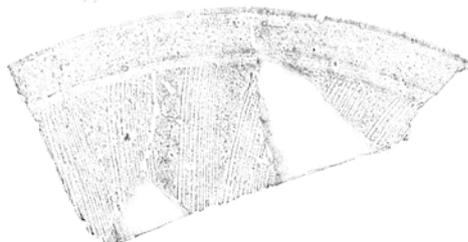
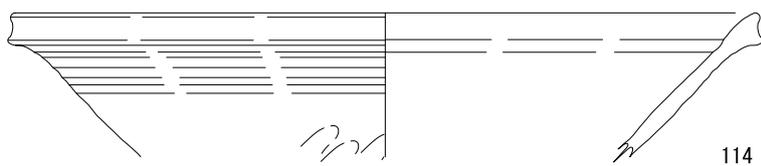
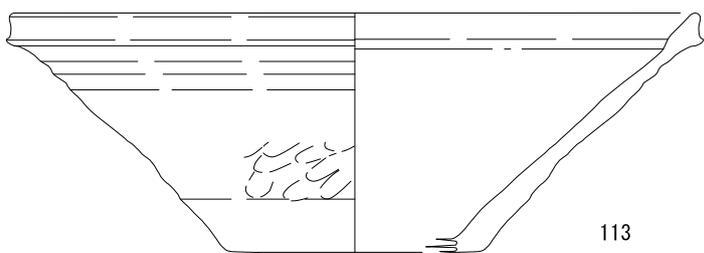
111



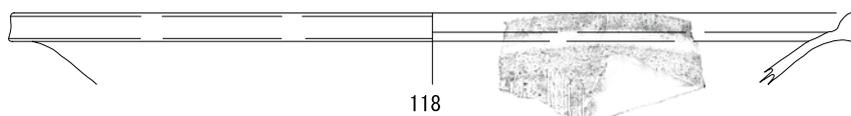
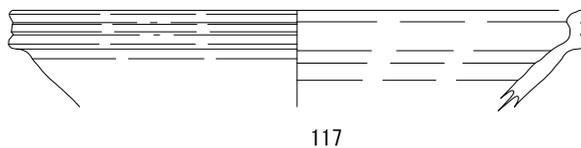
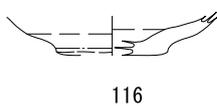
112



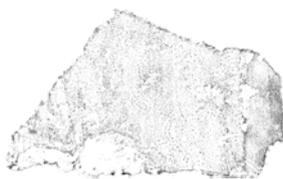
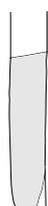
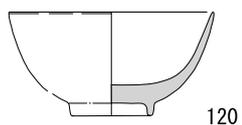
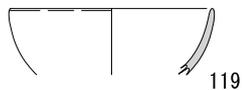
SK11



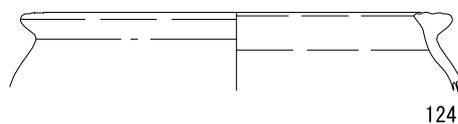
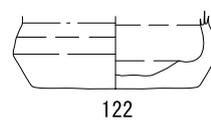
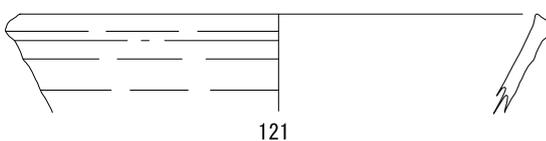
SD3



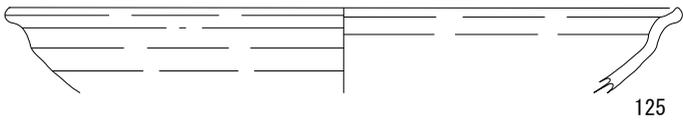
SD4



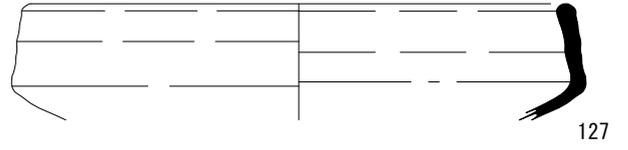
SD5



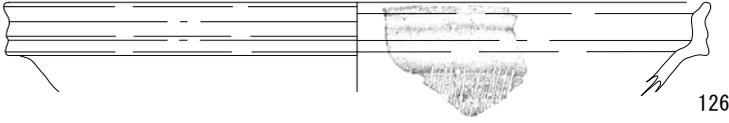
SD5



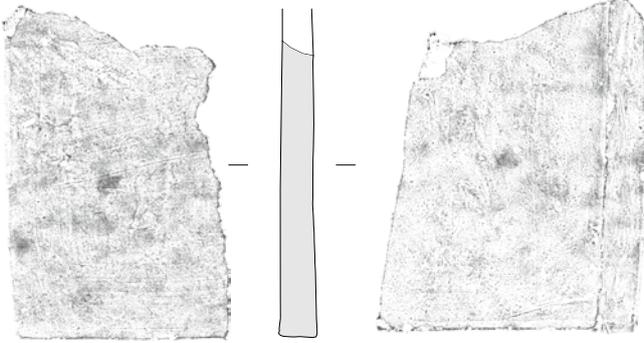
125



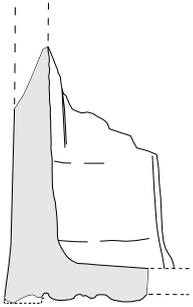
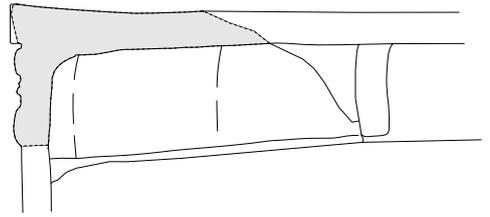
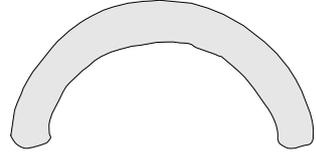
127



126



K80

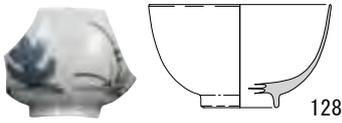


K82



K81

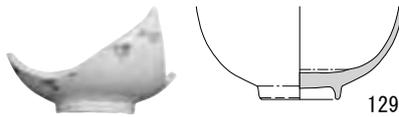
SD6



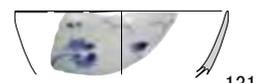
128



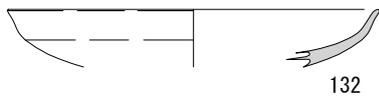
130



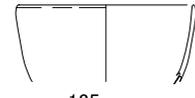
129



131



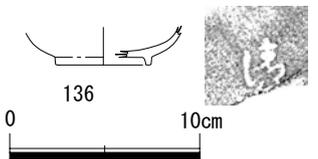
132



135



134

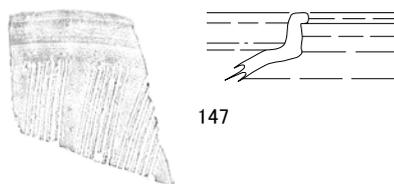
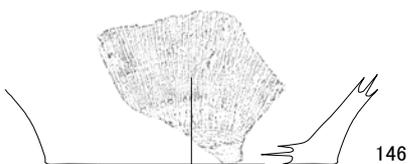
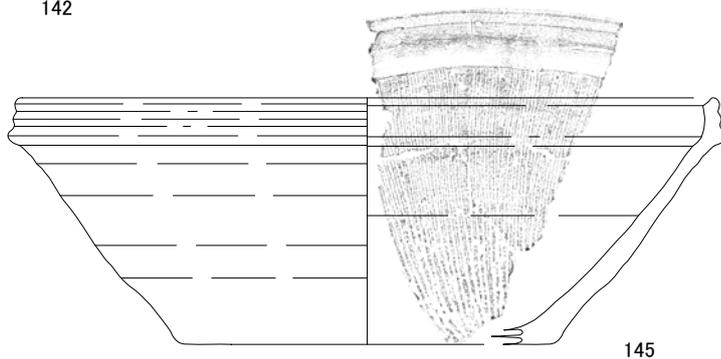
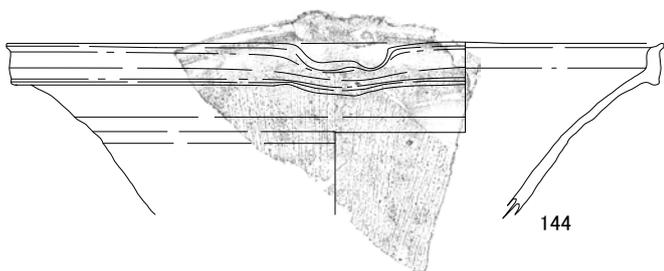
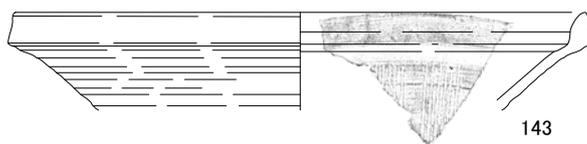
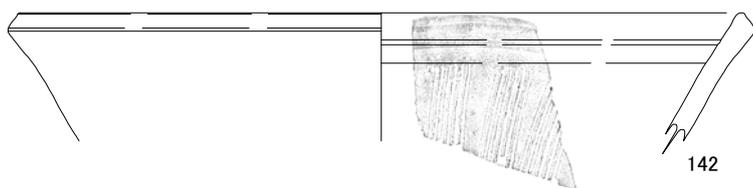
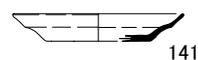
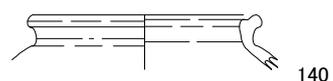
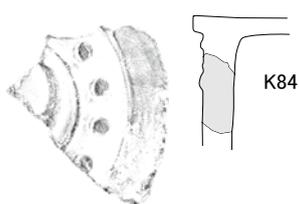
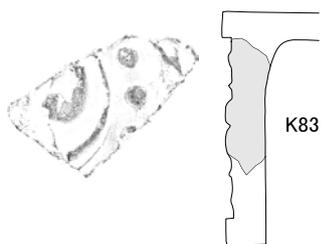
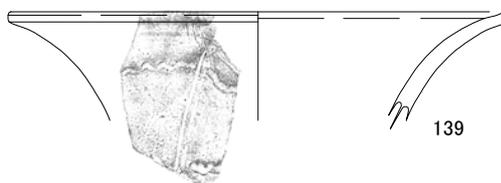
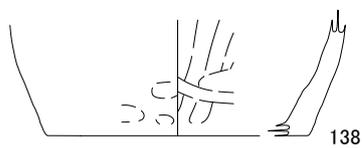
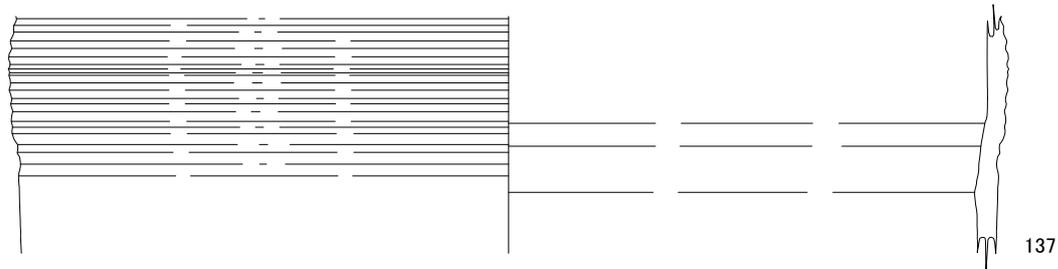


136

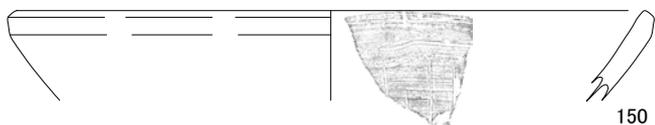
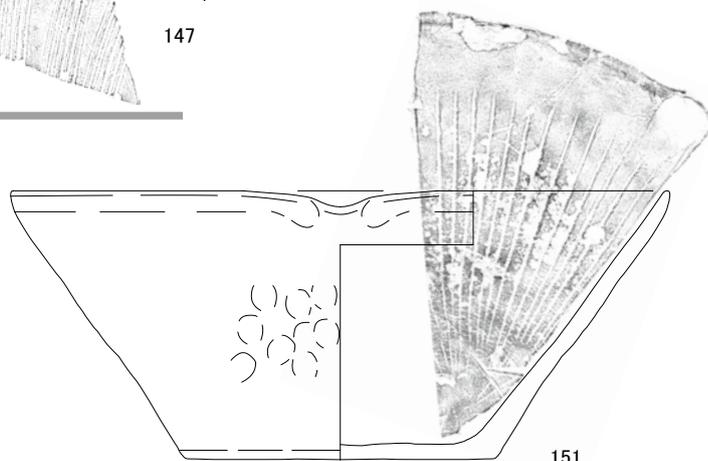
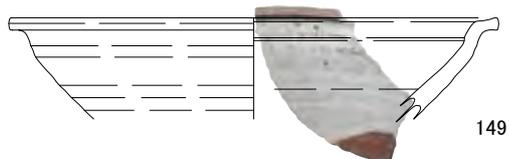
0 10cm

133

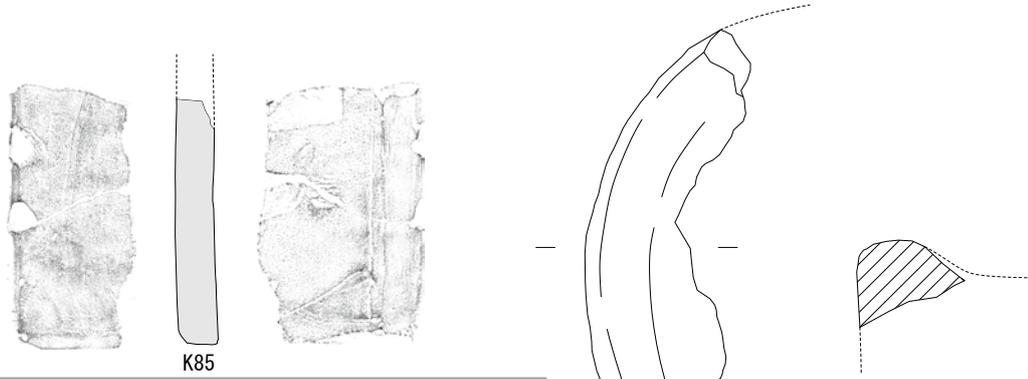
S06



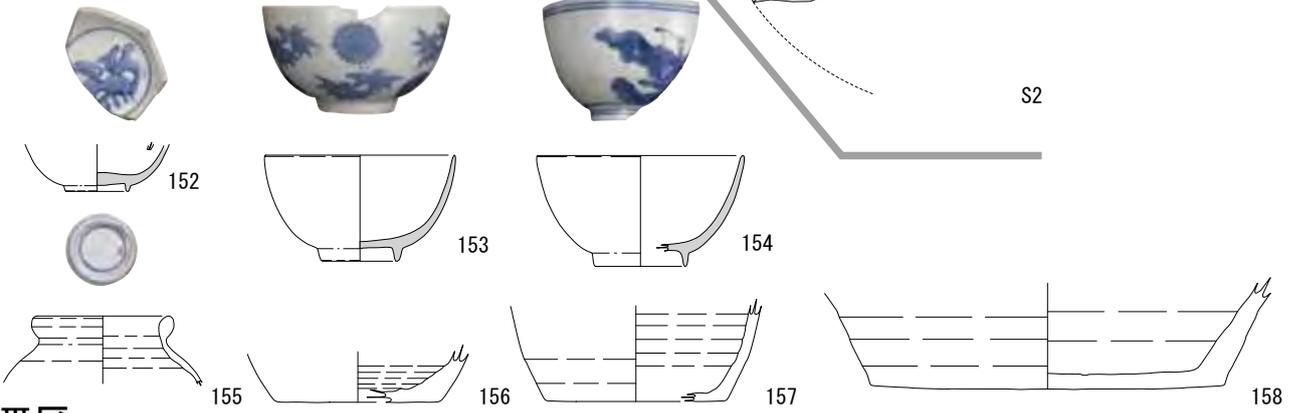
南側落ち



南側落ち

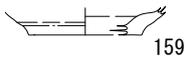


包含層



BⅢ区

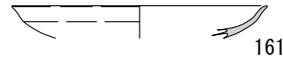
P6



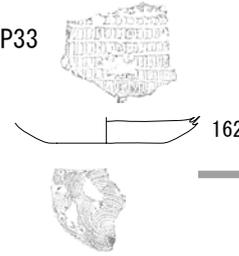
P14



P27



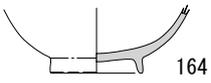
P33



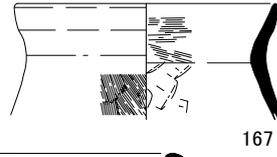
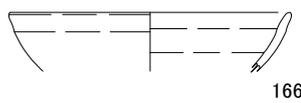
P35



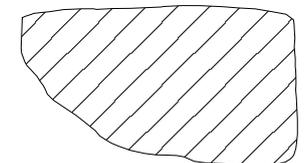
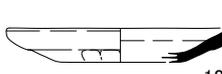
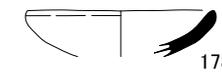
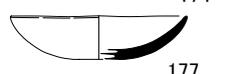
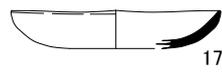
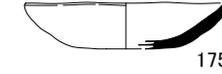
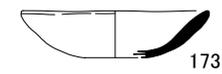
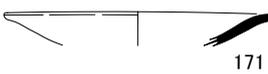
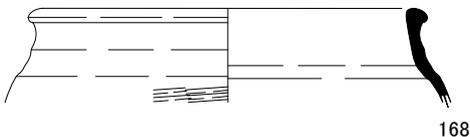
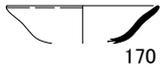
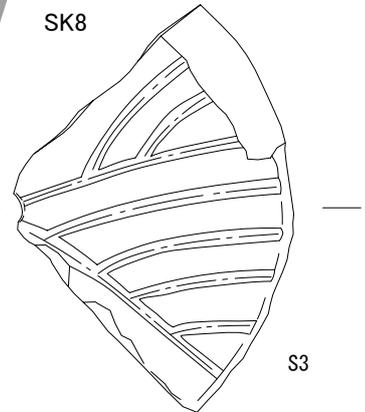
SK4



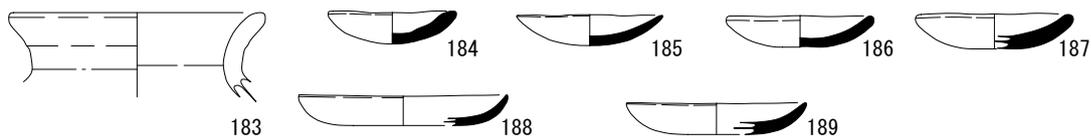
SK7



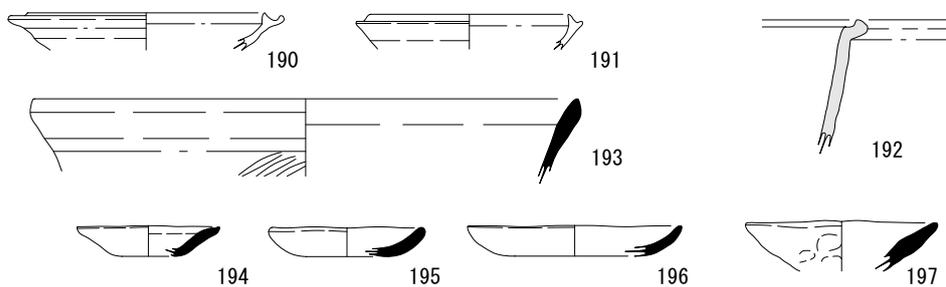
SK8



南東落ち

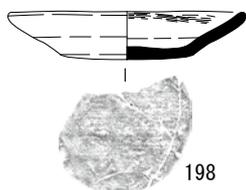


包含層



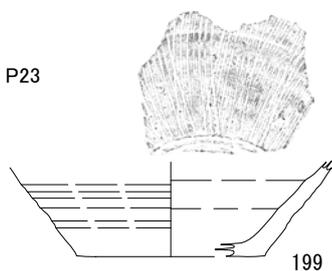
BIV区

P18



198

P23



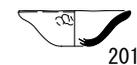
199

P26



200

SK1



201



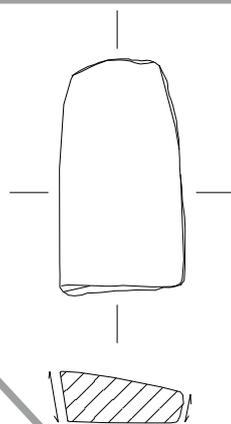
202



203

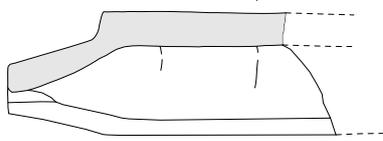
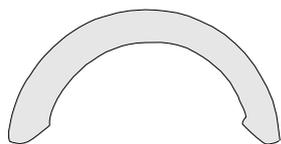


204

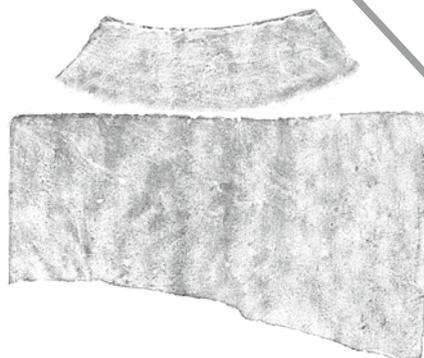


S4

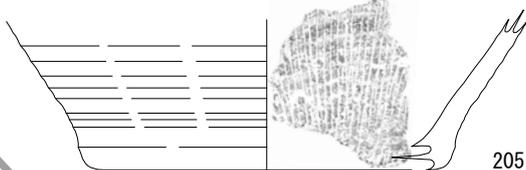
SK2



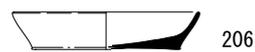
K86



SK3



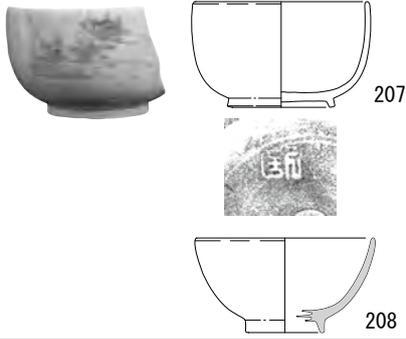
205



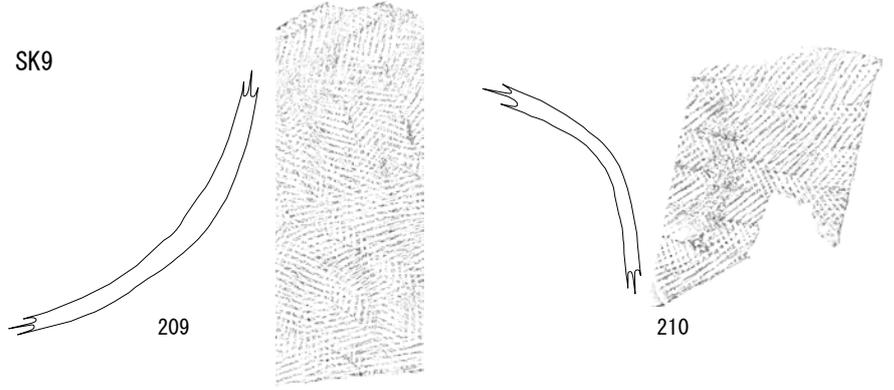
206



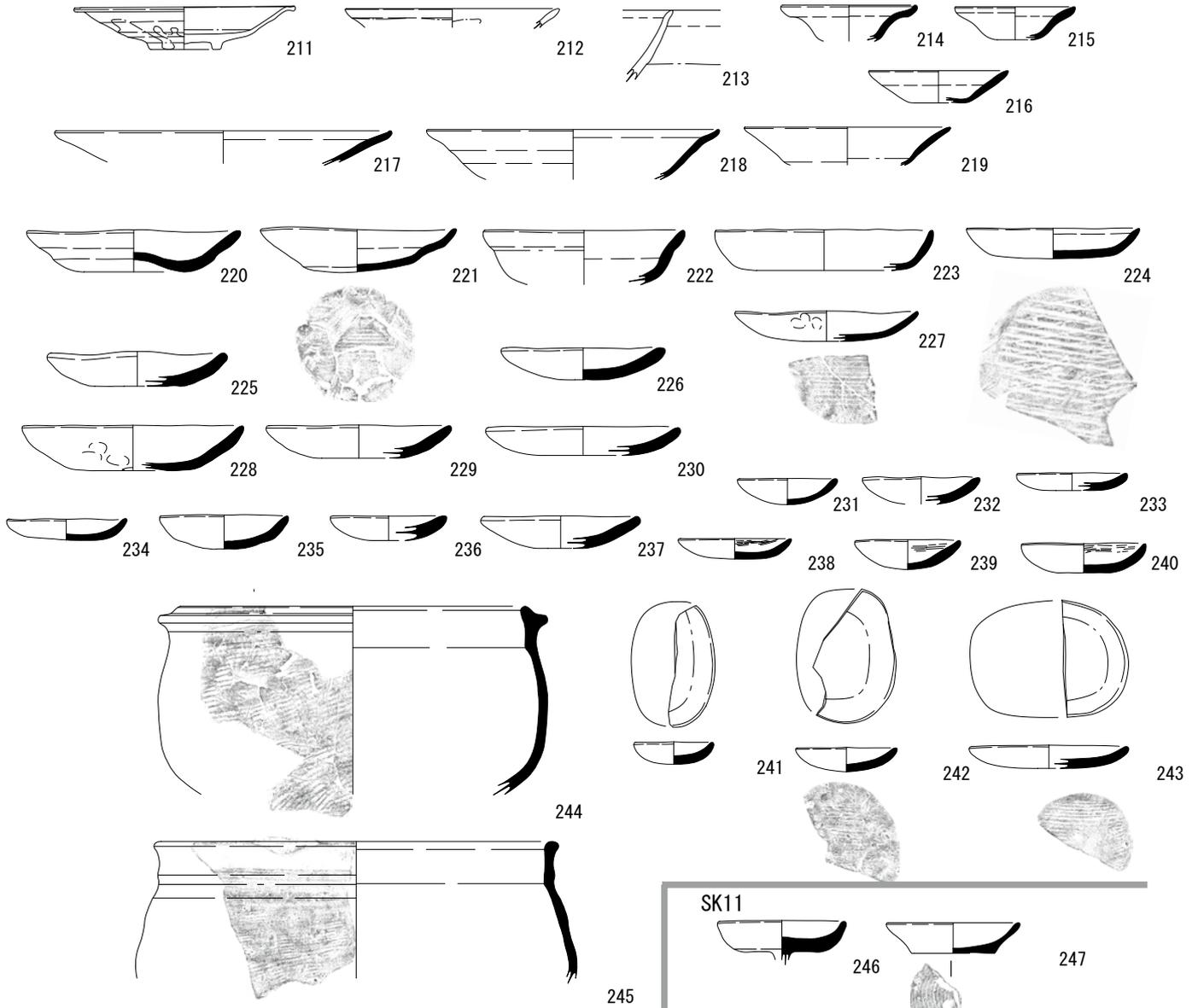
SK8



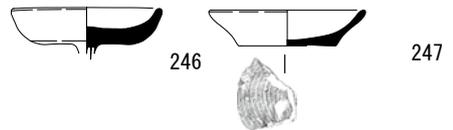
SK9



SK10



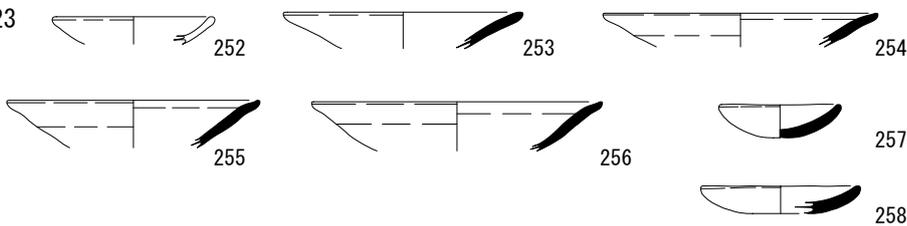
SK11



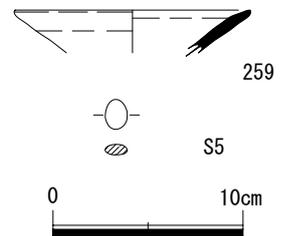
SK18



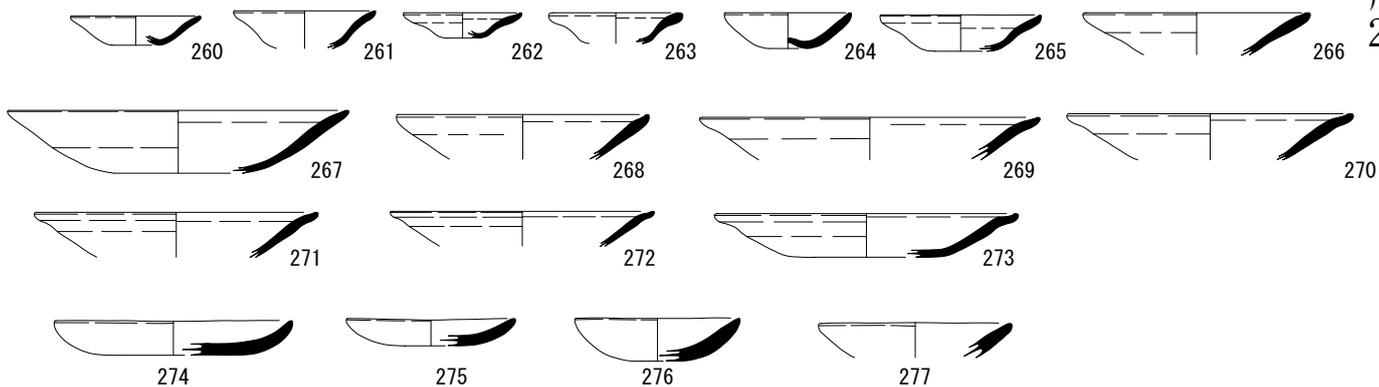
SK23



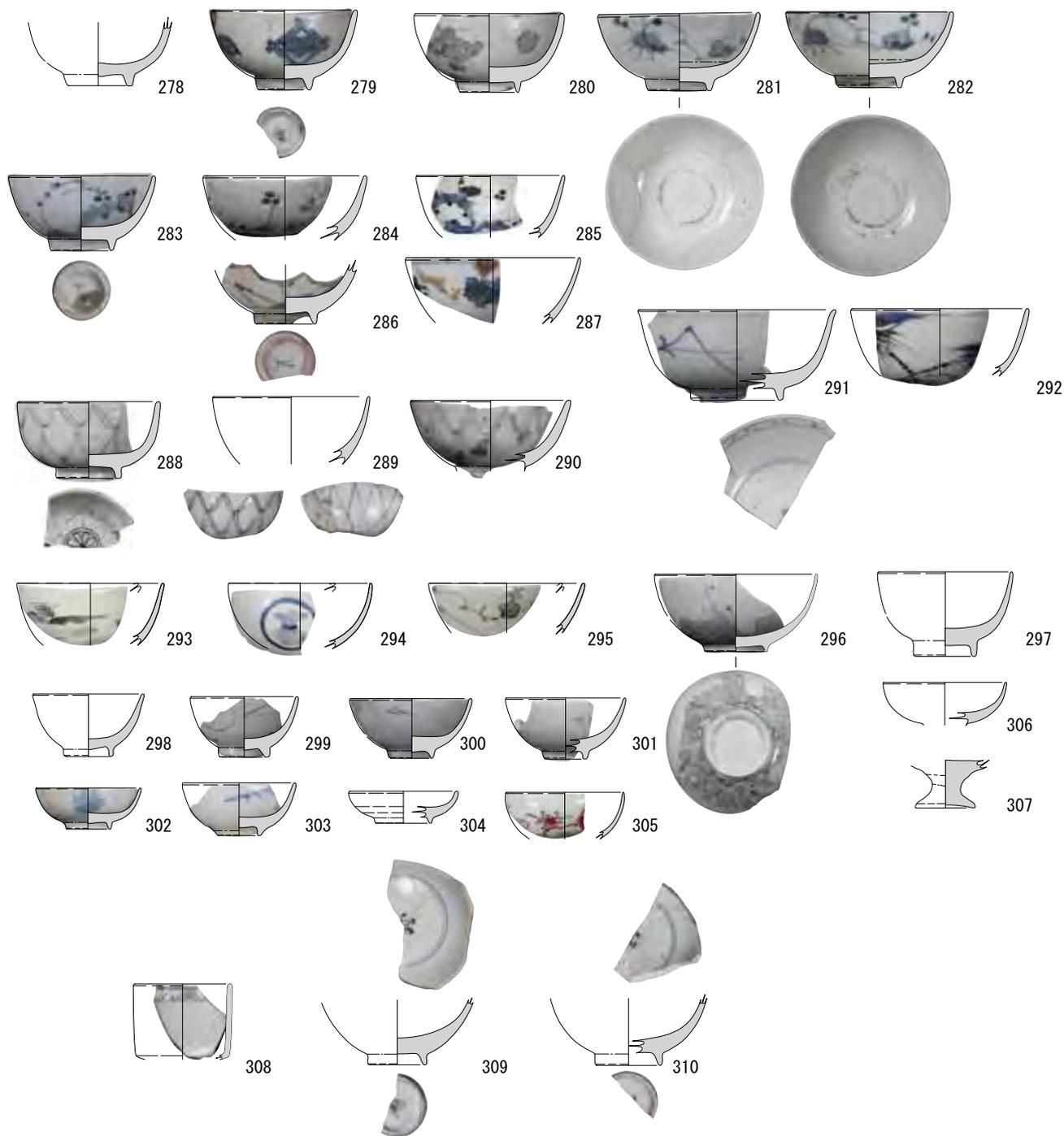
SK24



SK25



SD1



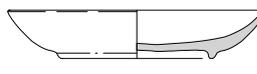
SD1



311



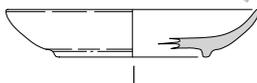
312



313



314



316



317



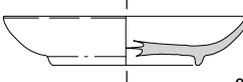
318

319

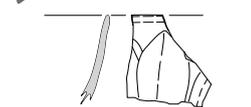


320

321



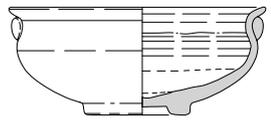
315



324



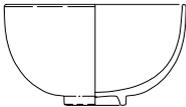
322



323



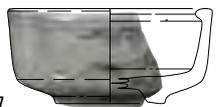
325



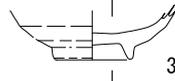
326



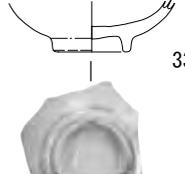
327



328



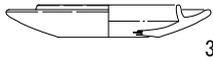
329



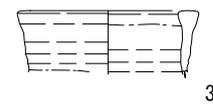
330



332



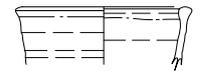
331



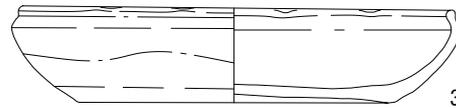
333



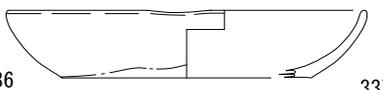
335



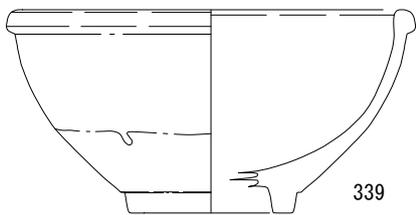
334



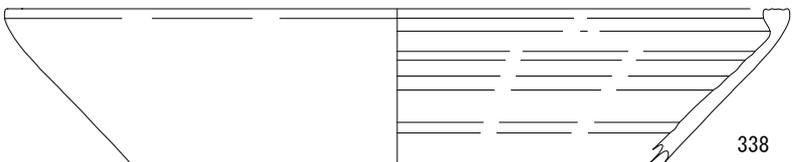
336



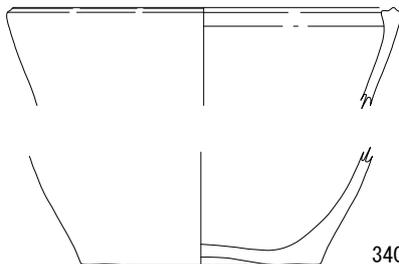
337



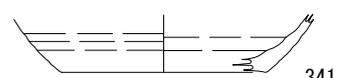
339



338



340



341

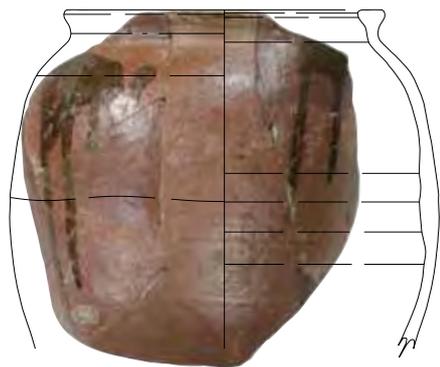


342

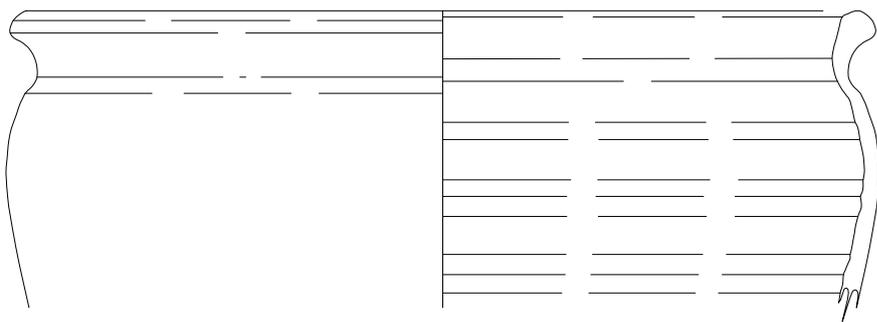


343





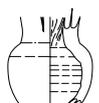
344



345



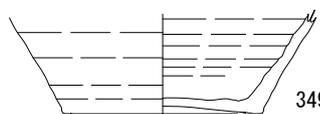
346



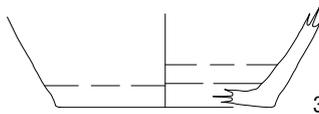
347



348



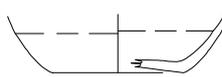
349



350



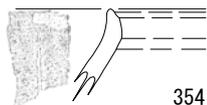
353



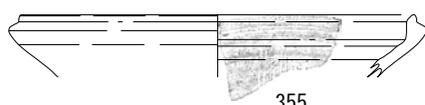
351



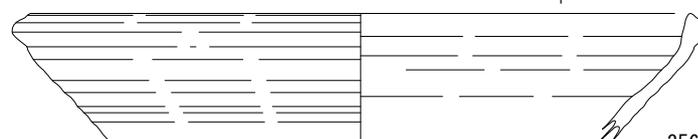
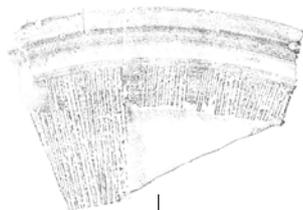
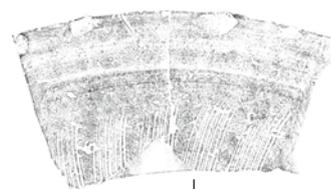
352



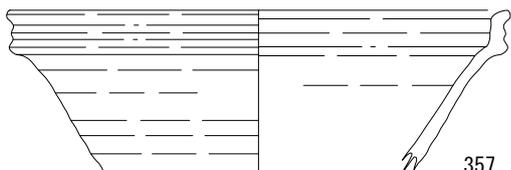
354



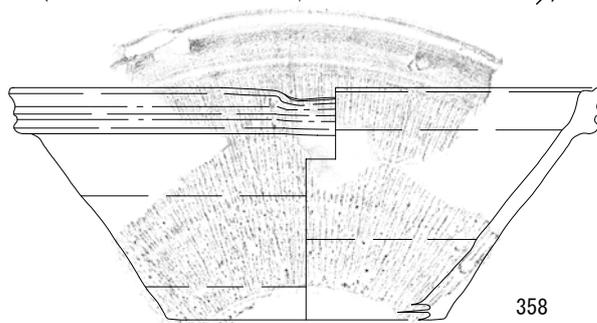
355



356



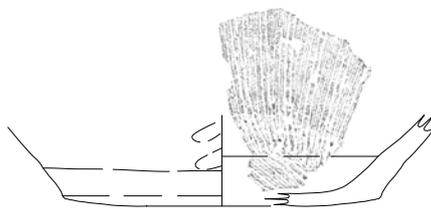
357



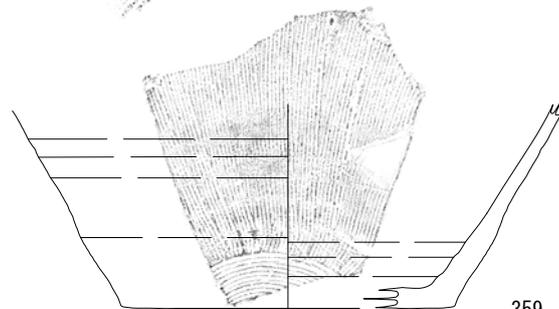
358



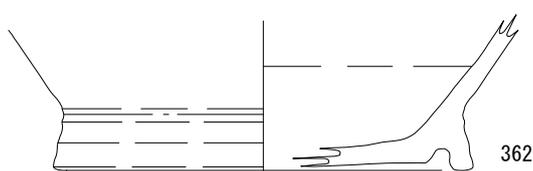
360



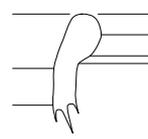
361



359

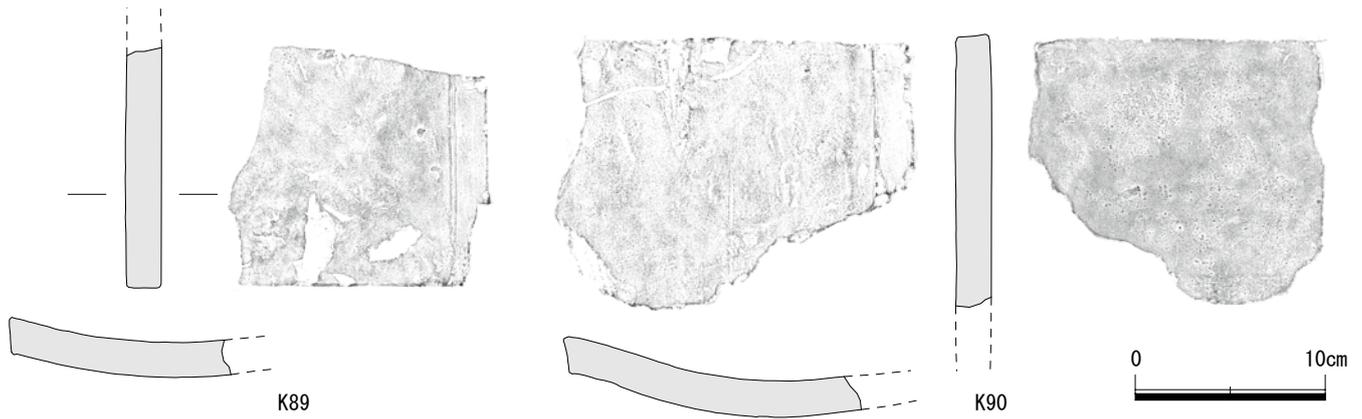
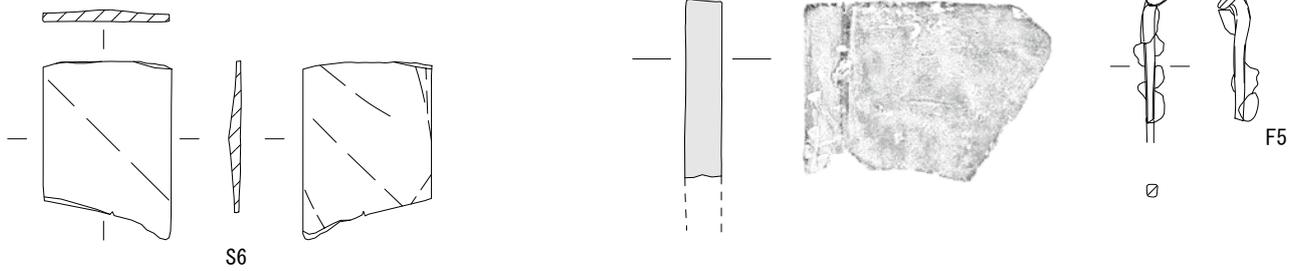
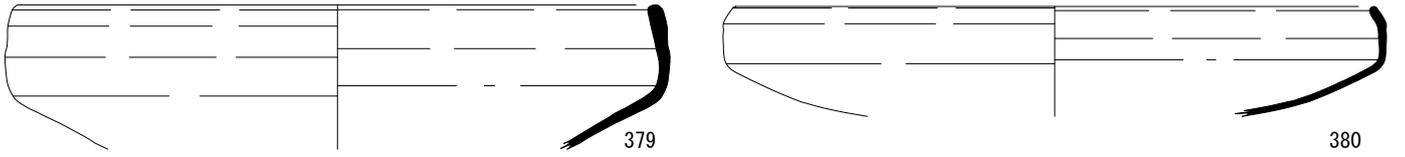
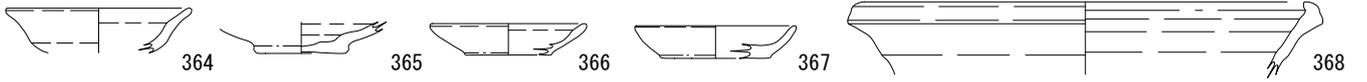


362

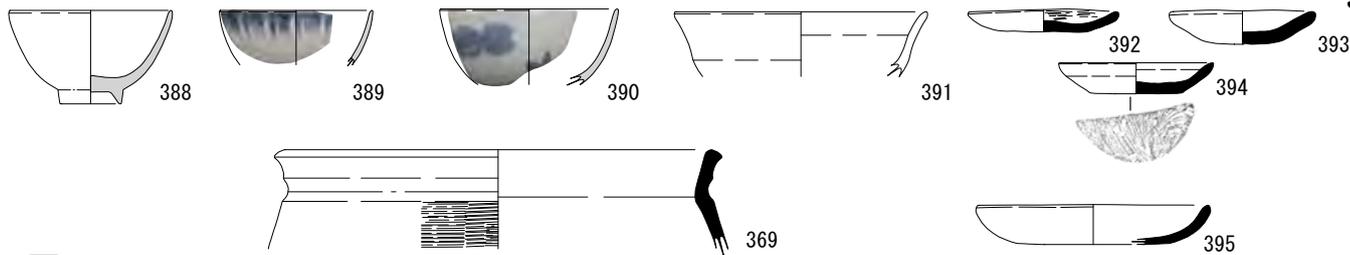


363



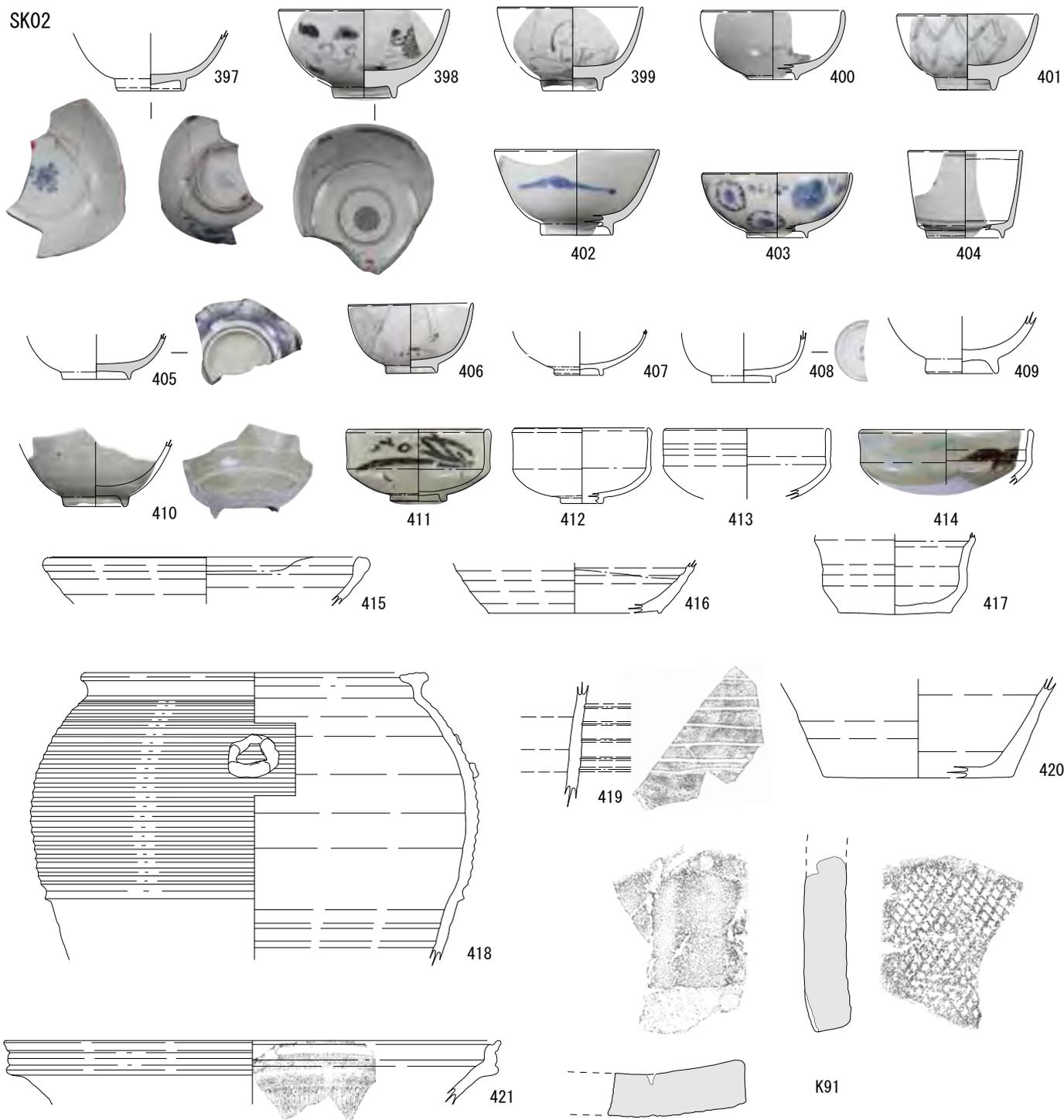


包含層

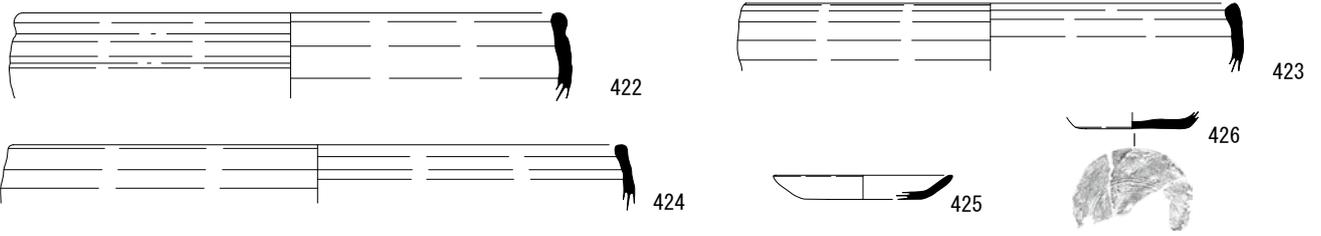


BV区

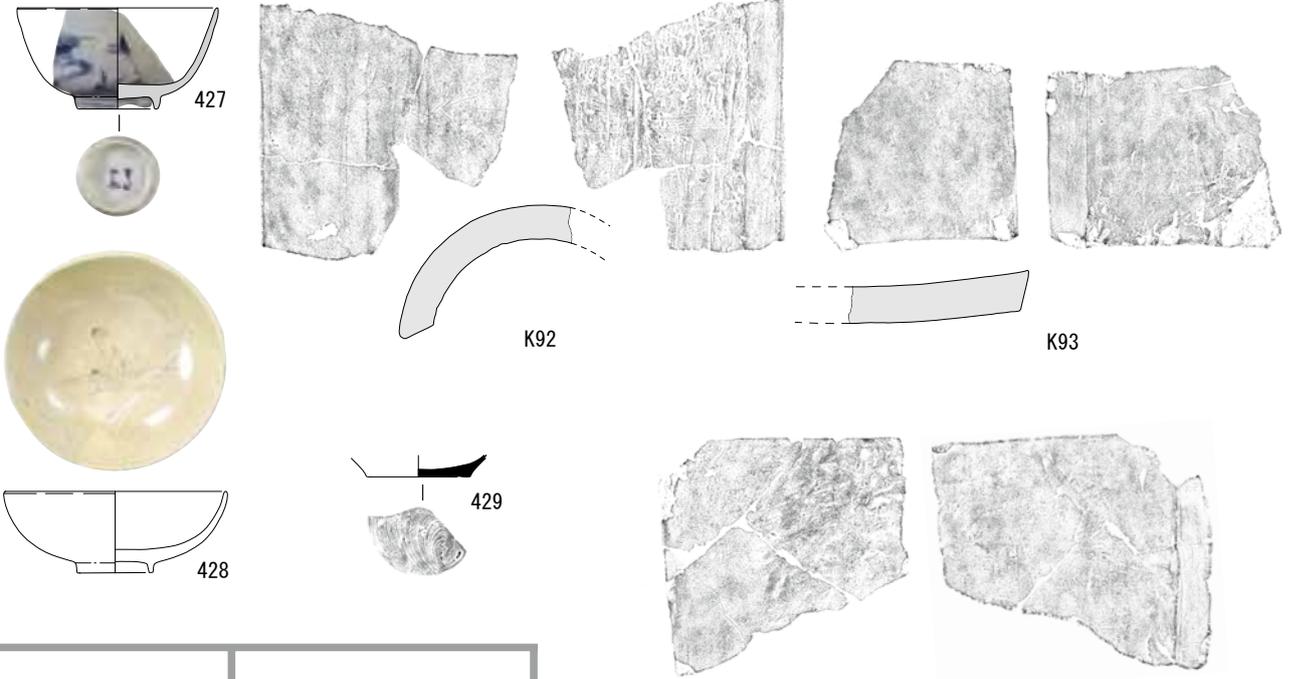
SK02



SK2



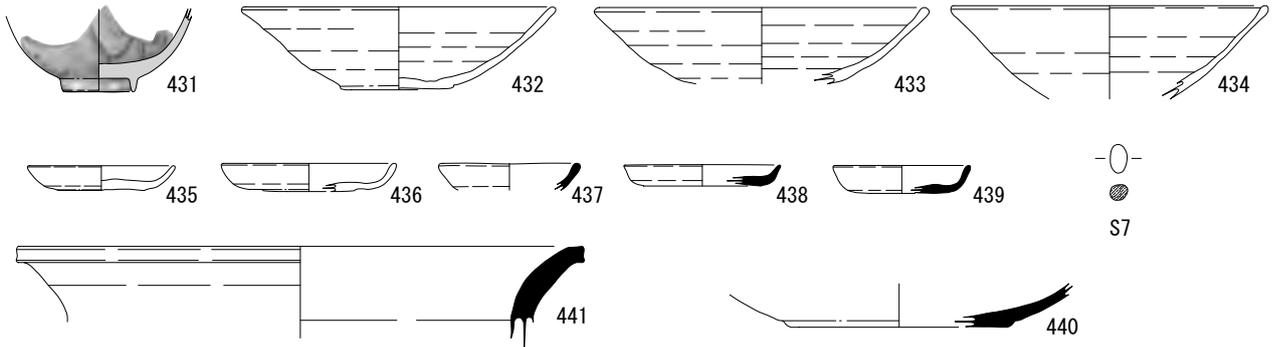
SK5



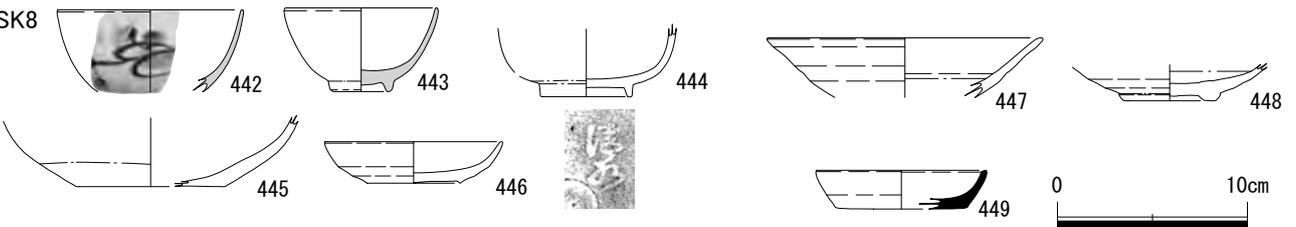
SK6



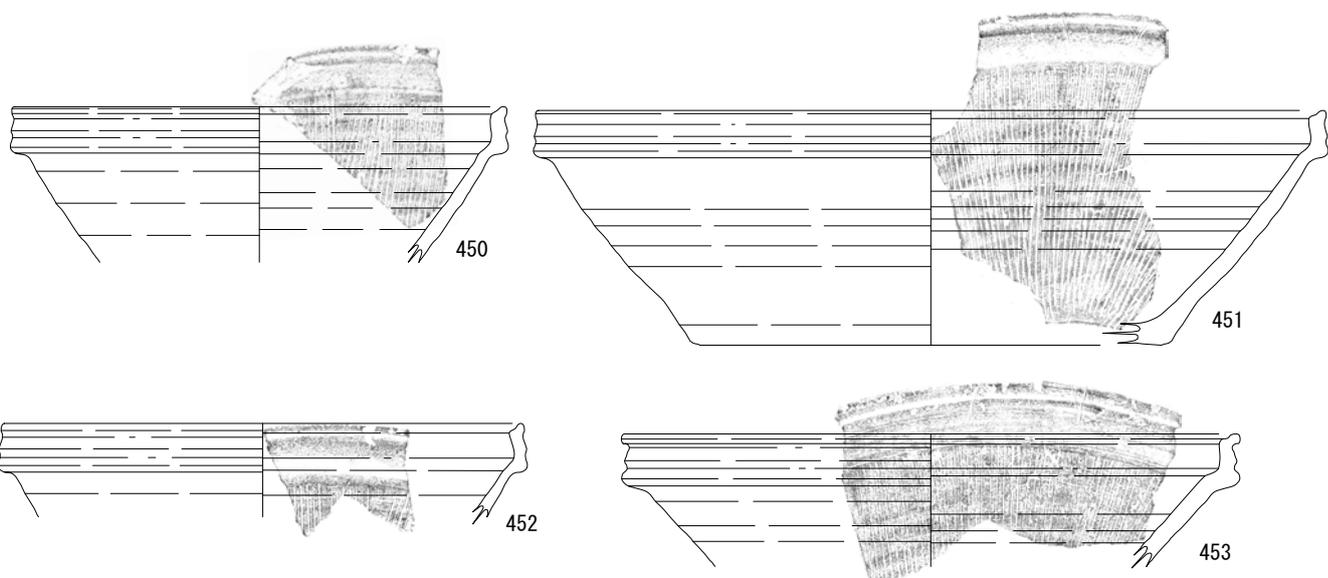
SK7



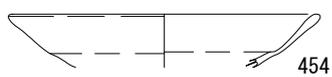
SK8



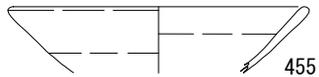
SK8



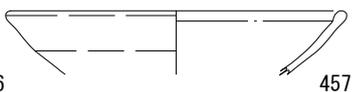
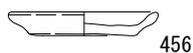
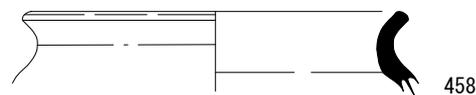
SK12



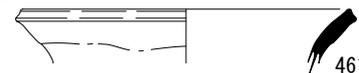
SK13



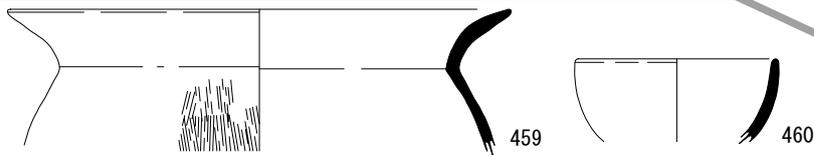
SK14



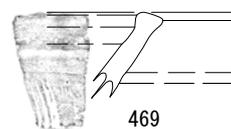
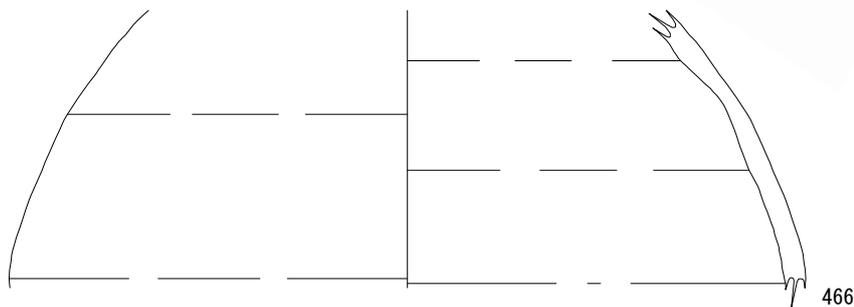
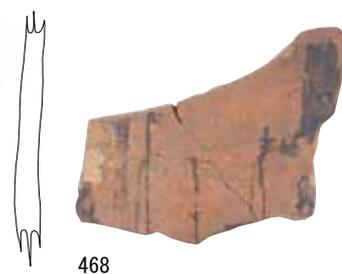
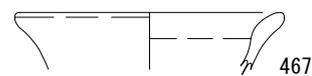
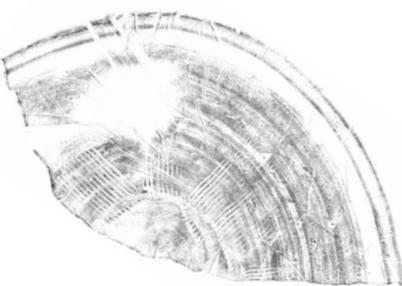
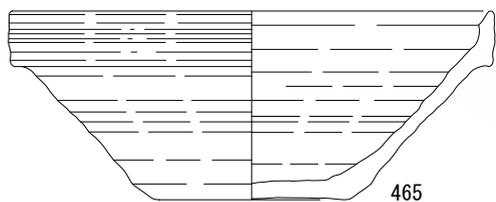
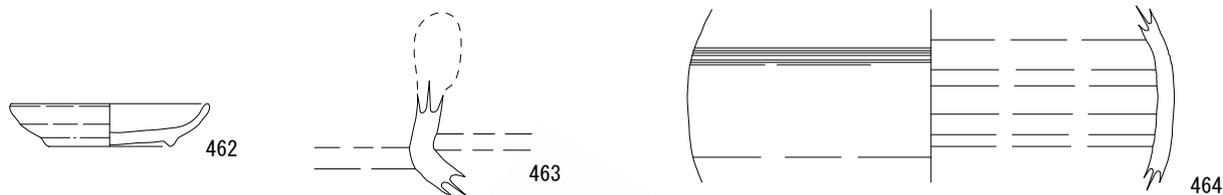
SK18

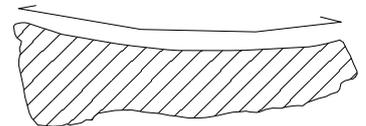
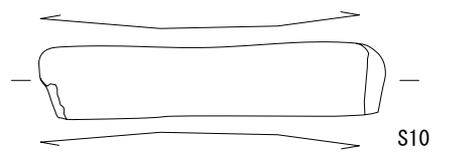
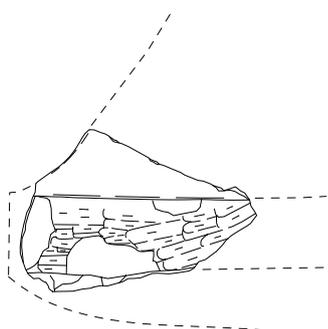
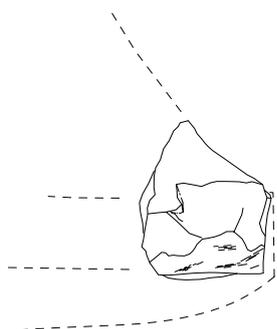
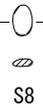
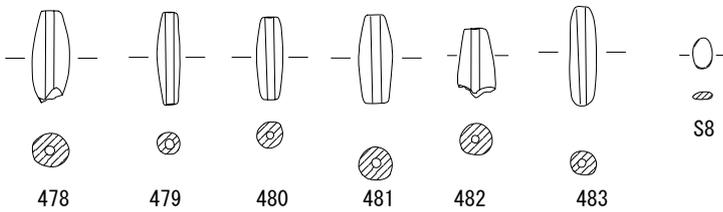
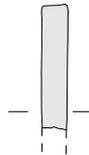
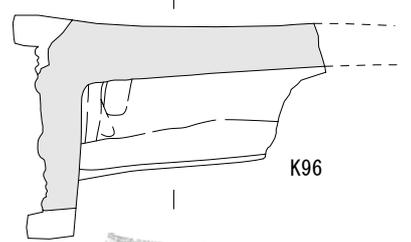
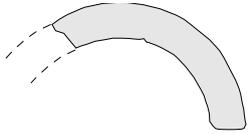
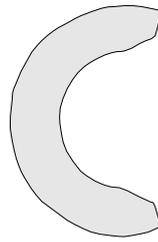
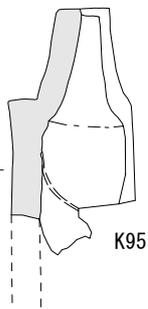
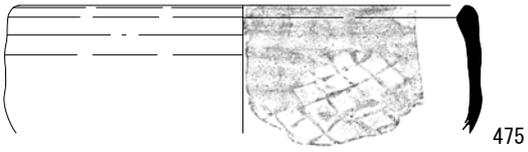
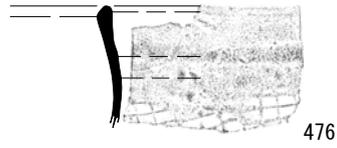
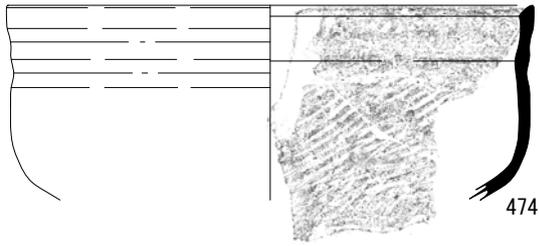
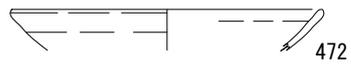
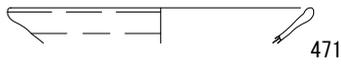
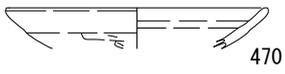


SK15

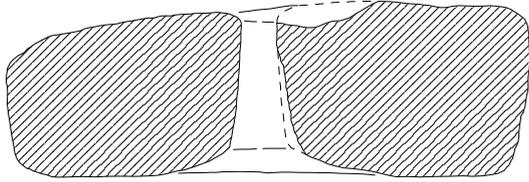


SE1

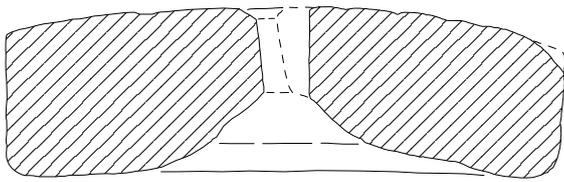




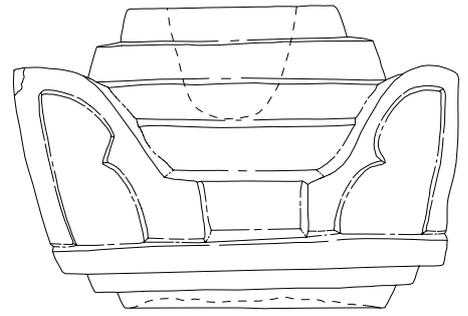
SE1



S11



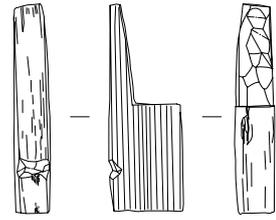
S12



S13

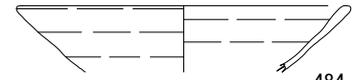


I



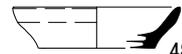
W1

P5



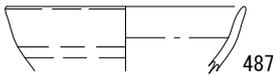
484

P9



485

SD1



487

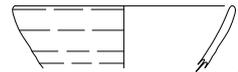


488

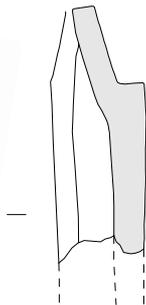
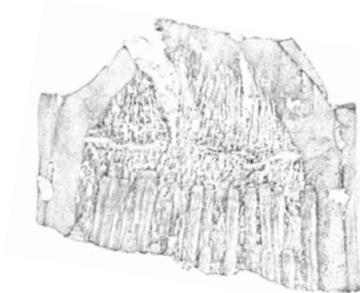


489

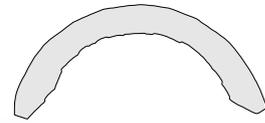
P12



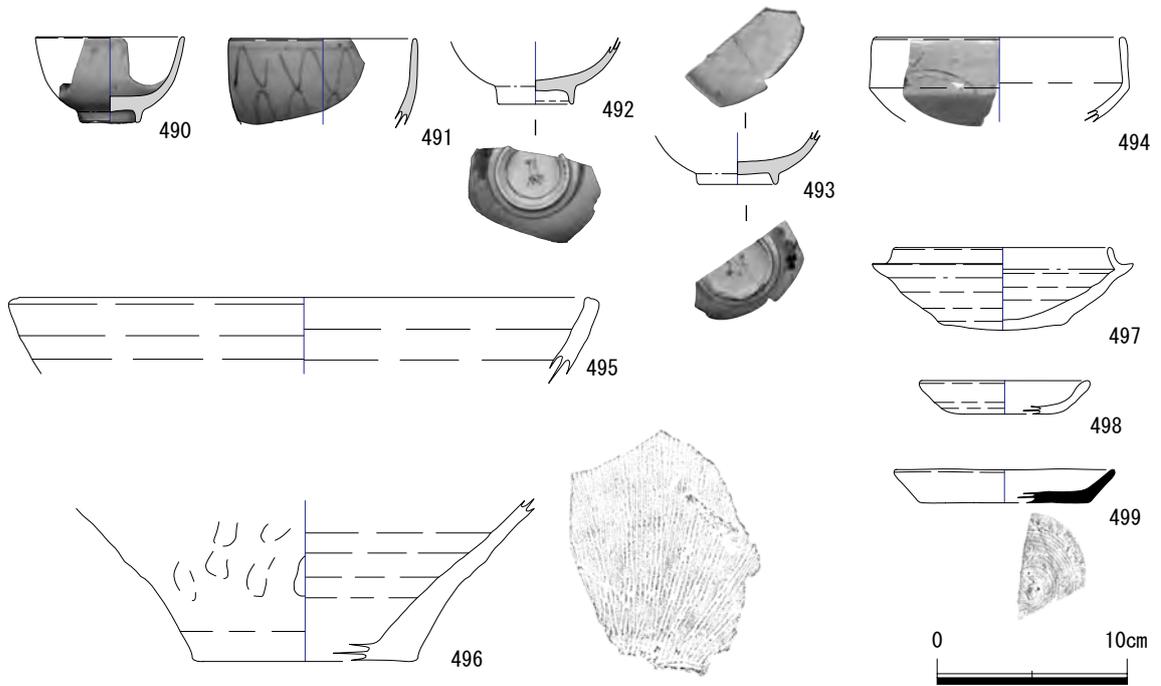
486



K98

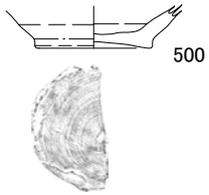


包含層

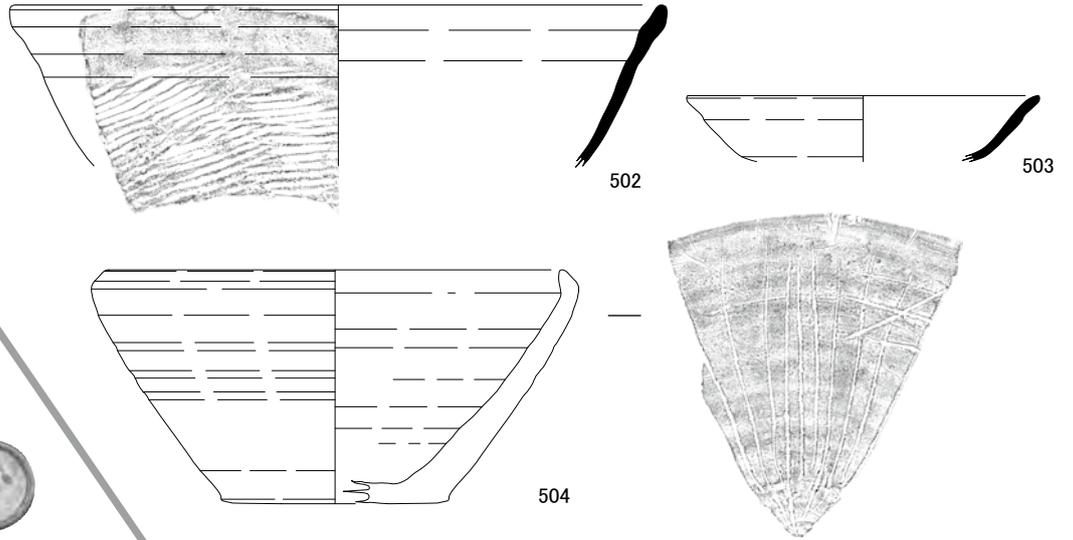


C区

SK9



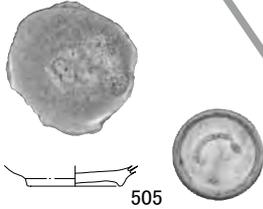
SK2



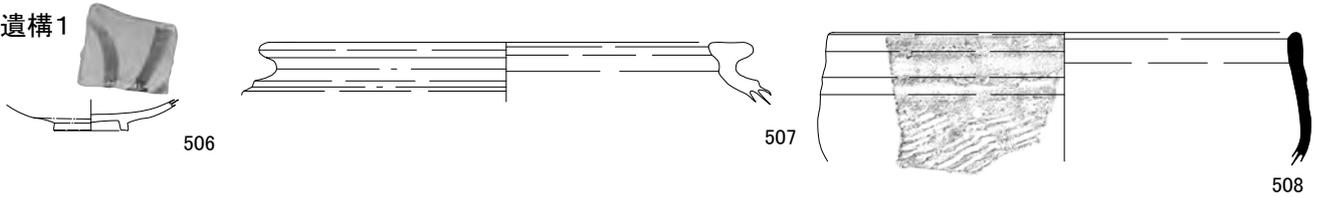
SK22



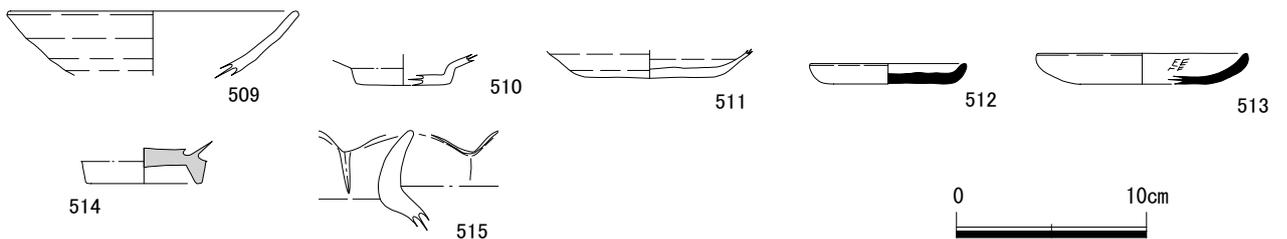
SK3



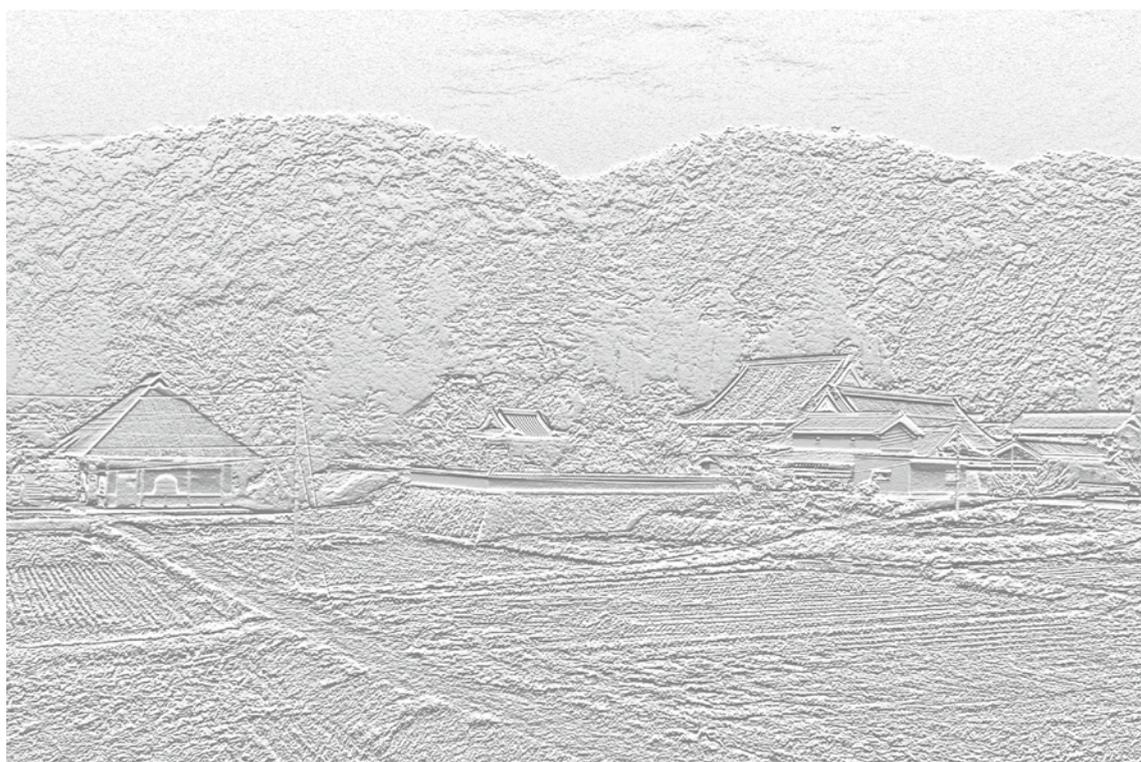
落ち状遺構1



包含層



# 写真図版





調査地



全面調査地



T-1



T-1 遺物出土状況



T-2



T-2 P36 (掘立柱建物) 上層遺物出土状況



T-2 P36 (掘立柱建物) 下層遺物出土状況



T-6



T-6 石列



調査区全景（西から）



掘立柱建物（北から）



掘立柱建物（南から）



掘立柱建物柱穴 P20（上層）



掘立柱建物柱穴 P20（下層）



掘立柱建物柱穴 P17



土坑 1



土坑 1 遺物出土状況



土坑 1 遺物出土状況



土坑 1 遺物出土状況



土坑 2 土層



土坑 3 土層



土坑 4 遺物出土状況



土坑 4 完掘



落ち状遺構 (西から)



落ち状遺構土層



P8



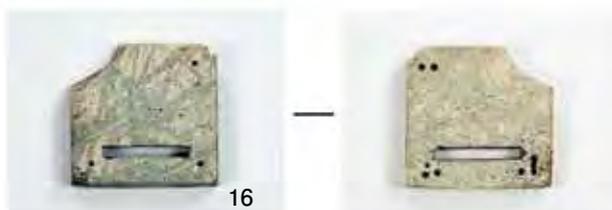
P18



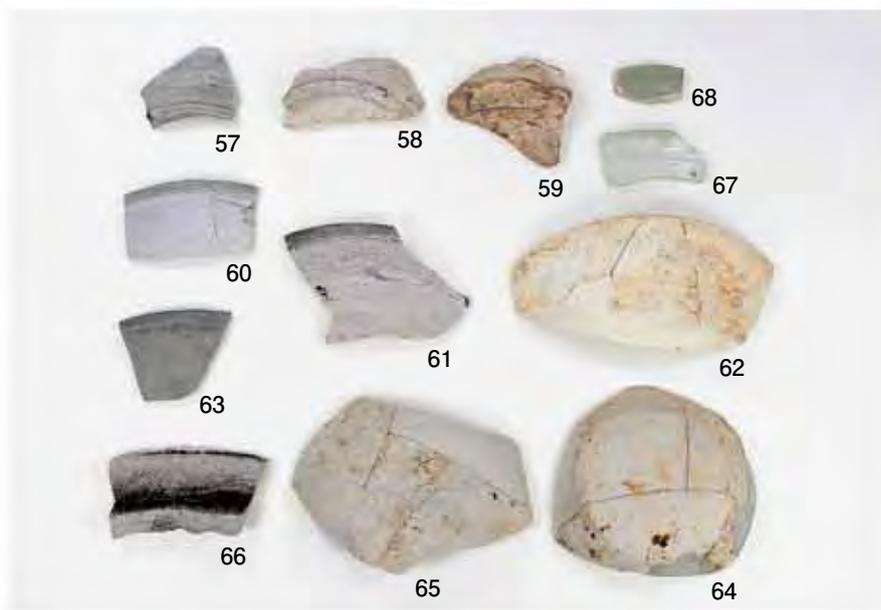
P21



P35









遠景（南から）



遠景（南から）



遠景（東から）



現在の法幢寺



A区調査地



A区全景（西から）



A区全景（西北から）



石列1（南から）



石列1（東から）



石列2



石列3 (東北から)



石列3 (東から)



石列3・4



SK3 土層



SK3 完掘



SK4 土層



SK4 完掘



SK5



SK7



SK8 検出状況



SK8 完掘



P1 土層



P1 完掘



P8 土層



P9 土層



西側盛土内出土瓦群



西側盛土内出土瓦群（北側）



細部①



細部②



細部③



細部④



細部⑤



調査区土層



石列部土層



西側盛土部土層



B 地区調査地



B I ・ B II 調査区航空写真



BI地区航空写真



BI調査区全景（北から）



B I 調査区全景 (南から)



SD1 遺物出土状況



SD1 土層①



SD1 土層②



SK1 検出状況真



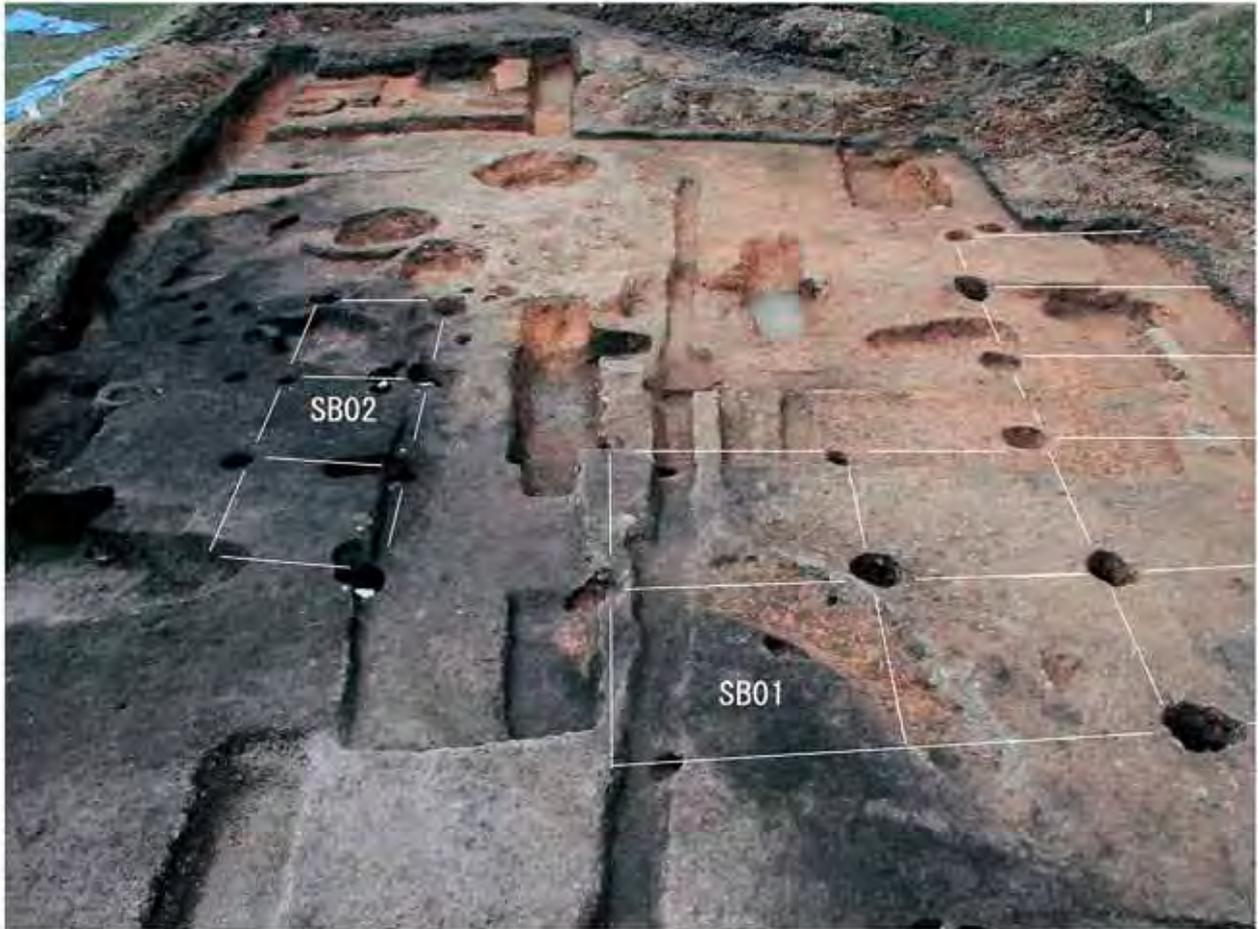
SK1 完掘



B I 調査区土層 (北壁)



B II 調査区航空写真



B II 調査区全景 (東から)



SB2 P1 土層



SB2 P1



SB2 P2 土層



SB2 P2



SB2 P3 土層



SB2 P3



SB2 P4



SB2 P14



SK1



SK1 土層



SK2



SK2 土層



SK3



SK3 土層



SK4



SK4 土層



SK5



SK5 土層



SK6



SK6 土層



SK7



SK8



SK9 土層



SK9 遺物出土状況



SK10



SK11



SK11 土層



SK12



SK12 土層 (東西)



SK12 土層 (南北)



SK13



SD1 土層



SD2 土層



SD3 土層



SD03 と段状遺構



SD04・5・6



SD04 土層



SD04・5 土層



SD04 遺物出土状況



SD05・6 土層



南側落ち土層



南側落ち土層



調査区土層（南壁）



調査区土層（西部北壁）



作業風景



BⅢ区航空写真



BⅢ区全景（北から）



BⅢ区全景（東から）



SK7集石状況



SK7遺物出土状況



SK8



SK8集石状況



SK8土層



SK8集石下層土層



SK8遺物出土状況



SK1



SK2



SK3



SK4



SK5



SK6



SK7



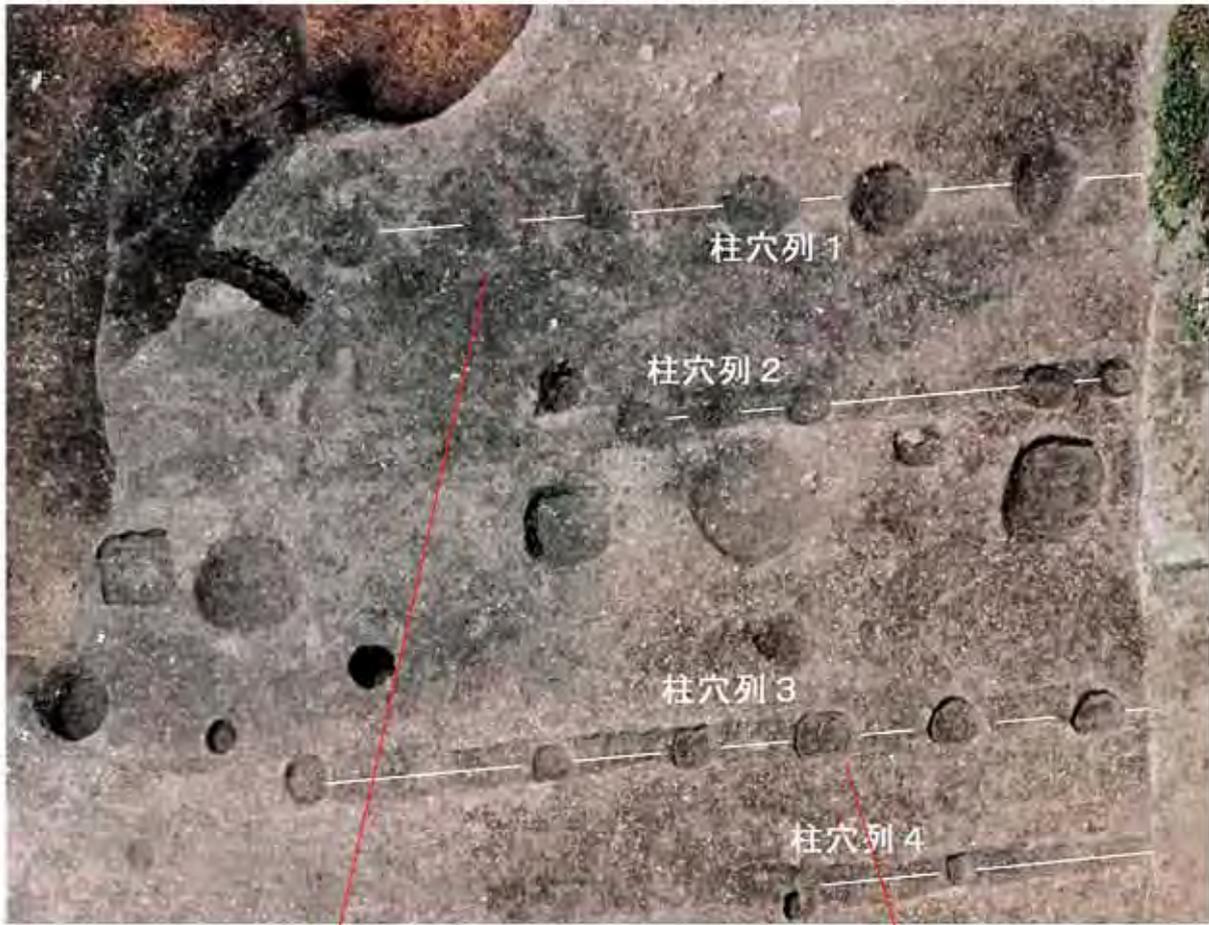
SK7土層



BV区航空写真



BV区全景（東から）





SK2検出状況



SK2土層



SK2遺物出土状況



SK3



SK4土層



SK5土層



SK6土層



SK7土層



SK8集石状況



SK8



SK9



SK10



SK10遺物出土状況



SK11土層



SK11集石状況



SK11



SK12



SK13・14



SK13土層



SK15



SK17



SK18・19



SK20



SK21・22



SK23土層



SK23



SK25



SK25遺物出土状況



SK27土層



SK28土層



SK29土層



SK30土層



SD1



SD1土層



SD1土層 (東端)



SD1遺物出土状況



SD1遺物出土状況



石列（西から）



石列（東から）



石列（正面）



石列全面堆積状況



石列裏込め



BV区航空写真



BV区全景



土坑群



SK2



SK2集石・遺物出土状況



SK5



SK5遺物出土状況



SK6



SK6土層



SK7



SK7遺物出土状況



SK11



SK11遺物出土状況



SK12・13



SK13遺物出土状況



SK15



SK18



SE1検出状況



SE1全景



SE1石組み



SE1石組み



SE1底面石貼石



SE1底面貼石除去（半裁）



SE1上層堆積状況



SE1裏込め（上層部）



SE1遺物出土状況 (瓦)



SE1遺物出土状況 (瓦)



遺物出土状況 (砥石)



遺物出土状況 (石臼)



遺物出土状況 (備前焼)



遺物出土状況 (瀬戸美濃焼)



遺物出土状況 (宝篋印塔笠部)



遺物出土状況 (丹波焼)



SD1土層



SD1位汚物出土状況

BⅢ・Ⅳ・Ⅴ区航空写真





C区調査地



C区全景（東から）



C地区全景 (北から)



建物跡土層図 (SK1)



建物跡土層図 (SK19)



SK1



SK1土層



SK2



SK2土層



SK3



SK3土層



SK4・SD01



西側盛土状況



作業風景



瓦



土師器皿



施釉陶器・磁器



擂鉢

図版90  
出土遺物





K7



K8



K9



図版92  
出土遺物



K11

K12

K10

K13

K14

K15

K16

K17



K18



K22



K23



K24



図版94  
出土遺物



K30



K31



K33



|



K36



K37



K38



K40



K41



|



K39

図版  
96  
出土遺物



K42



K43



K45



K44



K50



K51



K52

図版  
98  
出土遺物



K53



K55



K58



K56





K61



K62



K63



K64



K65



K66



K70



K71





K76



K77



K78







36



37



38



40



41



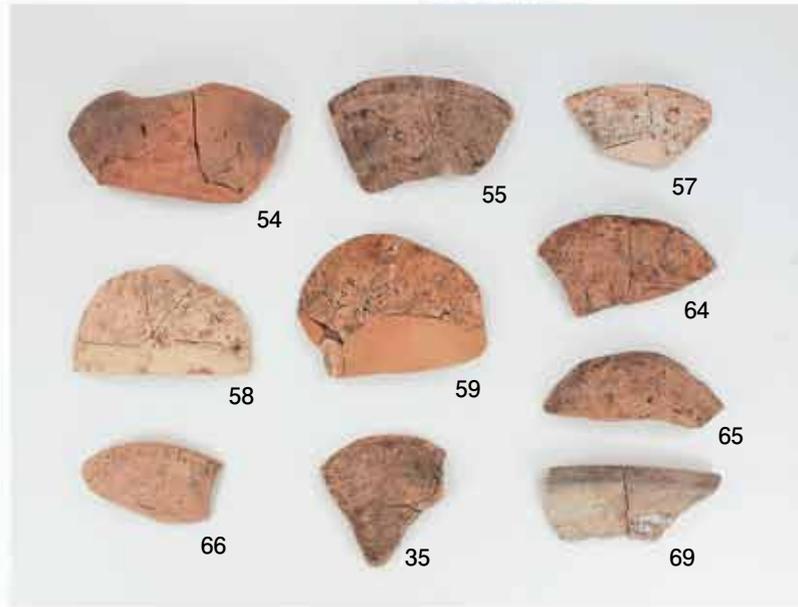
42



43



44



56



60



61



62



75



63



68

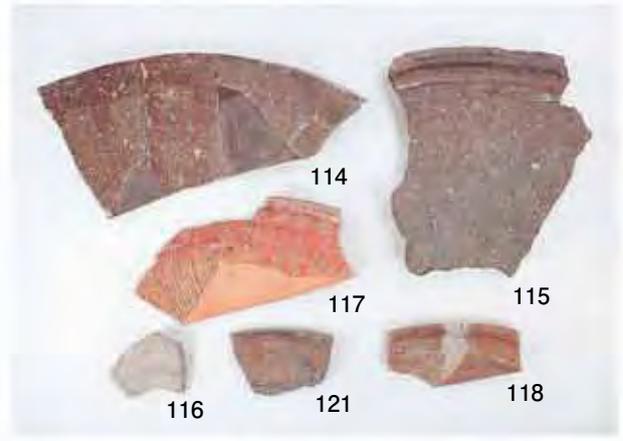


S1



76







K80



K81



K82



K83

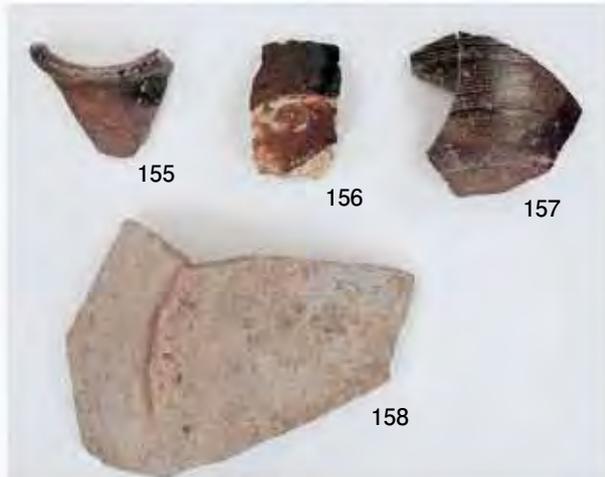


K84



142 143 144 145 147

142 143 144 145 147





198



201



202



203



204



S4



206



199

205

212

213

214

215

216

217

218

219



K86



209

210



221



211



234



240



235



220

222

224

223

225

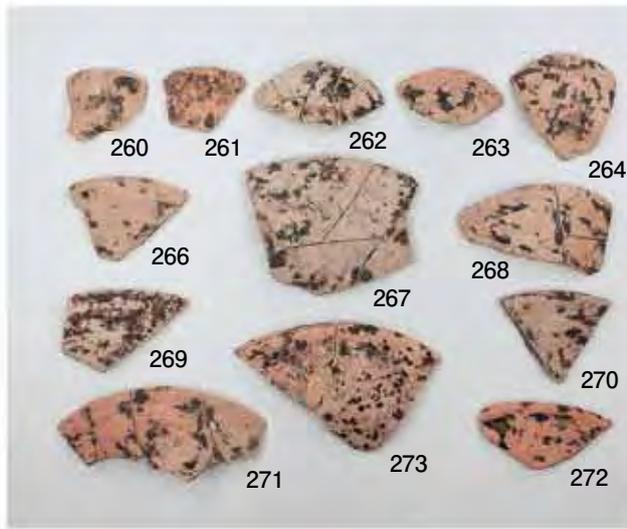
226

227

228

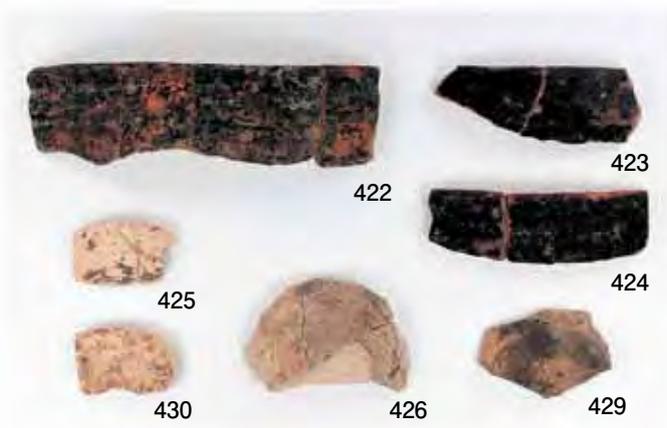
229

230













K95



K96



K97



S10



S9



S11



S12



W1

図版114  
出土遺物



S13



K98



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	にしやすだ・もりのまえいせき    なかやすだ・ほうどうじいせき							
書名	西安田・森ノ前遺跡    中安田・法幢寺遺跡							
副書名	安田地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	多可町文化財報告							
シリーズ番号	14							
編著者名	安平 勝利							
編集機関	多可町教育委員会							
所在地	〒679-1134 兵庫県多可郡多可町中区茂利20 TEL0795-32-2385							
発行年月日	西暦 2011年（平成23）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
にしやすだ・もりのまえ 西安田・森ノ前 遺跡	ひょうごけんたかぐん 兵庫県多可郡 たかちやうなか 多可町中区 にしやすだあぎ 西安田字 もり森のまえ 前	23833	中区番号 334	35度 02分 35秒	134度 56分 45秒	2009.10.9 ) 2009.11.5	約300m <sup>2</sup>	安田地区 ほ場整備 事業
なかやすだ・ほうどう 中安田・法幢 寺遺跡	ひょうごけんたかぐん 兵庫県多可郡 たかちやうなか 多可町中区 なかやすだあぎ 中安田字寺口 ほか	23833	中区番号 345	35度 02分 43秒	134度 57分 04秒	2010.1.13 ) 2010.3.19	約1300m <sup>2</sup>	安田地区 ほ場整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
西安田・森ノ前 遺跡	集落跡	弥生時代後 期～中世	弥生時代終末 期の土坑。 中世後半期の 掘立柱建物群。	弥生土器、須 恵器、土師器、 輸入磁器	中世後半期の掘立柱建 物跡			
中安田・法幢 寺遺跡	寺院跡	中世～近世	中世～近世の 寺院跡	須恵器、土師 器、陶器・磁 器・鉄器・石 製品	中世～近世期にかけて の法幢寺関連遺構群 近世期の磁器・陶器・ 瓦が多量に出土			

多可町文化財報告14

にしやすだ もりのまえいせき  
西安田・森ノ前遺跡

2011年3月  
多可町教育委員会  
発行 〒679-1134 多可郡多可町中区茂利20番地  
TEL. (0795) 32-2385  
印刷 ウニスガ印刷株式会社

■アートー 紙質 表紙 アートポスト 220kg  
見返し 色上質 藤色 特厚口  
本文 ニューエイジ 57.5kg  
カラー図版 アート 93.5kg  
文字 モリサワ 14級  
写真 スキャナー分解  
製本 無線トジ

